千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　XVII

－印西市船尾白幡遺跡Ⅱ－

平成17年３月

独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部

財団法人　千葉県文化財センター

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書　XVII

－印西市船尾白幡遺跡Ⅱ－

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第510集として，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の千葉北部地区新市街地造成整備事業関連に伴って実施した印西市船尾白幡遺跡Ⅱの発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器・縄文時代を始めとして，本遺跡の東地区にあたる船尾白幡遺跡と同様に，多数の奈良・平安時代の遺構・遺物が検出され，この地域の古代史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関，また，発掘作業から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　清水新次

凡　　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は千葉県印西市大字船尾字神明作217-1ほかに所在する船尾白幡遺跡Ⅱ（遺跡コードCN712）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団から変更，旧都市基盤整備公団）千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，第1章第2節の一部，第4章第1節，第5章第1節，第6章第1節を上席研究員（平成15年度　印西調査室長）糸川道行，第2章および第3章第2節石器を上席研究員矢本節朗，第5章第2節の一部および第6章第2節の一部を上席研究員星　勇人，それ以外を室長香取正彦が担当し，編集は香取が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部及び印西市教育委員会の御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図　　国土地理院発行1/50,000地形図「竜ヶ崎」(N1-54-19-13)「佐倉」(N1-54-18-14)

第2図　　印西市発行　1/2,500地形図22・26

第3・4図　千葉県企業庁千葉ニュータウン事業部（当時）　平成2年6月発行　平成4年12月修正　千葉ニュータウン平面図59・60

8　写真図版1の周辺航空写真は京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北（日本測地系）である。

10　本書で使用したスクリーントーンは挿図で指示した以外は下記のとおりである。

11　本書での小グリッド呼称法は下記のとおりである。

遺構

カマド構築材・粘土

焼土

炭化物

掘立柱建物柱痕

遺物

黒色処理

小グリッド呼称法（例：7Dグリッド）

					D					
	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
	10	11								
	20		22							
	30			33						
	40				44					
7	50					55				
	60						66			
	70							77		
	80								88	
	90									99

本文目次

序　文
凡　例
第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１．調査の経緯と経過……1
　　２．調査の方法……2
　第２節　遺跡の位置と環境……2
　　１．遺跡の位置と地理的環境……2
　　２．遺跡の歴史的環境……2
第２章　旧石器時代……8
　第１節　概　要……8
　第２節　第２文化層……8
　　１．第１ブロック……8
　第３節　ブロック外出土石器……12
　　１．ブロック外石器……12
第３章　縄文時代……15
　第１節　遺構とその出土遺物……15
　　１．竪穴住居・竪穴状遺構……15
　　２．土坑・ピット群……23
　第２節　遺構外出土遺物……29
第４章　弥生時代……42
　第１節　遺構とその出土遺物……42
　　１．竪穴住居・竪穴状遺構……42
　第２節　遺構外出土遺物……44
第５章　古墳時代……45
　第１節　遺　構……45
　　１．竪穴住居……45
　第２節　遺　物……53
　　１．竪穴住居……53
　　２．遺構外出土遺物……62
第６章　奈良・平安時代……65
　第１節　遺　構……65
　　１．竪穴住居・竪穴状遺構……65
　　２．掘立柱建物……87
　　３．ピット・ピット群・土坑……100
　　４．土器集中遺構……106
　第２節　遺　物……107

1．竪穴住居…… 107
2．掘立柱建物…… 142
3．ピット群…… 145
4．土　坑…… 145
5．土器集中遺構…… 148
6．遺構外出土遺物…… 148
第7章　中・近世及びその他の遺構・遺物…… 164
第1節　遺構とその出土遺物…… 164
1．土　坑…… 164
2．溝状遺構…… 164
第2節　遺構外出土遺物…… 168
第8章　まとめ…… 169
第1節　全体の概要…… 169
第2節　奈良・平安時代集落の様相…… 174
1．竪穴住居・出土遺物の時期区分…… 174
2．集落の変遷…… 175
3．文字・記号資料について…… 179
4．土器の打ち欠きについて…… 184
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺地形図……3
第2図　遺跡地形図……4
第3図　遺構全体図……5
第4図　下層全体図……6
第5図　第1ブロック器種別分布……9
第6図　第1ブロック母岩別分布……10
第7図　第1ブロック出土石器……11
第8図　ブロック外出土石器……13
第9図　SIⅡ025及びその出土遺物 ……16
第10図　SIⅡ026・Ⅱ027及びその出土遺物……17
第11図　SIⅡ028及びその出土遺物 ……19
第12図　SIⅡ049及びその出土遺物 ……21
第13図　SIⅡ055及びその出土遺物 ……22
第14図　SKⅡ022・Ⅱ081及びその出土遺物 ……23
第15図　土坑群（1）…… 25
第16図　土坑群（2）…… 26
第17図　土坑群（3）…… 27
第18図　遺構外出土土器（1）…… 30
第19図　遺構外出土土器（2）…… 31
第20図　遺構外出土土器（3）…… 33
第21図　遺構外出土土器（4）…… 34
第22図　遺構外出土土器（5）…… 35
第23図　縄文時代石器（1）…… 38
第24図　縄文時代石器（2）…… 39
第25図　縄文時代石器（3）…… 40
第26図　遺構外出土土製品……41
第27図　SIⅡ054・Ⅱ079及びその出土遺物，
遺構外出土遺物……43
第28図　SIⅡ010 ……45
第29図　SIⅡ013 ……46

第30図　SIⅡ034・Ⅱ035……48
第31図　SIⅡ040・Ⅱ042……50
第32図　SIⅡ042……51
第33図　SIⅡ043……52
第34図　SIⅡ010・Ⅱ013出土遺物……54
第35図　SIⅡ034出土遺物……56
第36図　SIⅡ034・Ⅱ035・Ⅱ040・Ⅱ042
出土遺物……57
第37図　SIⅡ042出土遺物……59
第38図　SIⅡ042・Ⅱ043・遺構外出土遺物……61
第39図　SIⅡ001……66
第40図　SIⅡ001遺物出土状況，SIⅡ002……67
第41図　SIⅡ002カマド，SIⅡ003……69
第42図　SIⅡ005……70
第43図　SIⅡ006……72
第44図　SIⅡ007・Ⅱ008……73
第45図　SIⅡ008遺物出土状況，SIⅡ009……75
第46図　SIⅡ012……76
第47図　SIⅡ014・Ⅱ024……78
第48図　SIⅡ031・Ⅱ033……80
第49図　SIⅡ037・Ⅱ044・Ⅱ046・Ⅱ047……82
第50図　SIⅡ048……84
第51図　SIⅡ071・Ⅱ078……86
第52図　SBⅡ015・Ⅱ018……88
第53図　SBⅡ029・Ⅱ030・Ⅱ032・Ⅱ041……90
第54図　SBⅡ045・Ⅱ052・Ⅱ057，SIⅡ051……91
第55図　SBⅡ053・Ⅱ056・Ⅱ058……93
第56図　SBⅡ066……95
第57図　SBⅡ067……96
第58図　SBⅡ069……97
第59図　SBⅡ070A・Ⅱ070B……98
第60図　SBⅡ074・Ⅱ075……99
第61図　SHⅡ017・Ⅱ021・Ⅱ023……101
第62図　SHⅡ050……102
第63図　SKⅡ062・Ⅱ063・Ⅱ064・Ⅱ065・
Ⅱ068・Ⅱ072……104
第64図　SKⅡ073・Ⅱ076・Ⅱ077・Ⅱ080・
Ⅱ082……106
第65図　土器集中遺構（2Z-76地点）……107
第66図　SIⅡ001出土遺物……109
第67図　SIⅡ001・Ⅱ002出土遺物……110
第68図　SIⅡ002・Ⅱ003・Ⅱ005出土遺物……112
第69図　SIⅡ005・Ⅱ006出土遺物……115
第70図　SIⅡ006・Ⅱ007出土遺物……117
第71図　SIⅡ007・Ⅱ008・Ⅱ009出土遺物……120
第72図　SIⅡ012・Ⅱ014出土遺物……123
第73図　SIⅡ014出土遺物……125
第74図　SIⅡ024・Ⅱ031出土遺物……127
第75図　SIⅡ031・Ⅱ033・Ⅱ044・Ⅱ046・Ⅱ047
出土遺物……129
第76図　SIⅡ047・Ⅱ048出土遺物……133
第77図　SIⅡ048出土遺物……136
第78図　SIⅡ048・Ⅱ071出土遺物……138
第79図　SIⅡ078出土遺物……141
第80図　掘立柱建物・ピット群出土遺物及び
竪穴住居出土遺物補遺……144
第81図　土坑出土遺物……146
第82図　土器集中遺構・遺構外出土遺物……149
第83図　SDⅡ011・Ⅱ038・Ⅱ059・Ⅱ060・
Ⅱ061・Ⅱ084……166
第84図　SDⅡ036・Ⅱ038・SKⅡ039……167
第85図　銭　貨……168
第86図　旧石器ブロック分布図……171
第87図　縄文時代遺構分布図……172
第88図　弥生・古墳時代遺構分布図……173
第89図　奈良・平安時代遺構分布図（1）……176
第90図　奈良・平安時代遺構分布図（2）……177
第91図　奈良・平安時代遺構分布図（3）……178
第92図　文字・記号資料集成（1）……180
第93図　文字・記号資料集成（2）……181
第94図　文字・記号資料集成（3）……182
第95図　文字・記号資料集成（4）……183
第96図　打ち欠き土器集成……185

表 目 次

第1表　船尾白幡遺跡Ⅱ発掘調査概要……1
第2表　船尾白幡遺跡Ⅱ整理作業概要……1
第3表　船尾白幡遺跡Ⅱ遺構種別一覧……7
第4表　第1ブロック石器属性表……9
第5表　第1ブロック組成表……10
第6表　ブロック外出土石器属性表……14
第7表　縄文時代土坑群一覧表……28
第8表　縄文時代石器属性表……37
第9表　古墳時代竪穴住居観察表……62
第10表　古墳時代遺構・遺構外出土遺物観察表…63
第11表　奈良・平安時代竪穴住居観察表……152
第12表　掘立柱建物観察表……153
第13表　奈良・平安時代遺構・遺構外出土遺物観察表……154
第14表　竪穴住居の時期区分……174
第15表　文字・記号資料部位表……179
第16表　文字・記号主要資料一覧表……183
第17表　打ち欠き土器等一覧表……196

図 版 目 次

図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　1　調査区北部航空写真（東から）
　　2　調査区南部航空写真（北から）
図版3　1　SⅡ042・Ⅱ043付近近景（西から）
　　2　第1ブロック　3　第1ブロック
図版4　1　SⅡ025
　　2　SⅡ028
　　3　SⅡ028炉跡
　　4　SⅡ028遺物出土状況
　　5　SⅡ055
　　6　SⅡ027
　　7　SⅡ026
　　8　SKⅡ081
　　9　SKⅡ022
図版5　1　SⅡ079
　　2　SⅡ010
　　3・4　SⅡ010遺物出土状況
　　5　SⅡ034縮小プラン
　　6　SⅡ034拡大プラン
　　7　SⅡ034遺物出土状況
　　8　SⅡ035
図版6　1　SⅡ040
　　2　SⅡ040遺物出土状況
　　3　SⅡ042
　　4～8　SⅡ042遺物出土状況
図版7　1～3　SⅡ042遺物出土状況
　　4・5　SⅡ042カマド
　　6　SⅡ043
　　7　SⅡ043カマド
　　8　SⅡ043遺物出土状況
図版8　1　SⅡ043遺物出土状況
　　2　SⅡ001
　　3・7　SⅡ001遺物出土状況
　　4・5　SⅡ001炭化材・焼土出土状況
　　6　SⅡ001遺物・炭化材出土状況
　　8　SⅡ002
図版9　1　SⅡ002カマド
　　2　SⅡ003
　　3　SⅡ003カマド
　　4・6　SⅡ005
　　5　SⅡ005カマド
　　7　SⅡ005鑑柱穴
　　8　SⅡ006
図版10　1　SⅡ006カマド
　　2　SⅡ006
　　3～5　SⅡ006遺物出土状況

6　SIⅡ007
7　SIⅡ007カマド
8　SIⅡ007遺物出土状況
図版11　1　SIⅡ007カマド
2　SIⅡ008
3　SIⅡ009
4　SIⅡ009カマド
5・6　SIⅡ009遺物出土状況
7　SIⅡ012
8　SIⅡ012カマド
図版12　1　SIⅡ013
2　SIⅡ013カマド
3　SIⅡ014
4・5　SIⅡ014遺物出土状況
6　SIⅡ024
7　SIⅡ031
8　SIⅡ031カマド
図版13　1～3　SIⅡ031遺物出土状況
4　SIⅡ033
5　SIⅡ033カマド
6　SIⅡ037・SBⅡ032
7　SIⅡ044
8　SIⅡ044焼土出土状況
図版14　1　SIⅡ044遺物出土状況
2　SIⅡ046
3　SIⅡ046カマド
4　SIⅡ046遺物出土状況
5　SIⅡ047
6　SIⅡ047カマド
7・8　SIⅡ047遺物出土状況
図版15　1　SIⅡ048建て替え後
2　SIⅡ048カマド
3　SIⅡ048建て替え前
4～7　SIⅡ048遺物出土状況
図版16　1・3　SIⅡ071
2　SIⅡ071カマド
4　SIⅡ071遺物出土状況
5　SIⅡ078
6　SIⅡ078カマド
7・8　SIⅡ078遺物出土状況
図版17　1・2　SIⅡ078遺物出土状況
3　SIⅡ051
4　SBⅡ018
5　SBⅡ029
6・7　SBⅡ030
8　SBⅡ032
図版18　1　SBⅡ041
2　SBⅡ045・Ⅱ057
3　SBⅡ052
4・5　SBⅡ053遺物出土状況
6　SBⅡ053
7　SBⅡ056
8　SBⅡ058
図版19　1　SBⅡ066
2　SBⅡ067
3　SBⅡ069
4　SBⅡ070A・B
5　SBⅡ074
6　SBⅡ075
7　SHⅡ050
8　SKⅡ062・Ⅱ063・Ⅱ064
図版20　1　SKⅡ068
2　SKⅡ062
3　SKⅡ072
4　SKⅡ068確認面
5　SKⅡ073
6　土器集中遺構
7　SKⅡ080
図版21　1　SDⅡ011・Ⅱ038
2　SKⅡ039
3・4　SDⅡ011
5・6　SDⅡ038
図版22　第1ブロック　ブロック外
図版23　SIⅡ025・Ⅱ026・Ⅱ027出土土器

図版24　SIⅡ028出土土器
図版25　SIⅡ049出土土器　SIⅡ055出土土器
図版26　SKⅡ022・Ⅱ081出土土器
図版27　遺構外出土土器（1）-1
図版28　遺構外出土土器（1）-2，（2）-1
図版29　遺構外出土土器（2）-2，（3）-1
図版30　遺構外出土土器（3）-2
図版31　遺構外出土土器（3）-3，（4）
図版32　遺構外出土土器（5）-1
図版33　遺構外出土土器（5）-2
図版34　縄文時代石器
図版35　縄文時代遺構外出土土製品　SIⅡ079
　　弥生時代遺構外出土遺物
図版36　古墳時代遺構出土土器（1）
図版37　古墳時代遺構出土土器（2）
図版38　古墳時代遺構出土土器（3）
図版39　SIⅡ034　1～4鍛造剥片　5粒状滓
図版40　奈良・平安時代遺構出土土器（1）
図版41　奈良・平安時代遺構出土土器（2）
図版42　奈良・平安時代遺構出土土器（3）
図版43　奈良・平安時代遺構出土土器（4）
図版44　奈良・平安時代遺構出土土器（5）
図版45　奈良・平安時代遺構出土土器（6）
図版46　奈良・平安時代遺構出土土器（7）
図版47　奈良・平安時代遺構出土土器（8）
図版48　奈良・平安時代遺構出土土器（9）
図版49　奈良・平安時代遺構出土土器（10）および
　　遺構外出土土器，文字・記号資料（1）
図版50　文字・記号資料（2）
図版51　奈良・平安時代　土製支脚・砥石・土製
　　品・鉄床石
図版52　軽石（SIⅡ001・Ⅱ013）
図版53　鉄製品（鉄族・槍鉋・刀子・袋状鉄斧・
　　穂摘み具・釘ほか）
図版54　鉄製品（鎌）　銭貨　鉄滓

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1．調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターは，千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連の埋蔵文化財調査として住宅・都市整備公団（現，独立行政法人都市再生機構）の業務委託を受け，本遺跡の発掘調査を実施した。発掘調査年度は平成７・９年度の２年度である。（第２図）。なお，本遺跡は船尾白幡遺跡のほぼ西半部にあたる。先に報告した船尾白幡遺跡と区別するために，調査時から船尾白幡遺跡Ⅱと呼称され，遺構番号も区別されているので，報告書でもこれを使用する。

全体の調査対象面積は上層が13,000㎡，下層が12,400㎡である。確認調査面積は上層が1,368㎡，下層が448㎡，本調査面積は，上層が9,900㎡，下層が221㎡である。

発掘調査開始から報告書刊行に至るまでの発掘調査・整理概要及び各年度の調査担当者等は，第１表・第２表に記したとおりである。

第１表　船尾白幡遺跡Ⅱ発掘調査概要

調査年度	発掘調査面積			期間	調査部長	担当職員
平成７(1995)	確認調査	上層	300/ 3,000㎡	7/3～9/26	谷　旬	立和名明美
		下層	48/ 2,400㎡			
	本調査	上層	2,400㎡			
		下層	0㎡			
	確認調査	上層	1,068/10,000㎡	3/3～3/12		黒澤　崇
平成９(1997)	本調査	下層	400/10,000㎡	4/7～9/18	折原　繁	竹田　良男
	本調査	上層	7,500㎡			
		下層	221㎡			

第２表　船尾白幡遺跡Ⅱ整理作業概要

調査年度	整理作業内容	期間	所長	担当職員
平成14(2002)	水洗・注記，記録整理，分類・選別，復元，実測の一部まで	4/1～3/31	古内　茂	糸川　道行
平成15(2003)	実測の一部から挿図・図版作成，原稿執筆の一部まで	4/1～3/31	古内　茂	糸川　道行
平成16(2004)	原稿執筆の一部から編集，報告書刊行	4/1～3/31	古内　茂	香取　正彦 矢本　節朗 星　勇人

2．調査の方法

発掘調査を始めるに当たり，調査対象区域を公共座標に合わせて，40m×40mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を４m×４mに分割し，100個の小グリッドとした。グリッドを船尾白幡遺跡と共有するために，大グリッドは西から東へＺ，Ａ，Ｂ，Ｃ，……，北から南へ０，１，２，３，……と記号をつけた。小グリッドは北西隅を起点に00，01，……98，99と番号を付け，これらを組み合わせて６C-35のように呼称することにした。

調査は，上層確認調査→上層本調査→下層確認調査→下層本調査の順で実施した。上層調査については原則として調査対象面積の10％を確認調査し，遺構と遺物の分布状況を確認した。本調査は，確認調査の遺構と遺物の分布状況をもとに，範囲を設定して実施した。下層調査については，調査対象区域全体に公共座標を合わせて，２m×２mのグリッドを設定して（第４図），調査対象面積の４％を確認調査し，遺物の分布状況を確認した。本調査は確認調査の遺物の分布状況をもとに，範囲を設定して実施した。

第２節　遺跡の位置と環境

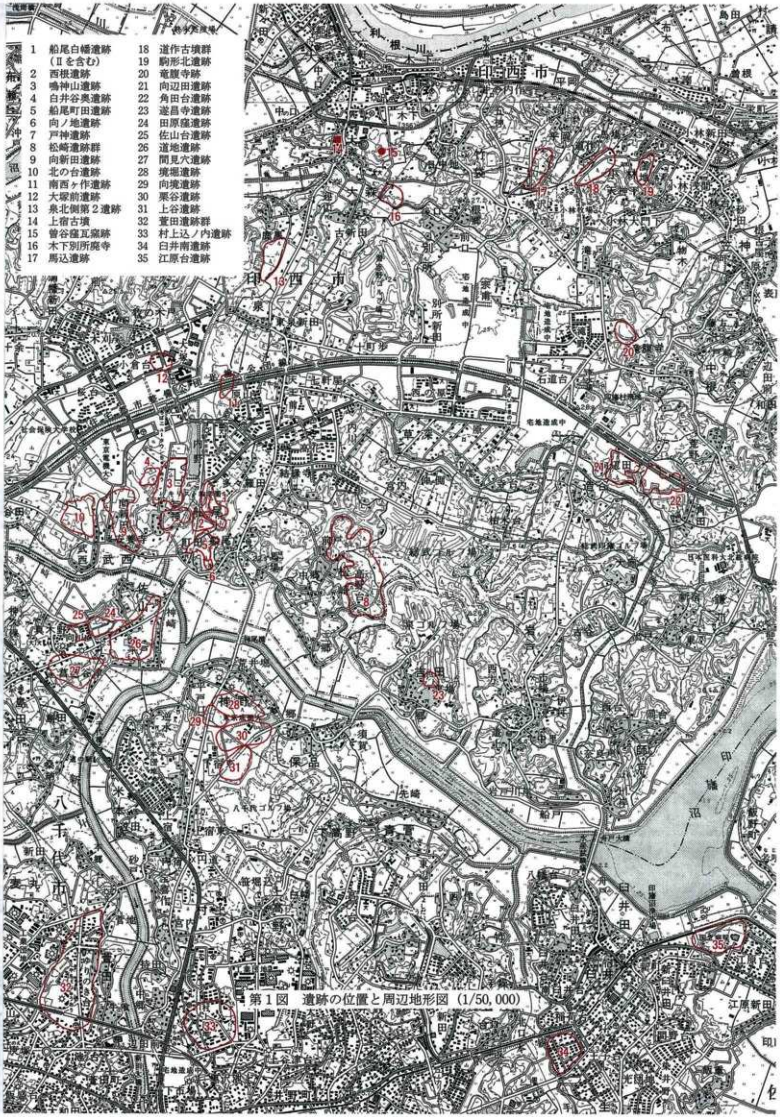
1．遺跡の位置と地理的環境

船尾白幡遺跡Ⅱは，船尾白幡遺跡の西半部であり，内容は船尾白幡遺跡と同じであるので，船尾白幡遺跡報告書から再録する[1]。『北総線「千葉ニュータウン中央駅」から1.5kmほど南に位置する。中央駅の東側には県道船橋印西線があり，遺跡西端に接して，南北に通っている。地形的には，印旛沼西端から北に延びる支谷に面した，標高25m～26mの舌状台地上に立地する。台地の西側は，神崎川の支流である戸神川が南流する，南北に細長い小谷である。神崎川は，印旛沼西端部に西やや北方から流入し，戸神川は，沼端部近くで合流している。現在，印旛沼は治水事業により水面積が減少しているが，沼西端部は明治年間に至っても，船尾白幡遺跡の所在する台地から台地一つを挟んで南側まで達していた。当時の沼尻から遺跡までの直線距離はおよそ1.2kmである。』

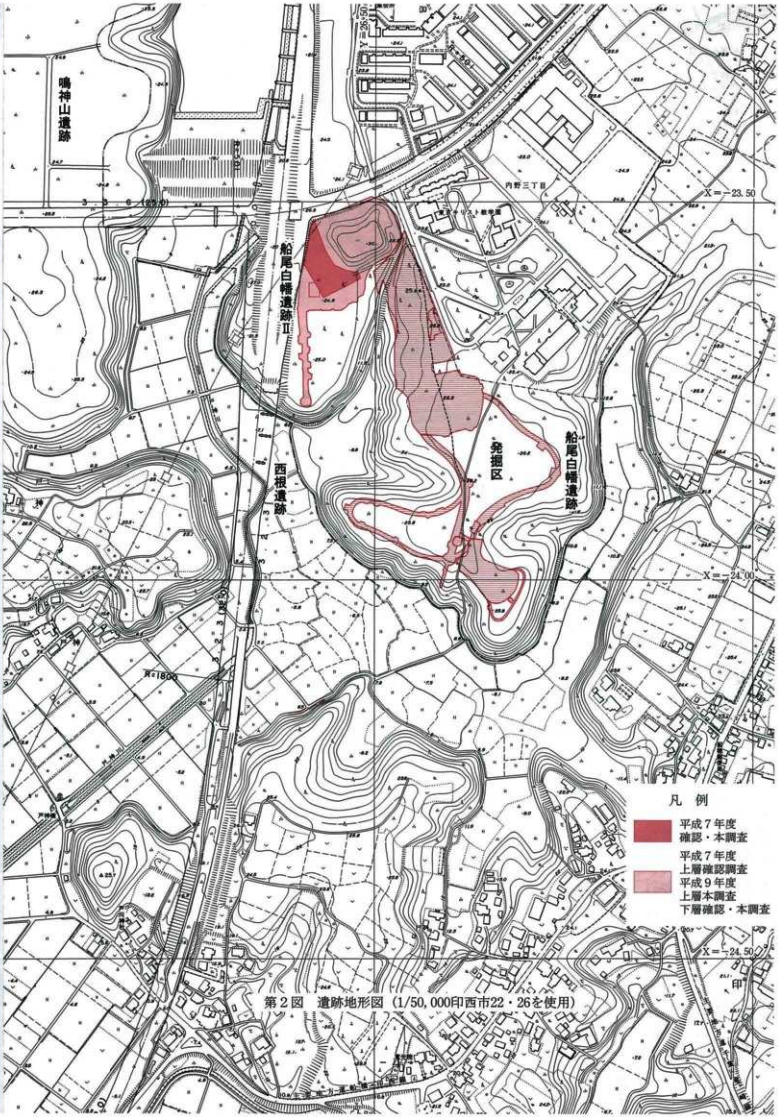
2．遺跡の歴史的環境

上記と同様に船尾白幡遺跡Ⅱの主体を占める奈良・平安時代について，船尾白幡遺跡報告書から再録する[2]。『鳴神山遺跡や向新田遺跡等，本遺跡に近い位置にある遺跡の報告書が近年相次いで刊行されている。したがって，詳細はそれら既刊の報告書に譲り，本項では本報告において主体を占める・・中略・・奈良・平安時代を中心に近在の遺跡を概観する。

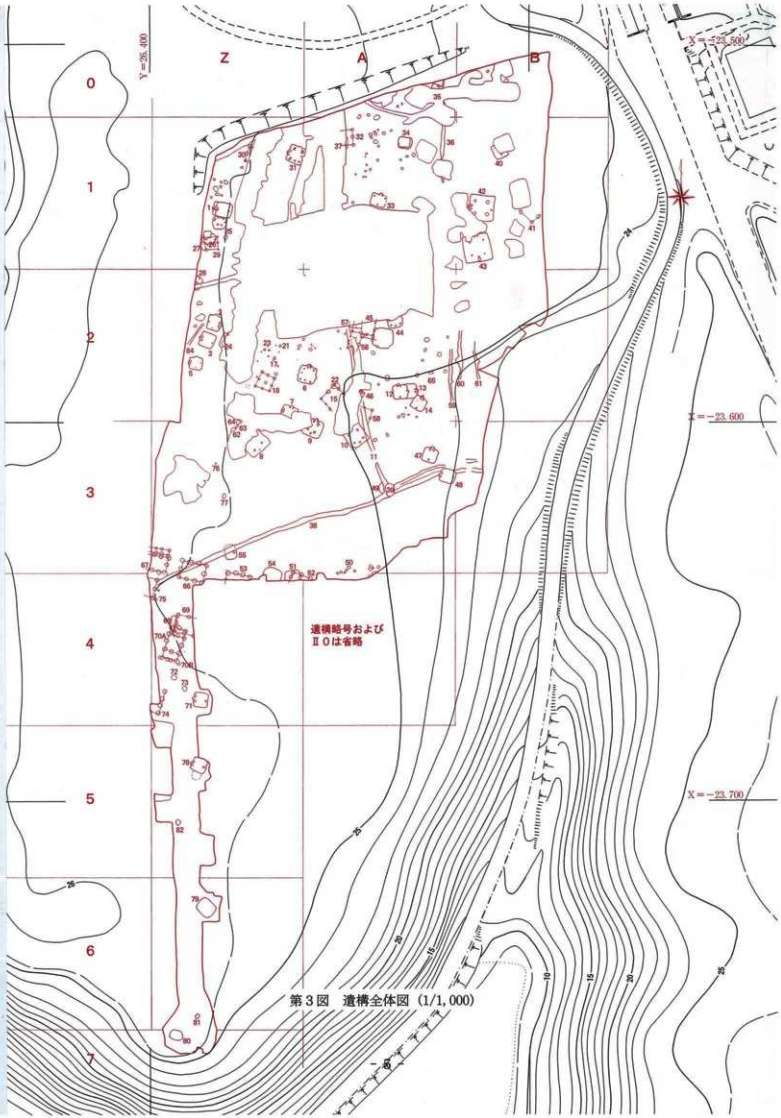
・・中略・・奈良・平安時代では，本遺跡西方の谷部に西根遺跡（２）が所在する。水路跡からは長文墨書土器等，多数の土師器坏や木製の人形・馬形等の祭祀遺物が見つかっている。谷部の西根遺跡をはさんで対岸西方の台地上には鳴神山遺跡（３）・白井谷奥遺跡（４）がある。以上の遺跡群は印旛郡船穂郷の中核となる遺跡と思われる。船尾白幡遺跡の北方の台地上には南西ヶ作遺跡（11）が所在する。鳴神山遺跡・船尾白幡遺跡と同じ谷筋の集落遺跡である。南西ヶ作遺跡の西方には大塚前遺跡（12）がある。奈良・平安時代の寺跡であり，遺構の状況とともに下総国分寺の同笵瓦が出土したことで注目される遺跡である。船尾白幡遺跡の東方には松崎遺跡群（８）があり，Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ遺跡で遺構・遺物が検出されている。西方では北の台遺跡（10）があり，土製の人形・馬形が出土している。また，印旛沼西部南岸地域は上谷遺跡（31），向境遺跡（29）等の調査により，奈良・平安時代においても様相が明らかになりつつある。』



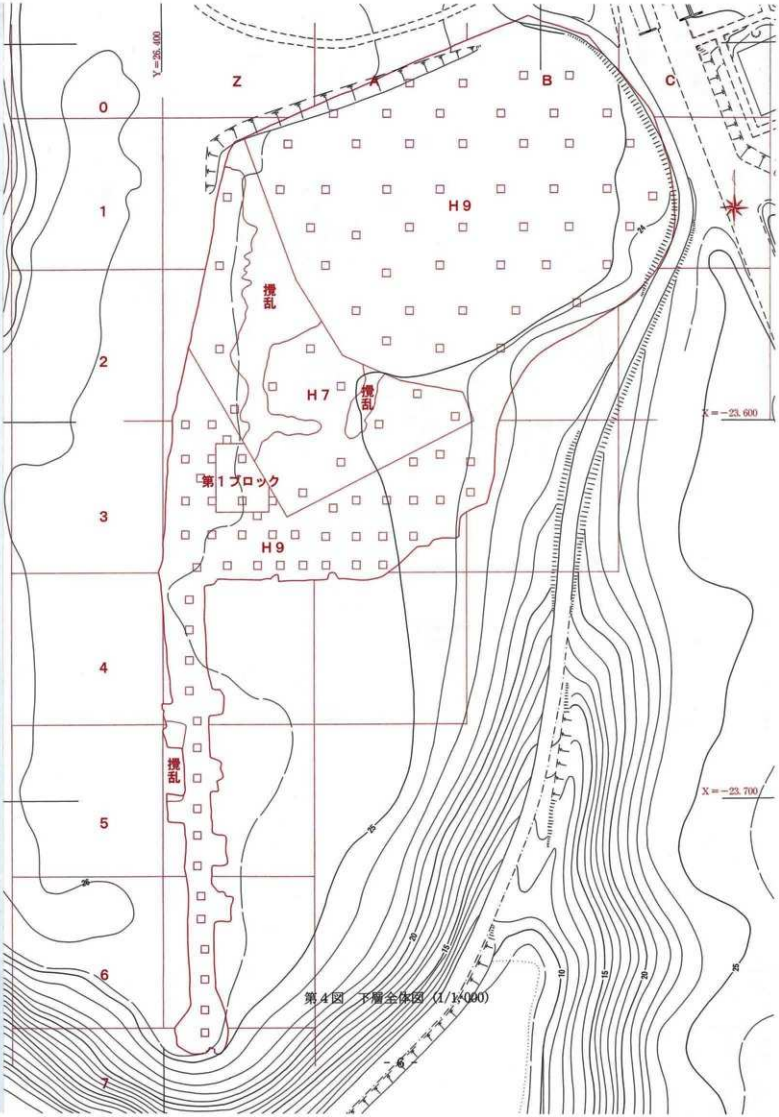
第1図　遺跡の位置と周辺地形図（1/50,000）



第２図　遺跡地形図（1/50,000印西市22・26を使用）



第３図　遺構全体図（1/1,000）



第4図　下層全体図（1/1,000）

注1　糸川道行・小笠原永隆・田島　新　2004　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ―印西市船尾白幡遺跡―』(財) 千葉県文化財センター

2　鳴田浩司・田形孝一　1999　『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡―』(財) 千葉県文化財センター

萩原恭一　2000　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ―印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡―』(財) 千葉県文化財センター

金丸　誠他 2002　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ―印西市向新田遺跡―』(財) 千葉県文化財センター

第3表　船尾白幡遺跡Ⅱ遺構種別一覧

時　代	遺構名	遺構番号	遺構数	備考
縄文時代	竪穴住居	SⅡ025，SⅡ028，SⅡ055	3	
	竪穴状遺構	SⅡ026，SⅡ027，SⅡ049	3	
	土坑	SKⅡ022，SKⅡ081	2	
	ピット群	PⅡ1～PⅡ90	90	
弥生時代	竪穴住居	SⅡ079	1	
	竪穴状遺構	SⅡ051，SⅡ054	2	
古墳時代後期	竪穴住居	SⅡ010，SⅡ013，SⅡ034，SⅡ035，SⅡ040，SⅡ042，SⅡ043	7	
奈良・平安時代	竪穴住居	SⅡ001，SⅡ002，SⅡ003，SⅡ005，SⅡ006，SⅡ007，SⅡ008，SⅡ009，SⅡ012，SⅡ014，SⅡ024，SⅡ031，SⅡ033，SⅡ037，SⅡ044，SⅡ046，SⅡ047，SⅡ048，SⅡ071，SⅡ078	20	
	掘立柱建物	SBⅡ015，SBⅡ018，SBⅡ029，SBⅡ030，SBⅡ032，SBⅡ041，SBⅡ045，SBⅡ052，SBⅡ053，SBⅡ056，SBⅡ057，SBⅡ058，SBⅡ066，SBⅡ067，SBⅡ069，SBⅡ070A，SBⅡ070B，SBⅡ074，SBⅡ075	19	
	ピット・ピット群	SHⅡ017，SHⅡ021，SHⅡ023，SHⅡ050	4	
	土坑	SKⅡ062，SKⅡ063，SKⅡ064，SKⅡ065，SKⅡ068，SKⅡ072，SKⅡ073，SKⅡ076，SKⅡ077，SKⅡ080，SKⅡ082	11	
	土器集中遺構	(2Z－76地点)	1	
中・近世	溝状遺構	SDⅡ011，SDⅡ036，SDⅡ038，SDⅡ059，SDⅡ060，SDⅡ061，SDⅡ084	7	
	土坑	SKⅡ039	1	
		004,016,019,020,083		欠番
		遺構数　合　計	171	

※遺構番号で数字の前の英文字・ローマ数字は整理が進行した段階で付与したものであり，遺物の注記は下3桁のアラビア数字のみである。なお，SDⅡ084は整理段階で新たに付けた遺構番号である。また，縄文時代ピット群の個々のピットについても整理時に通し番号とした。その他は，調査時の遺構番号をそのまま使用した。

第２章　旧石器時代

第１節　概要

今回の旧石器時代調査は船尾白幡遺跡の北西部の調査であり，戸神川から遺跡の南西方向より入り込む支谷の西側の台地上を調査した。調査区はこの支谷に向かって東側に緩やかに傾斜するが，台地縁辺よりやや奥まった所で１箇所の遺物集中地点が検出された。また上層調査に伴って遺構やグリッド出土に混在して石器が検出されている。これらの石器集中地点は，１箇所のブロックとブロック外出土石器と把握した。このブロックは出土層位と石器群の特徴から１つの文化層を設定し，前回報告の文化層に併せ第２文化層とした。このブロックは便宜的に第１ブロックと番号付けした。また，ブロック外出土石器には東内野型尖頭器や細石刃が存在し，第２文化層と石器群の特徴が異なることから，今回の調査では集中地点が確認されなかったが異なる文化層が存在していたことも予想される。

なお，当該調査区の基本層序は，前回報告の「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－」と同様であり，そちらの記載を参照していただきたい。

第２文化層は，立川ローム層のⅣ・Ⅴ層～Ⅲ層下部に産出層位があるもので，ソフトローム層からハードローム層の境界付近に産出層準が認められる。ブロックは単独であり，第１ブロックが帰属する。

第２節　第２文化層

第２文化層に属するブロックは１箇所のブロックであり，調査区の中央西側に当たり，舌状台地中央部分に存在する。ブロックは小規模なブロックで，主要な器種はナイフ形石器の破片１点が存在するのみである。

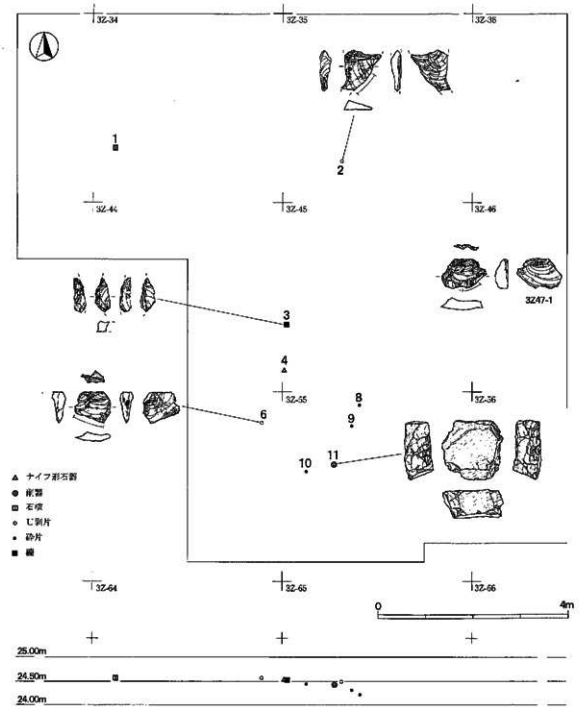
１．第１ブロック（第５～７図，表４・５，図版３・22）

分布状況　調査区西側で調査されたブロックである。3Ｚグリッド中央に位置している。現況では立川ローム層の堆積は水平に堆積している。

遺物総数は11点で，小規模のブロックとなっている。その分布は散漫であり，南側に数十cmの間隔で遺物の分布がややまとまる部分があり，そこから北側に３ｍ～５ｍ離れて２点が散在している。3Z-34グリッドから3Z-55グリッドにかけて分布する。分布範囲は南北6.8m，東西5.2mを測る。垂直分布では約0.4mの高低差がある。土層断面が集中分布から離れた場所でとられており投影できないが，調査の所見からはⅢ層（ソフトローム）下部～Ⅳ・Ⅴ層（ハードローム）上部で検出されており，Ⅲ層とⅣ・Ⅴ層の境界付近に産出層位が求められる。

母岩別資料　４母岩が認められる。黒曜石２母岩９点，流紋岩１母岩１点，チャート１母岩１点である。点数の多い母岩を挙げると，黒曜石２が５点，黒曜石１が４点であり，この２母岩で母岩構成の大部分を占め，他の母岩はすべて単独母岩となっている。黒曜石母岩の峻別は，半透明でやや透明度が弱く気泡・夾雑物の多いものを黒曜石１とし，半透明でやや透明度が強く気泡・介在物が少ないものを黒曜石２とした。母岩の分布では，黒曜石２はブロックの南側に集中している。母岩と器種の関係では，ナイフ形石器は黒曜石１の母岩を，削器はチャート１を素材としている。

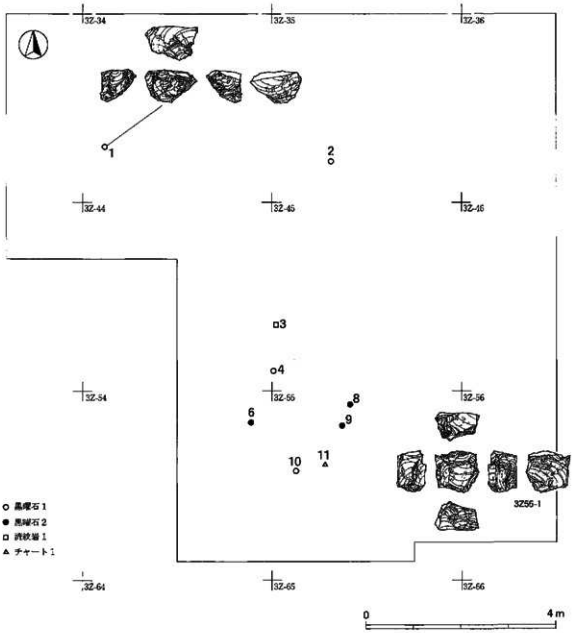
出土遺物　小規模なブロックであるが，主要な器種ではナイフ形石器１点，削器１点が検出されている。他は黒曜石１と黒曜石２の母岩で１点ずつ石核がある。



第５図　第１ブロック器種別分布

第４表　第1ブロック石器属性表

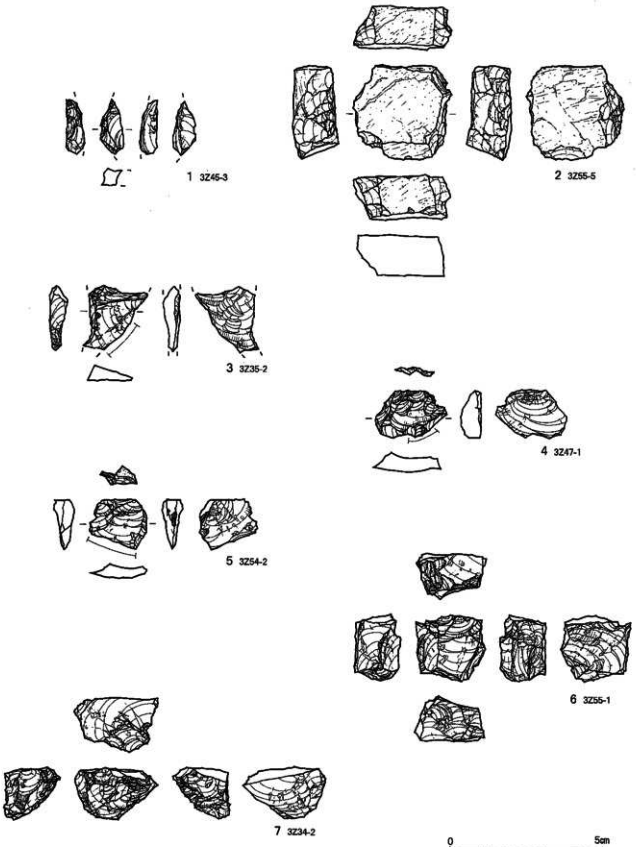
No.	遺物番号	器種	母岩	測図番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面	打角	打面調整	剥離調整	打面構成 C	S	H	T	R	L	D	V	側角	先端角	側縁形状	断面形状	末端部状
1	3Z34-0002	石核	黒曜石1	7	1.79	2.75	1.80	7.4																	
2	3Z35-0002	U剥片	黒曜石1	3	2.16	2.11	0.39	1.4																	
3	3Z45-0002	礫	流紋岩1		2.92	2.50	1.57	9.3																	
4	3Z45-0003	ナイフ形石器	黒曜石1	11	1.68	1.07	0.60	0.7																	
5	3Z47-0001	U剥片	黒曜石2	4	1.65	2.35	0.85	2.0																	
6	3Z34-0002	U剥片	黒曜石2	5	1.65	1.85	0.70	1.3																	
7	3Z55-0001	石核	黒曜石2	6	2.19	2.28	1.49	8.6																	
8	3Z35-0002	砕片	黒曜石2		1.01	1.45	0.54	0.9																	
9	3Z35-0003	砕片	黒曜石2		0.64	1.29	0.35	0.3																	
10	3Z35-0004	砕片	黒曜石1		1.46	0.83	0.14	0.1																	
11	3Z55-0005	剥離	チャート1	2	3.10	3.20	1.50	21.1																	



第6図　第1ブロック母岩別分布

第5表　第1ブロック組成表

	ナイフ形石器	削器	U剥片	砕片	石核	礫	総計	総計比（%）
チャート1		1 21.13					1 21.13	16.67% 39.70%
黒曜石1	1 0.66		1 1.41	1 0.14	1 7.42		4 9.63	25.76% 18.09%
黒曜石2			2 3.34	2 1.22	1 8.59		5 13.15	53.03% 24.70%
流紋岩1						1 9.32	1 9.32	4.55% 17.51%
総計（点） （g）	1 0.66	1 21.13	3 4.75	3 1.36	2 16.01	1 9.32	11 53.23	100.00% 100.00%
総計比 （%）	6.06% 1.24%	16.67% 39.70%	19.70% 8.92%	40.91% 2.55%	12.12% 30.08%	4.55% 17.51%	100.00% 100.00%	



第７図　第１ブロック出土石器

ナイフ形石器　1はナイフ形石器とした。器体を大きく欠損し平面形状は不明であるが，左側縁に連続した急角度調整加工が認められる。或いはこの調整加工途中で欠損した調整剥片とも考えられる。

削器　2は削器である。厚味のある板状素材の両側面を左側面で正面側から，右側面を裏面側から急角度の幅広加工と細部加工が集中する。また左側面から下面方向への調整も見られる。

U剥片　3～5は使用痕のある剥片（以下，U剥片と略称する。）である。3が黒曜石1,4・5が黒曜石2を素材としている。3は器体右側縁下部の鋭角な刃部に刃こぼれ状の微細剥離痕が疎らに認められる。4は器体下端部の鈍角な縁辺に細長剥離痕が集中する。5は器体下端部の鋭角な縁辺に微細剥離痕が疎らに見られる。

石核　6・7は石核である。6は黒曜石2を母岩としている。厚みのある剥片素材の石核であり，上面を打面とし正面を作業面とした剥片剥離，裏面を打面として下面と右側面を作業面とする剥片剥離，右側面を打面として裏面方向への剥片剥離が看取される。打面転移は90度を基調としており残核は饗子状の形状を呈している。7は上面を打面として右側面から正面，左側面に打点が移動して剥片剥離が繰り返されている。

第3節　ブロック外出土石器

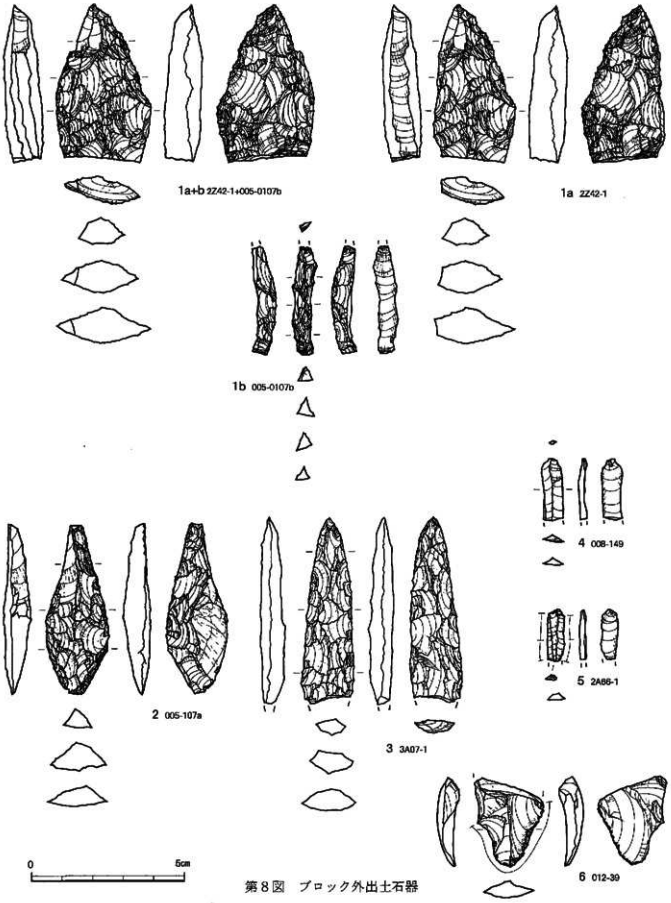
1．ブロック外石器（第8図，表6，図版22）

旧石器時代調査の過程でブロックの広がりが認められない石器及び上層調査の過程で出土した旧石器時代石器と判断される石器をブロック外出土石器としてまとめて記載する。

1a～3は尖頭器である。1a・bは面取り尖頭器と削片の接合資料である。石材は黒曜石であり，グレー～黒色に縞状に濁る半透明の良質なもので，夾雑物は少ないが球塊状の介在物をもつものである。器体は平坦剥離で全面覆われており素材が窺い知れないが，比較的厚味があり両面体素材の可能性が高い。下端部の割れは左側縁の樋状剥離以前に割れている。面取り剥離は表面右側面先端部方向から下端折れ面に突き抜ける剥離が行われており，剥離された削片基部を欠損する。左側縁部は表裏面とも面取り剥離後の加工は認められないが，表面右側縁上部は面取り剥離後に裏面側から調整が行われ，右側縁は肩が張るように先端が鈍角となる。1bの面取り尖頭器から剥がされた削片は2とともに奈良・平安時代竪穴建物跡のSIⅡ005から一括資料として検出されたものであり，SIⅡ005の近隣グリッドの2Z-42から検出された面取りの尖頭器（1a）と接合している。検出された範囲は調査区の西端にあたり，旧石器時代調査では石器集中箇所は検出されなかったが，調査区の西側に当該期の文化層が広がっていた可能性が高い。

2は珪質頁岩1を母岩とする。乳灰褐色を呈し，表面は風化して部分的にやや茶色を帯びる。器体横断面形は山形を呈し横長剥片素材のものである。器体先端は面取り剥離以前に欠損している。表面左側縁に面取り剥離が行われており，面取り剥離後に左側縁中間部及び器体先端稜上に面取り剥離面からの再加工が認められ，この稜上剥離後に右側縁先端が細部加工されている。この面取り剥離及び再加工により両側縁上半は内彎するように細身になっている。3は安山岩A（黒色緻密質安山岩）を母岩とする。3A-07のソフトローム（Ⅲ層）で検出されている。細身の大型のもので最大幅を器体過半部にもつ。基部を欠損し基部形状が判然としないが，旧石器時代終末期～縄文草創期に見られるものであろう。

4・5は細石刃である。2点とも乳灰白色を呈した珪質頁岩を母岩とするが，5の方が珪化度が強い。いずれも器体端部を欠損している。4は自然面打面であり，5は点状打面である。



第８図　ブロック外出土石器

6は二次加工を有する剥片（以下，R剥片と略記する。）とした。乳白色にグレーの斑文の入る珪質頁岩である。器体上部を欠損し器体下半部は背面左側面で幅広な加工，背面右側縁で細部加工が認められ舌状に突出した機能部が作出されている。この部分に微細な剥離痕が見られる。削片系細石器石器群に伴出する剥片類と石材・形態が共通しており，明確ではないが細石器石器群期のものである可能性が高い。

第6表　ブロック外出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	母岩	標識番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面	打角	打面調整	腹部調整	背面構成								調整角	先端角	調整部位	打面部位	欠損部位
													C	S	H	T	R	L	D	V					
1	005-0107a	実測器	珪質頁岩1	2	5.60	2.05	0.90	7.4																	
2	005-0107b	削片	黒曜石3	1b	3.55	0.85	0.80	1.2																	
3	008-0149	細石刃	珪質頁岩2	4	2.01	0.71	0.27	0.3																	
4	010-0004	剥片	珪質頁岩3		1.66	1.81	0.49	1.4	—				○								1				E
5	012-0039	R剥片	珪質頁岩4	6	2.92	2.29	0.76	3.1																	
7	2A66-0001	細石刃	珪質頁岩5	5	1.68	0.57	0.23	0.2																	
8	2Z42-0001	実測器	黒曜石3	1a	5.22	2.69	1.20	15.5																	
9	3A07-0001	実測器	安山岩A1	3	5.13	1.78	0.85	8.1																	

第３章　縄文時代

第１節　遺構とその出土遺物

検出された遺構は，竪穴住居３棟（中期２，後期１），竪穴状遺構３基（中期２，後期１），土坑２基（早期１，後期１），ピット群３箇所である。

１．竪穴住居・竪穴状遺構

SIⅡ025（第９図，図版４・23）

調査区北部，1Z-74グリッドに位置する竪穴住居である。平面形は楕円形で，規模は長軸4.7m，短軸4.2mである。床面までは浅く，深さは10～15cmである。長軸方位はN-87.5°-Eである。床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面および，炉跡は検出されなかった。主柱穴と考えられるピットが，楕円形に配置されて８基検出された。平面形は円形または楕円形で，規模は楕円形が38cm×28cm～50cm×33cm，円形が径22cm～径37cm，床面からの深さは10cm～51cmである。深さが不均一であるが，配置から主柱穴と判断した。

出土遺物は破片が多く，覆土中および主柱穴内から出土した縄文土器片６点を図示した。１～３は深鉢形土器の口縁部である。１は口縁はやや外反し，丸く肥厚する。口縁下に沈線による枠状区画が施され，区画内に横位のＬＲ縄文が施される。施文部以外にはナデが施される。色調は外面が明褐色，内面が灰黒色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。２は口縁が内彎し，平縁である。口縁直下に横位のＲＬ縄文が１段巡ると思われ，その下に縦位のＲＬ縄文が施され，羽状にみえる。横位のＲＬ縄文下から沈線文が施されると思われる。色調は内外面灰黒色である。胎土は砂粒をやや多く含む。３は口縁はやや外反し，内面が面取りされ，尖り気味である。口縁下に円形刺突文と沈線による枠状区画が施され，区画内に縦位のＲＬ縄文が施される。施文部位外にはナデが施される。色調は内外面明褐色で，内面が一部黒色である。胎土は細砂粒を少量含む。

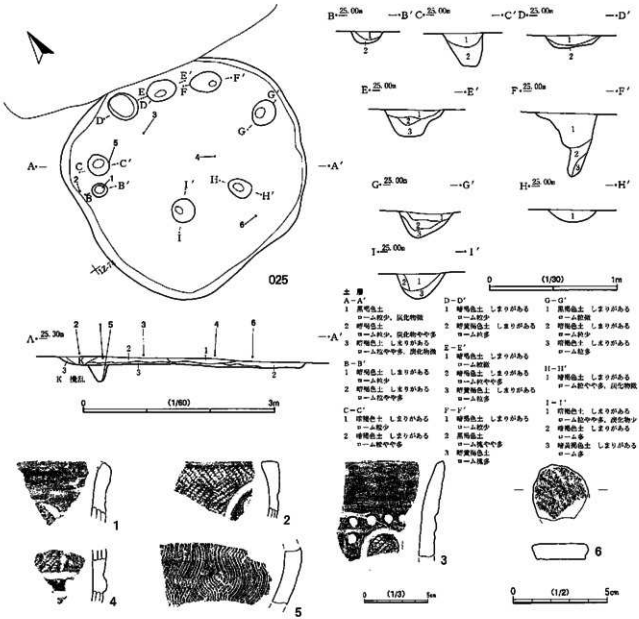
４・５は深鉢形土器の胴部である。４は隆帯で区画が施される。隆帯の両側が沈線状になり，区画内には縦位のＲＬ縄文が施される。色調は内外面暗褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。５は柳描文様が縦位に波状に施される。内面はヘラミガキが施される。色調は外面が明褐色，内面が灰黒色である。胎土は細砂粒を少量含む。

６は土器片錘と思われるが，刻み目が不明瞭である。ＲＬ縄文が施される。

すべて中期加曽利ＥⅡ式と考えられる。

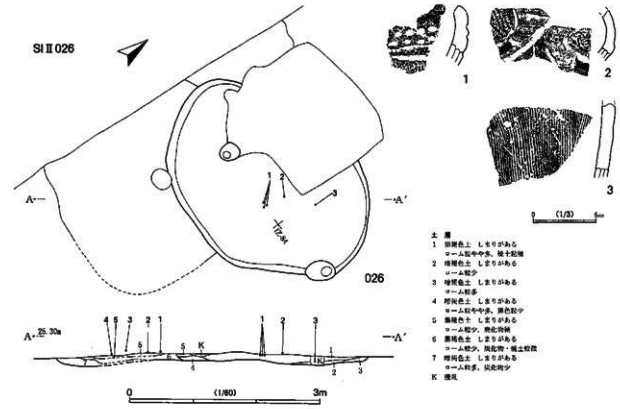
SIⅡ026（第10図，図版４・23）

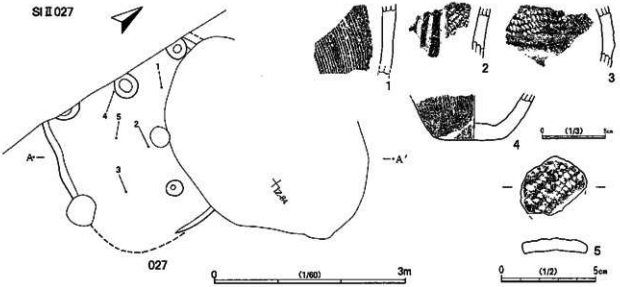
調査区北部，1Z-83グリッドに位置する。SIⅡ027と重複する。土層断面から本遺構が新しい。北側1/4が方形に攪乱を受けている。平面形は楕円形で，規模は長軸3.7m，短軸推定2.7mである。床面までは浅く，深さは15cmである。長軸方位はN-89.5°-Eである。床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面および主柱穴・炉跡は検出されなかった。本遺構に伴うと思われるピットが２基検出された。１基は床面中央やや西に検出された。平面形は円形で，規模は径30cm，床面からの深さは15cmである。他は東端の壁に接して検出された。平面形は楕円形で，規模は48cm×32cm，床面からの深さは10cmである。規模や内部施設から竪穴状遺構とした。



第９図　SⅡ025及びその出土遺物

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片３点を図示した。１は深鉢形土器の口縁部である。口縁は内彎し，丸縁である。口縁下に円形刺突文が２列に施され，その下に沈線による枠状区画が施される。区画内には縦位Ｌ撚糸文が施される。施文部位外にはナデが施される。色調は外面が灰黒色一部明褐色，内面が淡明褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。２は深鉢形土器の口縁部付近で，内彎している。隆帯による区画が施される。隆帯の両側は沈線状で，区画内には横位のＲＬ縄文が施される。内面にはヘラミガキが施される。色調は内外面褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。３は深鉢形土器の胴部である。縦位の櫛描文が施される。色調は外面褐色，内面明褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。すべて中期加曽利ＥⅡ式と考えられる。





第10図　SIⅡ026・Ⅱ027及びその出土遺物

SIⅡ027（第10図，図版４・23）

調査区北部，1Z-83グリッドに位置する。西側約１/４が調査区外である。遺存は悪く，南東部の壁が削平されている。北側１/４がSIⅡ026と重複し，土層断面から本遺構が古い。遺存部分から平面形はやや不整な円形と考えられる。規模は推定径3.5m，床面までは浅く，深さは10cmである。床面はほぼ平坦で，明瞭な硬化面は検出されなかった。主柱穴・炉跡は検出されなかった。本遺構に伴うと思われるピットが４基検出された。１基は床面東部，他の３基は調査区境部分に検出された。平面形はほぼ円形で，径

25cm～44cm，床面からの深さ10cm～20cmである。規模や内部施設から竪穴状遺構とした。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片５点を図示した。１～３は深鉢形土器の胴部である。１は縦位の櫛描文が施される。色調は内外面淡明褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。２は沈線による区画と縦位のＲＬ縄文が施される。色調は外面黒褐色，内面暗褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。３は口縁下の区画部分と思われ，縦位のＲＬ縄文が施される。色調は外面淡明褐色，内面暗灰褐色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。

４は深鉢形土器の底部である。縦位の櫛描文が施される。５は土器片錘と思われるが，刻み目が不明瞭である。ＲＬ縄文が施される。色調は内外面灰黒色である。胎土は細砂粒をやや多く含む。すべて中期加曽利ＥⅡ式と考えられる。

SⅡ028（第11図，図版４・24）

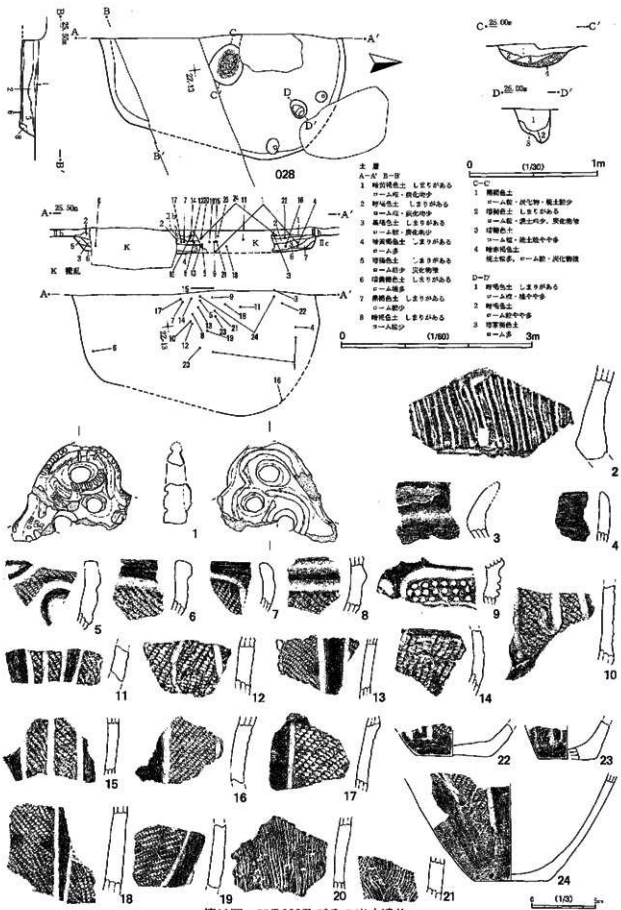
調査区北部，2Z-02グリッドに位置する竪穴住居である。西側約１/３が調査区外である。南側１/４が溝状に攪乱を受け，また，床面中央，北東壁にも攪乱を受けている。平面形は長方形に近い楕円形で，規模は長軸3.9m，短軸推定2.8m，床面までの深さは37cmである。長軸方位はN-7°-Eである。床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面は検出されなかった。炉跡が検出されたが，主柱穴は検出されなかった。本遺構に伴うと思われるピットが３基検出された。炉跡は床面ほぼ中央で，北西端と南東端が攪乱を受けている。平面形は楕円形で，64cm×53cm，床面への掘込みは18cmである。

ピットは床面北東隅に検出された。２基は楕円形で，30cm×24cm，深さ27cm，25cm×18cm，深さ10cmである。１基は円形で，径18cm，深さ10cmである。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片24点を図示した。

１は深鉢形土器の把手である。表面は孔のまわりに渦巻状の突帯を貼り付け，突帯には刻み目が施される。内面は孔の周りに太い沈線が施される。色調は内外面淡赤褐色で，胎土は長石粒を多く含み，雲母粒を少量含む。２は大形の深鉢形土器の口縁部付近である。縦方向の条線文が施され，内面にはヘラミガキが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は粗い砂粒を少量含む。３は口縁部片である。器形は不明確であるが，有孔鍔付土器の可能性がある。口縁は丸く，内外面にヘラミガキが施される。口縁付近の器面が薄くはがれている。色調は内外面褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。４は深鉢形土器の口縁部片である。口縁は丸く，内外面にヘラミガキが施される。色調は内外面灰黒色で，胎土は細砂粒を少量含む。以上は，中期勝坂式と思われる。

５～24は深鉢形土器である。５～７は口縁部片である。５は平縁で，把手が付くか，波状口縁になると思われる。隆帯による渦巻文が施され，地文に縦位のＬＲ縄文が施される。内面はヘラミガキが施される。色調は内外面黒褐色で，胎土は細砂粒を少量含む。６はやや丸縁で，口縁直下に区画文が施され，区画内に横位ＬＲ縄文が施され，内面にヘラミガキが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は細砂粒を少量含む。７は丸縁で，口縁直下に区画文が施され，区画内に横位ＲＬ縄文が施される。色調は外面黒褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。８は口縁部付近で，沈線を伴う隆帯の区画文の中に横位ＲＬ縄文が施される。色調は外面褐色，内面灰褐色で，胎土は砂粒をやや多く含む。９は口縁部付近で，沈線を伴う隆帯の区画文の中に３列の円形刺突文が施される。色調は外面灰褐色，内面淡褐色で，胎土は細砂粒を少量含む。



第11図　SIⅡ028及びその出土遺物

10～21は胴部片である。10は横位ＲＬ縄文の地文に沈線文が施され，一部Ｊ字状になる。色調は外面暗褐色，内面明褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。11は沈線で無文部分と縦位ＬＲ縄文部分が区画され，縄文部分が沈線で縦に二分される。無文部分にはナデが施される。色調は外面明褐色，内面灰黒色で，胎土は細砂粒を少量含む。12は縦位ＲＬ縄文の地文に沈線文が施され，一部Ｊ字状になると思われる。色調は内外面灰褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。13は沈線で無文部分と横位ＲＬ縄文部分が区画される。無文部分にはナデが施される。色調は外面黒褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。14は縦位ＲＬ縄文が施され，沈線による区画が施される。色調は外面灰褐色，内面灰黒色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。11は沈線で無文部分と縦位ＬＲ縄文部分が区画され，縄文部分が沈線で縦に二分される。無文部分にはナデが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。16～19は沈線で無文部分と縄文部分が区画される。16・17・19はＲＬ縄文，18はＬＲ縄文である。無文部分にはナデが施される。16は，色調が外面灰褐色，内面明褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。17は，色調が外面褐色，内面暗褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。18は，色調が外面灰褐色，内面明褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。19は，色調が内外面明褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。20・21は縦位の櫛描文様が施される。20は，色調が内外面暗褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。21は，色調が外面明褐色，内面暗褐色で，胎土は細砂粒を少量含む。

22～24は底部である。平底でナデが施される。22・24は沈線で無文部分と縄文部分が区画される。22は縦位のＬＲ縄文，24は縦位のＲＬ縄文である。22は，色調が内外面明褐色で，胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。23は，色調が内外面褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。24は，色調が外面明褐色，内面は褐色で，炭化物が付着する。胎土は細砂粒を少量含む。中期加曽利ＥⅡ式と考えられる。

SⅡ049（第12図，図版25）

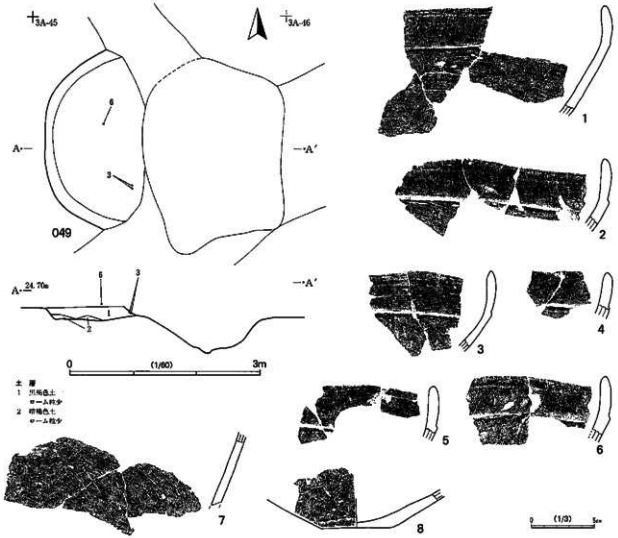
調査区中央，3A-45グリッドに位置する。東側約1/2が他遺構等による攪乱を受けている。平面形は，遺存部分から円形と考えられ，規模は推定径3.2m，床面までの深さは20cmである。床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面は検出されなかった。炉跡，主柱穴，ピットは検出されなかったが，規模から竪穴状遺構とした。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片８点を図示した。器形，調整，胎土からすべて同一個体と思われる。

１～６は精製浅鉢形土器の口縁部から胴部である。波状口縁で，口縁部と胴部との境に段がある。外面は口縁部にヘラミガキ，胴部にヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。７は胴部片である。外面にヘラケズリ，内面にヘラミガキが施される。８は底部である。平底でナデが施される。色調は，外面が黒褐色主体で，一部明褐色，内面は黒褐色主体で，一部褐色である。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。後期加曽利B1式と考えられる。

SⅡ055（第13図，図版４・25）

調査区中央やや西，3Z-58グリッドに位置する竪穴住居である。北側約1/4が溝状に攪乱を受け，また，北壁がほとんど削平されている。平面形は長方形で，規模は推定長3.8m，幅3.0m，床面までの深さは



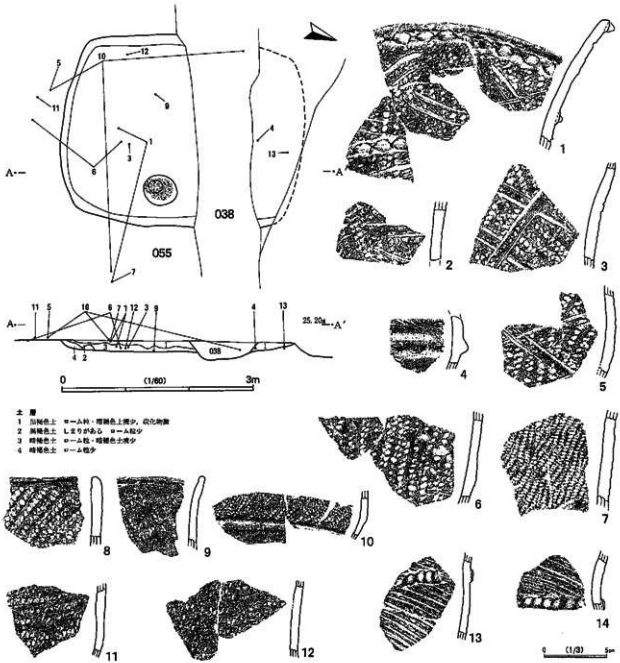
第12図　SⅡ049及びその出土遺物

20cmである。長軸方位はN-17.5°-Wである。床面はほぼ平坦である。明瞭な硬化面は検出されなかった。炉跡が検出されたが，主柱穴，ピットは検出されなかった。炉跡は床面中央東寄りである。平面形は楕円形で，55cm×47cm，床面への掘込みは5cmである。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片14点を図示した。

1～3，5・6は粗製深鉢形土器で，地文にＲＬＲ複節縄文が施され，1は口縁部から胴上部で，口縁直下と胴部上半部に押さえが施された紐線文が貼り付けられている。また，半截竹管による平行沈線が弧状に施され，内面にはヘラミガキが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。2は胴部片で，半截竹管による平行沈線が施され，内面にはヘラミガキが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。3は胴部片で，半截竹管による平行沈線が施される。色調は外面暗褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。5は胴部片で，半截竹管による平行沈線が施される。色調は内外面暗褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。6は胴部片で，半截竹管による平行沈線が施される。色調は外面黒褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。

4は粗製深鉢形土器の胴部片で，隆帯部分である。色調は内外面暗褐色で，胎土は砂粒・雲母粒をやや多く含む。7は粗製深鉢形土器の胴部片で，縦位のＲＬ縄文が施される。色調は内外面褐色で，胎土は細



第13図　SⅡ055及びその出土遺物

砂粒をやや多く含む。8は粗製深鉢形土器の口縁部片である。外面に横位のＬＲＬ複節縄文が施され，内面口縁直下に沈線が施される。色調は外面黒褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。9は粗製深鉢形土器の口縁部片である。外面に縦位のＲＬＲ複節縄文が施され，内面口縁直下が沈線状にくぼむ。色調は外面暗褐色，内面褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。

10は精製浅鉢形土器の胴部片と思われる。横位ＬＲ縄文部分と，無文部分との境に段がある。色調は内外面明褐色で，胎土は砂粒をやや多く含む。

11・12は粗製深鉢形土器の胴部片である。縦位ＬＲ縄文が施される。11は，色調が内外面褐色で，胎土は細砂粒を多く含む。12は，色調が内外面明褐色で，胎土は細砂粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。

13・14は粗製深鉢形土器の胴部片である。地文に半截竹管の平行条線が施され，連続して押圧された紐線文が貼り付けられている。13・14とも，色調は外面明褐色，内面淡褐色で，胎土は砂粒を多く含む。

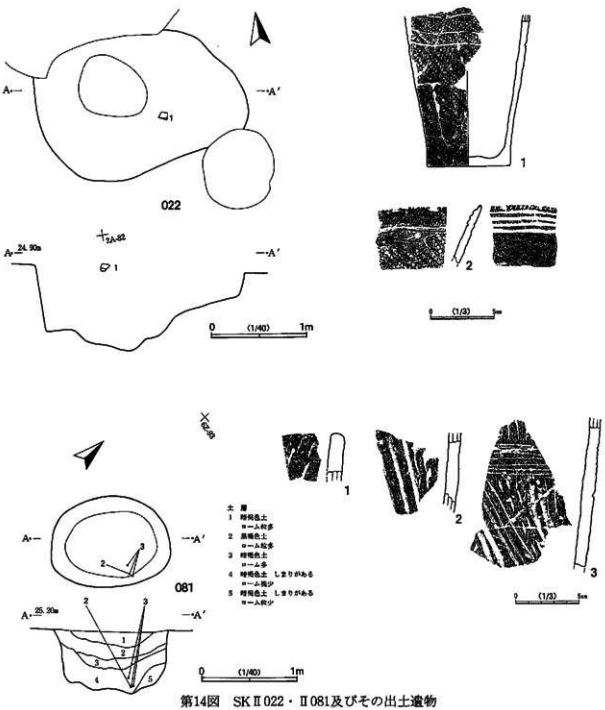
土器は後期加曽利Ｂ１式で，住居の時期も同じと考えられる。

２．土坑・ピット群

SKⅡ022（第14図，図版４・26）

調査区中央やや北，2A-72グリッドに位置する。北側と南東側に攪乱を受けている。平面形はかなり歪んだ楕円形で，規模は長軸2.3m，短軸推定1.6m，深さ93cmである。出土遺物から縄文時代と判断した。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片２点を図示した。



第14図　SKⅡ022・Ⅱ081及びその出土遺物

1は精製深鉢形土器の胴部から底部である。胴部には地文にＲＬ縄文が施され，平行沈線文２条以上施される。底部付近は磨消し縄文である。底部にはていねいなナデが施される。色調は内外面黒褐色で，胎土は砂粒をやや多く含む。２は精製浅鉢形土器の口縁部片である。口縁に刻み目が施される。外面は口縁下に無文帯があり，沈線を境にして縦位ＬＲ縄文と区分される。内面は口縁直下に４条の平行沈線が施され，施文部以外はヘラミガキが施される。色調は内外面明褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含む。

土器は後期加曽利Ｂ1式で，土坑の時期も同じと考えられる。

SKⅡ081（第14図，図版４・26）

調査区南端，6Z-93グリッドに位置する。平面形は楕円形で，規模は長軸1.25m，短軸0.95m，深さ67cmである。出土遺物から縄文時代と判断した。

出土遺物は破片が多く，覆土中から出土した縄文土器片３点を図示した。

１～３は深鉢形土器である。１は口縁部片である。平縁で，口縁下から斜方向の短沈線文が施される。色調は内外面明淡褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。２は胴部片である。斜方向の平行沈線文，短沈線文が施される。色調は内外面明淡褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。３は口縁部に近い胴部片と思われる。上部から縦位条線文，横位条線文が施され，その下に斜方向に太沈線，細沈線，短沈線の順に文様が施される。色調は外面明淡褐色，内面淡灰褐色で，胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。

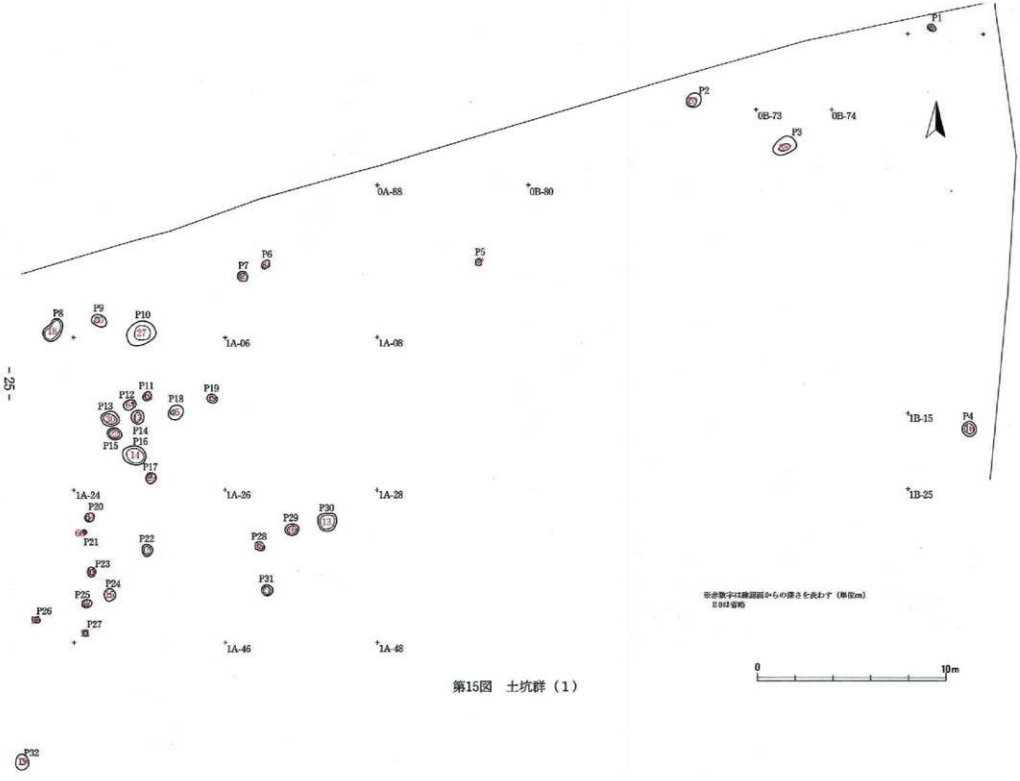
土器は早期三戸式で，土坑の時期も同じと考えられる。

土坑群　PⅡ１～PⅡ90（第15～17図，第７表）

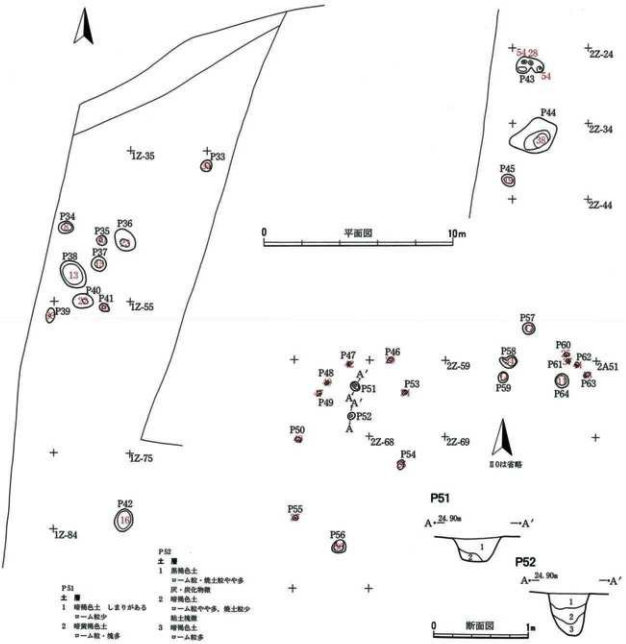
縄文時代の土坑群は調査区北部から中央部に検出された。これらは，縄文時代竪穴住居の分布とほぼ一致する。分布状況から７箇所の小グループに分けられると考えられる。PⅡ１～PⅡ32の32基は，調査区北端部1Aグリッドを中心分布にしている。PⅡ33～PⅡ42の10基は調査区北西端部1Zグリッドを中心に分布している。PⅡ43～PⅡ45の３基は2Zグリッド北西部に位置している。PⅡ46～PⅡ64の19基は2Zグリッドの南東部を中心に分布している。PⅡ65～PⅡ73の９基は2Aグリッドのほぼ中央に分布している。PⅡ74～PⅡ83の10基は2Aグリッドの西部を中心に分布している。最後に，PⅡ84～PⅡ90の７基は3Aグリッドの北部を中心に分布している。　平面形は楕円形が最も多く，他は円形，方形，不整形であるが，不整形のものは複数の重複と考えられる。大きさは，最大が２m以上，最小は30cm以下であり，深さは，最も深いものが66cm，最も浅いものは７cmである。深さから陥穴の可能性は無いと思われる。大きさが１m以上のものは墓坑の可能性も考えられる。大きさが50cm以上は貯蔵穴の可能性がある。50cm以下については竪穴住居の柱穴のみの残存または，柱状のものを立てた跡の可能性もある。

土坑の平面形，規模は一覧表のとおりである。

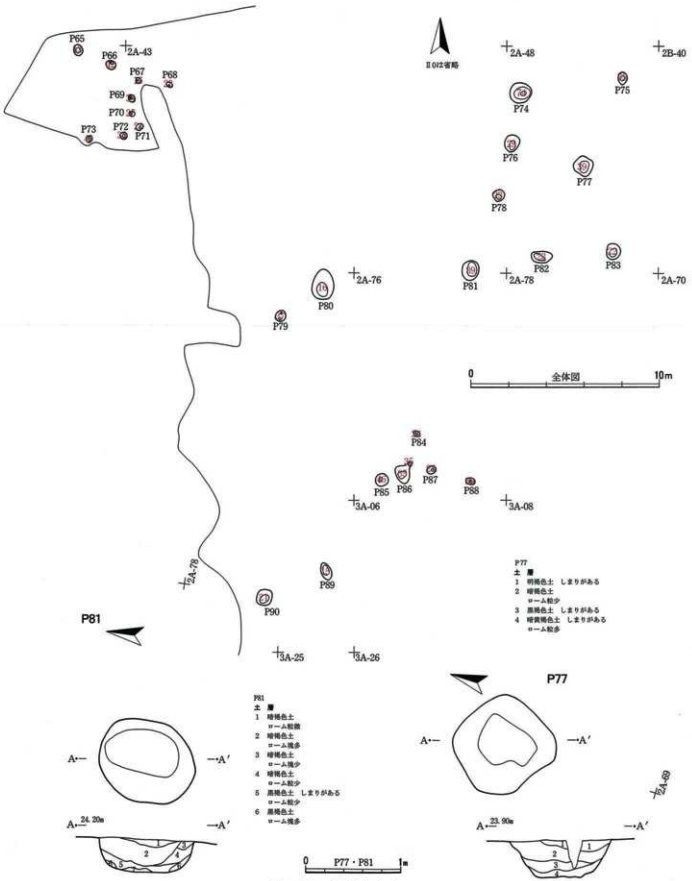
遺物はほとんど細片であった。


P1
P2
0B-73
0B-74
P3
0A-88
0B-80
P5
P6
P7
P8
P9
P10
1A-06
1A-08
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
1B-15
P4
1A-24
1A-26
1A-28
1B-25
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
1A-46
1A-48
P32
※赤数字は廃棄面からの深さを表わす（単位cm）
※P18省略
0
10m

第15図　土坑群（1）


1Z-35
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
1Z-55
1Z-75
1Z-84
P42
P43
P44
P45
2Z-24
2Z-34
2Z-44
0
平面図
10m
P47
P46
P48
P51
P53
P49
P52
P50
2Z-68
2Z-69
2Z-59
P54
P55
P56
P57
P58
P59
P60
P61
P62
P63
P64
2A51
Ⅱ01と省略
P51
A 24.90m
A′
1
P52
A 24.90m
A′
1
2
3
0
断面図
1m
P51
土 層
1 暗褐色土 しまりがある
ローム粒少
2 暗黄褐色土
ローム粒・焼多
P52
土 層
1 黒褐色土
ローム粒・焼土粒やや多
炭・炭化物微
2 暗褐色土
ローム粒やや多、焼土粒少
粘土焼微
3 暗褐色土
ローム粒多

第16図　土坑群（2）


P65
P66
2A-43
P67
P68
P69
P70
P73
P72
P71
II区は省略
2A-48
2B-40
P74
P75
P76
P77
P78
P79
2A-76
P80
P81
2A-78
P82
P83
2A-70
0
全体図
10m
P84
P85
P86
P87
P88
3A-06
3A-08
2A-78
P89
P90
3A-25
3A-26
P81
A
A′
24.20m
P77
23.90m
2A-69
P81
土 層
1 暗褐色土
ローム粒微
2 暗褐色土
ローム塊多
3 暗褐色土
ローム塊少
4 暗褐色土
ローム粒少
5 黒褐色土 しまりがある
ローム粒少
6 黒褐色土
ローム塊多
P77
土 層
1 明褐色土 しまりがある
2 暗褐色土
ローム粒少
3 黒褐色土 しまりがある
4 暗黄褐色土 しまりがある
ローム粒多
0
P77・P81
1m

第17図　土坑群（3）

第７表　縄文時代土坑群一覧表

挿図	遺構番号	平面形	平面規模(cm)	深さ(cm)
15	ＰⅡ1	楕円	50×35	7
	ＰⅡ2	楕円	85×75	20
	ＰⅡ3	楕円	158×83	38
	ＰⅡ4	円	径75	16
	ＰⅡ5	円	径33	27
	ＰⅡ6	楕円	55×35	24
	ＰⅡ7	円	径55	25
	ＰⅡ8	楕円	130×87	18
	ＰⅡ9	楕円	80×58	20
	ＰⅡ10	楕円	155×75	27
	ＰⅡ11	楕円	53×44	13
	ＰⅡ12	楕円	68×50	64
	ＰⅡ13	楕円	100×80	30
	ＰⅡ14	楕円	75×68	13
	ＰⅡ15	楕円	80×60	22
	ＰⅡ16	楕円	125×100	14
	ＰⅡ17	円	径57	29
	ＰⅡ18	楕円	83×72	45
	ＰⅡ19	楕円	56×47	29
	ＰⅡ20	楕円	53×44	34
	ＰⅡ21	円	径23	66
	ＰⅡ22	楕円	63×57	15
	ＰⅡ23	楕円	50×45	15
	ＰⅡ24	円	径60	15
	ＰⅡ25	楕円	55×42	22
	ＰⅡ26	楕円	45×32	16
	ＰⅡ27	円	径32	21
	ＰⅡ28	楕円	55×43	20
	ＰⅡ29	楕円	77×58	16
	ＰⅡ30	楕円	110×103	13
	ＰⅡ31	円	径60	21
	ＰⅡ32	楕円	82×70	19
16	ＰⅡ33	楕円	64×57	34
	ＰⅡ34	楕円	78×67	8
	ＰⅡ35	円	径50	30
	ＰⅡ36	楕円	130×98	23
	ＰⅡ37	円	径80	15
	ＰⅡ38	楕円	162×117	13
	ＰⅡ39	楕円	78×43	33
	ＰⅡ40	楕円	108×75	22
	ＰⅡ41	楕円	62×43	16
	ＰⅡ42	楕円	120×95	16
	ＰⅡ43	不整	140×88	28・54・54
	ＰⅡ44	楕円	262×180	38
	ＰⅡ45	楕円	75×63	19

挿図	遺構番号	平面形	平面規模(cm)	深さ(cm)
16	ＰⅡ46	楕円	37×25	29
	ＰⅡ47	楕円	28×20	42
	ＰⅡ48	楕円	28×18	49
	ＰⅡ49	円	径25	47
	ＰⅡ50	楕円	33×25	49
	ＰⅡ51	楕円	55×45	26
	ＰⅡ52	楕円	38×34	45
	ＰⅡ53	円	径25	34
	ＰⅡ54	楕円	53×33	26
	ＰⅡ55	円	径25	37
	ＰⅡ56	楕円	78×70	56
	ＰⅡ57	円	径62	17
	ＰⅡ58	不整楕円	95×67	34
	ＰⅡ59	円	径55	14
	ＰⅡ60	楕円	28×20	25
	ＰⅡ61	円	径25	37
	ＰⅡ62	円	径27	44
	ＰⅡ63	楕円	40×20	18
	ＰⅡ64	円	径72	11
17	ＰⅡ65	楕円	62×48	13
	ＰⅡ66	楕円	55×42	42
	ＰⅡ67	円	径30	16
	ＰⅡ68	楕円	40×25	23
	ＰⅡ69	楕円	45×32	34
	ＰⅡ70	円	径30	25
	ＰⅡ71	楕円	42×32	21
	ＰⅡ72	円	径38	32
	ＰⅡ73	円	径30	49
	ＰⅡ74	円	径112	34
	ＰⅡ75	楕円	67×48	31
	ＰⅡ76	楕円	90×75	29
	ＰⅡ77	不整円	径100	39
	ＰⅡ78	円	径65	23
	ＰⅡ79	円	径55	37
	ＰⅡ80	楕円	160×113	16
	ＰⅡ81	楕円	105×90	39
	ＰⅡ82	楕円	110×60	23
	ＰⅡ83	円	径75	22
	ＰⅡ84	楕円	37×28	24
	ＰⅡ85	円	径65	46
	ＰⅡ86	不整楕円	110×100	35・35
	ＰⅡ87	楕円	53×42	28
	ＰⅡ88	楕円	50×35	30
	ＰⅡ89	楕円	93×55	15
	ＰⅡ90	方	辺78	21

第２節　遺構外出土遺物

早期の土器（第18図１～37，図版27）

１～12はいわゆる撚糸文系土器である。１・２は井草１式，３・４は井草２式に比定できる。５～12は胴部片で，細かな分類は不明であるが，縦位縄文が比較的密であるので，井草式に含まれると思われる。13～31は沈線文土器である。13は上から格子状細沈線，横位平行細沈線，平行の斜行沈線の間に横位の短沈線が施される。14は横位平行細沈線の下に格子状細沈線が施される。15は格子状細沈線が施される。16は斜行条線文の下に横位平行条線文が施される。17・18は口縁部片で，17は横位平行条線文，18は列点文の下に横位平行条線文が施される。19は横位平行条線文の下に縦位平行条線文が施される。20は横位平行条線文の下に斜行条線文が施される。21は平行条線文，斜行条線文，円形条線文が施される。22は平行太沈線文の下に斜行太沈線文が施される。23は地文にＬＲ縄文が施され，上に横位平行条線文，下に斜行条線文と縦位平行条線文が施される。24～29は条線文が施され，24・27・29は横位，25・26・28は縦位である。24は下に半截竹管押引文が施される。30・31は底部である。尖底であるが，底端部は突出しない。13～15は三戸式，16～29は田戸下層式に比定される。30・31はやや丸みがあるので，三戸式に属すると思われる。

32～37は条痕文系土器である。32・33は口縁部片で，口縁に刻み目，口縁直下に貝殻押圧文が施され，その下に貝殻条痕文が施される。内面にも貝殻条痕文が施される。34～37は内外両面に貝殻条痕文が施される。胎土には繊維が含まれ，32・33は茅山下層式，34～37は細かな分類は不明であるが，茅山式に比定される。

前期の土器（第18図38～45，図版27・28）

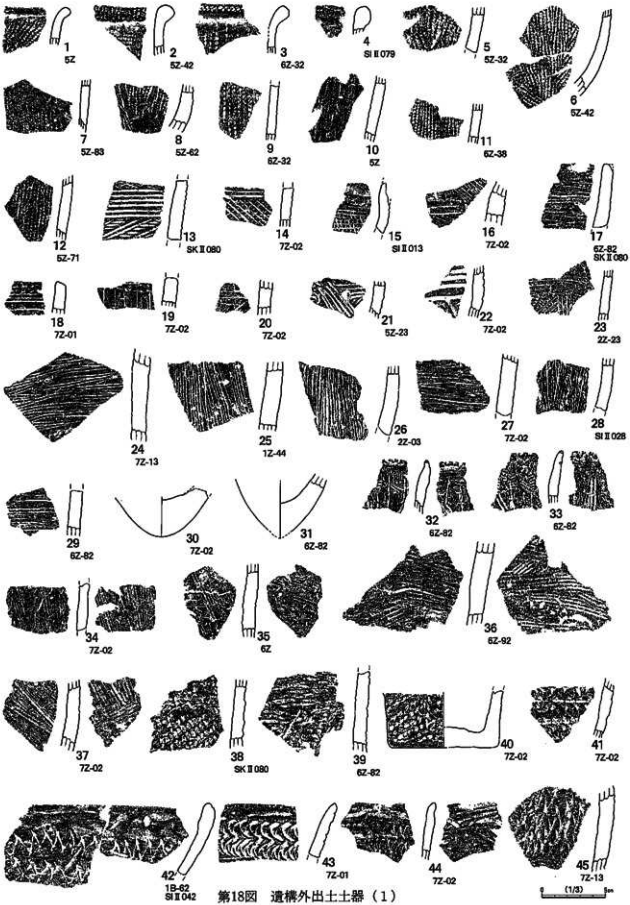
38～40はいわゆる繊維土器である。胎土に繊維が含まれる。38はＬＲ縄文が施される。39は縦位のＲ無節縄文が施され，その下に横位のＬＲ縄文が施される。40は底部で横位のＬＲ縄文が施される。

41～45は浮島系土器である。42～44は口縁部片である。41は貝殻によると思われる三角文が施される。42・44・45は波状貝殻文が施される。42・44の口縁は無文である。43は口縁は無文で，変形爪形文が横位に施される。42～45は浮島２式，41は浮島３式に比定される。

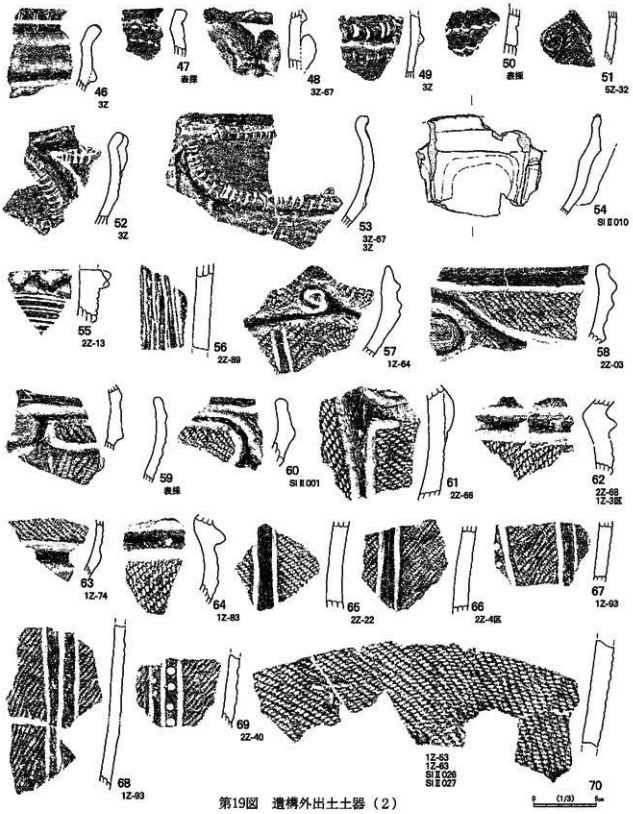
中期の土器（第19・20図46～81，図版28～30）

46～54は阿玉台式土器である。46は口縁部片で，隆起線による枠状文の一部である。口縁には２つ一組の刻み目が施される。隆起線に沿った部分は無文である。47は口縁部片である。口縁に沿って２列平行の角押文が施される。48は枠状文の交叉部分である。隆起線に沿った部分は無文であるが，枠内に角押文の痕跡が見られる。49は枠状文の隆起線の一部である。両側に爪形文が施される。50は波状の沈線文が施される。51は角押文による蕨手状文様で，地文にＬＲ縄文が施されている。52・53は口縁部片で，枠状文の隆起線に沿って爪形文が施されている。54は口縁部片で，口縁には２つ一組の刻み目が施される。枠状文の隆起線に沿った部分は無文である。破片のため全体の形状は不明確であるが，文様から48・49・52・53は阿玉台Ｉｂ式，47・50は阿玉台Ⅱ式，51は阿玉台Ⅲ式に比定されると考えられる。46・54は枠状文だけであるが，阿玉台Ｉｂ式と思われる。

55・56は交互に押圧が施された粘土紐貼付文と平行沈線文が施されている。55は横位に，56は縦位であ



第18図　遺構外出土土器（1）



第19図　遺構外出土土器（2）

る。文様から曽利Ⅰ式に比定されると考えられる。

57～81は加曽利Ｅ式土器である。57～64は口縁部片または口縁部付近の破片である。57は小突起を持ち，隆帯による渦巻文が施される。胴部には中間が無文帯の縦位の平行沈線文が施される。地文には縦位のＲＬ縄文が施される。58は口縁は無文で，口縁直下に沈線で区画文が施され，隆帯による渦巻文も施される。区画内には縦位のＬＲ縄文が施される。59は小突起を持ち，隆帯と沈線による区画文が施される。胴部には中間が無文帯の縦位の平行沈線文が施される。区画内には横位のＲＬ縄文，胴部には縦位のＲＬ縄文が施される。60は口縁直下に隆帯による区画文が施される。区画内には横位のＲＬ縄文が施される。61は両側に沈線を伴う隆帯による区画文が施される。区画内は縦位のＬＲ縄文，他は横位のＬＲ縄文が施される。62・64は口縁部直下の破片で，両側に沈線を伴う隆帯による区画文が施される。区画内は横位のＬＲ縄文が施される。63は両側に沈線を伴う隆帯による区画文が施され，横位のＲＬ縄文が施される。

65～70は胴部片である。65は中間が無文帯の縦位の平行沈線文が施される。地文には縦位のＬＲ縄文が施される。66は中間が無文帯の縦位の平行沈線文が施される。地文には縦位のＲＬ縄文が施される。67は３本の縦位の平行沈線文が施され，沈線の間に円形刺突文が施される箇所もある。地文には縦位のＲＬ縄文が施される。68は３本の縦位の平行沈線文が施され，沈線の間には無文である。地文には縦位のＲＬ縄文が施される。69は３本の縦位の平行沈線文が施され，沈線の間に円形刺突文が施される。地文には縦位のＲＬ縄文が施される。70は底部付近である。沈線はなく，全体に縦位のＬＲ縄文が施される。

71～81は口縁部片または口縁部付近の破片である。71は口縁直下に横位の浅い沈線が施され，沈線下に沈線による区画文が施される。区画以外は地文の縦位ＲＬ縄文が磨り消されている。72も71と同様であるが，区画内の文様が縦位のＬ撚糸文である。73～75は沈線による区画文が施される。区画以外は地文の縦位ＬＲ縄文が磨り消されている。76は波状口縁で，微隆起線で区画が施される。区画内には縦位のＲＬ縄文が施される。77は波状口縁で，波頂部分に円形刺突文が施され，口縁に沿ってナデ状の浅い沈線が施される。沈線下に横位のＬＲ縄文が施される。78は口縁下に無文帯があり，横位の沈線が施され，沈線下に縦位の条線文が施される。79～81は浅鉢形と思われる。口縁部が肥厚し，胴部との境に段をもつ。全体的に無文と思われる。

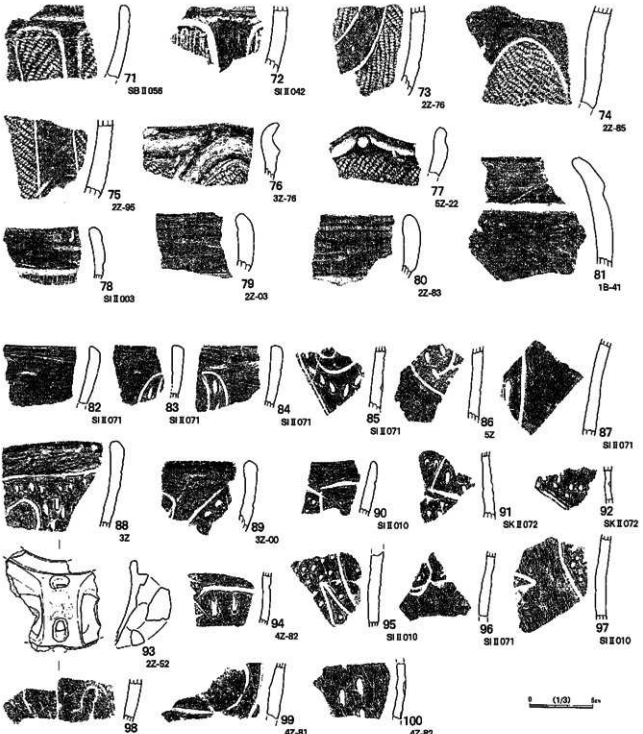
文様から57～70は加曽利ＥⅡ式。71～81は加曽利ＥⅣ式に比定されると考えられる。

後期の土器（第20～22図82～155，図版30～33）

82～100は称名寺式である。82・93以外は，沈線により区画が施され，区画内に列点文が施される。82は無文であるが，口縁の断面形から称名寺式と判断した。83・84・88はＪ字文を構成すると思われる。

93は中空把手である。把手部分にも孔が３箇所に施される。列点文から称名寺式Ⅱ式に比定されると考えられる。

101～117は堀之内式である。101～105は深鉢形土器の口縁部である。101は波状口縁の波頂突起部分である。両端部が折り返され，突起端部に円形刺突の列点文が施される。地文に縦位ＲＬ縄文が施され，列点文下に半円形の平行沈線が施される。102は波状口縁の波頂部である。刻み目が施された貼付文が施される。地文に縦位ＲＬ縄文が施され，沈線による区画が施される。103は波状口縁で，口縁に沈線文が施される。地文に横位ＬＲ縄文が施され，口縁下に横位に平行沈線が施される。口縁の断面は三角形状である。104は三角形状の小突起を持つ。小突起端に円形刺突文が施され，その両側から口縁直下を口縁に

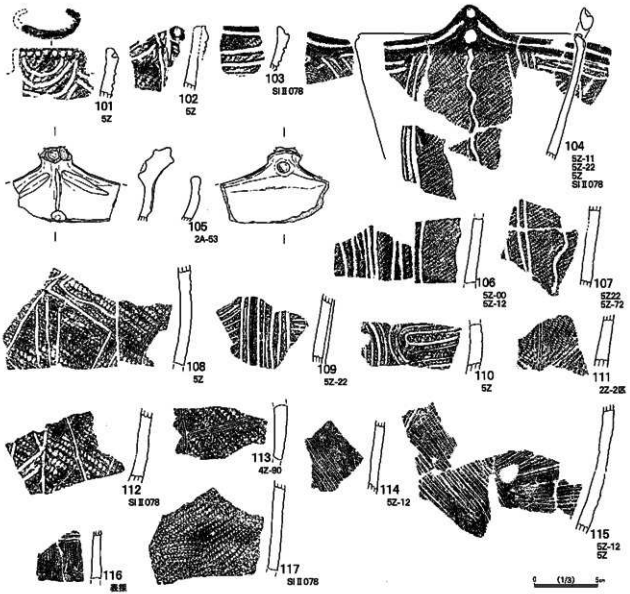


第20図　遺構外出土土器（3）

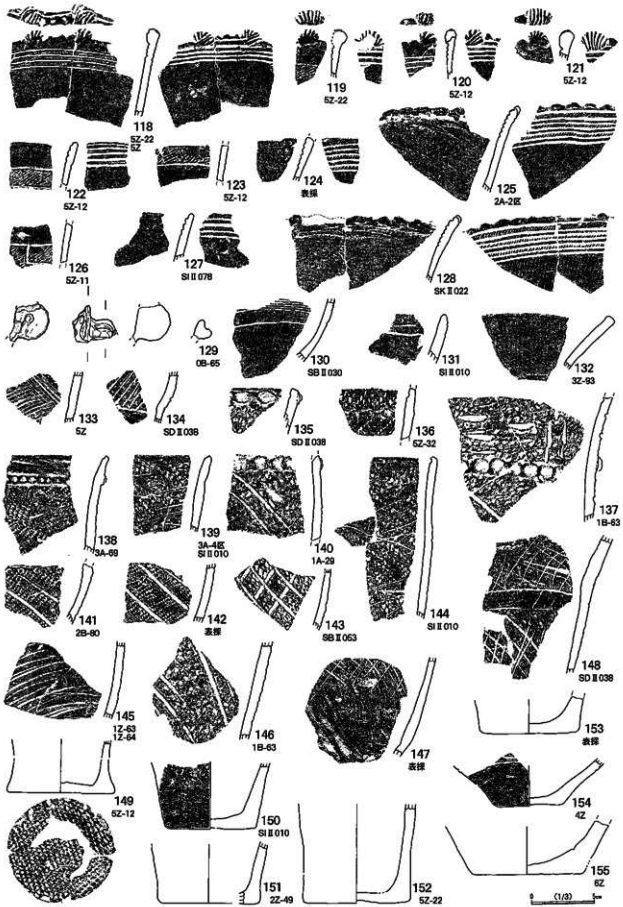
沿って沈線文が施され，右側は沈線の起点が円形刺突文状である。円形刺突文下に円孔が施され，ここから沈線の波状懸垂文が施される。地文に横位ＬＲ縄文が施され，平行沈線の区画文が施される。105は波状口縁の波頂突起部分で，突起端部と，内側に円形刺突文が施される。突起端部の円形刺突文の周りに半円形に太沈線文が巡る。小突起両側口縁に短く沈線文が施される。外面小突起下から，口縁沿い，および垂直に沈線文が施される。垂直の沈線文は途中に円形刺突文が施され，ここを交点に横方向に沈線文が施

される。地文は無文で，ヘラミガキが施される。106は地文に横位ＬＲ縄文が施され，垂直に平行沈線文が施される。107は地文に横位ＬＲ縄文が施され，垂直に平行沈線文，波状懸垂文が施される。108は地文に横位ＲＬ縄文が施され，沈線による区画文が施される。沈線端には円形竹管文が施されるものもある。109は地文に横位ＬＲ縄文が施され，垂直に隆帯と平行沈線文が施され，その両側から横方向に平行条線文が施される。110は地文に横位ＬＲ縄文が施され，平行沈線の蛇行文が施される。111は地文に横位ＬＲ縄文が施され，平行沈線の区画文が施される。112・113は地文に横位ＲＬ縄文が施され，単沈線，平行沈線の区画文が施される。垂直に平行沈線文が施される。112は沈線端には円形竹管文が施されるものもある。114・115は条線文が施される。114は上部で条線文が格子状になる。116は地文に横位ＬＲ縄文が施され，横方向の平行沈線文が施される。縄文は一部摩り消されている。117は横位ＬＲ縄文が施される。堀之内１式に属すると考えられる。

118～155は加曽利Ｂ式である。118～134は精製土器である。118は深鉢形土器である。口縁に瘤状突起が２個一組で施され，突起を繋ぐ様に粘土紐を貼り付け，波状に加工している。口縁下には平行沈線が，



第21図　遺構外出土土器（４）



第22図　遺構外出土土器（5）

外面に４条，内面に４条施され，口縁上にも沈線が施される。瘤状突起には刻み目が施される。119～121も同様の土器と思われる。119は外面に沈線で区画し，区画内に縦位ＲＬ縄文が施される。

122・123・126は深鉢形土器である。122は口縁部で，口縁上に沈線が施される。外面はヘラミガキの無文帯の下に，平行沈線で区画され，区画内に縦位ＲＬ縄文が施される。内面は口縁下に平行沈線が４条施され，最上段の沈線は１箇所が埋められている。内面はヘラミガキが施される。123は胴部片で外面は平行沈線で区画され，区画内に縦位ＲＬ縄文が施される。外面無文部分および内面はヘラミガキが施される。126も同様であるが，平行沈線で区画された縄文帯を縦方向に鉤条沈線で区画されていると思われる。124・125・127・128は浅鉢形土器の口縁部片である。125・128は同型で，口縁に粘土紐を貼り付け，波状に加工している。内面口縁下には７条の平行沈線が施され，沈線間には一つおきに，刻み状に文様が施される。外面は無文である。124も同様であるが，平行沈線が６条である。127は口縁の波状の粘土紐はなく，内面口縁下の平行沈線は４条である。沈線間の刻み状の文様は，下段の２箇所である。

129は深鉢形土器の口縁把手である。粘土円板が口縁に垂直に貼り付けられ，片面の中心に円形刺突が施され，そこから太沈線が円板端部まで施される。刺突と反対側には円板に接して瘤状突起が貼り付けられ，上部に太沈線が施される。

130は浅鉢形土器の胴部片である。上から平行沈線文，平行沈線で区画された縄文帯が施される。縄文は横位ＬＲ縄文である。外面の無文部都にはヘラミガキが施される。131は浅鉢形土器の口縁部である。平行沈線が１条施される。132は深鉢形土器の口縁部である。平縁で，内外面にヘラミガキが施される。133・134は胴部片である。133は平行沈線の区画内に斜方向の平行沈線が施される。134は斜方向の平行条線が向きを変えて上下に施される。

135～148は粗製土器である。すべて深鉢形である。135は口縁部片である。外面に横位のＲＬＲ複節縄文が施され，口縁直下に連続して押圧された紐線文が貼り付けられている。内面口縁直下に太沈線が施される。136は口縁部片である。外面にＲ撚糸文が施され，口縁下やや離れた位置に，連続して押圧された紐線文が貼り付けられている。内面口縁直下に太沈線が施される。137は口縁に近い胴部片である。地文に横位ＲＬ縄文が施され，連続して押圧された紐線文が貼り付けられる。紐線文より上には横および縦方向の短沈線文が施され，紐線文より下には斜行沈線文が施される。138は口縁部である。口縁と磨り消し縄文帯を挟んで，連続して押圧された紐線文が貼り付けられる。紐線文下には横位ＬＲ縄文が施される。内面は口縁直下に沈線が施され，全体にヘラミガキが施される。139は口縁部である。外面は横位ＲＬＲ複節縄文の地文に，斜方向の平行沈線が施される。内面は口縁直下に沈線が施される。140は口縁部付近と思われる。連続して押圧された紐線文が貼り付けられ，縦方向ＲＬＲ複節と思われる縄文の地文に，斜方向の平行沈線が施される。141は胴部片である。横方向沈線に沿って半截竹管の刺突列が施され，その下に横位ＬＲ縄文を地文に，斜方向の平行沈線が施される。内面はヘラミガキが施される。142は胴部片である。横位ＬＲ縄文を地文に，斜方向の平行沈線が施される。143は胴部片である。横位ＲＬＲ複節縄文を地文に，斜格子状に平行沈線が施される。内面はヘラミガキが施される。144は口縁部から胴部である。横位ＲＬＲ複節縄文の地文に，方向が異なる斜方向の平行沈線が交互に施される。内面は口縁直下に沈線が施される。

145は胴部片である。外面に平行条線文が施される。146は胴部片である。条節不明であるが，縄文の地文に，斜方向の沈線が施される。147は底部に近い胴部片である。上方に斜格子状の沈線文が施される。

148は胴部片である。中間に横方向の平行沈線で区画された無文帯を挟んで、斜格子状の沈線文が施される。

149～155は底部である。149～153は深鉢形，154・155は浅鉢形である。149は外面に網代痕がある。

石　器（第23～25図，第8表，図版34）

概要　船尾白幡遺跡Ⅱでは調査区全域で散漫に石器が検出されている。大部分が縄文時代遺構に伴わないでグリット出土石器或いは後世の時代の遺構に混在して検出されている。これらの石器は本遺跡で出土している縄文時代早期～後期の土器群，特に本遺跡の主体となる縄文中期加曽利E式～縄文後期加曽利B式の土器群に伴う蓋然性が高い。特徴的な分布状態を示さないため明確な共伴関係については不明である。石鏃1点が縄文時代中期の竪穴状遺構から出土しているが，この項で便宜的に縄文時代の所産と考えられる遺構出土・遺構外出土石器をすべてまとめて掲載する。

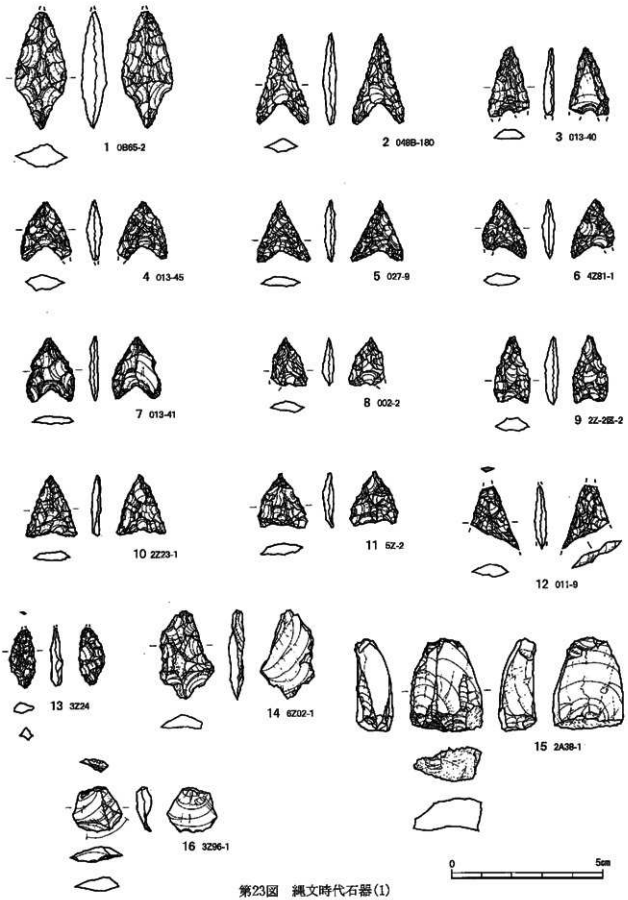
有舌尖頭器　1は有舌尖頭器である。調査区の北東端で検出されている。黒色緻密質安山岩（安山岩A）を石材としている。厚味のある素材を整形し両側縁上半部が膨らみ，下半部が抉れて基部が尖がった舌部をもち，特徴的な形態を有する。縄文草創期の所産であろう。

石鏃　2～14は石鏃及び石鏃未成品である。2～13が石鏃，14が石鏃未成品である。2は細身長身のもので，基部が逆V字状に抉れ尖った脚部を有する。遺跡内最大のもので調整は精緻である。3も細身のもので両脚部を欠損するが，基部の抉れは逆U字状になるものであろうか。4はやや幅広の器体で両側縁が膨らむ，基部の抉れは山形となる。5は直線的な両側縁をもち基部は浅く抉られ片脚が突出する。この石鏃はSIⅡ027の竪穴状遺構から検出されたもので，縄文中期加曽利E期の所産である，6は両側縁非対称に円味をもち片脚を欠損する。7も両側縁が非対称に円味をもつが，基部は浅い逆V状に抉れ脚部は左右対称に突出する。8は小型のもので器体先端が尖る。片脚を欠損するが基部はごく浅い抉りのものである。9は細身のもので両側縁上半が内彎して先端部が尖り，下半部が外彎して膨らむ。基部はごく浅い抉りとなる。10は両側縁が直線的なもので明確な脚部を有しないもので，基部は，かすかに窪む。11は小型なもので両側縁が膨らみ，基部は浅く弧状に抉れ左右非対称となる、12は先端及び器体下半部を欠損するが，脚部側の調整加工から深く抉れた基部をもつものであろうか。13は有茎石鏃とした。欠損した脚部もしくは先端部を再加工して茎部を作り出している。或いは石鏃転用の石錐（ドリル）の可能性がある。14は流紋岩質の珪質頁岩を石材としている。横長剥片を素材としており表面には粗い調整加工が見られる。右側面には先行する鋭角な剥離面がありこの剥離面を除去できずに製作途中で放棄されたものであろうか。

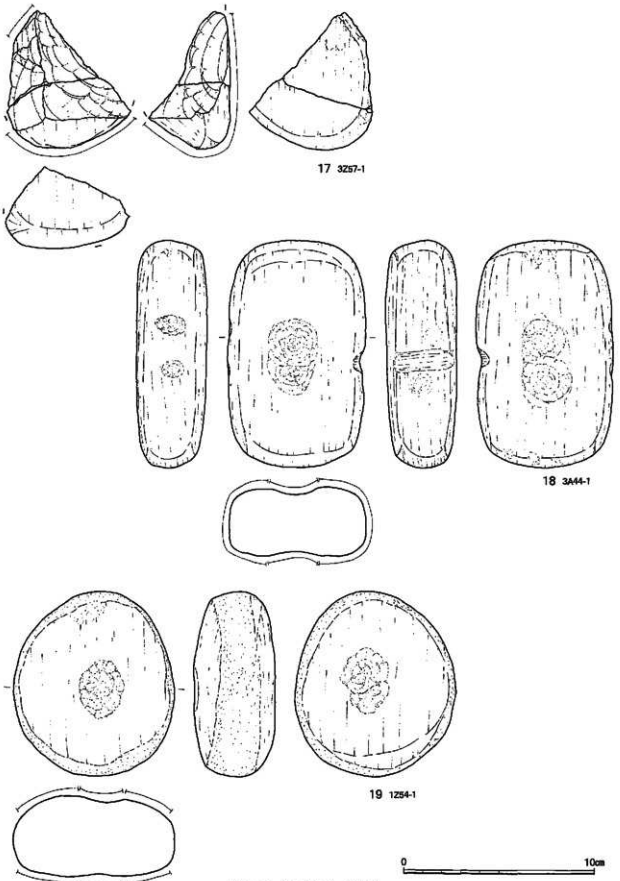
楔形石器　15は楔形石器とした。15はチャート製のもので，下端部に素材の自然面を残し，この面から の細長い剥離痕が認められ，先端部方向は潰れた端部と階段状の剥離痕が集中する。器体は厚味のある三

第8表　縄文時代石器属性表

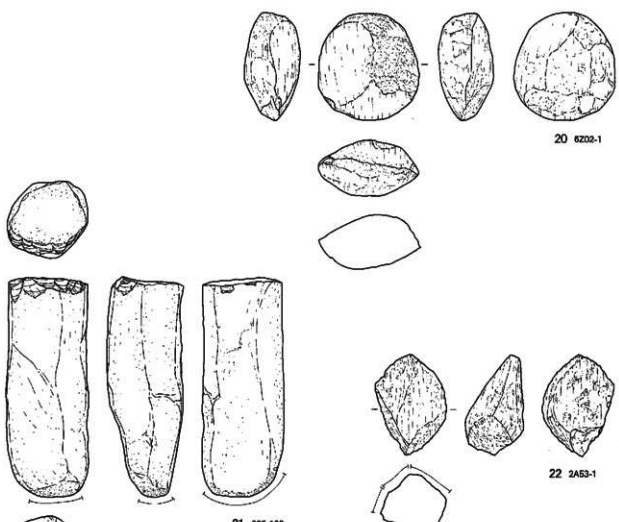
挿図番号	遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g
1	0065-0002	有舌尖頭器	安山岩A	3.79	1.72	0.81	4.1
2	0489-0180	石鏃	チャート	2.98	1.70	0.42	1.3
3	013-0040	石鏃	頁岩	2.24	1.32	0.35	0.6
4	013-0045	石鏃	頁岩	1.94	1.68	0.57	1.1
5	027-0008	石鏃	頁岩	1.99	1.77	0.34	0.6
6	4281-0001	石鏃	頁岩	1.92	1.49	0.42	0.8
7	013-0011	石鏃	チャート	2.07	1.61	0.42	0.8
8	002-0002	石鏃	頁岩	1.39	1.29	0.38	0.5
9	22-255-0002	石鏃	頁岩	2.21	1.18	0.44	0.6
10	2223-0001	石鏃	頁岩	1.99	1.69	0.33	0.7
11	57-0002	石鏃	頁岩	1.78	1.62	0.34	0.8
12	0214-0009	石鏃	チャート	2.06	1.57	0.39	0.9
13	32-0024	石鏃	黒曜石	1.89	0.87	0.41	0.6
14	6702-0001	石鏃未成品	流紋岩質頁岩	2.90	1.79	0.51	1.8
15	2238-0001	楔形石器	チャート	3.07	2.45	1.26	10.6
16	3236-0001	凹基石	頁岩質	1.47	1.63	0.51	0.9
17	3237-0001	磨石	安山岩	7.29	6.49	4.30	149.0
18	3241-0001	磨石	砂岩	12.01	7.31	3.86	560.0
19	1254-0001	磨石	石英斑岩	9.79	8.50	4.30	560.0
20	6202-0001	磨石	砂岩	5.70	5.36	2.96	110.8
21	005-0102	敲石	砂岩	11.62	4.44	4.07	315.5
22	2453-0001	敲石	粘石	5.31	3.80	3.08	124



第23図　縄文時代石器(1)



第24図　縄文時代石器(2)



第25図　縄文時代石器(3)

角形状を呈し，石鏃の素材であることも考えられる。

U剥片　16は使用痕を有する剥片（U剥片と略称する）である。扇状横長剥片の下端部全面を切断するような微細剥離痕が看取される。

磨石類　擦り面の観察される石器を総括して磨石類とした。17～20が磨石類である。17は器体を大きく欠損して形態が判然としないが，擦り面のみが観察されるものである。18は表裏側面が擦り面となり器体平面形が長方形に近くなるもので，表裏に2箇所ずつの窪み部が認められる。また，左側面には2箇所の浅い窪み，右側縁に紐擦れ状の細長い抉れが看取される。19は表裏面のみが擦り面となって側縁に擦りが及ばないものである。表裏中央部には1箇所ずつの窪み部が見られる。側縁は敲打痕が全周する。20はソロバン状の形態をした特異なものである。剥離や敲打の後の面が，表裏面ともに多方向からの擦り面となっている。下端部は刃部状となり欠損した石斧を再加工して転用したものかもしれない。

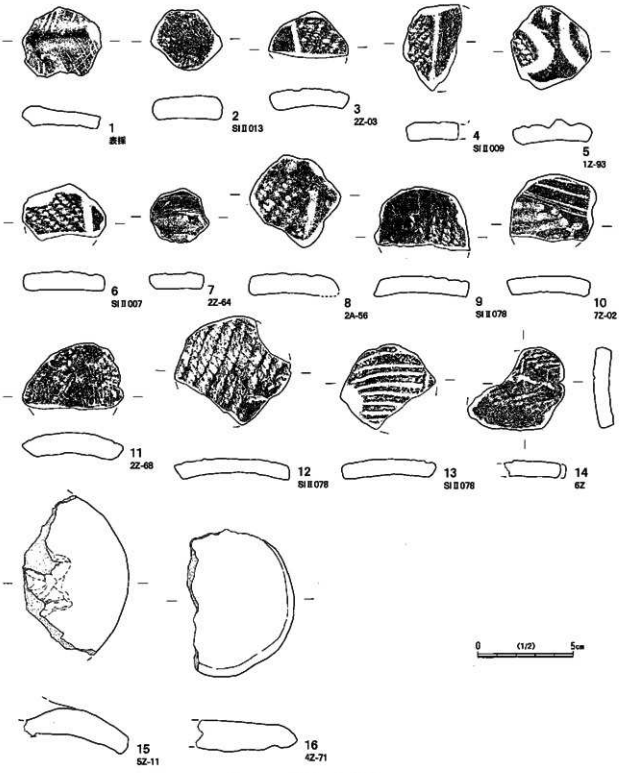
敲石　21は敲石である。不整多角体の棒状礫の下端部に沿ってやや細かな敲打痕が連続する。上端部は横位に切断され，この切断面の端部が敲打されたためか潰れと階段状剥離痕が疎らに認められる。

軽石　22は軽石とした。スコリヤ質火山噴出物のいわゆる軽石を素材としたもので，不整形の形状で多方向からの擦りにより多面体を呈している。機能的には磨石類に分類されるものかもしれないが，浮子と

しての機能も想定されるため軽石と別分類した。

土製品（第26図，図版35）

1～16は縄文土器片を再利用した土製品である。明瞭な刻み加工が施され，土器片錘と考えられるのは，6・11・13・14である。ほかは円板状土製品と思われる。1・2・14は中期阿玉台式，ほかは中期加曽利E式と思われる。15・16は蓋状土製品である。後期と思われる。



第26図　遺構外出土土製品

第４章　弥生時代

第１節　遺構とその出土遺物

検出された遺構は竪穴住居１棟，竪穴状遺構２基である。調査区中央から南部に検出され，遺跡南半部の調査区外にも遺構が存在する可能性は極めて大きい。

１．竪穴住居・竪穴状遺構

竪穴住居はSIⅡ079，竪穴状遺構はSIⅡ052・SIⅡ054である。

SIⅡ051（第54図，図版17）

調査区北部南端，4Z-09グリッド周辺に位置する。南側が調査区外であるが，平面形は不整な方形または長方形と推測する。なお，本遺構の図面については，奈良・平安時代の掘立柱建物SBⅡ052とともに第６章に掲載した。規模は東西方向で4.1mである。SBⅡ052と重複するが，新旧関係は不明である。調査区内の平面形は台形的であり，隅部が直角ではない。確認面から底面までは８cm～19cmであり，浅い。南東側の壁の立ち上がりに不明な部分があるが，調査区外に近いことと，掘立柱建物柱穴の影響による。底面は北西側が高く，北東側が低い。８cm程度の差があるが，凹凸は少ない。

出土遺物はない。西側近くに所在するSIⅡ054が弥生時代の遺構であり，また，山砂は見られず，カマドが存在した痕跡はうかがえないので，本遺構も弥生時代の可能性があると考え，本項で記載した。

SIⅡ054（第27図）

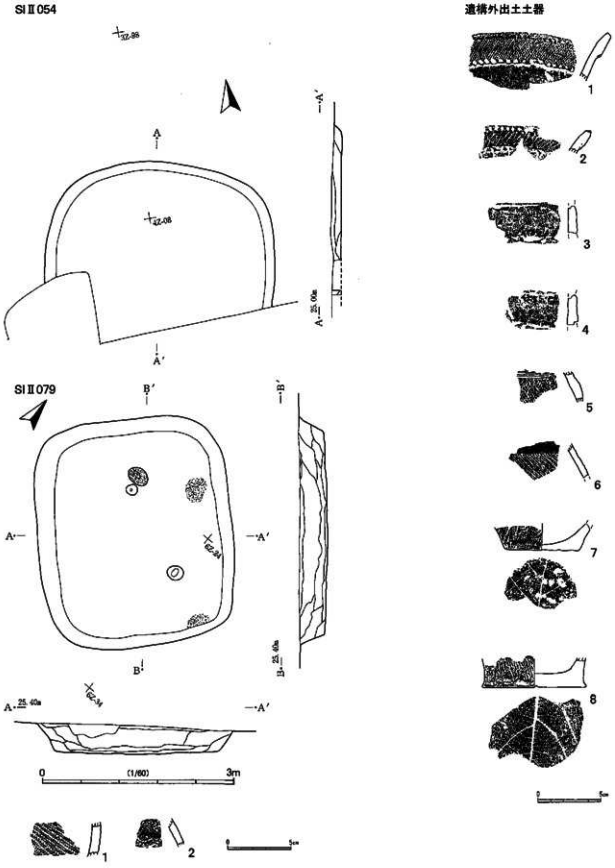
調査区北部南端，4Z-08グリッド周辺に位置する。南側が調査区外であるが，平面形は南北に長い隅丸長方形と推測する。規模は東西方向で4.8m，検出面からの深さは20cmである。長軸の方位はN-11°-Eである。覆土は暗褐色土主体で，壁付近は褐色土が堆積する。壁下から堆積が始まり，住居跡中央に土層堆積が進む，自然堆積の覆土である。底面は平坦である。山砂は見られず，カマドが存在した痕跡はうかがえない。出土遺物はないが，形状および覆土から弥生時代と判断した。

SIⅡ079（第27図，図版５・35）

調査区南部中央やや南，6Z-23グリッド付近に位置する。平面形は隅丸長方形で，規模は長辺4.8m，短辺4.1m，検出面からの深さは40cm～60cmである。長軸の方位はN-44°-Wである。主柱穴および壁溝は検出されなかった。覆土は基本的に上・中・下層の３層に区分される。最上層の薄い土層は表土の一部である。上層は黒褐色，中層は暗褐色土，下層はローム粒を多く含む明るい暗褐色土が主体である。壁付近で土層が細かく分かれ，壁下から堆積が始まり，住居跡中央に土層堆積が進む，自然堆積の覆土である。

床面北部に炉跡が検出された。平面形は楕円形で，40cm×35cm，床面からの深さは約７cmである。床面にピットが２基検出された。１基は炉跡の南隣で，平面形は楕円形で，25cm×20cm，床面からの深さは15cmである。他は，床面南東部で，平面形は楕円形で，35cm×30cm，床面からの深さは20cmである。位置および数から，主柱穴，出入りピットではないと考えられ，用途は不明である。

床面に焼土の堆積が２箇所で検出された。１箇所は床面北東部の壁寄りである。範囲は，50cm×40cmの楕円状である。他は南東隅壁下で検出された。範囲は，50cm×24cmの短い帯状である。



第27図　SI II 054・II 079及びその出土遺物，遺構外出土土器

地物の出土は少量である。1・2は甕の胴部と思われる。1は附加条縄文（RL＋L・L）が施される。2は結節多条の網状文が施される。色調は表面暗褐色で，胎土に長石，石英の細砂粒を含む。焼成は良い。

第2節　遺構外出土遺物（第27図，図版35）

1・2は広口壺または甕の口縁部で，折り返し口縁であるある。1は口縁，折り返し部に撚糸文（R）が施され，折り返し部下端に刻目が施される。内面にヨコナデが施される。色調は暗褐色で，胎土に長石，石英の細砂粒，赤色スコリアを含む。焼成は良い。2は折り返し部に附加条縄文（LR＋R・R）が施され，口縁に刻目，折り返し部下端から口縁部下部に沈線文が施される。内面にヨコナデが施される。色調は灰褐色で，胎土に長石，石英の細砂粒を含む。焼成は良い。3・4は甕の胴部輪積段部分である。色調は褐色で，胎土に長石，石英の細砂粒，赤色スコリアを含む。焼成は良い。5・6は甕の胴部である。

5は3条以上の横位沈線と附加条縄文（RL＋L・L）が施される。色調は灰褐色で，胎土に長石，石英の砂粒をやや多く含む。焼成は良い。6は附加条縄文（RL＋L・L）が施される。胴部と口縁部との境部分と思われ，破片上端部は無文である。色調は淡褐色，一部黒褐色で，胎土に長石，石英の砂粒をやや多く含む。焼成は良い。7・8は甕の胴部下部～底部である。底部には木葉文が施され，7は胴部に附加条縄文（RL＋L・L），8は単節縄文（RL）が施される。7は色調は赤褐色で，胎土に長石，石英の細砂粒，赤色スコリアを含む。焼成は良い。8は色調は淡褐色で，胎土に長石，石英の砂粒を含む。焼成は良い。3～8は内面にナデが施される。

第5章　古墳時代

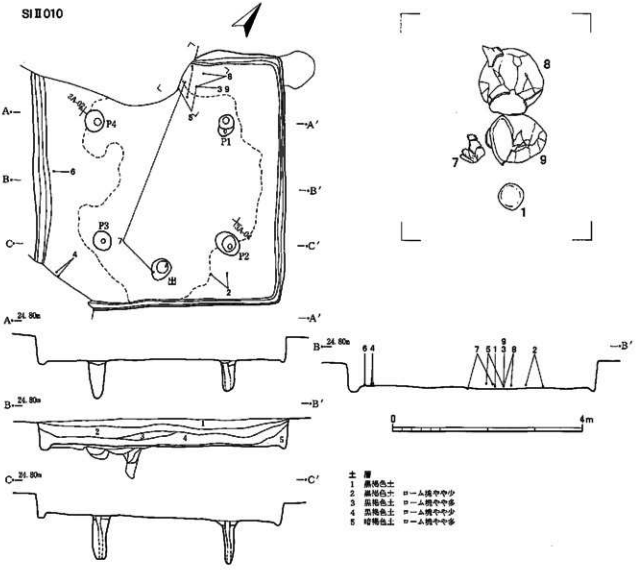
第1節　遺　構

1．竪穴住居（第9表）

古墳時代の竪穴住居は調査区内では7棟見つかった。調査区北部東半部に集中して検出された。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。

SIⅡ010（第28図，図版5）

調査区北部中央，3Aグリッドに位置する。撹乱を受け，北西壁の2/3から西隅にかけての部分と南隅が破壊されている。また，東側でSDⅡ011と重複して壁上部を若干損なっている。その他，北隅部でもSBⅡ058の柱穴により，北東壁側の壁が破壊されている。平面形は整った方形で，壁溝は全周する。4箇所の主柱穴があり，P1・P2・P3には柱痕が見られる。柱痕部分の土層は黒灰褐色土で，軟質である。周



第28図　SIⅡ010

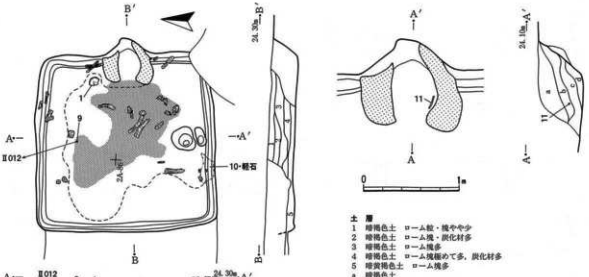
囲はローム主体の黄褐色土で，しまっている。出入りピットは南東壁側中央に位置する。南東壁側に傾いて掘り込まれており，一木の階段梯子を立てかけた様子がうかがえる。床面の硬化面はあまり明瞭ではない。図示した範囲は，周囲よりもやや高くなる部分を表している。覆土は黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。掘形底面は床面と大差のない部分が多いが，一部深いところがあり，黒色土とローム塊の混合土が複雑に堆積している。

カマドは北西壁中央に存在したことが確実であるが，攪乱により破壊され，遺存していない。

出土遺物のうち，北西壁際の床面・下層からまとまって出土した土器群は，本来カマド右脇に存在したもので，本遺構に伴う遺物と考える。土器群は，土師器坏１・３・５，土師器甕７・８・９で，１は伏せた状態の出土である。３の出土状況はやや不明瞭であるが，９の下から出土したものと理解する。その他の遺物では，土師器坏２がP２と南東壁の間の床面から倒位で出土した。土師器坏４・手捏土器６は床面からの出土である。図示しない遺物の分布を見ると，中央部が多く，壁際から出土した遺物が少ない。出土層位は上層出土のものが多い。それらは，竪穴住居廃棄後，埋まる過程で捨てられたものや，混入したものである。

SIⅡ013（第29図，図版12）

調査区北部中央東寄り，2Aグリッドに位置する。西側上・中部がSIⅡ012に大きく切られ，南東隅部もSIⅡ014に切られている。平面形は方形で，４箇所の主柱穴は見られない。南壁際中央に連接した２箇所のピットがある。床面からの深さは，壁際のものが22cm，中央寄りのものが31cmである。古墳時代後期以降の出入りピットは，通常カマドに対面する壁際にあるが，SIⅡ013では西壁際にピットが見つからなかった。南壁際のピットがSIⅡ013に伴うものであれば，その性格は出入りピットであるが，その位置からは断定しがたく，可能性の指摘にとどめる。壁溝は全周する。床面は，北壁際・西壁際を除いて広範



第29図　SIⅡ013

囲に硬化している。床面には，炭化材・焼土範囲が中央部を中心に広く見られる。覆土はローム粒・塊の含有も多く，住居の焼却後，埋め戻されていると考える。

カマドは東壁中央に位置する。袖部はやや高いところまで遺存している。袖基底部の構築材は黒色土主体であり，その上部も山砂に加えて黒色土の含有が多い。両袖内壁は，被熱により強く赤色化・硬化している。対照的に火床部は赤色化が見られず，火床面が不明瞭である。また，火床部底面はあまり窪んでいない。カマド内堆積土は，上から２層目・３層目に焼土塊・炭化物の堆積が多く，最下層は少ない。火床部はやや高い位置にあったものと考える。

遺物の出土は少なく，残りの良い土器も土師器坏１だけである。１はカマド左脇の床面から正位で出土した。土器以外では，軽石が南壁際やや西寄りの中層から出土し，そのうちの１点を図示した。また，槍鉋11がカマド内下層から出土した。

SIⅡ013出土土器については，図示しないものを含めると，多くのものが奈良・平安時代土器である。古墳時代のものは，１と口縁部片である土師器坏４のほか，土師器甕９が古墳時代の土器といえる可能性があるが，出土量は少ない。竪穴住居の時期の判断が難しいが，１の状況から，SIⅡ013は古墳時代後期の竪穴住居であり，奈良・平安時代土器はSIⅡ012・SIⅡ014からの混入品と考える。

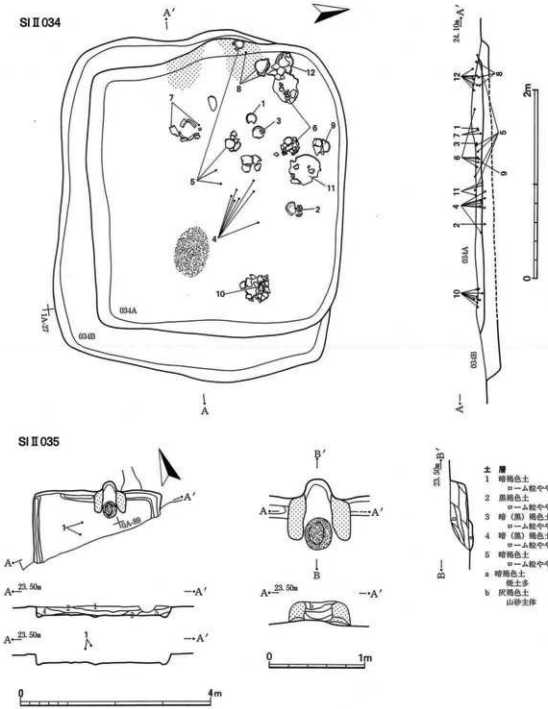
SIⅡ034（第30図，図版５）

調査区北部北側，1Aグリッドに位置する。遺構確認面はソフトローム層に達しないⅡ層中であり，確認面から床面まで浅いため，プランの把握に不安を残す竪穴住居である。また，東側で大形の風倒木痕と重複していることも，プランの確認を難しくする要因となっている。調査時の所見は，規模を縮小した建て替えを行ったと推定するものである。また，遺物の出土状況から，建て替え後の床面は，建て替え前の床面の上部にある可能性が推測されている。建て替え前の床面について見ると，建て替え後の床面の外側部分は，比較的しっかりしているという。しかし，縮小後の床面の下に存在すると推定される古い床面の確認はできなかった。

以上のことから，本竪穴住居の建て替えについては，かなり不明瞭であり，断定はできない。可能性の指摘のみにとどめておく。時期から，平面形が方形であることは疑いないが，規模の数値は不安定である。壁溝と４箇所の主柱穴は見られず，出入りピットも確認できなかった。床面は硬化面が見られなかったが，東壁側で焼土範囲が確認された。覆土は，上層が黒褐色土で，ローム粒の含有が少ない。壁側はローム粒・塊をやや多く含む暗褐色土・暗黄褐色土である。

西壁中央に焼土塊を多く含む土層があり，山砂も若干量見られるので，この位置にカマドがあったものと推測できる。しかし，山砂は少量であり，袖の形状は不明瞭である。したがって，図では，想定される袖部分を網掛けのみで表現した。

遺物の出土量は多く，土器が個々にまとまった状態で出土した。平面的には，建て替え？後の竪穴住居内にやや広く分布するが，南壁側で空白域があり，東壁側も土師器甕10以外はやや希薄である。出土位置が確認面に近いため，本来はより遺存が良かったものと考える。土師器坏１・２・３はいずれも正位で出土した。坏は実測個体にならない破片が少ない。土器以外では，焼土範囲周辺に鉄滓が約20点出土している。そのため，焼土範囲西側の地点で，25cm×25cm×５cmのコラムサンプルを採取した。鉄滓の出土量が多いことに加え，プランが不明瞭であることから，本遺構は鍛冶遺構の可能性があると考える。



第30図　SIⅡ034・Ⅱ035

SIⅡ035（第30図，図版５）

調査区北部北側，0Aグリッドに位置する。攪乱を受け，南側の１/２以上が破壊されている。また，SDⅡ036に上部の一部をわずかに切られている。平面形は方形であるが，主軸方向から見て縦長か横長かは不明である。壁溝は，北東壁北隅付近で途切れるほかは巡る。４箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは，カマドとの位置関係から，南西壁側に位置することが確実であるが，破壊されている。床面は全体に硬質である。掘形底面と床面はほとんど同じである。

カマドは北東壁中央に位置する。袖基底部の土層は多少のロームを含む暗褐色土・黒褐色土である。そ

の上部の構築材は山砂主体である。火床部は床面と同じレベルである。火床部上からは，常総型甕が出土したが，胴部破片であり，図示していない。カマド上部は，天井部の崩落による山砂主体の土層が堆積しており，その背後の突出部では，煙道の痕跡も見られる。

遺物の出土は，土師器片が数十点で，少量である。坏片は2点で，他は甕である。常総型甕がほとんどを占める。土師器甕1は常総型甕の底部破片で，上層から出土した。

SIⅡ040（第31図，図版6）

調査区北部北東側，1Bグリッドに位置する。攪乱を受け，北東側の1/2が破壊されている。平面形はやや縦長の方形である。壁溝は南西壁側の一部で見られないが，ほかは巡る。4箇所の主柱穴は見られない。出入りピットは南東壁側中央に位置する。長径90cm・短径65cm・深さ30cmのピットが南東壁際の南隅寄り床面にある。出入りピットにも近い位置であり，本遺構に伴うものであれば貯蔵穴である。しかし，底面が不整であること，古墳時代後期以降の貯蔵穴としては，位置的にそぐわないこと，の2点から攪乱と考え，図示していない。床面は全体的に硬質である。覆土は黒褐色土・暗褐色土主体であるが，下層はローム粒を多く含む。焼土・炭化材が南隅部付近の床面に堆積している。

カマドは北西壁に存在したと考えられるが，攪乱により破壊され，遺存しない。

遺物は調査範囲全体から出土しているが，少量で，散在的な分布である。土師器坏1は南東壁際中央の床面から伏せた状態で出土した。

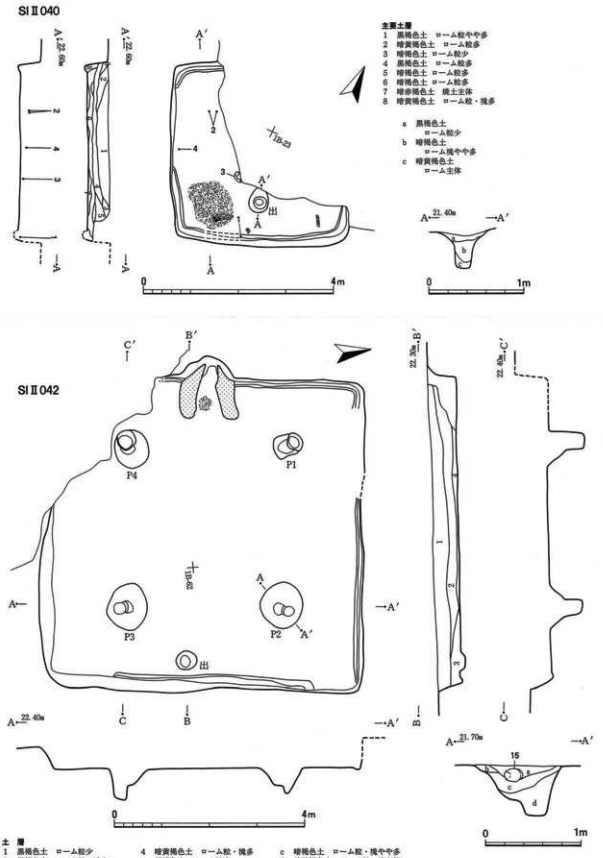
SIⅡ042（第32図，図版6・7）

調査区北部東側，1Bグリッドに位置する。平面形はわずかに横長の方形で，整ったプランである。しかし，攪乱により，南西隅付近が破壊されている。また，掘り過ぎにより，P1付近から北壁にかけての床面を損なってしまった。壁溝は，西壁・北壁と東壁の2/3に見られるが，南壁と東壁の両隅側には見られない。主柱穴は4箇所ある。いずれも上部で広がっているが，建て替えまたは廃棄時に柱を抜き取った際，周囲が掘削されたためである。出入りピットは東壁際中央からやや南寄りに位置する。床面は全体にあまり硬質ではない。覆土は黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。ただし，各柱穴の最下層はローム粒・塊主体の土層が堆積している。柱抜き取り時に掘り広げた周囲の床面の土が流入したものか，あるいは埋め戻されたものと考える。

カマドは西壁中央に位置する。確認面から床面までやや浅いため，上部の遺存は良くないが，両袖は比較的良く残り，堅くしまっている。構築材は山砂主体であるが，外側は黒色土を多く含む。内壁は焼けて赤色化している。火床部はやや前側に位置し，床面と同じ高さのところにある。カマドの両脇から多くの土器が出土したが，カマド内からはほとんど遺物が出土していない。

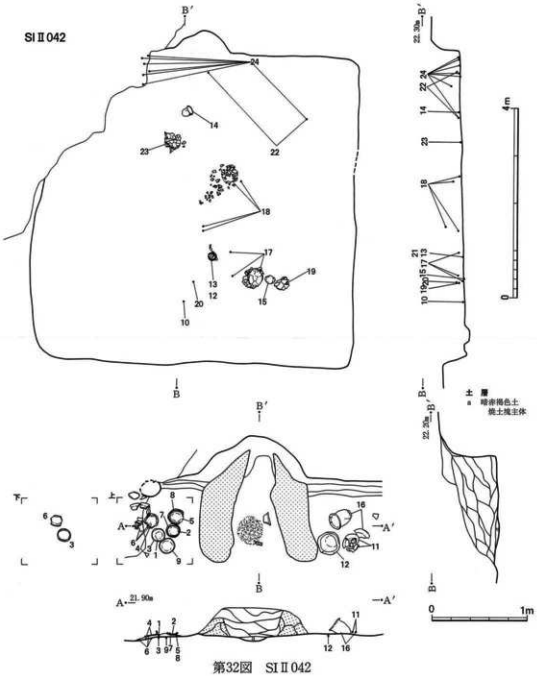
出土遺物は多量である。遺存の良い土器が多く，土師器坏・高坏については破片が少ない。また，土師器甕も破片の半数程度が図示した17・18と接合しないものである。図示した遺物は，鉄製品25を除き，出土位置のわかるものであるが，それらはすべて床面・下層から出土している。甕18の破片は一部が上層から出土しているが，主体はほぼ床面からの出土である。帰属時期が不明瞭な25以外の土器は，この竪穴住居で使用されていたものか，竪穴住居廃棄時期のものである。

カマドの左脇床面からは，9点の土師器坏がいずれも正位で出土した。一番手前にある9が単独である



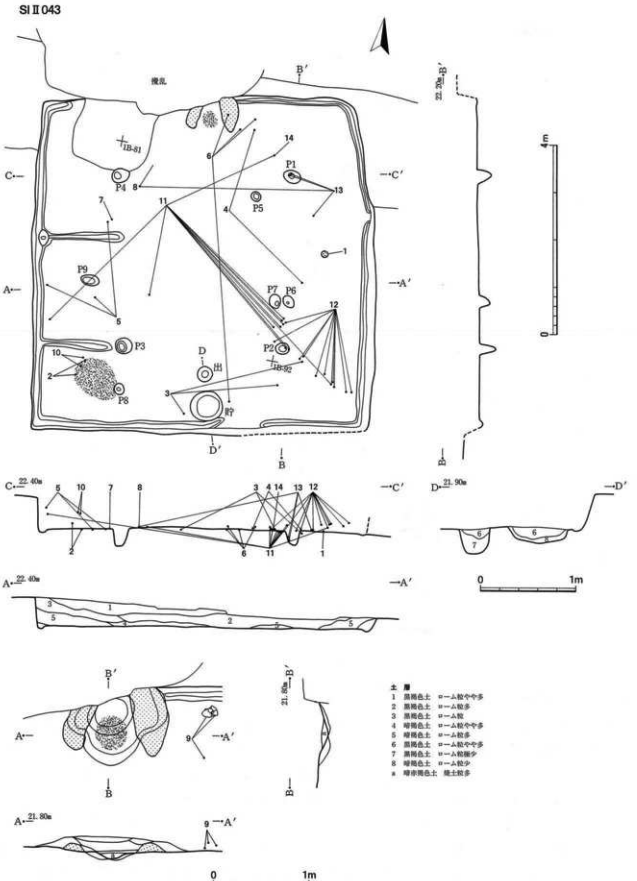
土 層
1 黒褐色土 ローム粒少
2 黒褐色土 ローム粒・焼少
3 暗褐色土 ローム粒やや多
4 暗黄褐色土 ローム粒・焼多
a 黒褐色土 ローム粒多
b 暗褐色土 ローム粒やや多
c 暗褐色土 ローム粒・焼やや多
d 暗黄褐色土 ローム粒・焼主体

第31図 SIⅡ040・Ⅱ042



第32図　SIⅡ042

以外は，２枚重ねで出土した。１・3，2・7，4・6，5・８の組み合わせで，１・２・４・５が上の土器である。この坏群よりも壁際の位置から，土師器甑24が出土している。カマド右脇の床面からは土師器高坏11・土師器鉢12・土師器甕16が出土した。11の坏部が割れ，16は横になっているが，３点とも正位に置かれていたものと考える。カマドの前方からは，土師器甕14が出土し，14の前方からは土師器甑23が出土している。土師器甕18は中央部からの出土である。土師器甕15・17・19はＰ２付近からの出土である。このうち，小型の甕である15はＰ２の覆土上層から出土しているが，特に柱穴内への埋納が意図されたのではなく，柱穴覆土がまだくぼんでいる段階で廃棄されたものと考える。その他の遺物では，土師器甕13・21が同一地点から出土しており，同一個体の可能性が高い。また，手捏土器10がＰ２・Ｐ３の中間地点の下層から出土している。


SⅡ043
撹乱
B′
C
C′
A
A′
D
D′
B
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
HB-81
HB-92
H1
H7
22.20m
22.40m
21.90m
21.80m
0
1m
土層
1 黒褐色土 ローム粒や中多
2 黒褐色土 ローム粒多
3 黒褐色土 ローム粒
4 暗褐色土 ローム粒や中多
5 暗褐色土 ローム粒多
6 黒褐色土 ローム粒や中多
7 黒褐色土 ローム粒微少
8 暗褐色土 ローム粒少
a 暗赤褐色土 焼土粒多

第33図　SⅡ043

以上の遺物のうち，少なくともカマド両脇から出土した土器は，本竪穴住居で使用されていた可能性が高いと考える。

SⅡ043（第33図，図版7・8）

調査区北部東側，1Bグリッドに位置する。平面形は整った方形であるが，攪乱により北壁の1/2から主柱穴P4付近まで破壊されている。また，北側では壁の一部が暗褐色土中に存在したため，遺構確認が難しく，確認調査時に壁を損なった箇所がある。壁溝は，ほぼ巡っているが，南壁下の出入り口部分右側（東側）が途切れている。主柱穴は4箇所あり，平面規模はあまり大きくない。南壁側中央には2つのピットがある。壁際にある平面規模が大きく浅いものが貯蔵穴，壁からやや離れて位置する平面規模の小さく深いものが出入り口ピットである。西側には床溝が2条あり，西壁下の壁溝から垂直に延びている。1条はP3と西壁間，もう1条は西壁中央からやや北側に位置し，P3とP4を結ぶラインまで延びる。この床溝と西壁壁溝の接する部分がピット状に深くなっている。深さは17cmである。そのほか，床面ではピットが5基見つかった（P5～P9）。深さは，P5が19cm，P6が23cm，P7が30cm，P8が20cm，P9が13cmである。平面位置を見ると，P5はP1に寄った柱穴ライン内にあり，P6・P7はP1・P2間でP2に寄った位置にある。また，P8はP3・P4ラインの延長上にあり，P9はP3・P4のラインからははずれるが，その中間でやP3寄りのところに位置する。以上の5基については，主柱穴の中間に位置するものはないが，主柱穴の規模がそれほど大きくないため，補助柱穴の可能性があると考える。特に，主柱穴のライン上に位置するものは可能性が高いと思われる。P6・P7が補助柱穴であれば，組か，どちらかが建て替えである。床面は全体にあまり硬質ではない。覆土は黒褐色土・暗褐色土主体であり，自然堆積と考える。

カマドは北壁中央に位置する。遺存は両袖下部の一部である。煙道部側は攪乱を受け，上部も確認調査時に掘りすぎているが，もともとあまり良く残っていないようである。構築材は山砂に加えて暗褐色土の含有が多く，堅くしまっている。袖上部は山砂主体の構築土である可能性があるが，下部は本来的に暗褐色土を多く含むものと考える。火床部上は焼土が堆積し，袖内壁もやや赤色化している。

出土遺物は中程度の量である。竪穴住居全体から散在的に出土しており，きわだって集中する箇所はない。出土層位は床面から上層に及ぶが，下層・床面から出土したものが多い。土師器坏は図示した個体が多く，破片が少ない。ただし，図示したものの遺存度はあまり良くないものの方が多い。個々の出土状況を見ると，須恵器坏蓋1は東壁側中央の床面から天井部を下にして出土した。土師器坏6と土師器小型甕11は広く散って出土した。

第2節　遺　物

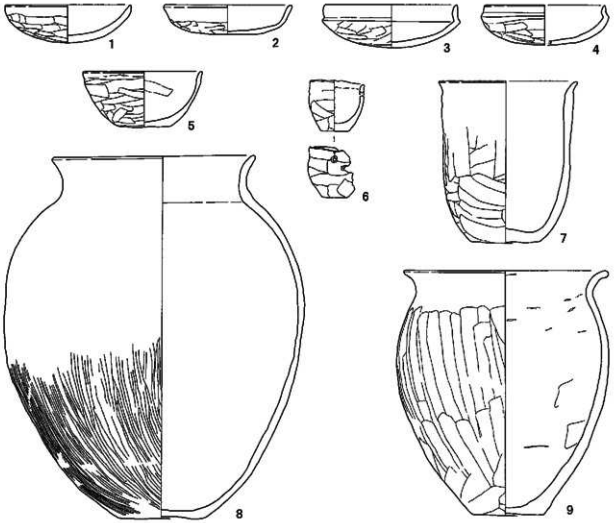
1．竪穴住居（第10表）

計測値等は観察表に記載したので省略する。

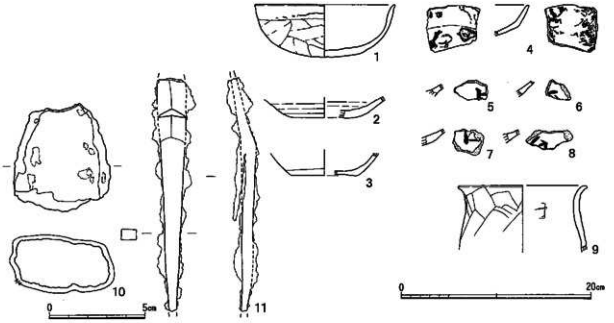
SⅡ010（第34図，図版36）

1～4は土師器坏である。須恵器模倣で，1・2は坏蓋，3・4は坏身の模倣と考えられる。丸底で底部と体部の区別は無く，体底部は浅い皿状である。1は体部と口縁部の境は，口縁部のヨコナデで区別さ

SIⅡ010



SIⅡ013



第34図　SIⅡ010・Ⅱ013出土遺物

れる。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁に至る。口縁は尖り気味で，断面が三角形状である。口縁部内外面に漆仕上げが施されている。2は体部と口縁部の境が明瞭である。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁はわずかに外反する。3・4は受け部がある。口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，口縁に至るまでに，直立する。3は内外全面に漆仕上げが施されている。胎土は1・3が細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。2は細砂粒を少量含む。4は細砂粒をやや多く含み，細雲母粒が顕著である。

5は土師器鉢である。平底で，胴部が外傾して立ち上がり，緩やかに内彎して口縁部に至る。胴部と口縁部の境には弱い稜がある。口縁部はほぼ直立し，口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。6は土師器手捏土器である。形は甕のミニチュアである。平底で，胴部が外傾して立ち上がり，緩やかに内彎して口縁部に至る。胴部と口縁部の境がわずかにしまり，口縁部はほぼ直立する。口縁部内面に面取り状の調整が施され，断面が三角形状である。口縁部には，焼成前に口径の中心に相対して，孔が2箇所に施されている。胎土は細砂粒を少量含む。

7～9は土師器甕である。7は小型である。平底で，ほぼ円筒形の胴部から口縁部が短く外反する。胎土は細砂粒をやや多く含み，細雲母粒が顕著である。8は底部中央がやや上げ底である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位やや上にある。口縁部は外反し，口縁は丸い。胎土は砂粒を多く含み，長石粒・石英粒が顕著である。9は底部中央がわずかに上げ底である。胴部は鶏卵形で，最大径が上位にある。口縁部は強く外反し，口縁は丸く，玉縁状である。胎土は砂粒をやや多く含む。

SIII013（第34図，図版36・52）

1は土師器坏である。須恵器坏蓋の模倣と考えられる。丸底で底部と体部の区別は無く，体底部は丸みがある。体部と口縁部の境は，口縁部のヨコナデで区別される。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒をやや多く含む。2は土師器皿，3は土師器坏である。ロクロ成形で，時期は平安時代であり，住居外からの混入である。4は土師器坏の口縁部片である。須恵器坏蓋の模倣と考えられ，内外面に漆仕上げの痕跡が観察される。胎土は細砂粒をやや多く含む。5～8は土師器坏または皿の破片である。墨書があるが，文字は不明である。ロクロ成形で，時期は平安時代であり，住居外からの混入である。9は土師器甕の口縁部から胴上部で，しまりが弱い胴部上端から口縁部が短く外反する。胎土は細砂粒，赤色スコリア粒をやや多く含む。

10は軽石片である。表面が全体に磨耗しているので，砥石として使用されたと思われる。11は鉄製品である。刃部の形状から槍鉋と考えられる。刃部先端および頸部端を欠損する。

SIII034（第35・36図，図版36・37・39）

1～3は土師器坏である。須恵器坏身の模倣と考えられる。丸底で底部と体部の区別は無い。体底部は扁平な半球形で，3はやや浅い。受け部があり，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，口縁に至る。3の口縁部は直立に近い。1は内面に黒色処理が施される。胎土は1・3が細砂粒・赤色スコリア粒を少量含み，1には大きな砂粒が見られる。2は細砂粒をやや多く含む。3は細砂粒をやや多く含み，細雲母粒が顕著である。

4は土師器坩である。平底で，胴部は球形である。口縁部は直立し，口縁がわずかに内彎する。

5・6は土師器鉢である。5は丸底に近い平底で，胴部は球形である。胴部と口縁部の境は，口縁部の

ヨコナデで区別される。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁に至る。口縁は丸い。胎土は細砂粒，赤色スコリア粒を少量含む。6は平底で，胴部は球形である。胴部と口縁部の境に稜があり，口縁部が外傾して立ち上がり，口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒をやや多く含み，大きな砂粒が見られる。被熱のため器面がやや荒れ，刻みのような傷が見られる。

7～11は土師器甕である。7は口縁部から胴上部，8・9は胴下部から底部である。7は，しまりが弱い胴部上端から口縁部が短く外反する。胎土は細砂粒を多く含み，砂粒を少量含む。8は平底で，胴部はほぼ球形と考えられる。胎土は細砂粒を多く含む。9は平底で，胴部は鶏卵形と考えられる。胎土は細砂粒を多く含み，細雲母粒が顕著である。10は口縁部から胴部である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位にある。口縁部は強く外反し，口縁は丸い。胎土は砂粒をやや多く含み，雲母粒が顕著である。胴部上端部に帯状にススが付着する。11は胴部から底部である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位にある。底部は平底で，中央部がわずかに上げ底状である。胎土は砂粒をやや多く含む。

12は土師器甑である。無底で，胴部はやや丸みがある逆円錐台形である。胴部と口縁部の境に稜があり，口縁部が短く外反する。胴部下部に右斜め下方向へ沈線状のヘラナデが施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。

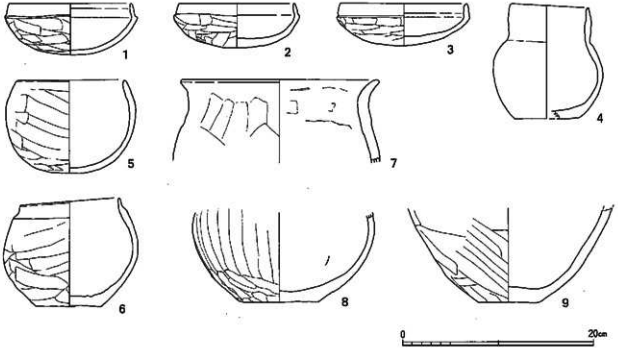
焼土周辺で採取したコラムサンプルを水洗し，フルイにかけたところ，約1.3gの鍛造剥片を採取した。

SIⅡ035（第36図）

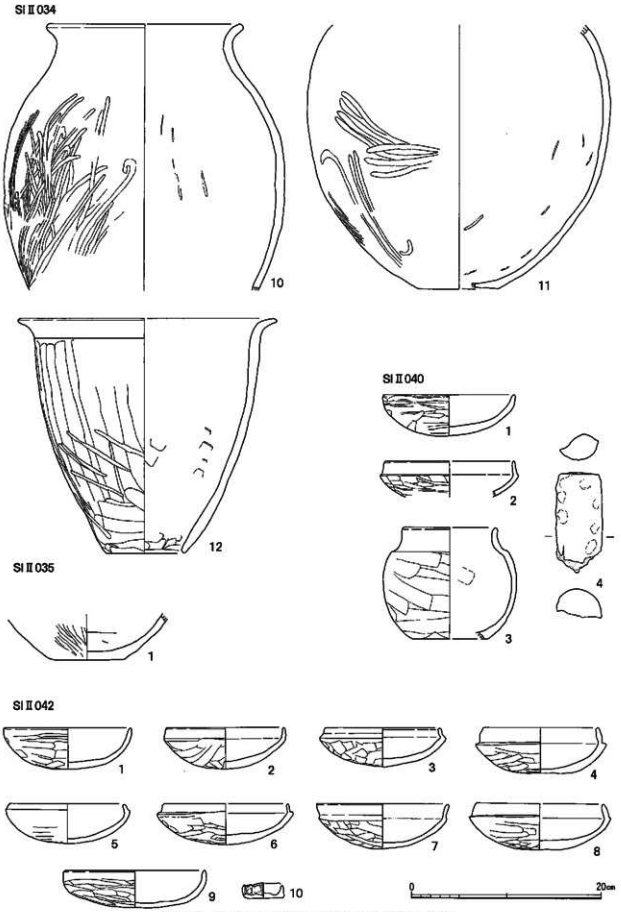
1は土師器甕の胴下部から底部である。平底で，胴部は鶏卵形になると思われる。内面に明瞭な粘土紐の接合痕が見られる。胎土は粗い砂粒を多く含む。

SIⅡ040（第36図，図版36～38）

1・2は土師器坏である。須恵器模倣で，1は坏蓋，2は坏身の模倣と考えられる。丸底で底部と体部



第35図　SIⅡ034出土遺物



第36図　SⅡ034・Ⅱ035・Ⅱ040・Ⅱ042出土遺物

の区別は無く，体底部は扁平な半球形である。1は体部と口縁部の区別は不明瞭で，口縁はわずかに外傾する。2は受け部がある。口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，わずかに外反しながら口縁に至る。口縁はわずかに内傾する。胎土は細砂粒，赤色スコリア粒を少量含む。3は土師器甕である。小型で，底部中央を欠損する。底部は平底と思われ，胴部はほぼ球形である。胴部と口縁部の境に稜がある。口縁部は内傾して立ち上がり，外反しながら口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒を多く含み，砂粒，赤色スコリア粒を少量含む。4は土製支脚である。円筒形で，手捏ねの跡が明瞭である。

SIⅡ042（第36～38図，図版37・38）

1～9は土師器坏である。須恵器模倣で，1・2・7・9が坏蓋，3～6，8が坏身の模倣と考えられる。丸底で底部と体部の区別は無く，体底部は扁平な半球形である。3～6，8は受け部がある。1は体部と口縁部の境は，ヨコナデで区別される。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁はほぼ直立する。表面に粘土紐の接合痕が見られる。胎土は細砂粒をやや多く含む。2は体部と口縁部の境が明瞭で，口縁部は内傾して立ち上がり，口縁に至る。口縁は内傾する。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒を少量含む。3は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，わずかに外反しながら口縁に至る。口縁はわずかに内彎する。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒を少量含む。4は，口縁部は受け部から直立し，内彎しながら口縁に至る。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。5は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，内彎しながら口縁に至る。口縁部の立ち上がりは短く，口縁は内彎する。胎土は細砂粒を少量含む。内外面全体に漆仕上げが施される。6は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎しながら口縁に至る。口縁はわずかに内彎する。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。内外面全体に漆仕上げが施される。外面の受け部直下に粘土紐の接合痕が見られる。7は，外面，体部と口縁部の境に受け部状の稜があり，口縁部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。内外面全体に漆仕上げが施される。8は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，内彎しながら口縁に至る。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒を少量含む。内外面全体に漆仕上げが施される。9は，体部と口縁部の境は不明瞭で，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに内彎する。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。内外面全体に漆仕上げが施される。

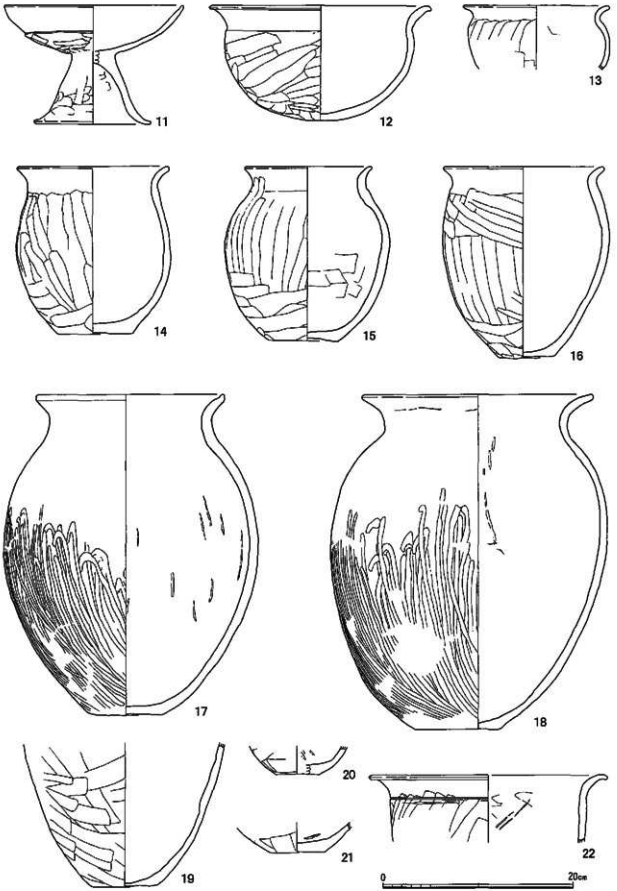
10は手捏土器である。器形は背の低い円筒形である。平底で体部と口縁部との区別はない。内面および体・口縁部に指による，明瞭な成形痕がある。胎土は細砂粒を少量含む。

11は土師器高杯である。脚部は円錐台形で，裾部は外反する。坏部は扁平な半球形に近い皿状で，体部と口縁部の境に段がある。口縁部内面に，スス状の炭化物が付着する。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。

12は土師器鉢である。丸底で底部と胴部の区別は無く，胴底部は半球形である。胴部と口縁部の境に稜がある。口縁部はラッパ状に外反し，口縁は丸く，玉縁状である。胴部上半から口縁部の外面に，スス状の炭化物が付着する。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒を少量含む。

13～16は土師器小型甕である。13は口縁部から胴上部である。胴部はほぼ球形と思われ，口縁部は短く外反する。口縁は丸い。胎土は細砂粒をやや多く含む。14は平底である。胴部は鶏卵形で，最大径が下部にある。胴部と口縁部の境に稜がある。口縁部は短く外反し，口縁は丸い。胎土は細砂粒を多く含み，砂粒

SⅡ042



第37図　SⅡ042出土遺物

を少量含む。被熱のため器面が荒れている。15は底部中央がやや上げ底である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位やや上にある。胴部と口縁部の境に弱い稜がある。口縁部は短く外反し，口縁はやや尖り気味である。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。16は底部中央がわずかに上げ底である。胴部は鶏卵形で，最大径が上位にある。胴部と口縁部の境に弱い稜がある。口縁部は外反し，口縁は丸い。14・15よりも口径に比べて底径が小さい。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。

17～19は土師器甕である。17は平底である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位やや上にある。口縁部は短く外反し，口縁はわずかにつまみ出された様に受け口状になる。胴部上半部および胴部内面に，それぞれ，横方向，縦方向の調整痕がある。胎土は砂粒を多く含み，石英粒，長石粒，雲母粒が顕著である。18は平底である。胴部は鶏卵形で，最大径が中位やや上にある。胴部と口縁部の境に稜がある。口縁部は大きく外反し，口縁は丸い。胎土は砂粒を多く含み，雲母粒が顕著である。19は胴下部から底部である。平底で，胴部は鶏卵形と思われる。底部中央の器壁がかなり薄くなる。胎土は細砂粒を多く含む。

20・21は土師器小型甕の胴下部から底部である。平底である。胎土は細砂粒を多く含む。

22～24は土師器甑である。22・24は口縁部から胴部であるが，23と同形と考えられる。無底で，胴部はやや丸みのある逆円錐台形である。胴部と口縁部の境に，強弱の差はあるが，稜がある。口縁部は短く外反する。口縁は丸い。22・24は玉縁状になる。胎土は，22は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。23は細砂粒を多く含み，砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。24は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。

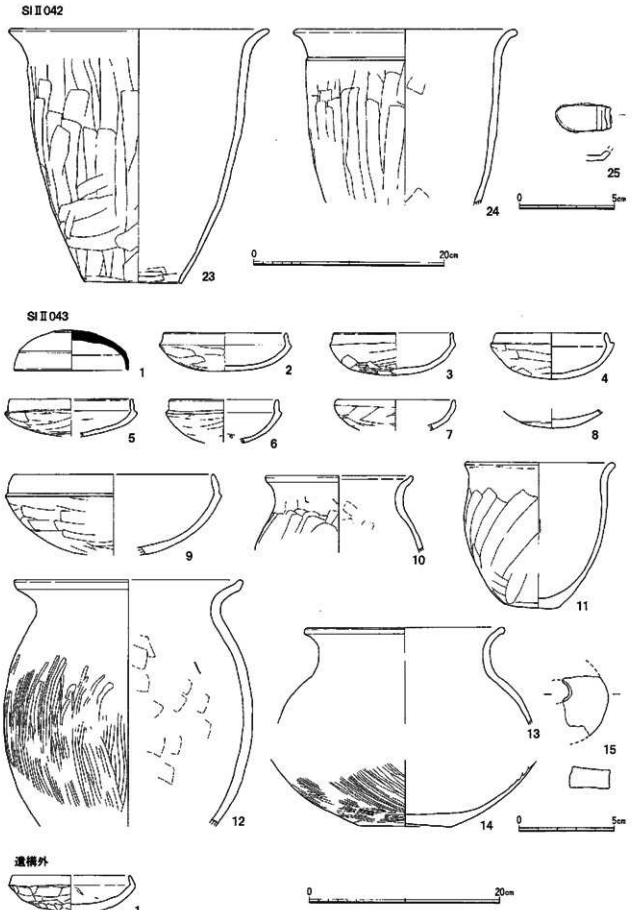
25は鉄製品である。器形は不明であるが，古墳時代後期のものと思われる。

SIⅡ043（第38図，図版38）

1は須恵器坏蓋である。半球形で，天井部と周縁部との境に沈線状の稜がある。端部は丸い。

2～9は土師器坏である。須恵器模倣で，2～6・9が坏身，7は坏蓋の模倣と考えられる。8は口縁部がないので模倣元は不明である。丸底で底部と体部の区別は無く，体底部は扁平な半球形である。2～6・9は受け部がある。2は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，わずかに外反しながら口縁に至る。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。内面に漆仕上げが施される。3は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，わずかに外反しながら口縁に至る。口縁はほぼ直立する。胎土は細砂粒・砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。4は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，内彎しながら口縁に至る。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。5は，口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。胎土は細砂粒をやや多く含み，砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。6は，口縁部は受け部からほぼ直立し，内傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。7は，体部と口縁部の境は，口縁部のヨコナデで区別される。口縁部はほぼ直立し，立ち上がりは短い。胎土は細砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。内外面に黒色処理が施される。9は，やや大型である。口縁部は受け部から内傾して立ち上がり，内彎しながら口縁に至る。胎土は細砂粒を多く含み，砂粒・赤色スコリア粒を少量含む。

10～14は土師器甕である。10・11は小型である。11は口縁部から胴上半部である。胴部は鶏卵形と思われる。口縁部はほぼ直立し，外反して口縁に至る。口縁は内側に段があり，わずかに受け口状になる。胎土は細砂粒を多く含む。11はヘラケズリでやや丸みがある底部である。胴部は鶏卵形で，最大径は中位より



第38図　SⅡ042・Ⅱ043・遺構外出土遺物

上である。胴部上端のしまりは弱く，口縁部は短く外反する。口縁は丸く，玉縁状になる。胎土は砂粒を多く含み，赤色スコリア粒を少量含む。12は底部が欠損する。胴部は鶏卵形で，最大径は中位やや上である。口縁部は外反して口縁に至る。口縁は内側に段があり，わずかに受け口状になる。胎土は砂粒を多く含み，雲母粒が顕著である。13は口縁部から胴上部である。胴部は鶏卵形と思われる。口縁部はほぼ直立し，外反して口縁に至る。口縁はヨコナデにより面取り状になる。胎土は砂粒を多く含み，石英粒・長石粒が顕著である。被熱のため器面が荒れている。14は，胴下部から底部である。底部は中央がわずかに上げ底である。胴部はほぼ球形と思われる。胎土は砂粒を多く含み，石英粒・長石粒・雲母粒が顕著である。

15は土製紡錘車である。扁平なドーナツ形で，断面は長方形である。

2．遺構外出土遺物（第38図，第10表，図版38）

1は土師器坏である。須恵器坏の模倣と考えられる。丸底で底部と体部の区別は無く，体底部は扁平な半球形である。口縁部は内傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒を少量含む。

第9表　古墳時代竪穴住居観察表

遺構No.	規模（主軸×副軸）	主軸方位	面積（上：床面積 cm²　下：柱穴内面積 cm²）	壁高（cm）	柱穴様式	柱穴深さ（cm）	出入口幅さ（cm）	炉跡	カマド位置	特記遺物・備考	時代
SII C30	5.28×5.30	N－37°－W	(26.21) 6.96	41～62	P1 65 P2 78 P3 84 P4 79		42	全周	（北西壁中央）		7C後半
SII C33	3.74×3.80	N－85°－E	12.77	47～58			31？	全周	東壁中央		
SII C34	旧？3.60×3.97 新？2.96×2.71	旧？N－80°－W 新？N－83°－W	旧？ 9.12 新？ 6.55	5～8			？	無	西壁		7C前葉
SII E35	×2.68	N－25°－E	(5.8)	14～18			？	ほぼ全周か	北東壁やや右寄り	遺存不良	6C末～7C初
SII E40	3.84×3.66	N－25°－W	(13.17)	13～47			44	南西壁一部欠ほかは有？	（北西壁）		
SII E42	6.54×6.80	N－84°－W	(41.2) 12.65	20～28	P1 51 P2 41 P3 67 P4 75		14	東壁の一部と床様欠か	西壁中央		6C末～7C初
SII E43	7.10×7.16	N－12°－W	(47.6) 12.78	10～66	P1 31 P2 32 P3 41 P4 37		30	柱穴全周	北壁中央	西壁側に床構2条 補助柱穴5基か	6C末～7C初

第10表　古墳時代遺構・遺構外出土遺物観察表

一部に奈良・平安時代遺物を含む
（　）は復元値、［　］は現存値を表す

遺構・遺物番号		器種	口径	底径	器高	残存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SII 010	1	土師器坏	13.0		4.0	100%	内　淡浅褐色 外　明褐色	良好	内　ナデ　外　平持ちヘラケズリ　口縁仕上げ	62
	2	土師器坏	13.2		3.2	100%	内　暗浅褐色 外　黒褐色・淡赤褐色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　底　ケズリ仕上げ?	2・30・60・74
	3	土師器坏	13.8		4.6	95%	内　淡褐色・赤褐色 外　黒褐色・黒色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　口縁仕上げ　胴重器坏身模倣	66
	4	土師器坏	12.6		4.3	50%	内　暗淡褐色 外　暗褐色	良好	内　ナデ　ミガキ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　胴部器坏身模倣	3・48・49
	5	土師器坏	(12.3)	5.5	5.9	70%	淡褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　ミガキ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	1・54・66
	6	甲形	(5.5)	3.0	5.2	70%	内　暗赤褐色・赤褐色 外　暗赤褐色・褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラケズリ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	59
	7	土師器壺	(14.4)	7.3	17.0	60%	内　淡褐色 外　淡褐色・黒褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラケズリ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	36・63
	8	土師器壺	(21.0)	9.2	38.1	85%	内　淡褐色 外　淡褐色・赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　外　ヨコナデ　ナデ　ミガキ　底　ナデ　ミガキ　常型型　内面半位調整ましい	65・66
	9	土師器壺	21.0	7.5	25.7	95%	内　暗褐色 外　暗褐色・褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラケズリ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	66
SII 013	1	土師器坏	(14.5)		5.5	75%	内　黒色・赤褐色 外　暗褐色	良好	内　ヘラミガキ　外　ヘラケズリ　ヨコナデ　ヘラミガキ　被熱　外部煤分厚有り	4
	2	土師器皿		(6.6)	[2.2]	10%	褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転糸切り　回転ヘラケズリ　須恵・平安時代土器の混入	40
	3	土師器坏		(7.2)	[2.4]	15%	暗褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　底　回転ヘラケズリ　須恵・平安時代土器の混入	46
	4	土師器坏			[4.5]	10%	暗褐色	良好	内　ナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ヘラケズリ　須恵器のパレットとして使用？部分的に鏡ケランダムに付ス	不明
	5	土師器皿			[1.0]	破片	暗褐色	良好	ロクロ成形　体内墨書文字不明　須恵・平安時代土器の混入	014−71
	6	土師器皿			[1.6]	破片	褐色	良好	ロクロ成形　体内墨書文字不明　須恵器・平安時代土器の混入	40
	7	土師器皿			[1.7]	破片	褐色	良好	ロクロ成形　外　回転ヘラケズリ　体内墨書文字不明　糸底・平安時代土器の混入	014−71
	8	土師器皿			[0.8]	破片	暗褐色	良好	ロクロ成形　体内墨書文字不明　須恵・平安時代土器の混入	014
	9	土師器壺	(13.2)		[7.0]	20%	褐色	やや・あまい	内　ナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　内面接合痕有り　器面の汚れが全しい	3・39・41・012−13
	10	紡石	長さ 5.7 完存 12.25	幅 5.0 厚 1.65	厚さ 2.6 重さ 0.35		淡褐色		重さ22.0kg　被熱面以外は全面研磨痕有り	38
	11	鉄製品 鉄鏃	長さ 12.25	幅 1.65	厚さ 0.35				重さ3.07g　刃部幅1.56　柳状部幅0.8　刃部厚さ0.4　茎状部は3.0.56	
SII 034	1	土師器坏	(12.7)		5.4	75%	内　黒色・赤褐色 外　赤褐色	良好	内　ヨコナデ　ミガキ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　内面黒色処理　胴重器坏身模倣	1・89
	2	土師器坏	12.1		4.7	75%	内　赤褐色・褐色 外　明赤褐色・褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　胴重器坏身模倣	95
	3	土師器坏	(13.2)		4.5	70%	褐色・黒色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　内面黒色処理　被熱　胴部器坏身模倣	88
	4	土師器坏	8.0	6.9	12.0	45%	内　赤褐色 外　明褐色・灰褐色	やや・あまい	内　ヨコナデ　ナデ　外　ヨコナデ　ナデ　底　ナデ　内面被熱により剥離	2・27・110・122・123・124・131・132
	5	土師器鉢	(11.2)	6.2	9.7	70%	内　黒色 外　黒色・赤褐色・明褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　ミガキ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	1・47・48・96・138・139
	6	土師器鉢		6.8	[11.4]	75%	内　黒褐色・褐色 外　黒褐色・褐色	良好	内　ヨコナデ　ナデ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ　内面被熱による剥離　外部煤	1・68・81・82・83・241
	7	土師器壺	20.4		[8.7]	10%	内　淡褐色〜黒褐色 外　淡褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ	1・130・142
	8	土師器壺		8.4	[9.4]	35%	内　褐色・黒褐色 外　褐色・赤褐色・黒褐色	良好	内　ヘラナデ　外　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ	1・73・74
	9	土師器壺		6.5	[9.9]	25%	暗褐色	良好	内　ヘラナデ　外　平持ちヘラケズリ　底　ナデ	75
	10	土師器壺	(20.2)		[28.0]	20%	淡黄褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　ナデ　ミガキ　内面剥離が著しい	1・3・9・22・13・14・16・17・18・20・240
	11	土師器壺		8.4	[27.8]	35%	黒褐色・褐色	良好	内　ヘラナデ　外　ナデ　ミガキ　底　ナデ　内面被熱による剥離が著しい	1・77・79・80・32・61・66・67・70・71・78・238
	12	土師器甕	(26.6)	8.2	24.6	40%	内　褐色 外　赤褐色〜褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　手持ちヘラケズリ　ケズリ	1・55・56・57・58・59・61・72
SII 035	1	土師器壺		7.9	[4.8]	10%	内　暗淡褐色 外　暗淡褐色・赤褐色	良好	内　ナデ　外　ヘラケズリ　底　ナデ　荒粒　底部に少量の山砂付着	1・3・4
SII 040	1	土師器坏	13.6		4.4	90%	内　黒褐色 外　黒褐色・褐色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　縁　ヘラミガキ	26
	2	土師器坏	(13.4)		[3.8]	15%	黒褐色	良好	内　ナデ　ミガキ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　縁ヘラミガキ　須恵器坏身模倣	6・12
	3	土師器壺	(9.8)	(8.2)	11.7	40%	淡褐色	良好	内　ヨコナデ　ヘラナデ　外　ヨコナデ　平持ちヘラケズリ　底　平持ちヘラケズリ　内面の調整がましい	22
	4	土製支脚	長さ 10.6				外　明赤褐色・黒褐色		重さ172.5g　明瞭な指跡有り	14
SII 042	1	土師器坏	13.2		4.4	100%	淡黄褐色・黒褐色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ　ヘラナデ	86
	2	土師器坏	12.2		4.3	100%	内　褐色 外　淡黄褐色・黒色	良好	内　ナデ　外　ナデ　平持ちヘラケズリ	82

遺構・地区		器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
	3	土師器杯	12.0		4.1	100%	内 暗赤褐色 外 褐色・黒色	良好	内 ナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 悪部叶身後撫	87
	4	土師器杯	12.0		4.9	70%	褐色	良好	内 ヨコナデ ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 須恵器平瓦模倣	88・89・100
	5	土師器杯	12.0		4.2	100%	内 灰褐色 外 黄褐色・黒色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 調仕上げ	84
	6	土師器杯	(13.1)		4.3	75%	内 黒褐色 外 褐色～暗褐色	良好	内 ナデ ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 調仕上げ 須恵器杯身模倣	89・90・98・99
	8	土師器杯	13.7		4.7	100%	内 暗褐色 外 赤褐色・暗茶褐色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 調仕上げ 須恵器坪蓋模倣	83
	9	土師器杯	(13.3)		4.9	65%	暗茶褐色	良好	内 ナデ ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 調仕上げ? 須恵器坪身模倣	85
	9	土師器杯	14.7		4.0	100%	内 暗褐色 外 褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 調仕上げ	81
	10	手捏	4.0	4.2	1.6	100%	淡黄褐色			45
	11	土師器(S字)	18.7	12.0	[12.5]	75%	内 淡褐色 外 淡赤褐色	良好	内 ナデ ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ 部分内面 ナデ ヘラナデ	77・78
	12	土師器杯	22.8		12.2	90%	内 赤褐色 外 暗褐色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ミガキ	80
	13	土師器甕	15.0		[6.7]	10%	内 橙褐色・灰褐色 外 淡褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 下持ちヘラケズリ	1・45
	14	土師器甕	13.5	7.8	17.6	100%	内 黒褐色・暗褐色 外 明褐色・褐色～暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	71
	15	土師器甕	13.1	7.3	18.3	100%	内 褐色 外 明褐色・黒色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	76
	16	土師器甕	16.6	5.9	20.1	90%	内 淡橙褐色 外 淡灰色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 下持ちヘラケズリ 底 ナデ	77・79
	17	土師器甕	(19.5)	8.0	33.5	55%	内 灰褐色 外 淡褐色・暗茶褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ミガキ 底 ナデ 常総型	1・25・56・57・61
	18	土師器甕	(24.0)	(8.9)	35.0	45%	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色・黒褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ミガキ 底 ナデ 常総型	1・25・36・54・66・75・97・99
	19	土師器甕		6.7	[15.2]	20%	内 赤褐色 外 明赤褐色・淡褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 ナデ 内面剥離著しい	64
	20	土師器甕		4.5	[2.9]	10%	内 褐色 外 褐色・黒褐色	良好	内 ヘラナデ 外 下持ちヘラケズリ 底 下持ちヘラケズリ	1・47
	21	土師器甕		5.7	[3.1]	10%	淡褐色・黒褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	48
	22	土師器鉢	24.4		[7.1]	10%	内 明褐色～褐色 外 淡褐色～褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ	72・95
	23	土師器鉢	27.0	10.2	26.7	85%	内 明灰色・褐灰色 外 暗褐色・淡赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラミガキ 外 下持ちヘラケズリ ヨコナデ	1・70
	24	土師器甑	22.8		[18.6]	30%	赤褐色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	25・35・52・62・65・66・103・81・88・91・97
	25	鉄製品	長さ 29.5	幅 1.3	厚さ 2.6				重さ4.8g 何かの鉄造品の一部か?	
SI 043	1	須恵器壺	11.8		4.3	90%	青灰色	良好	コクロ成形 内 ナデ ヨコナデ 外 ナデ ヨコナデ 調整痕	42
	2	土師器杯	12.8		4.0	70%	内 灰褐色 外 灰褐色・黒色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ ナデ 内面調仕上げ	34・65
	3	土師器杯	(12.3)		4.5	55%	黒褐色・赤褐色	良好	内 ヨコナデ ミガキ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	1・12・26・32・75 一括
	4	土師器杯	11.6		4.9	60%	内 淡褐色 外 明色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 下持ちヘラケズリ 調仕上げ 被熱	45・76
	5	土師器杯	(12.8)		[4.0]	35%	黒褐色・淡褐色	良好	内 ヨコナデ ミガキ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 被熱	1・39・40・50
	6	土師器杯	(11.3)		[4.8]	35%	内 淡赤褐色・黒褐色 外 淡褐色・暗赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 被熱	1・30・64・73・81・82
	7	土師器杯	12.3		[3.2]	30%	黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ 内面黒色処理	1・51
	8	土師器杯			[2.0]	30%	内 黒色 外 黒褐色	良好	内 ミガキ 外 ナデ ミガキ 底 ヘラケズリ ナデ 内は黒色処理	1・73
	9	土師器杯	(20.9)		[8.5]	20%	赤褐色・黒褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ 下持ちヘラケズリ 被熱	74・80・87
	10	土師器甕	15.5	5.1	15.3	85%	内 淡褐色 外 淡橙色・赤橙色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	1・5・16・18・19・20・22・23・38・41・62・69
	11	土師器甕		9.8	[7.0]	10%	内 暗淡褐色 外 淡黄褐色	良好	内 ヘラナデ ミガキ 外 ミガキ 底 ミガキ 常総型	62
	12	土師器甕	(23.5)		[25.8]	35%	内 淡黄褐色・黒褐色 外 淡赤褐色・灰褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ ヘラミガキ 黄褐型	1・2・3・4・5・6・7・13・14・17・21・69
	13	土師器甕	(15.2)		[8.1]	10%	赤褐色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	1・35・56
	14	土師器甕	20.5		[10.0]	10%	内 淡赤褐色・黒褐色 外 淡赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 常総型 強く被熱	43・71・72・73
	15	土製品 紡錘車	厚さ 1.1			25%	褐色・明褐色		重さ8.13g 上下面ヘラミガキ的な調整	1
遺構外	1	土師器杯	(12.2)		3.9	55%	内 明赤褐色	良好	内 ヘラミガキ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ	047～0052

第６章　奈良・平安時代

第１節　遺　構

１．竪穴住居（第11表）・竪穴状遺構

奈良・平安時代の竪穴住居は調査区内では20棟見つかった。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。なお，竪穴住居かどうか不明な遺構が一つ存在する（SIⅡ051）。それについては，竪穴状遺構として本項で記述するが，竪穴住居の棟数には加えない。出土遺物がなく，ほかの時代に帰属する可能性もある。

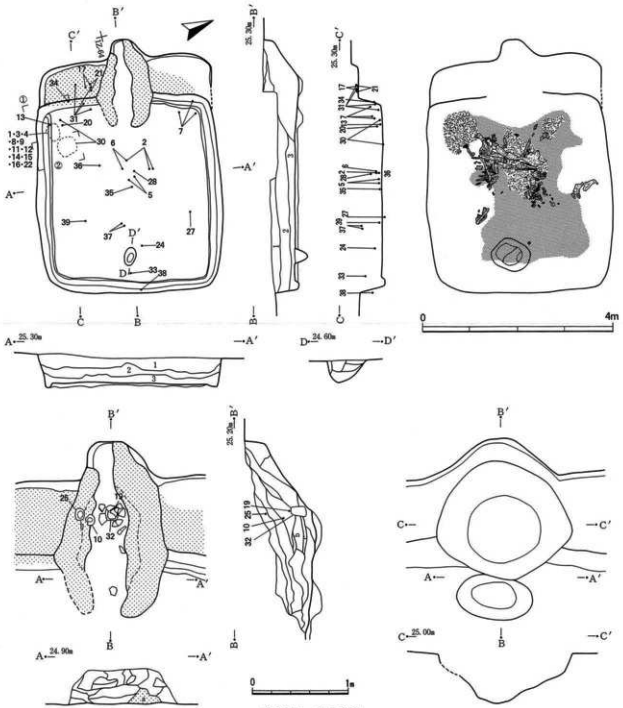
SIⅡ001（第39・40図，図版８）

調査区北部西側，1Zグリッドに位置する。西壁側中央にカマドがあり，その両側が棚状に張り出す。全体のプランは長方形で，棚状部以外のプランもやや縦長の方形である。出入り口ピットは東壁側中央に位置する。４箇所の主柱穴は見られない。壁溝は床面西壁南側（カマド左側）で伴わないが，他は巡る。なお，棚状部にはない。棚上には，厚さ４㎝～５㎝程度の山砂が敷かれており，西壁南側は壁面部分も貼り付けられている。棚状部の北側（右側）底面は隅部側で山砂の敷設が確認できない。北側は遺存が悪く，元々は全面に敷かれていたと推測できる。西壁北側壁面も山砂の貼り付けがないが，これも本来は貼り付けられていた可能性が高い。掘形底面は一部を除いて床面からあまり深くならず，平坦である。床面はローム塊に若干の山砂，黒色土が混じった土でならされている。出入り口部分はやや大きく掘り込まれている。また，棚状部は山砂と焼土混じりの黒褐色土により，５㎝～16㎝の厚さに埋め戻され，その上に山砂がのる。

覆土は下層で住居の焼却（あるいは火災）による炭化物・焼土を含むが，中・上層は黒褐色土主体で，自然堆積と考える。炭化材は西側を中心に多く出土した。板材と観察できるものもあるが，多くは丸太材である。丸太材は径10㎝弱の太いものと径５㎝前後の細いものがあり，太さと配置に規則性がある。また，萱材も規則的に出土した。北側と東側では，炭化物混じりの土が一面に堆積しているが，炭化材の出土が少ない。炭化材の残りが悪いのは，燃焼が強いことによって，燃え尽きるものが多かったためと推測できる。それに対し，西側と南側では，上屋が完全に燃え尽きずに床面に落下したものと考える。屋根組みが一部で良く残っているので，上屋を崩した後の焼却ではなく，屋根が焼けて，上屋が落ちたものと考える。焼土の集中的な出土は西側に偏っている。

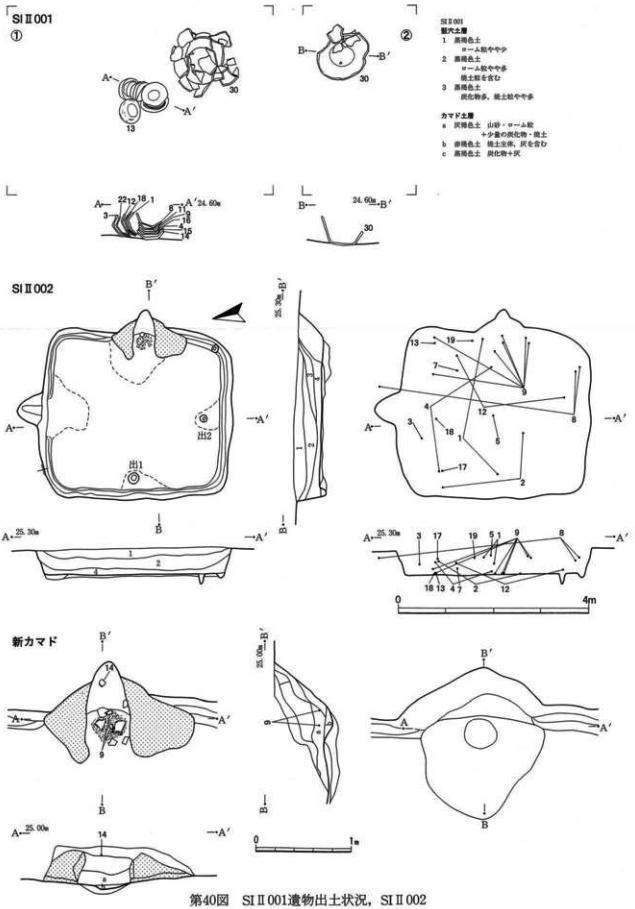
カマドは棚状部からその前後におよび，かなり長い作りである。火床部奥に土製支脚32が正立したまま，原位置で残っていた。袖基部が焼土混じりの土で構築されているが，これはカマドの作り替えによる影響である。上部は比較的しっかりとした山砂で構築されている。覆土は，火床部直上に焼土塊と灰が多く堆積し，火床部下は炭化物と灰が堆積していた。火床部より上層は，カマドの使用・崩壊及びその後の土砂堆積に伴い，山砂・焼土・煤・黒褐色土・ローム粒などが複雑に堆積している。カマド下部からは２箇所の窪みが見つかった。遺存したカマドに伴う窪みは奥の方で，手前の窪み上部には床面が形成されていた。手前の窪みの底面は焼けており，このことと袖構築土の所見から，カマドが作り替えられたことがわかる。なお，棚状施設の増築もその際に実施された可能性がある。

遺物の出土量は多い。その主体は，南西隅部床面から集中して出土した土師器坏13点と須恵器甕１点



第39図　SⅡ001

(30) である。土師器坏13点の出土状況を見ると，７点は正位に重なり，５点は正位に重なったものが横倒れとなっている。そして，１点 (13) は正位から僅かに斜めの状態で出土し，横倒れの坏群に接している。７点の坏群は，下から14・15・４・16・９・11・８の順である。５点の坏群は，下から３・22・12・18・１の順である。１は７点の坏群に接している。重なった坏群は，やや大形のものが下部に位置する。７枚重ねの方は下２点，５枚重ねの方は最下部のものが，他よりやや大きい。ただし，７枚重ねの方は，最上部の坏（８）もやや大形である。須恵器甕30も正位の状態で出土したが，胴部・口縁部の多くが割れて出土した。破片は離れた位置にはあまり散っていない。



第40図　SⅡ001遺物出土状況，SⅡ002

その他の図示した遺物の中では，大型の土師器坏17・21がカマド左側の棚状部底面から出土した。集中して出土したが，細かく割れており，本来正位か倒位か不明である。カマド内から土師器坏19は支脚の上部から出土した破片である。熱を受けており，支脚の高さ調節のものと推測できる。土師器坏10は遺存が良いが，正位，倒位どちらの状態かわからない。

遺物は竪穴全体から出土しているが，図示した個体の出土が多いのは，南西隅部及び近い位置にあるカマド左側棚状部，カマド内，中央部から出入り口ピット周辺である。壁際は南西隅部付近を除いて，図示した個体の出土が少ない。出土層位は，床面から下層にかけてのものが多いが，出入り口ピット周辺の遺物は中層から上層のものが目立つ。

SIⅡ002（第40・41図，図版８・９）

調査区北部西側，2Zグリッドに位置する。建て替えにより，新旧のカマド・出入り口ピットがある。遺存の良い東カマドが新しく，悪い北カマドが古い。平面形は東カマドを上にした場合，横長の方形である。東カマドに対面する西壁際中央のピットが新しい出入り口ピット，北カマドに対面する南壁際中央のピットが古い出入り口ピットである。４箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。床面はカマド前と出入り口ピット付近を除いて，広範囲に硬化している。覆土は黒褐色土主体で，自然堆積と考える。掘形底面は全体的に床面とは大差が無い。

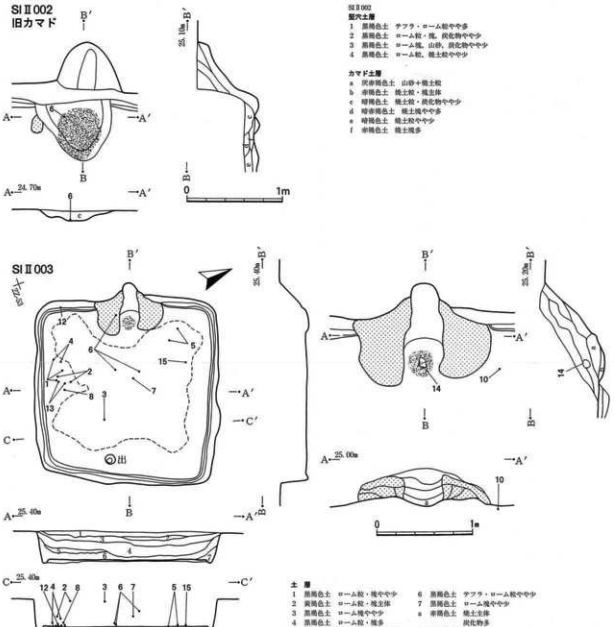
新カマドは東壁中央に位置し，袖部の遺存は良好である。構築材も山砂主体で，基底部が少量の黒色土を含む以外は，ローム・黒色土の包含が少ない。袖部内壁は被熱により，赤色化および硬化している。火床部には焼土塊が多く堆積し，カマド内覆土中層は天井部の崩れによる山砂が多く堆積している。煙道部分の堆積土は，暗褐色土主体で，山砂・炭化物・焼土を含む。カマド下部は広く掘り込まれており，床面はローム塊を含む暗褐色土で埋め戻した土で形成されている。ただし，火床部下はかき出しによって深くなった面もあると考える。

旧カマドは北壁中央に位置する。火床部には，東カマドの設置に伴い，埋め戻されて床面が構築されている。埋め戻しの土層は焼土・山砂・ロームを含む暗褐色土で，その下部の火床部上には焼土塊が多く堆積していた。図のｃ・ｄ・ｅ層上面が床面である。カマド掘形壁の前の土層は竪穴覆土と差がなく，壁面の再形成は不明である・火床部下は焼土粒・ローム塊を含む暗褐色土が見られる。これは，掘形の埋土およびかき出しに伴って深くなった部分に堆積した土である。左側の床面には山砂が貼り付いて残っており，袖部の痕跡と理解できる。

遺物量は整理箱（543×340×150㎜）１箱で，それほど多くない。平面位置は南西隅付近が希薄である他は，広く散っている。図示しない遺物の位置も含めて見ると，両カマド側にやや多い傾向が窺える。土師器甑９は，東カマド内及び周囲から出土したものである。層位は，砥石13と鉄滓18が床面から出土した以外は，中・上層からの出土が多い。破片が床面から出土したものも，中・上層の破片と接合している。

SIⅡ003（第41図，図版９）

調査区北部西側，2Zグリッドに位置する。SIⅡ002が北側に80㎝離れて所在する。平面形は方形であるが，西壁と北壁が東壁・南壁と比べ，やや長い。出入り口ピットは東壁際中央からやや南側に位置する。４箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。床面は壁際を除いて硬化面が広い。覆土は全体にローム

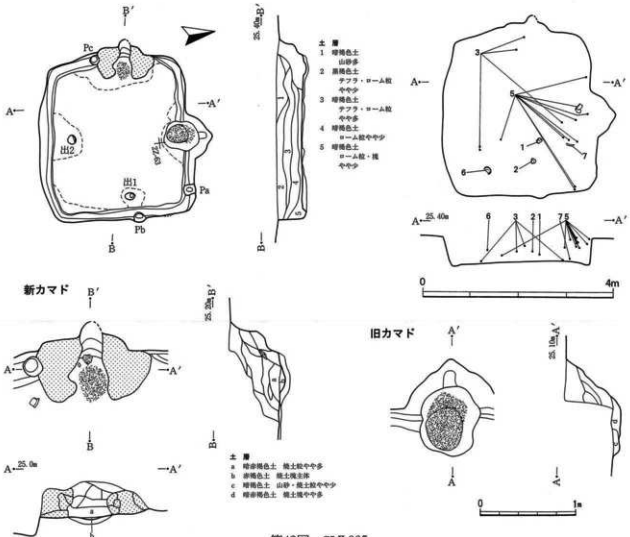


第41図　SⅡ002カマド，SⅡ003

塊の含有が多く，上層でローム塊主体の層があることから，埋め戻された土層と考える。掘形底面と床面との高さの差は少なく，当初から平坦に掘られている。

カマドは西壁中央に位置し，袖部下半部の残りは良好である。構築材は山砂を主体とするが，基底部は暗褐色土を含み，内壁は焼土塊と炭化物が混入する。土製支脚片14が火床部中央から出土しているが，層位的には少し高い位置である。火床部上下は焼土が多く堆積し，aの上層は，構築材が崩れた山砂が多く堆積する。火床部の手前は深く掘り込まれており，暗褐色土で埋め戻されて床面が形成されている。

遺物の出土はあまり多くなく，平面分布は南西半分に偏っている。出土層位は床面から上層まで及ぶが，埋め戻された土層と考えられるので，廃棄時の時期差は無いと考える。図示した遺物の中では，ほぼ完形の鉄鎌15が床面から出土し，本住居に伴う可能性がある。その近くから出土した土師器坏5も，床面出土で，復元で完形となった土器である。



第42図　SIⅡ005

SIⅡ005（第42図，図版９）

調査区北部西側，2Zグリッドに位置する。建て替えにより，新旧のカマド・出入りロピットがある。遺存の良い西カマドが新しく，悪い北カマドが古い。平面形は西カマドを上にした場合，縦長の方形である。西カマドに対面する東壁際中央のピットが新しい出入りロピット（1），北カマドに対面する南壁際中央のピットが古い出入りロピット（2）である。４箇所の主柱穴は見られない。壁溝は全周する。壁柱穴が３箇所あり，底面には柱のあたりが見られた。確認面からの深さは，北東隅部のものが74cm，出入りロピット１に近いものが66cm，西カマド左袖部に接するものが78cm，である。各壁柱穴の位置関係は規則的ではなく，東側の２箇所は壁溝幅の中央よりも壁際に存在することから，上屋を支える補強柱と考える。床面は広範囲に硬化しているが，とくに中央部は強く踏み固められている。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。掘形は，隅部がやや深く掘られていたが，全体としては床面と大差がない。ローム塊を含む暗褐色土を埋め戻して，床面を形成している。

新カマドは西壁中央からやや右寄りに位置し，右袖脇はすぐ北西隅である。袖部の遺存は良好である。構築材は山砂主体で，左袖の基底部が暗褐色土を含む以外は，ローム・黒色土の包含が少ない。袖部内壁

側は被熱により，赤色化しており，一部は硬化している。火床部には焼土塊が堆積し，その上層も焼土がやや多く堆積する。また，カマド内覆土中層は，構築材の崩れによる山砂が多く堆積している。煙道部分の堆積土は，暗褐色土主体で，山砂・焼土・ローム粒を含む。

旧カマドは北壁中央に位置する。火床部は広く火を受けているが，焼土塊の堆積は厚くない。また，構築材は完全に除去されていた。清掃の後に床面が形成されたことがわかる。掘形壁の前の土層は竪穴の覆土と差がなく，壁面の再形成は不明である。東カマドの設置に伴い，埋め戻されて床面と壁面が構築されている。

遺物の出土は，あまり多くないが，竪穴全体から出土している。出土層位は中・上層から出土したものがほとんどで，破片が床面・下層から出土したものも，中・上層の破片と接合している。

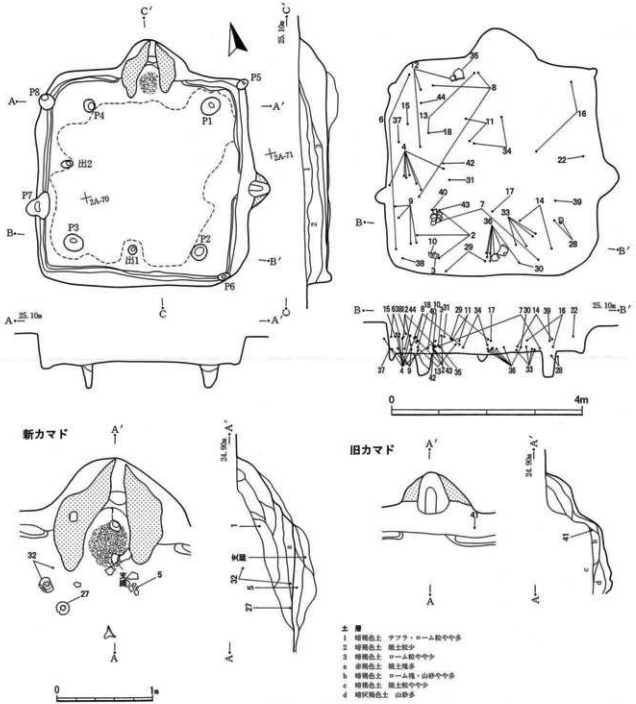
SⅡ006（第43図，図版９・10）

調査区北部中央，2Z・2Aグリッドに位置する。建て替えにより，新旧のカマド・出入りロピットがある。遺存の良い北カマドが新しく，悪い東カマドが古い。平面形は北カマドを上にして見た場合，わずかに縦長の方形である。新しい出入りロピット（1）は南壁際中央からわずかに西寄りのピットで，古い出入りロピット（2）は，西壁際中央やや北寄りのピットである。４箇所の主柱穴があり，いずれも柱のあたりが見られた。それぞれ隅部に寄った位置にあり，竪穴の規模のわりに柱穴内面積が広い。これら４箇所の主柱穴は床面除去後の調査で見つかったもので，柱穴内上部の土層はローム塊をやや多く含む暗褐色土である。北カマドに設置替えの後は柱が撤去されて，柱穴部分が床面となっていた可能性がある。しかし，この想定が確実であるかは断定しがたく，可能性の指摘にとどめる。また，壁柱穴が４箇所ある。左右非対称の位置関係であるが，補強柱の柱穴の可能性がある。壁溝は全周する。床面は広範囲に硬化している。覆土は暗褐色土主体で，各層の差は少なく，自然堆積と考える。なお，北東隅部付近の壁溝発掘時に，光る鉱物状の物質が見られたので，一部を採取した。掘形底面は，カマド下部・出入りロピット１部分・南東隅部が深く掘り込まれているが，中央部は床面との差が少なく，平坦に掘り込まれている。深い部分は，主としてローム塊を多く含む暗褐色土で埋め戻されている。

新カマドは北壁中央に位置する。残りはあまり良くなく，山砂が周囲に広く流れている。袖部の残りはとくに悪く，前天井とともに意図的に破壊された可能性がある。火床部上は焼土が堆積し，一部で灰混じりの焼土も見られた。カマド下部は深く広く掘り込まれている。火床部下は焼土塊・灰・炭化物・山砂を多く含む暗褐色土が堆積するが，その下層は混入物がやや少なくなる。

旧カマドは東壁中央に位置する。袖部や火床部の痕跡は，全く残っていないが，煙道部両側の後天井部は良く残っていた。北カマド移動に際して，突出部の構築材は除去されなかったことがわかる。カマド下部は深く掘り込まれており，ローム塊・山砂・焼土塊を含む暗褐色土で埋め戻されて（ｂ・ｃ・ｄ層），床面が形成されている。

遺物の出土は多く，平面位置も竪穴全体から出土している。出土層位も床面から上層に及ぶが，最上層は少ない。周囲に竪穴住居が存在しなくなった後も，しばらく窪地になっていた状況がうかがえる。北カマド火床部では，土製支脚が出土しているが，破片でもろいため，実測図は図示していない。北カマド内および周辺では，遺存の良い個体がいくつか出土している。土師器坏１は上層から正斜位で出土し，土師器高台付皿27・32は床面から倒位で出土した。また，土師器坏12はあまり遺存が良くないが，下層から倒

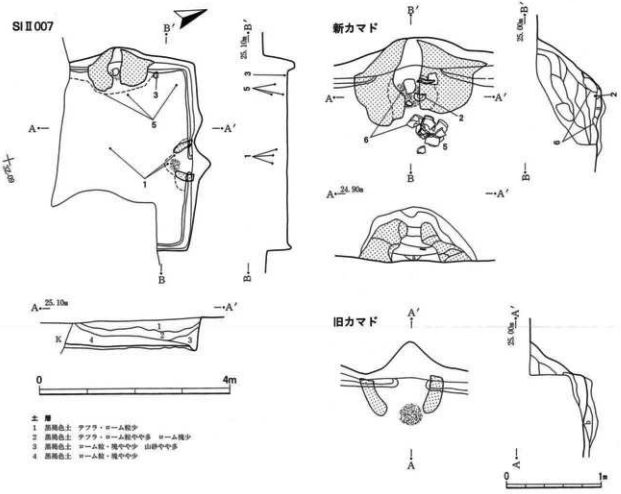


第43図　SⅡ006

位で出土した。その他の遺物では，鎌41が東壁際中央の床面から，壁に立てかけたと推測できる状況で出土した。

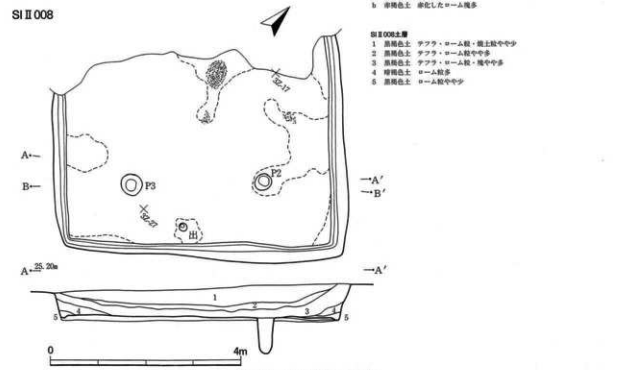
SⅡ007（第44図，図版10・11）

調査区北部中央やや西寄り，2Zグリッドに位置する。建て替えにより，新旧のカマドがある。遺存の良い西カマドが新しく，悪い北カマドが古い。攪乱により南東側が大きく壊されている。平面形は方形であるが，北壁以外の長さが不明であるため，どのくらい長方形状になるかわからない。出入り口ピットは，新旧２箇所あると推測できるが，破壊部分にあるため，見つからなかった。新しいものは東壁際中央，古



土　層
1　黒褐色土　テフラ・ローム粒少
2　黒褐色土　テフラ・ローム粒やや多　ローム塊少
3　黒褐色土　ローム粒・塊ややや少　山砂ややや多
4　黒褐色土　ローム粒・塊ややや少

SIⅡ007カマド土層
a　赤褐色土　焼土塊多
b　赤褐色土　赤化したローム塊多



SIⅡ008土層
1　黒褐色土　テフラ・ローム粒・焼土粒やや少
2　黒褐色土　テフラ・ローム粒やや多
3　黒褐色土　テフラ・ローム粒・塊やや多
4　暗褐色土　ローム粒多
5　黒褐色土　ローム粒やや少

第44図　SIⅡ007・Ⅱ008

いものは南壁際中央にあると推測する。4箇所の主柱穴は見られない。壁溝は破壊部分を除いて存在する。床面は調査範囲のほぼ全面が硬化している。覆土は黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。掘形底面は，隅部がやや深く掘り込まれているが，それ以外は床面との差が少なく，平坦に掘り込まれている。深い部分は，ローム塊をやや多く含む暗褐色土で埋め戻されている。

新カマドは西壁に位置する。カマドの中軸線が西壁の中央とすると，かなり縦長のプランとなることから，カマドは北西隅に寄っていると考える。袖部の残りは良く，かなり上部まで遺存するが，右袖前部の遺存が悪い。構築材は山砂主体で，混入物が少ない。両袖内壁下部は被熱により赤色硬化している。火床部は焼土塊が多く堆積し，奥で土製支脚（6）の下部が据えられた状態で出土した。支脚の下方には，山砂が円形に堆積しているが，支脚を固定するためのものと考える。また，支脚の上部が火床部前方の床面から出土している。カマド下部の掘り込み・灰のかき出しに伴う地山面の掘削は，あまり深くない。

旧カマドは北壁中央わずかに南寄りに位置する。袖部下部は完全に除去されずに残っている。また，床面には山砂がへばりついた状態で堆積していた。北カマドの除去があまりていねいに行われずに，床面が修復されたことがわかる。火床部下の被熱痕跡は顕著に認められた。カマド上部は除去されており，突出する煙道部両脇の山砂も見られない。

遺物の出土は破壊部分があるため，あまり多くないが，調査範囲内では，全体から出土している。図示した個体も少ないが，西カマド付近からの出土がまとまっている。中でも土師器坏2は火床部上面から正位で出土した。また，土師器甕5は右袖前方から，主として流出した山砂の上から出土した。土師器坏3はあまり遺存が良くないが，カマド右袖脇のほぼ床面から正位で出土した。その他，土師器坏1は主として北カマド上部の上層から出土した。

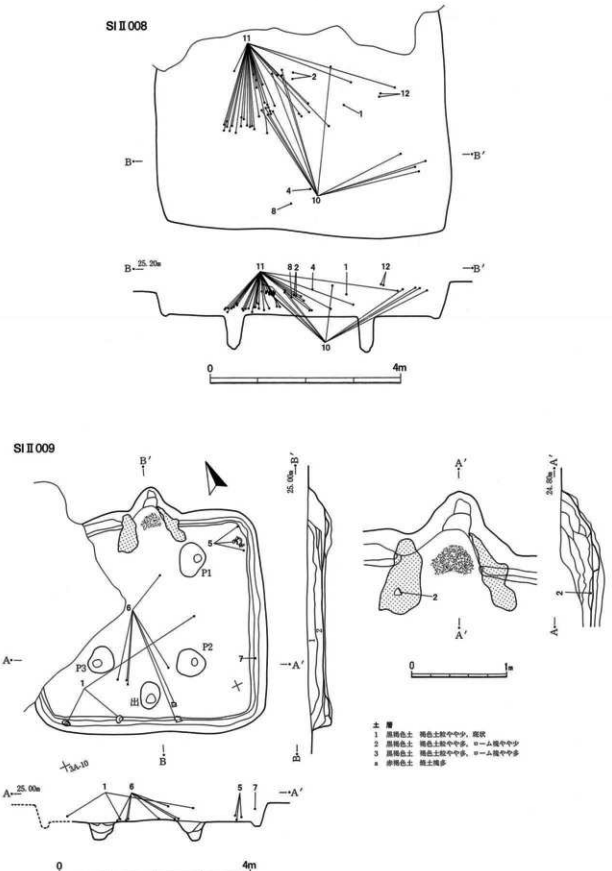
SIⅡ008（第44・45図，図版11）

調査区北部南西寄り，3Zグリッドに位置する。奈良・平安時代の竪穴住居の中でもっとも大形のものである。攪乱により，北西壁側が壊されている。平面形は方形であるが，南東壁以外の長さが不明であるため，どのくらい長方形状になるかわからない。出入り口ピットが，南東壁際中央からやや左寄りにある。カマドは見つからなかったが，出入り口ピットの位置から，破壊された北西壁側に位置することが確実である。主柱穴が南東側で2箇所見つかったが，北西側の2箇所は破壊されている。床面中央から北東壁側にかけて，いくつかのピットが存在するが，柱穴と認められるものはなく，攪乱と考える。壁溝は破壊部分を除いて存在する。壁溝はしっかりとした状態であり，全周するものと考える。床面は広範囲に硬化している。覆土は黒褐色土主体で，各層の差は少なく，自然堆積と考える。炭化物が混じりの焼土が，中央から北側にかけての床面上に数箇所堆積しているが，この部分の床面に被熱痕跡は認められない。掘形底面は，全体に平坦である。ローム塊を多く含む暗褐色土で埋め戻されて，床面が形成されている。

遺物の出土はあまり多くない。平面位置は竪穴中央部に集中し，壁際は少ない。とくに南隅部付近は，空白域が広がっている。出土層位は下層から上層に及ぶが，上層出土のものが多い。垂直分布の様相から，壁側がかなり埋まってから，廃棄場所として利用されたことがわかる。

SIⅡ009（第45図，図版11）

調査区北部中央,3A-00グリッド周辺に位置する。平面形は方形であるが、攪乱により北西側が1/4程



第45図 SIⅡ008遺物出土状況，SIⅡ009

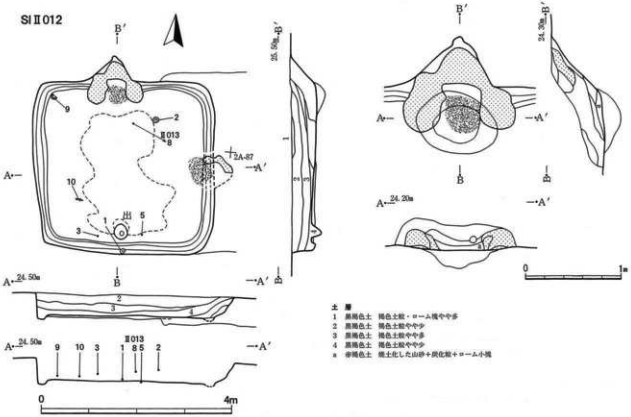
度破壊されている。4箇所の主柱穴をもつが，北西側の柱穴は破壊されている。出入りピットは南壁際中央に位置する。壁溝は破壊部分を除いて存在するが，本来全周するものと考える。床面は全面硬化している。覆土は黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。掘形底面は床面からあまり深くない。床面はローム塊を含む暗褐色土をならして形成されている。なお，南西隅部の貼り床中から光る鉱物状の物質が出土したので，一部を採取した。これは，隣接するSIⅡ006から出土した物質と同様の物質と推測できるものである。

カマドは北壁中央に位置する。残りが悪く，袖部前側は短くなる可能性がある。構築材は山砂主体であるが，遺存している下部は暗褐色土を多く含む。内壁は被熱により赤色硬化している。火床部は焼土塊が多く堆積する。カマド下部は広く掘り込まれており，ローム塊を含む暗褐色土で埋め戻されている。

遺物の出土量はあまり多くないが，図示しない遺物も含めて見ると，平面位置は全体から出土している。出土層位は床面から上層に及ぶが，土師器坏1・土師器甕6の破片は床面・下層と上層のものが接合している。須恵器甕5は北東隅部の下層から出土しているが，底部の破片である。カマド周辺では，図示した遺物は土師器皿2だけであるが，多くの破片が出土している。

SIⅡ012（第46図，図版11）

調査区北部中央やや東寄り，2Aグリッドに位置する。東側が古墳時代後期の竪穴住居であるSIⅡ013と重複し，SIⅡ013の上に作られている。建て替えにより，新旧のカマドがある。遺存の良い北カマドが新しく，悪い東カマドが古い。平面形は北カマドを上にした場合，わずかに横長の方形である。出入り口ピットは南壁際中央に位置する。南壁側はカマド移設後の出入り口部である。カマド移設以前の出入り口部は，西壁側にあると考えるが，出入りピットは見つからなかった。4箇所の主柱穴は見られない。壁



第46図　SIⅡ012

溝は全周する。床面の硬化面は，出入りピットから北カマド前までの中央部に広がっており，東西壁側はやや軟質である。覆土は黒褐色土主体で，自然堆積と考える。掘形底面は全体に平坦である。ローム塊を主体とする黄褐色土で埋め戻されて，床面が形成されている。なお，床面を形成する土層は，上下で２面の硬化面をもつ部分がある。旧カマドから新カマドへの移設に際して，床面の整備が実施されたと考える。

新カマドは北壁中央に位置する。カマド前側の残りはあまり良くなく，山砂がカマド前方の床面に流れているが，袖部後ろ側から後天井の遺存は良い。構築材は，袖部が山砂主体で，後天井は煤・黒褐色土粒を含む。内壁と火床部は被熱により，かなり強く赤色化している。火床部下の土層はローム塊・焼土を含む褐色土である。カマド下の底面は深く，カマドは埋め戻された土の上に作られているが，火床部下はかき出しによって深くなった面もあると考える。

旧カマドは東壁中央に位置する。左袖部の一部がSIⅡ013に突出した部分に残っていた。また，床面から覆土下部にかけて，焼土粒の堆積があり，火床部の痕跡が窺えた。

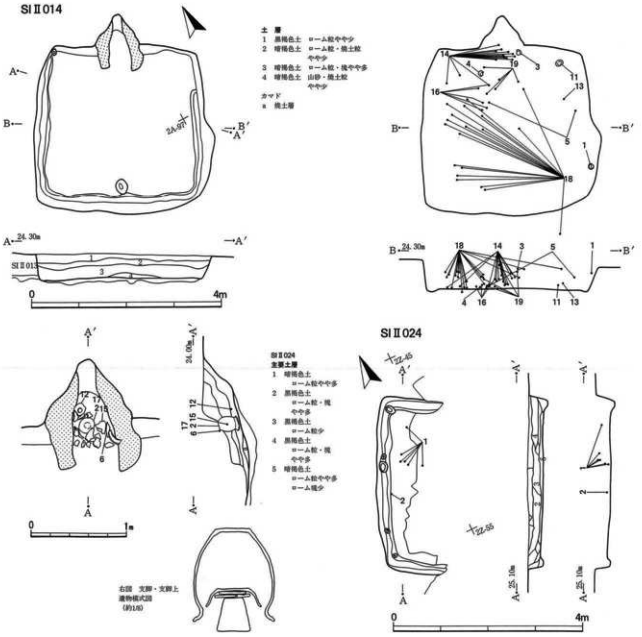
遺物の出土は少ない。平面分布は，北カマド前方にやや多いほかは，散在している。出土層位は床面から上層に及ぶ。遺存の良い遺物を見ると，土師器坏１は，南壁際中央の壁溝上から正位で出土した。出入りピット手前の位置である。灰釉転用硯９は，北西隅の下層から倒位で出土した。土師器坏２はほぼ完形で，北カマド右前方から倒位で出土したが，層位は中層あるいは上層下部といっても良い位置である。

SIⅡ014（第47図，図版12）

調査区北部中央東寄り，2Aグリッドに位置する。北隅部がSIⅡ013と重複し，Ⅱ013を切っている。平面形は方形である。出入りピットは南西壁際中央に位置する。４箇所の主柱穴は見られない。壁溝は北東壁で見られないが，他の３壁は存在する。南東壁の東隅部側が中に入った状況で発掘されているが，掘り過ぎと思われる。覆土は黒褐色土・暗褐色土主体であり，自然堆積と考える。少量の焼土と炭化材が東隅部の中下層から出土している。床面から掘形底面までは全体にやや深い。ローム塊を多く含む黄褐色土で埋め戻されて，床面が形成されている。

カマドは北東壁中央に位置し，壁からかなり突出している。構築材は山砂主体であるが，基底部はローム塊の含有が多く，その上層は黒色土の含有が多い。火床部上には焼土だけの土層が堆積している。火床部奥には土製支脚が立っていたが，著しくもろいため実測図を作成できなかった。支脚上には２段の土師器甕破片がのっており，その上に土師器坏２が伏せて重ねられている。２は被熱痕跡が強く，支脚に転用されたものである。さらに，２の上に土師器甕17が倒位でかぶせられており，17の左側を囲むように土師器甕14が正位で出土している。その他，17の周囲から出土した遺物は多く，図示したものは，土師器坏３・土師器皿６・土師器高台付皿12・土師器甕15にのぼる。12は低い位置から倒位での出土である。２以下は支脚として機能したが，カマド廃絶の祭祀行為により，17がかぶせられ，周囲に土器が配されたと考える。カマド下部は広く，深く掘り込まれており，カマドはローム塊を多く含む黄褐色土で埋め戻した土層の上に作られている。ただし，火床部下はかき出しによって深くなった面もあると考える。

遺物の出土は多く，特にカマド周辺に集中している。カマド周辺では，先述した土器以外でも，土師器坏４がカマド左袖前の床面から正位で出土している。また，土師器甕転用甑16もカマド左袖前方から中央部寄りの床面・下層から出土している。その他の遺物では，完形の土師器坏11が東隅部近くから正位で出



第47図 SⅡ014・Ⅱ024

土しているが，層位は床面からやや高い位置である。また，土師器蓋１も完形で正位であるが，南隅部近くから上層の出土である。須恵器甕18は南西壁側を主体に広く散っている。上層出土の破片が多い。平面分布は，南隅部周辺がやや希薄である。

SⅡ024（第47図，図版12）

調査区北部西側，2Zグリッドに位置する。約２ｍ西方にSⅡ002・SⅡ003が存在する。攪乱により大きく破壊され，西壁際しか遺存しない。平面形は方形であるが，横長か縦長かわからない。カマドが遺存しないが，北壁か東壁側に位置すると推測できる。近くにあるSⅡ002の状況から，双方にあって，付け替えられた可能性も考えられる。出入り口ピットも遺存しない。４箇所の主柱穴の存在は不明である。壁溝は，遺存部分では存在する。壁溝内には小ピットがある。北西隅のものは深さが26cm，南西隅のものは12cmで，壁柱穴の可能性がある。西辺のものは深さが数cmと浅く，壁溝の凹凸と考える。覆土は黒褐色

土・暗褐色土主体であるが，ローム粒・塊を多く含む土層もあり，自然堆積か埋め戻された土層か判断が難しい。

遺物は竪穴の遺存部分が少ないため少量である。土師器坏１は北西隅側の上層及び下層から出土し，土師器高台付皿２は西壁際中央部の下層から出土した。図示した遺物はないが，南西隅側にも少量の遺物が分布する。

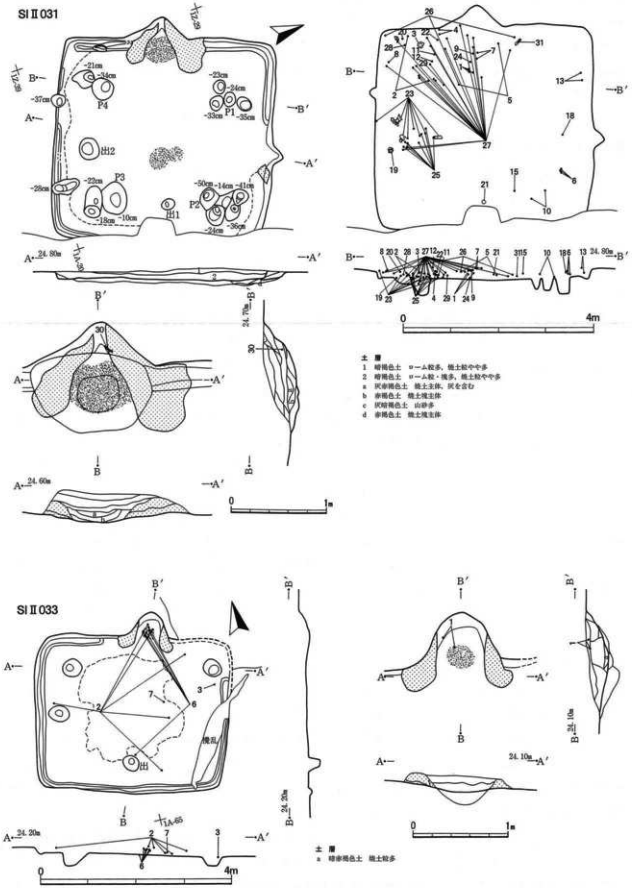
SIⅡ031（第48図，図版12・13）

調査区北部西側，2Zグリッドに位置する。建て替えにより，新旧のカマド・出入り口ピットがある。遺存の良い西カマドが新しく，悪い北カマドが古い。平面形は西カマドを上にした場合，やや横長の方形である。新しい出入り口ピットは，東壁側中央のピットで，わずかに北寄りに位置する。古い出入り口ピットは，南壁側中央のピットで，やや東寄りに位置する。主柱穴は４箇所あるが，各箇所とも複数のピットがある。建て替えに伴い，柱の位置を変えたことがわかる。ピットの数は北西側柱穴（P1）が４箇所，北東側柱穴（P2）が４～５箇所と，多く見られる。P1のピットの重複がないことを重視すれば，建て替えは最多で３回の可能性がある。しかし，柱穴群の中に補助柱穴や抜き取り痕があったとしたら，それ以下の可能性もある。柱穴群は全体的にあまり深くなく，特にP3中央寄りのピットは９cmの深さであり，単独で機能したものか疑問がある。なお，南壁に壁柱穴が２箇所あり，各々P3・P4寄りの位置にある。床面からの深さは西側のものが37cm，東側のものが28cmで，主柱穴群の深さの範囲内に収まる。これらがP3・P4とともに機能したものとすると，P1・P2も中央寄りのものと壁寄りのものが同時に機能していた可能性もある。以上から，建て替えは１回以上とする方が妥当である。なお，柱穴はP4中央寄りのピットだけが，床面上で確認できたものであり，他は貼り床除去時に確認されたものである。どの柱穴とどの柱穴が組み合わせとなるかわからないが，柱穴内面積（6.3㎡）はもっとも方形に近くなる組み合わせのピットで算出した。実際の面積は，建て替えに応じてこの面積を上下するものである。壁溝は南西隅部や北東隅部周辺で見られないが，床面まで浅いことと，攪乱の影響で覆土が非常に硬いことから，本来は全周する可能性がある。床面も攪乱の影響で全体に硬く，硬化面と軟質な部分の区別が難しい。掘形底面は床面から５cm～10cmの深さであり，やや深い。ローム塊を多量に含む暗褐色土で埋め戻されている。

新カマドは西壁中央やや南寄りに位置する。遺存はあまり良好でなく，構築材はカマド左側にかなり流失している。袖部基底部の土層はローム塊を多く含む暗褐色土である。その上の構築材は山砂を多く含むが，暗褐色土の含有も多い。また，煙道部側で山砂を多く含む層があり，天井部の名残である。両袖から煙道部背後の内壁は良く焼けて赤色化している。火床部上も焼土粒・塊が厚く堆積している。火床部下はやや深く掘り込まれているが，灰のかき出しによって深くなったものと考える。

旧カマドは北壁中央やや南寄りに位置する。カマド右側の床面に山砂混じりの土が見られるが，右袖の残存部である。構築材はそれ以外に見られない。火床部分は焼土塊主体の土層があり，旧カマドも長期に使われたことがわかる。カマド下部は広く掘り込まれているが，埋め戻されて床面が作られている。その部分の土層は焼土・炭化物・山砂を多く含む暗褐色土である。

遺物の出土は，竪穴の遺存があまり良くないにもかかわらず，多量である。平面位置は南東隅側が希薄である以外は，広く見られる。特に新カマド前から南西隅・南壁中央側にかけて多い。図示した遺物も多いが，遺存良好なものは少ない。出土層位は床面まで浅いため，おおむね下層出土として良いが，床面に



第48図 SI Ⅱ031・Ⅱ033

密着したものは少ない。竪穴住居が廃棄されてからあまり時をおかずに廃棄が始まり，特に南西側から多く廃棄された状況を示していると考える。

SIⅡ033（第48図，図版13）

調査区北部，1Aグリッドに位置する。北カマドの竪穴住居で，平面形は横長の方形である。北東隅周辺に風倒木痕があり，Ⅱ033よりも古いものであるが，北東隅付近の壁はとらえられなかった。出入りロピットは南壁側中央に位置する。また，西壁際中央にもピットがあるが，ちょうど西壁の1/2部分の際にあり，出入りロピットの可能性がある。これが出入りロピットであれば，東壁側に古いカマドが存在することが考えられるが，その痕跡はうかがえない。しかし，それは攪乱の影響と床面まで浅いことによるもので，存在した可能性があると考える。北西隅側・北東隅側に主柱穴と思われるピットがあるが，南西隅側と南東隅側のピットは見つからなかった。南東隅側の柱穴は攪乱の影響，南西隅側の柱穴は浅いため，確認できなかったと推測する。壁溝は北東隅が不明である以外は存在し，本来全周するものと考える。床面は中央部が明瞭に硬化している。覆土は黒褐色土・暗褐色土主体で，ローム粒をやや多く含む。壁際の土層はローム粒をより多く含む。また，部分的に炭化粒を多く含む層がある。掘形底面は凹凸があり，床面に近い部分とやや深い部分がある。粒径の大きなハードローム塊を主体として，黒色土を含む土層で埋め戻されている。

カマドは北壁中央右寄りに位置する。残りは悪く，袖部が短い。構築材は山砂主体であるが，左袖基部の土層はロームを多く含む暗褐色土である。また，右袖も暗褐色土を含む。火床部の赤色化もやや弱い。カマド下部は深く掘り込まれ，ローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。当初から深く掘り込まれたことと，使用によって深くなったことの双方が考えられる。

遺物の出土はやや少ないが，竪穴の遺存が悪いためであり，本来はもっと多かったと推測される。平面位置は竪穴全体から出土しているが，カマドからの出土が多い。土師器坏1は土製支脚片の上にかぶせられた状態で出土している。被熱痕跡も強いことから，支脚の一部に転用された土器と考える。

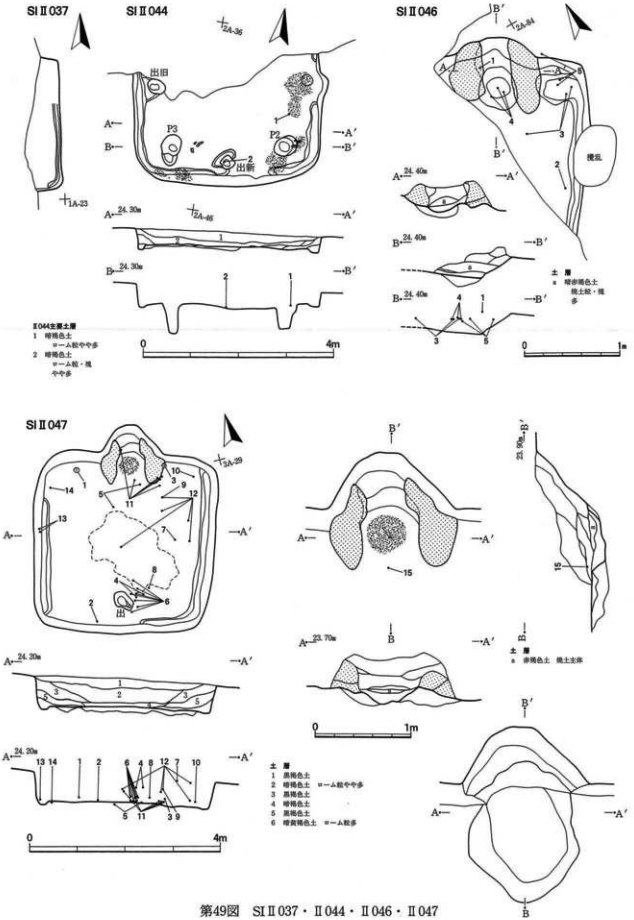
SIⅡ037（第49図，図版13）

調査区北部，1Aグリッドに位置する。東壁の南側から南東隅にかけて遺存するが，その他の3/4以上が破壊されており，やや不明瞭な遺構である。また，掘立柱建物のSBⅡ032と重複しているが，SIⅡ032の柱穴が確認できなかったので，本遺構の方が新しい可能性がある。平面形は方形であるが，規模は不明である。カマド・出入りロピットは攪乱部分にあり，遺存しない。主柱穴の有無は不明である。壁溝は遺存する部分ではほぼ存在し，全周する可能性がある。覆土は暗褐色土で，ローム粒の包含は少ない。

遺物の出土はない。

SIⅡ044（第49図，図版13・14）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。ほぼ北側半分が攪乱により破壊されている。東壁側にカマドの痕跡があるが，構築材が除去されており，古いカマドである。出入りロピットが南壁際中央と西壁際中央の2箇所にあり，南壁側が新，西壁側が旧である。このことからも，遺存しない北壁に新カマドが存在したことは確実で，建て替えられた竪穴住居である。平面形は方形であるが，旧カマド・出入りロピッ



第49図 SⅡ037・Ⅱ044・Ⅱ046・Ⅱ047

トが壁の1/2の位置にあると仮定して，北カマドを上に見た場合，やや縦長となる。主柱穴が2箇所，南東隅際・南西隅際にあるが，北側の2箇所は遺存しない。遺存する主柱穴は深い部分の脇が掘られており，建て替えに際して，柱が抜き取られたものと推測する。床面は暗褐色土とローム塊を混ぜた貼り床で，あまりしっかりしていない。硬化面は見られず，高低差がやや大きい部分がある。覆土は暗褐色土主体で，上層はローム粒をやや多く，下層はローム塊もやや多く含む。下層は焼土・炭化材も部分的に見られる。また，壁際の土層はロームを多く含む。

旧カマドの遺存は痕跡的で，両袖は遺存しない。火床部も焼け込みが弱く，含まれる焼土粒は少ない。

遺物の出土は少なく，散在的な分布である。ほぼ完形の土師器坏1が旧カマド右側下層から正位で出土している。

SIⅡ046（第49図，図版14）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。攪乱により大きく破壊され，遺存部分はカマドを含む1/4程度である。平面形は方形である。主柱穴は見られない。出入り口ピットは，南西壁側にあると考えられるが，遺存しない。壁溝は調査範囲内では存在する。床面はやや凹凸がある。硬化面の把握はできなかった。覆土は暗褐色土である。

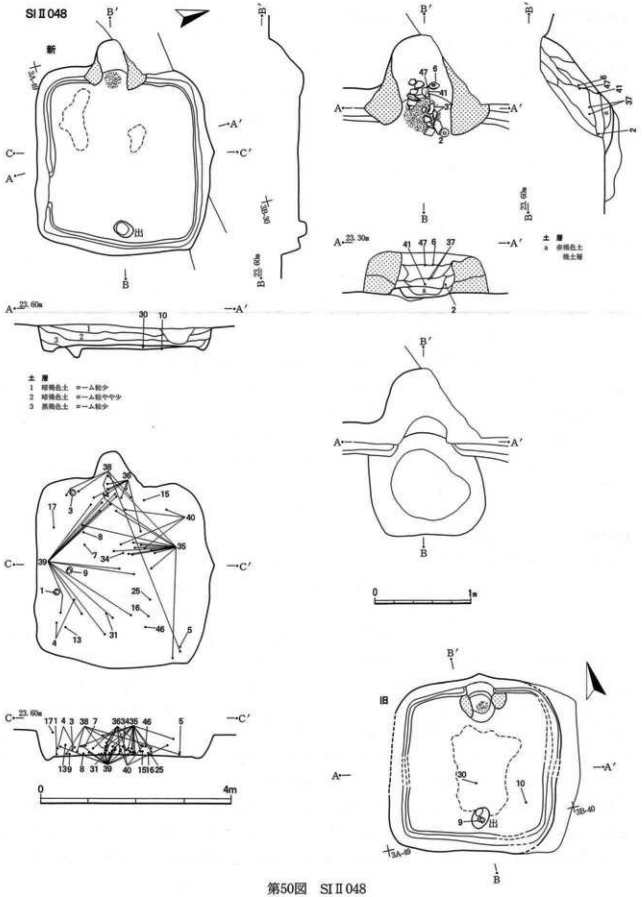
カマドは北東壁右寄りに位置し，右袖の右脇はすぐ東隅である。構築材は山砂主体であるが，右袖基底部はローム塊をやや多く含む。火床部は赤色硬化面が見られない。底面よりも高い位置に焼土を多く含む層があり，火床部はやや高い位置にあったものと考える。カマド下はやや深く掘り込まれており，左袖はローム粒・塊を多く含む暗黄褐色土を埋め戻した土層の上に構築されている。

遺物量は竪穴の遺存が悪いために少ないが，カマド周辺からの出土が目立つ。土師器坏1は左袖上から，若干傾いてはいるが正位で出土した。

SIⅡ047（第49図，図版14）

調査区北部南東寄り，3Aグリッドに位置する。平面形は方形である。4箇所の主柱穴は見られない。出入り口ピットは南壁側中央に位置する。壁溝は東壁から南東隅付近，西壁の大部分にあるが，北壁から北西隅付近，南壁の多くに見られない。床面は中央部がかなり硬化しているが，硬化面はあまり広くない。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体である。中層はややローム粒の包含が多いが，自然堆積と考える。掘形底面は凹凸があり，全体に床面から深い。床面はローム塊を含む暗黄褐色土を埋め戻して形成されている。カマドは北壁中央に位置する。袖部は竪くしまっており，基部が山砂に加えて暗褐色土の含有が多く，その上部は山砂主体の土層である。 カマド内堆積土を見ると，底面から高い位置に焼土主体の土層があり，火床部と考える。その下部は暗褐色土で，焼土の含有が少ない。使用に伴い埋まっていったことと，埋め戻した土層の上を火床面としたことの双方の可能性がある。カマド下部はやや深く掘り込まれており，両袖は暗褐色土・暗黄褐色土で埋め戻された土層の上に構築されている。

遺物は中程度の量で，竪穴全体から出土しているが，カマド周辺と出入り口部がやや多い。出土層位は床面から上層まで及ぶ。土師器坏1・2・3は完形で，1はカマド左側の下層から正位で出土し，3はカマド右袖上の下層から正位で出土した。2は出入りピット近くの南壁際下層から，横位で出土した。



第50図 SI II 048

SIⅡ048（第50図，図版15）

調査区北部南東寄り，3Aグリッドに位置する。北側でSDⅡ038と重複し，上部を切られている。建て替えにより，新旧のカマド・出入りロピットがある。遺存の良い西カマドが新しく，悪い北カマドが古い。平面形は西カマドを上にした場合，やや縦長の方形である。建て替えに際して，南壁側に拡張されている。西カマドに対面する東壁際中央のピットが新しい出入りロピット，北カマドに対面する南壁際中央のピットが古い出入りロピットである。主柱穴は見られない。壁溝は新旧ともほぼ全周する。拡張された南壁側は，古い壁溝の上が床面であり，壁溝が作り直されている。他の三壁はほぼ重なっている。建て替え後の床面は，建て替え前の床面よりも高い位置に作られている。暗褐色土とローム塊による貼床で，硬化面はカマド前の一部に見られる程度である。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。建て替え前の床面の硬化面は，出入りロピットから旧カマド前までの中央部に見られる。掘形底面は旧床面から浅く，旧床面はローム塊を多く含む暗褐色土をならした程度で形成されている。

新カマドは西壁中央に位置する。SDⅡ038により，カマド右側がこわされている。両袖下部は暗褐色土主体で，ローム塊をやや多く含む。上部は山砂主体である。火床部は明瞭で，焼土が厚く堆積している。焼土層上面はほぼ床面と同じ高さである。火床部から前方にかけてやや広く，深く掘り込まれている。焼土層の下は暗褐色土主体の土層，その下は焼けたローム塊を含む暗黄褐色土である。灰のかき出しだけではなく，当初から掘り込まれ，ある程度埋め戻された土層と考える。

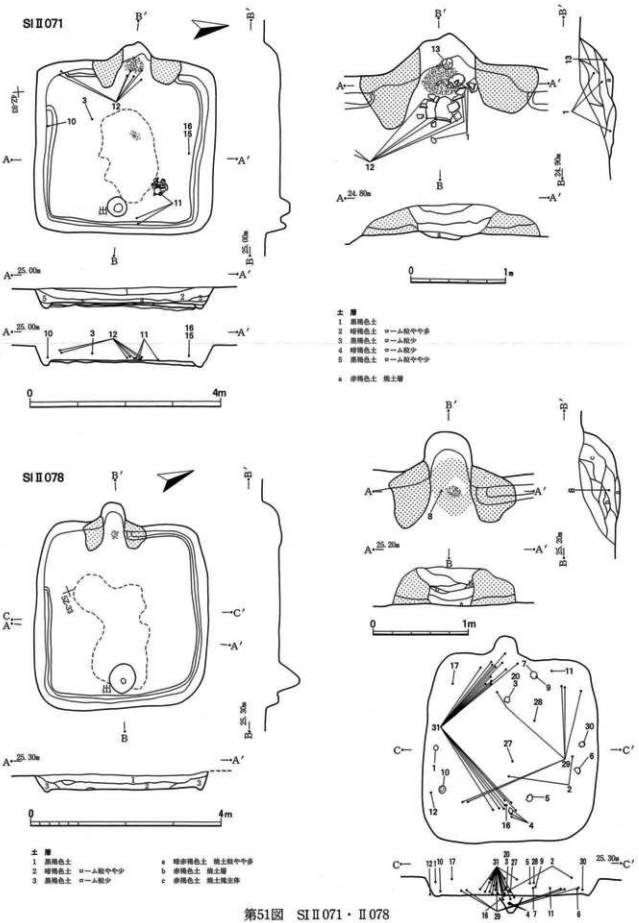
旧カマドは北壁中央に位置する。両袖部の構築材が建て替え後の床面上に少量遺存している。また，両袖間には焼土層が堆積し，その下部にはローム層が焼け込んだ火床面も見られた。

遺物の出土は多い。北壁際と東壁際がやや希薄である以外は，全体的に出土している。また，カマド内およびその周辺から出土する遺物が多い。出土層位は，中層以下のものが多く，上層から出土するものは少ない。個々の出土状況では，土師器坏９が旧出入りロピット上部の下層から正位で出土している。「鬼」の線刻と焼成後の底部穿孔，口縁・体部の打ち欠きをあわせもつ土器であり，意図的に置かれたものと考える。孔を境に２片に割れて出土したが，これは意図的なものか，土圧によるものか判別が難しい。カマド内及び周辺では，土師器坏６がカマド内から正斜位で出土し，土師器坏２はカマド内右前の床面かはやや傾いた正位で出土した。また，土師器坏３がカマド左側，南西隅近くの下層から倒位で出土した。

SIⅡ071（第51図，図版16）

調査区南部北寄り，4Zグリッドに位置する。平面形は方形である。４箇所の主柱穴は見られない。出入りロピットは東壁際中央に位置する。壁溝は南西隅で途切れるが，その他は巡る。新旧の床面があり，新しい床面は古い床面の数cm上に作られている。その間の土層は山砂混じりの暗褐色土で，堅くしまっている。この土層を除去すると，中央部を中心に硬化範囲があらわれ，古い床面が存在することがわかった。硬化面内の西寄りに小さな焼土範囲が見られる。カマドと出入り口位置の変更はないが，上屋は建て替えられた可能性がある。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体であり，自然堆積と考える。掘形底面は旧床面からそれほど深くなく，若干の凹凸がある。ローム塊を多く含む暗黄褐色土を埋め戻して，旧床面が形成されている。

カマドは西壁中央やや北寄りに位置する。山砂が前方に流れており，あまり遺存が良くない。両袖の基部はローム粒を含む暗褐色土で，山砂の含有は少ない。その上部は山砂を主体とする。火床部上には軟質



第51図 SI II 071・II 078

な焼土が堆積し，奥に土製支脚（13）が遺存している。

遺物の出土は，密度が高くないが，竪穴全体から出土している。土師器坏１はカマド内から出土し，土師器甕12もカマド内とカマドに近い南西隅から出土している。土師器甕11は中央と北東隅の中間の下層から比較的まとまった状態で出土した。

SIⅡ078（第51図，図版16・17）

調査区南部中央，5Zグリッドに位置する。平面形はやや縦長の方形である。４箇所の主柱穴は見られない。出入りロピットは南東壁際中央に位置する。壁溝は西隅周辺で途切れるが，その他は巡る。床面の硬化面は，出入りロピットから中央部にかけて見られる。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体である。床面上の一部に焼土を含む土層があり，中層では山砂を含む土層がある。

カマドは北西壁中央やや左（南）寄りに位置する。両袖基部は黒褐色土主体であり，山砂は少ない。その上部は山砂主体であり，非常に堅くしまっている。内壁は赤褐色化している。火床部は底面にあるが，焼け込みは弱い。カマド内中層に，焼土がリング状に堆積しており，天井部が崩落した痕跡と考える。中央の焼土が薄い部分は，器掛け口の痕跡と理解する。

遺物の出土量は多く，竪穴全体から出土している。出土層位も床面から上層にわたる。遺存の良いものも多い。坏皿類では，土師器坏４が出入りロピット内中位から，倒位であるがかなり横向きで出土した。土師器皿８はカマド内下層から出土した。正位か倒位か不明である。完形の土師器皿７はカマド右袖上から正位で出土した。土師器皿９は７の脇，カマド右袖からわずかに離れた位置から正位で出土した。出土層位は中層で，７とほぼ同レベルである。土師器坏３はカマドのかなり前方の中層から出土した。正位か倒位か判然としない。土師器高台付皿10は南西壁側南隅寄りの下層から倒位で出土した。その他，土師器坏１・５・６も遺存の良い土器であるが，出土が正位か倒位か判然としない。土師器甕31は，カマド内・周辺と出入りロピット周辺の２箇所から集中的に出土している。出土層位は，床面から上層におよぶ。土師器坏３～６は良く似ており，セットの土器群と考えるが，出土層位にはかなりの幅がある。しかし，覆土は暗・黒褐色土主体であり，積極的に埋め戻されているといえる状況ではない。

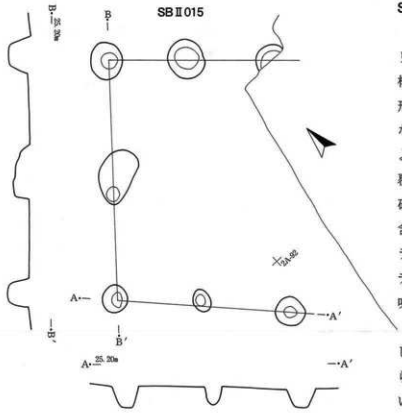
２．掘立柱建物（第12表）

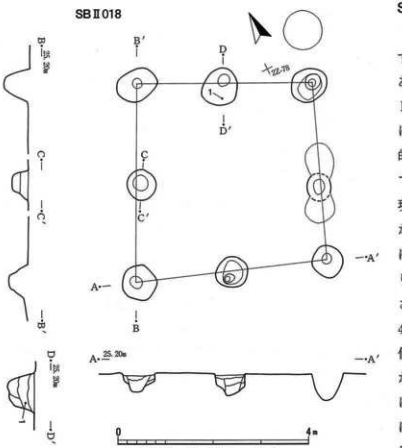
奈良・平安時代の掘立柱建物は調査区内では19棟見つかった。規模や主軸方位等の計測値については観察表に記載したので，以下の記述では省略する。

SBⅡ015（第52図）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。桁行２間以上×梁行２間の側柱構造の建物である。桁行方向はほぼ北西一南東方向である。南東側が攪乱により破壊されている。北側の柱穴は縄文時代の土坑であるSKⅡ022を切っている。隅の柱穴は中間の柱穴よりも深い。柱痕は不明である。覆土は基本的に２層で，上層は暗褐色土，下層はテフラ・ローム粒を含む暗黄褐色土である。

遺物の出土量は少なく，図示したものはない。





第52図　SBⅡ015・Ⅱ018

SBⅡ018（第52図，図版17）

調査区北部中央やや西寄り，2Zグリッドに位置する。2間×2間の側柱構造の建物である。プランは歪んだ方形で，桁行・梁行とも各辺の長さが異なる。四隅の柱穴の深さは中間の柱穴よりも平均でやや深いが，大差はない。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体で，山砂・焼土粒を含む。上層は山砂を多く含む傾向がある。底面・壁際はテフラ・ローム粒を含む（黒）褐色土で，テフラ・ローム粒が少ない場合は黒色味が強い。

遺物は性格不明の銅製品1点を図示した。北東辺中央の柱穴の覆土上層から出土した。その他には図示していないが，若干の土器片が出土した。

SBⅡ029（第53図，図版17）

調査区北部西端，1Zグリッドに位置する。1間×2間の側柱構造の建物である。縄文時代の竪穴状遺構であるSIⅡ026・SIⅡ027と重複し，それらの上に建てられている。プランはやや台形的な方形で，桁行方向の長さが異なっている。四隅の柱穴と中間の2穴とで，現状では規模の格差が見られない。しかし，中間の2穴のうち，西側のものはSIⅡ026・SIⅡ027の影響を受け，掘りすぎた可能性がある。この柱穴の深さを除外すると，柱穴の深さは18cm～42cm，中間柱穴の深さは1箇所だけの値で，24cmである。中間の柱穴の規模が本来は小さいものならば，桁行方向にも存在していたかもしれない。柱痕は不明である。覆土はローム粒を含む黒褐色土で，全体にしまりを欠いてい

る。2層に分かれ，大きな差はないが，下層は上層よりもローム粒を多く含む。

遺物の出土量は少ない。体部外面に墨書のある土師器坏小片1点を図示した。北西隅の柱穴からの出土である。

SBⅡ030（第53図，図版17）

調査区北部西寄り，1Zグリッドに位置する。東側が攪乱で破壊されており，西側の柱穴列のみの遺存である。2間×間数不明の側柱構造の建物である。西辺を梁行方向としたが，桁行方向の可能性もある。隅の2穴は中間の柱穴の2倍及び2倍弱の深さである。柱痕は平面では不明瞭であるが，土層断面で把握することができた。また，北西隅と中間の柱穴は，底面に柱のあたりも見られ，その部分を縦線で図示した。柱痕部分の土層はローム粒を含む黒褐色土で，やや軟質である。隅の2穴はややローム粒を多く含む。周囲の埋土はローム粒の多寡により複雑であるが，下層はロームが少なく，上層に多い傾向がうかがえる。掘り上げたとき，脇に積んだ土を上から埋め戻した状況を示している。

出土遺物の中には，完形の鉄鏃が1点ある。北西隅の柱穴の裏込め土下層からの出土であり，建築儀礼に関わるものと考える。その他は少量の土器片で，図示したものはない。

SBⅡ032（第53図，図版17）

調査区北部北側，1Aグリッドに位置する。西側が攪乱で破壊されており，南辺の一部と東辺の遺存である。また，竪穴住居と思われるSIⅡ037と重複するが，確認面でSBⅡ032の柱穴を確認できなかったので，本遺構の方が古い可能性がある。2間（以上？）×2間の側柱構造の建物である。東辺を梁行方向としたが，桁行方向の可能性もある。隅の2穴は中間の柱穴よりもやや深い。柱痕は平面では不明瞭であるが，北東隅と東辺中央の柱穴については，土層断面で把握することができた。柱痕部分の土層はローム粒をわずかしか含まない暗褐色土で，やや軟質である。周囲の土層はローム粒を多く含む土層もあるが，あまり多く含まない土層の方が多い。個別に見ると，南東隅の柱穴は最下層にローム塊の含有が多く，北東隅の柱穴は上層にローム粒が多い。東辺中央の柱穴は概して，ロームの含有が少ない。

遺物の出土量は少なく，図示したものはない。

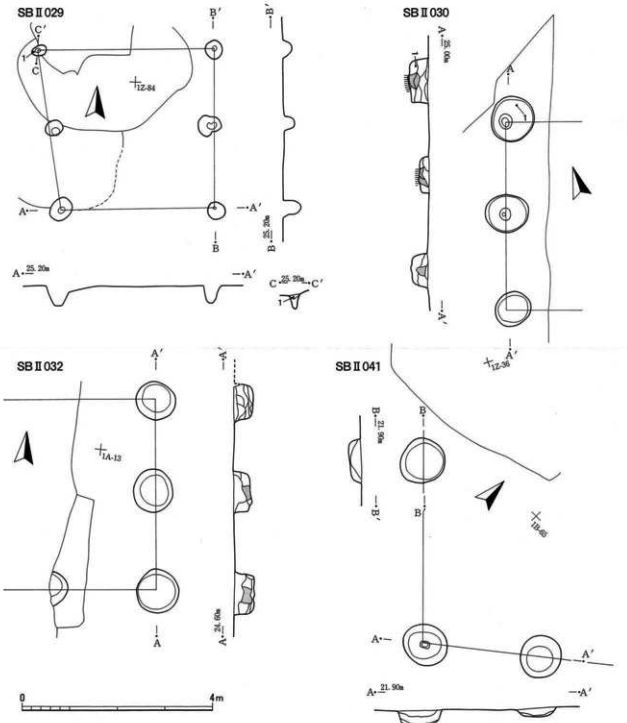
SBⅡ041（第53図，図版18）

調査区北部東端，1Bグリッドに位置する。1間以上×1間以上の側柱構造の建物である。北側に攪乱があり，東側もすぐに調査区外となるため，建物のコーナー部分の調査にとどまり，全体を把握できていない。浅い谷部に位置し，確認面はソフトローム層よりも高いⅡc層上面である。南西辺を桁行，南東辺を梁行としたが，逆の可能性もある。調査した3箇所の柱穴のうち，南隅の柱穴は他の2穴よりも深い。柱痕は不明であるが，南隅の柱穴は中央に窪みがあり，その部分に柱が立っていた可能性がある。覆土は黒褐色土・暗褐色土主体で，下層は若干のローム粒を含む。

遺物の出土量は少なく，図示したものはない。

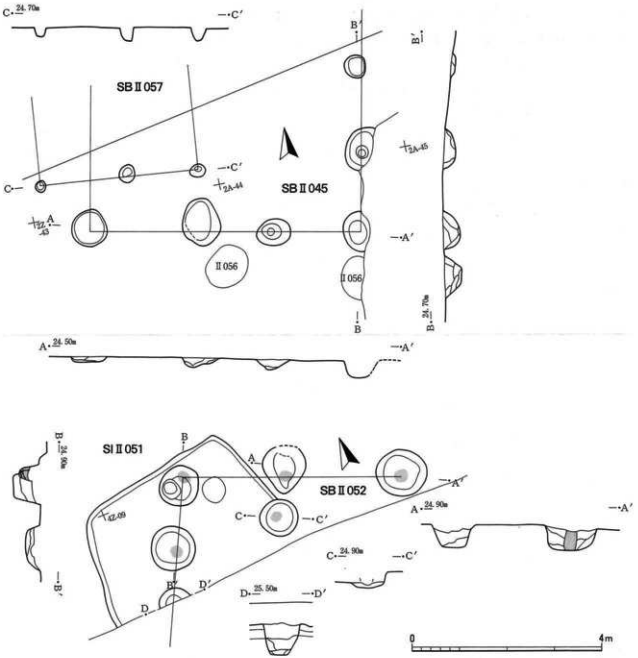
SBⅡ045（第54図，図版18）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。2間以上×3間の側柱構造の建物である。建物の攪乱によ



第53図　SBⅡ029・Ⅱ030・Ⅱ032・Ⅱ041

り建物の北側が破壊され，南東側も一部破壊されている。遺構の遺存は東辺の一部と南辺にとどまる。東辺を桁行，南辺を梁行としたが，逆の可能性もある。南東隅の柱穴はほかよりも深いが，南西隅の柱穴は浅く，ほかの柱穴の深さの範囲に収まる。柱痕は不明である。覆土は暗褐色土・黒褐色土で，ローム粒・塊の含有量により分層される。傾向として底面・壁際はロームが多く，上層は少ない。中層は黒色味がやや強い。遺物の出土量は少なく，図示したものはない。



第54図　SBⅡ045・Ⅱ052・Ⅱ057，SⅡ051

SBⅡ052（第54図，図版18）

調査区北部南端，4A-00グリッド周辺に位置する。南側が調査区外であり，調査したのは，建物北側の一部分である。西側で竪穴状遺構SⅡ051と重複するが，新旧関係は不明である。北西辺が桁行，北東辺が梁行としたが，逆もあり得る。ただし，前者の可能性の方が高いと考える。北西辺は南側に延びることが確実である。北東辺も延びる可能性はあるが，２間のままでも良いと思う。建物のバランスを考慮し，桁行３間（以上？）×梁行２間（？）とする。建物内にも柱穴があり，総柱建物の疑いもあるが，北東辺中央の柱穴と近すぎることから，別の掘立柱建物の柱穴と理解する。確実には断定しがたいが，本遺構は側柱構造の掘立柱建物と考える。北隅の柱穴はその両隣りの柱穴よりも深く，特に南側の柱穴との差は大

きい。もっとも東側の柱穴も，柱痕の把握が確実ならば，柱痕部分はむしろ北隅よりもやや深く，隅の柱穴の可能性がある。柱痕は，調査区外にかかるもっとも南の柱穴を除いて見られる。柱痕部分の土層は黒褐色土で，一部を除いてローム粒の含有は少ない。また，軟質であるが，下部はややしまっている。周囲の埋土はローム粒・塊を含む暗黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土である。部分的な違いはあるが，傾向としては下層の方が黒色味が強い。

遺物の出土量は少なく，図示したものはない。

SBⅡ053（第55図，図版18）

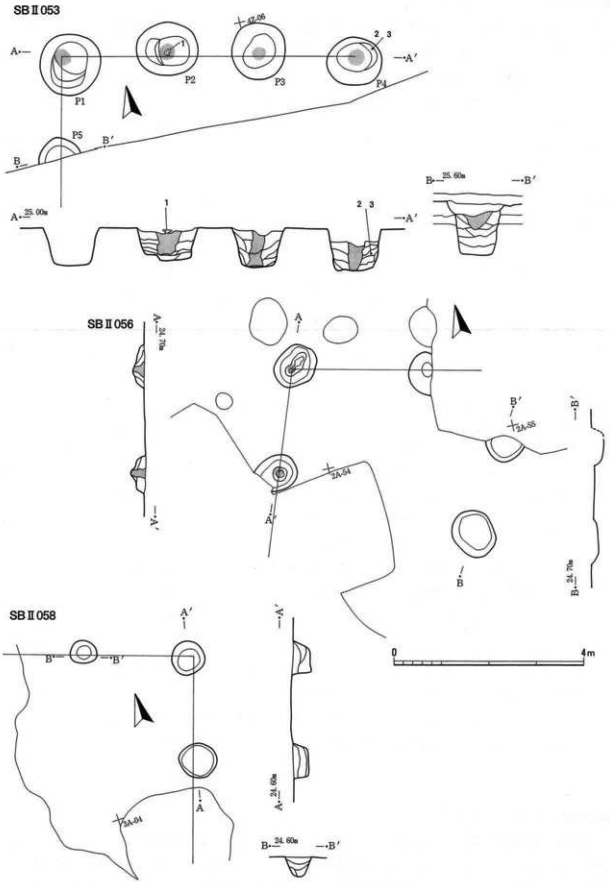
調査区北部南端，4Z-05グリッド周辺に位置する。南側が調査区外であり，調査したのは，建物の北側部分である。北辺が桁行，西辺が梁行方向と考える。東辺は北東隅の柱穴から続く柱穴が調査区外であるため不明瞭であるが，北辺東側の柱穴（P4）を北東隅の柱穴と考える。その理由として，P4がもっとも深い柱穴であること，西側に位置するSBⅡ066など周囲の掘立柱建物に近似した建物と想定されること，の２点をあげる。本遺構については，周囲の状況と建物のバランスから桁行３間×梁行２間（？）の側柱構造の建物と想定する。全体に，柱穴の規模は大きく，深さもかなりある。各柱穴の深さに大きな格差はないが，P4がもっとも深く，北辺で西から２番目のP2がもっとも浅い。柱痕はすべての柱穴に見られるが，西辺のP5は調査区外にかかるので，平面的な把握ができなかった。柱痕部の土層は黒褐色土で，ローム粒の含有が少ない。柱痕の周囲の埋土は，黒褐色土とローム粒・塊の混じった土層である。ロームは，傾向として下層に少なく，上層に多い。上層はローム塊も目立つ。色調もおおむね下部の方が暗く，一部で黒色土の堆積が卓越する。上部は黄色味がやや強い。

図示した遺物は土師器坏３点で，そのうち，１はP2柱痕部上で，確認面近くの高さから正位で出土した。口縁・体部の一部，口縁部部周で1/2弱が欠損するが，意図的に打ち欠きされたものである。他に欠損はない。また，底部外面には墨書がある。柱が抜かれた後，埋め戻され，柱が立っていた位置の柱穴上部に据え置かれたものであり，建物の廃棄儀礼に関わる土器と考える。２・３はP4埋土中層の同じ所から出土した。２は小片，３は45%の遺存で，１と同じ墨書文字がある。３は建築儀礼に関わる可能性もあると思うが，断定しがたい。その他に図示した遺物はないが，土器片が少量出土した。

SBⅡ056（第55図，図版18）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。側柱構造の掘立柱建物の一部である。調査では５箇所の柱穴を一つの掘立柱建物としているが，長方形プランからいちじるしく歪むため，ここでは，北西側の３箇所だけをSBⅡ056と扱うことにする。南東側の２箇所の柱穴は，SBⅡ056周辺の柱穴とする。これらの柱穴群の北東と南西及び南側には攪乱があり，SBⅡ045も近くに所在するなど，様相の把握が難しい。現状では，SBⅡ056については，北西コーナー部の１間×１間のみ確認できる建物である。北辺・西辺のどちらが桁行でどちらが梁行か不明である。柱穴は周辺のものを含めて浅く，大きな格差はない。柱痕は北西隅の柱穴と，西辺中間の柱穴に見られる。柱痕部分の土層は，ローム粒・塊をやや多く含む黒褐色土である。周囲の埋土はローム粒・塊をやや多く含む暗褐色土・暗黄褐色土である。

遺物の出土量は少なく，図示したものはない。



第55図　SB Ⅱ053・Ⅱ056・Ⅱ058

SBⅡ057（第54図，図版18）

調査区北部中央，2Aグリッドに位置する。側柱構造の掘立柱建物の一部の可能性があるが，南辺のみの遺存であり，断定できない。柵列の一部である可能性も考えることができるが，ここでは掘立柱建物として記述する。遺構は，南辺以外は攪乱により破壊されている。南辺は現状で２間であるが，柱穴の規模が小さいため，延びる可能性もある。桁行か梁行か不明である。柱穴の深さに格差はない。覆土は暗褐色土・黒褐色土で，西隅の柱穴はローム粒を多く含むが，他の２穴にはあまり多く含まれない。

遺物の出土はなかった。

SBⅡ058（第55図，図版18）

調査区北部中央，2A-94グリッドに位置する。西側及び南側が攪乱やSDⅡ011によって破壊されており，北東コーナー部１間×１間だけが遺存する側柱構造の掘立柱建物である。北辺・東辺のどちらが桁行でどちらが梁行か不明である。３箇所の柱穴の規模について見ると，平面的には北辺中間の柱穴の規模が小さいが，深さは大きな差がない。柱痕は不明である。覆土は暗褐色土・黒褐色土主体である。底面際でローム粒・塊を多く含む層が一部にあるが，ロームは概して少ない。色調は下層の方が黒色味が強い。

遺物は少量の土器片が出土し，そのうち，墨書のある土師器坏２点を図示した。ともに北辺中間の柱穴から出土したものである。

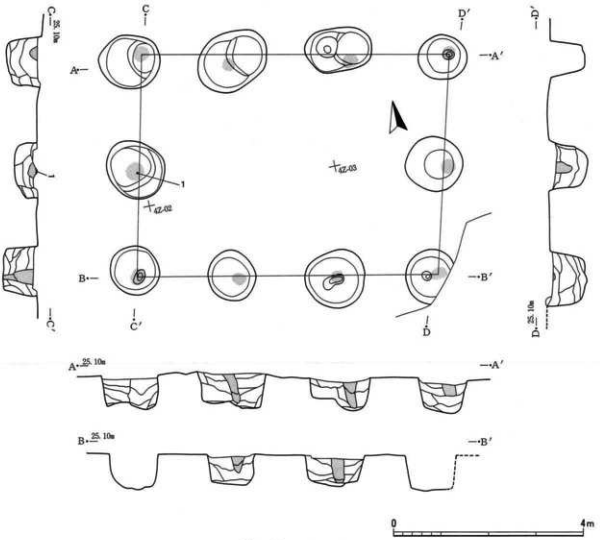
SBⅡ066（第56図，図版19）

調査区北部南端・南部北端の3Z-92グリッド周辺に位置する。桁行３間×梁行２間の側柱構造の建物である。柱穴の平面規模はいずれも大きく，柱痕もすべての柱穴で見つかった。柱穴の深さは，梁行西辺中間のP10が浅い他は，大差がない。詳細に見ると，南辺中央の柱穴P7・P8は両隅のP6・P9よりもわずかに浅い。しかし，P7・P8は北西隅のP1及び北辺中央のP2・P3と，ほぼ同程度の深さである。また，東辺中央のP5は，P1を除く三隅の柱穴と同程度の深さである。柱痕部分の土層は黒褐色土・暗黒褐色土で，概してローム粒が少ない。柱痕周囲の土層は黒褐色土・暗褐色土が多く，部分的に暗黄褐色土となる。ローム粒・塊の含有を見ると，P1・P2・P3は下部に少なく，上部に多い。周囲に掘り上げた土を，順次埋め戻した様相がうかがえる。他の柱穴も埋め戻されているが，ローム粒・塊の量が上部だけに多い傾向はうかがえない。

図示した遺物は土師器坏３点で，そのうち，１はP10の柱痕部上で，確認面から倒位で出土した。底部主体の破片で，内面に１条の線刻が見られる。欠損部は打ち欠きされていると考えるが，出土状況を見なければ断定しがたい破片である。Ⅱ053－１同様，建物の廃棄儀礼に関わる土器と考える。ただし，正位と倒位の違いがある。２・３は北東隅の柱穴P4から出土した。その他には図示していないが，土器片が少量出土した。

SBⅡ067（第57図，図版19）

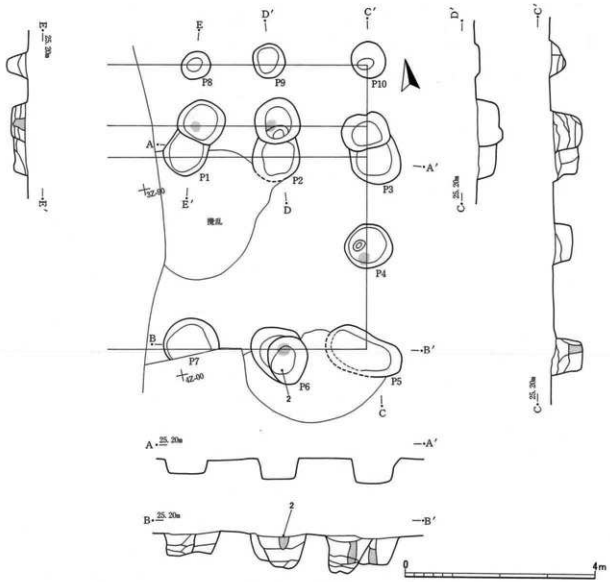
調査区北部南端・南部北端の3Z-90グリッド周辺に位置する。西側が調査区外であり，調査したのは，建物の東側部分である。北辺に庇の付く側柱構造の建物である。北辺の一部と南辺が攪乱と風倒木の影響を受け，欠損する部分がある。全体の規格は梁行が３間であるが，桁行については，建物のバランス及び



第56図　SBⅡ066

柱穴の深さから，３間（以上？）と考える。身舎部分の梁行は２間である。本遺構は建て替えられており，北辺は柱位置を南側から北側にずらしている。また，南辺も北辺ほどではないが，柱位置を替えている。移動幅を２箇所の柱痕が遺存する南東隅柱穴（P5）で見ると，およそ40cmである。北辺については，柱痕が中間柱穴（P1・P2）の新しい方に遺存するが，建て替え前の柱穴には見られない。そのため，移動幅の数値は確定しないが，60cm前後と推測する。柱痕が平面または土層断面で見られるのは，上記以外では，東辺中間のP4・南辺中間のP6である。なお，柱痕は平面・断面ともそれほど明瞭なものではない。柱穴の深さについては，身舎部分隅のP3・P5が深く，身舎部分中間の柱穴はそれらよりも浅い。底部分の柱穴は平面規模が小さく，深さも中間のP9が極端に浅いが，同じく中間のP8は身舎部分中間の柱穴と同程度かやや深い。北東隅のP10は身舎部分中間の柱穴よりも浅いが同程度である。柱痕部分の土層は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。柱痕周囲の土層は黒褐色土・暗褐色土を主体とし，色調やロームの多寡で細分される。ロームの含有は下層にやや多く，上層にやや少ない傾向が一部にうかがえるが，全体的には不明瞭である。P3の土層断面では，古い柱穴埋土を切る新しい柱穴の壁があまり明瞭でない。

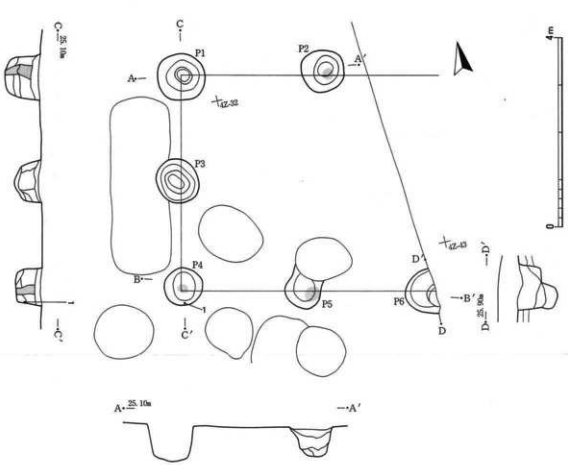
図示した遺物は土師器坏１点（1），袋状鉄斧１点（2）である。２は完形で，P6の確認面近くから出土した。１は墨書のある底部片で，P4から出土した。その他には図示していないが，土器片が少量出土した。



第57図　SBⅡ067

SBⅡ069（第58図，図版19）

調査区南部北寄りの4Zグリッドに位置する。東側が調査区外であり，調査したのは，建物の西側部分である。桁行２間以上×梁行２間の側柱構造の建物である。南側はSBⅡ070Aと重複し，南辺中間の柱穴（P5）が切られている。また，SKⅡ068が西辺の外側に添うような状況で存在し，西辺中間の柱穴（P3）が切られている。柱穴の深さは，北西隅の柱穴（P1）が他より深いが，南西隅の柱穴（P4）は中間の柱穴と同程度である。南辺東側の柱穴（P6）は調査区外にかかるため，やや不明瞭であるが，深さは中間の柱穴と同程度である。P4の深さと同程度であるので，隅の柱穴の可能性もあるが，周辺の掘立柱建物の様相から，本遺構も３間×２間と想定しており，P6については中間の柱穴として扱う。柱痕はP3とP6を除く４箇所の柱穴で見られる。P6も調査区外にかからなければ確認できた可能性がある。柱痕部分の土層は黒褐色土で，ローム粒の含有は少ない。柱痕周囲の土層は暗褐色土・黒褐色土を主体とし，一部が暗黄褐色土である。ローム粒・塊の含有は，各柱穴によって下層に多い場合や，上・中層に多い場合，片側に多い場合などがあり，一定の傾向は見られない。ロームの含有の多い柱穴もあるが，やや少ない柱穴

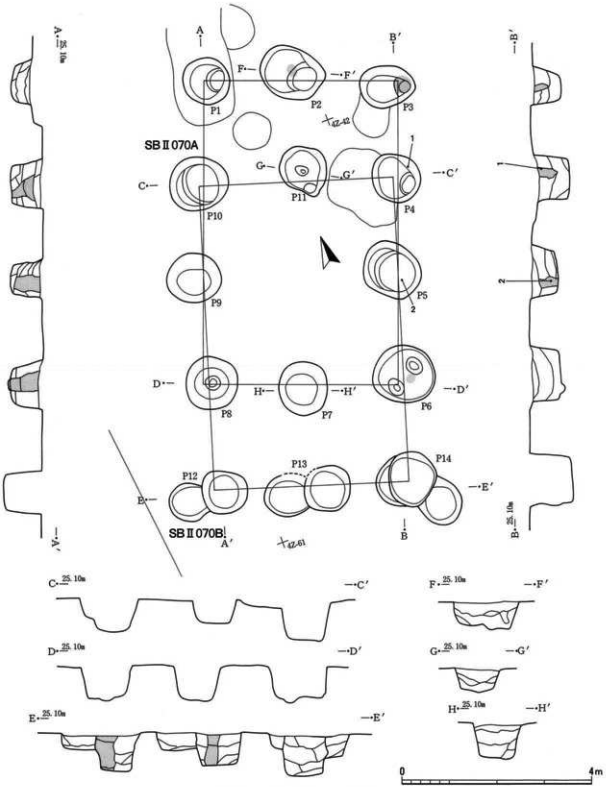


第58図　SBⅡ069

の方が多い。　図示した遺物は土師器坏１点で，P4埋土下層から出土した。その他，土器片が少量出土したが，図示したものはない。

SBⅡ070A・SBⅡ070B（第59図，図版19）

調査区南部北寄りの4Zグリッドに位置する。桁行３間×梁行２間の側柱構造の建物が２棟重複する遺構であるが，同規格・同規模の建物を建て替えた遺構であり，北側の建物をSBⅡ070A，南側の建物をSBⅡ070Bとする（以下，A，Bとする）。AはSBⅡ069，SKⅡ068と重複しているが，遺構の状況から，SBⅡ069がもっとも古く，Ⅱ068がもっとも新しい。なお，P4周辺に風倒木痕がある。AとBの新旧関係は不明である。A・Bの建物位置は，多く重なりながら南北方向に２m程度，桁行で１間ずれている。なお，細部を見ると，南側の建物はP12・P13・P14の柱穴の様相から，ほぼ同じ位置で２回または３回建て替えられたことがわかる。南北の建物の建て替えに際しては，多くの柱穴をそのまま再使用している。Aの柱



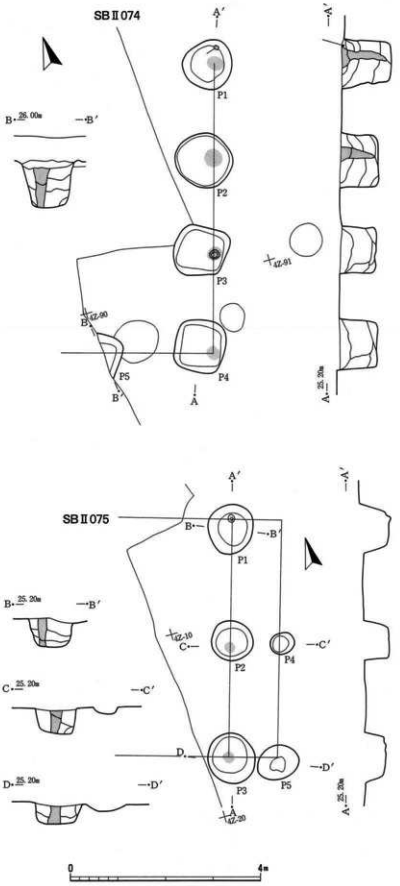
第59図　SBⅡ070A・Ⅱ070B

穴はP1～P10，Bの柱穴はP10から右回りにP11・P4・P5・P6・P14・P13・P12・P8・P9である。P4～P6・P8～P10の柱穴がどちらにも使われた柱穴である。その詳細を見ると，P4・P10はA中間・B隅の柱穴，P5・P9は中間の柱穴，P6・P8はA隅・B中間の柱穴である。

柱穴の平面規模はいずれも大きく，深さは柱穴によって差があるが，平均するとかなりの深さがある。

深さについてA・Bごとに見ていくと，Aの各柱穴の深さは，ほとんど差がない。その理由の一つは，Aの中間柱穴がB隅の柱穴であるという点にある。一方，Bの場合は，隅と中間で格差がある。その状況は西辺を除く三辺に顕著である。柱痕については，平面で確認できるものは少ないが，土層断面で確認できるものを加えると，半数以上の柱穴で見られる。柱痕部分の土層は，黒褐色土・暗褐色土を主体とし，ローム粒・塊の含有は微量・少量である。柱痕周囲の埋土は，黒褐色土・暗褐色土を主として，所々でロームを多く含む暗黄褐色土となる。ロームの含有は全体として，下層の方が少なく，上層に多い傾向がうかがえる。ただし，P2は全体にロームの含有が多く，P12・P13・P14は切られている側の土層にロームが多い。

図示した遺物は土師器坏２点，性格不明の鉄製品２点である。土師器坏１はP4上層から出土し，土師器坏２はP5柱痕部中層から出土した。ともに1/2弱の遺存であり，正位・倒位等の状況は不明である。建物の儀礼に関わる遺物であると積極的にいえる遺物ではない。鉄製品３・４もP4から出土した。同一遺物番号であるので，同一製品の可能性がある。その他には図示していないが，土器片が少量出土した。



第60図　SBⅡ074・Ⅱ075

SBⅡ074（第60図，図版19）

調査区南部やや北寄り，4Zグリッドに位置する。西側が調査区外であり，調査したのは，建物の東側部分である。桁行３間×梁行２間（以上？）の側柱構造の建物と想定する。梁行については南辺の１間分しか調査できなかったが，建物のバランスと周囲の掘立柱建物の様相から前記のように推測する。全体に，柱穴の規模は大きく，深さもかなりある。南側３箇所の柱穴は，平面形が方形である。南辺中間の柱穴（P5）と重複するピットは柱穴らしい掘形であるが，本遺構とは別の遺構である。P5との新旧関係は不明である。その他，近くに２基のピットがある。柱穴の深さは，北東隅（P1）が他よりも深いが，南東隅（P4）は中間の柱穴とほぼ同等の深さである。柱痕はすべての柱穴に見られる。P5は調査区外に多くかかるため，平面での確認はできなかったが，土層断面で確認することができた。柱痕部の土層は黒褐色土で，P1がやや多くローム粒を含むが，その他は少ない。P1・P2の柱痕部土層及びP3の埋土は少量の焼土粒・炭化物粒を含む。柱痕の周囲の埋土は，暗褐色土・暗黄褐色土・黒褐色土で，全体にローム粒・塊の含有が多い。特にP1は黄色味が強い。

図示した遺物は土師器坏１点で，P1の確認面から出土した。底部周辺が遺存する破片で，正位か倒位か判然としない。その他には図示していないが，土器片が少量出土した。

SBⅡ075（第60図，図版19）

調査区南部北側，4Zグリッドに位置する。西側が調査区外であり，調査したのは，建物の東辺梁行のみである。梁行は２間であるが，桁行の間数が不明である。側柱構造の建物であるが，中間の柱穴（P2）と南東隅柱穴（P3）の東側にピット（P4・P5）があり，東辺に庇が付く可能性が高い。北東隅柱穴（P1）の東側からは，ピットが見つかっていないが，庇部分の柱穴が浅いためと考える。柱穴の深さは，隅の柱穴と中間の柱穴で格差がない。柱痕は，すべての柱穴で見られる。ただし，P1は土層断面に見られる柱痕よりも，底面の凹みの方が柱筋の通りが良いため，平面図上には図示していない。柱痕部の土層は黒褐色土・暗褐色土で，ローム粒の含有は微量・少量である。柱痕の周囲の埋土は，上から黒褐色土，暗褐色土，暗黄褐色土の順が基本である。ロームの含有は，P2底面際の黒褐色土が少ないほかは，全体に多く，柱痕部分と対照的である。P4・P5の土層は暗褐色土・黒褐色土で，ローム粒は少ない。

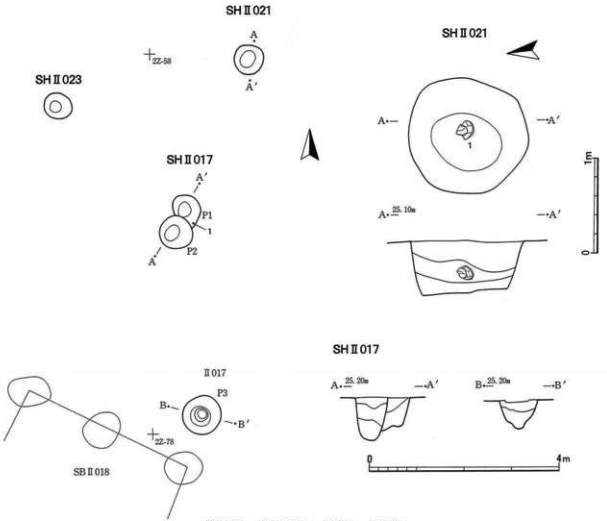
遺物の出土量は少なく，図示したものはない。

３．ピット・ピット群・土坑

掘立柱建物の柱穴となる可能性があるが，組となる柱穴が見当たらないものについて，ピット・ピット群として，本項で記述する。攪乱や調査区外の地域が近いことによる影響を受けているものもある。土坑については，より単独的で，明らかに掘立柱建物でないものがあるが，一部に掘立柱建物の可能性のあるものもあり，厳密な区分ではない。

SHⅡ017・SHⅡ021・SHⅡ023（第61図）

SHⅡ017・SHⅡ021・SHⅡ023は，調査区北部中央やや西寄りにある５基のピット群である。それぞれに関連性があるか不明であるが，位置的に近いことからここでまとめて記述する。５基のうち，南側の３基がSHⅡ0017，北側の１基が021，北西の１基がSHⅡ0023として調査されている。ピット群の北方及び



第61図　SHⅡ017・Ⅱ021・Ⅱ023

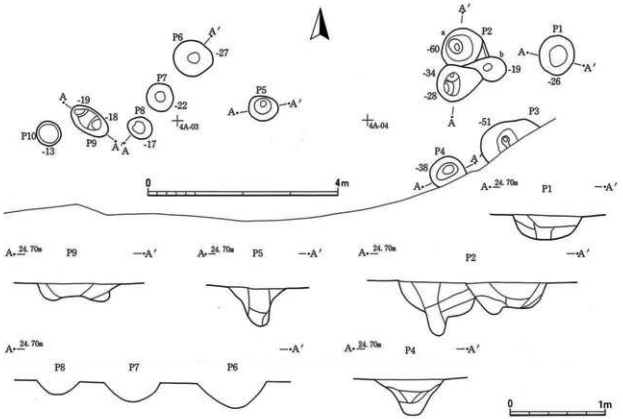
西方には攪乱がある。また，すぐ南にはSBⅡ018がある。さらに，ピット群付近は縄文時代の可能性のあるピット群も所在するので，５基のピット群も縄文時代に帰属する可能性がある。ただし，SHⅡ017とSHⅡ021からは，図示できるくらいの大きさの奈良・平安時代遺物が出土しており，特にSHⅡ021出土土器は遺存も比較的良い。５基については，より上層で確認したことからも，本項で扱うこととする。

SHⅡ017のP1・P2は重複しており，P2がP1を切っている。規模は，P1が径53cm～66cm，P2が径68cm，深さはP1が36cm，P2が47cmである。P3はSBⅡ018の近くにあり，規模は径80cm，深さは32cmである。覆土は基本的に暗褐色土主体で，下層にローム粒の含有が多い。個別に見ると，P2上層はローム塊の含有が多く，P1上層は焼土塊を含む。P3は下層が上層よりやや明るい程度である。図示した遺物は，P1から出土した土師器坏１点である。なお，出土の高さは不明である。その他，P1・P2から少量の土器片が出土しているが，図示したものはない。

SHⅡ021は径60cm～65cm，深さ29cmである。覆土は３層に分かれ，上層は黒色土混じりの暗褐色土，中層は暗褐色土，下層は褐色土である。図示した遺物は土師器坏１点で，中層から正位（やや斜位か？）で出土した。その他にも少量の土器片が出土しているが，図示したものはない。

SHⅡ023は径44～62cm，深さ24cmである。少量の土器片が出土したが，図示したものはない。

SHⅡ050（第62図，図版19）



第62図　SHⅡ050 P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9

調査区北部南端やや東寄り，4A-03グリッド周辺に位置する。10基程度のピット群について，050として調査したものである。掘立柱建物の一部である可能性があるが，南側が調査区外であるため，不明瞭である。また，すべてのピットで遺物の出土が無かったため，ほかの時代の遺構である可能性もある。ピット群の位置関係を見ると，東にまとまる一群（P1～P4）と，西にまとまる一群（P5～P10）の二群があり，別の遺構に分かれる可能性が高い。特に東側のピット群は，調査区外の様相次第で，掘立柱建物となる可能性がある。西側のピット群は，P6・P7・P8が直線に並び，P5と直角的となる。P6・P7・P8とP9の組み合わせも，やや鈍角であるが，掘立柱建物の一部の可能性がある。いずれにしても，コーナー部分しか遺存していないことになる。P6～P10はピット間の距離が短く，建物の柱穴と認めることは自体が難しい。

各ピットの平面形は円形に近いものが多いが，P9は２つのピットが連接したような状況で楕円形である。長径88cm，短径48cmである。P2は三つのピットが重複した状態（ａ・ｂ・ｃ）であり，建物の柱穴であれば，建て替えまたは柱の抜き取りがあったと考えることができる。P3は大型のピットで，最長径が1.3mであるが，調査区外にかかるため，平面形が不明瞭である。円形に近いピットの規模は，小さいもので径44cm～54cm（P8），大きいもので76cm～84cm（P6，P1もほぼ同規模）である。P2も同程度からやや小さいピットの複合である。各ピットの深さについては図面に記載した。

P1の覆土はローム粒・塊を多く含む暗褐色土・褐色土で，下層はローム塊の含有が多い。P2については，土層断面を見ると，ｃがａを切っている状況である。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土・褐色土で，ａ・ｃとも上層中央はロームが少なく，上層壁際はローム塊が少ない。下層はローム粒・塊とも多い。P4・P6～P9の覆土は全体にローム粒・塊の含有が多い。P5は中央でロームの含有が少なく，壁際で多い。

SKⅡ062・SKⅡ063・SKⅡ064（第63図，図版19・20）

調査区中央やや西寄り，3Z-05グリッドに位置する３基の土坑である。出土遺物を共有することや覆土の様相から，同時に存在した可能性の高い遺構と推測される。以上のことと，接近した位置関係にあることから，掘立柱建物の一部の可能性がある。しかし，遺構の南西側が攪乱によって破壊され，また，攪乱は北側にも広がるため，SKⅡ064の北西側にピットが続くかどうか不明であり，掘立柱建物かどうか判然としない。３基のうち，SKⅡ062とSKⅡ063はやや大きく壊されている。

SKⅡ064の平面形はほぼ円形であり，SKⅡ062・SKⅡ63も円形から楕円形の平面形と考えられる。規模については，SKⅡ062が長径1.48m，深さ41cm，底面径1.05m，SKⅡ063が長径94cm，深さ34cm，底面径62cm，SKⅡ064が径1.05m，深さ28cm，底面径78cmである。底面の高さをみると，SKⅡ063とSKⅡ064はほぼ同じであり，SKⅡ062はSKⅡ063・SKⅡ064よりも15cm～20cm程度深い。３基の土坑が掘立柱建物であるならば，SKⅡ062が隅の柱穴，SKⅡ063・SKⅡ064は中間の柱穴の可能性がある。ただし，掘立柱建物とするには，並びが一直線からずれることが，やや難点である。SKⅡ062の覆土は暗褐色土・黒褐色土主体で，中層にややローム粒が多い。SKⅡ063とSKⅡ064の上層は，焼土を多く含む土層が堆積する。中・下層については，SKⅡ063は暗褐色土，暗黄褐色土の順で，下層にロームが多い。SKⅡ064は暗褐色土主体で，下層に含まれるローム粒は少ない。なお，いずれの土坑も柱痕はみられない。

出土遺物については，同じ須恵器大甕の破片が，各土坑の中・上層を主体として出土している。便宜的にもっとも出土量の多いSKⅡ063の１として報告したが，各土坑がやや埋まった後の窪みに廃棄されたものである。その他，SKⅡ062では，鉄鏃（１）が上層から出土し，SKⅡ064では，須恵器甕片（１）が上層から出土した。図示した以外の遺物は少量で，９世紀代くらいの土器片が各土坑から出土している。

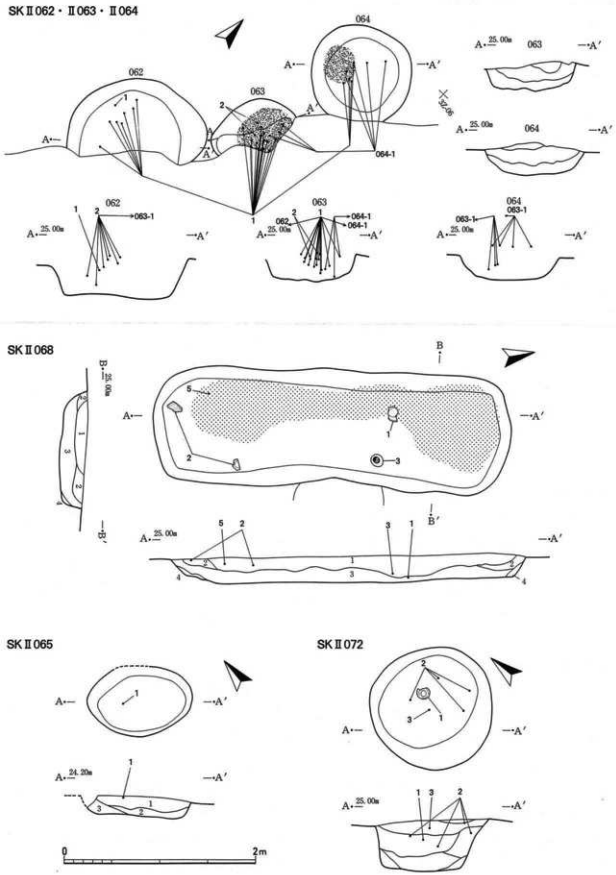
SKⅡ065（第63図）

調査区中央やや西寄り，2A-68グリッドにある土坑である。平面形は楕円形である。遺構の規模は長径1.1m，短径74cm，底面は長径93cm，短径57cm，深さは25cmである。北側の一部が攪乱により壊されているが，底面までは達していない。覆土は３層で，上から１層は焼土粒をやや多く含む暗褐色土，２層はローム粒をやや多く含む暗黄褐色土，３層は少量のローム粒を含む暗褐色土である。出土遺物は土器片20数点で，１層から多く出土した。そのうち，須恵器甕の口縁部片（１）を図示した。

SKⅡ068（第63図，図版20）

調査区南部北側，4Z-21・31グリッドに位置する土坑である。平面形は細長い長方形状であるが，短辺は丸みがある。遺構の規模は長径3.76m，短径1.25m，底面は長径3.53m，短径１m，深さは27cmである。長軸の方位はN-13°-Eである。底面は平坦で，長辺壁際は直線状である。遺構の南側でSBⅡ070と重複し，長辺東側でもSBⅡ069と重複している。遺構の状況から，本遺構がもっとも新しい。覆土は主として上下層に分かれる。上層（１層）は山砂を主体とする土層で，少量の焼土粒を含む。山砂はⅡ070柱穴の上部に堆積しており，遺構の新旧関係がわかる。上部壁際（２層）は黒褐色土で，山砂の包含は少ない。下層（３層）は黒褐色土で，ローム粒の包含は少ない。下層壁際（４層）は暗黄褐色土で，ロームを多く含む。覆土のうち，山砂を主体とする１層については，埋め戻された土層と考える。

出土遺物のうち，土師器皿３は完形である。東壁際北側の位置で，１層と３層の境の高さから伏せた状



第63図　SKⅡ062・Ⅱ063・Ⅱ064・Ⅱ065・Ⅱ068・Ⅱ072

態で出土した。その近くからは，土師器坏１が正位で出土した。遺存度は3/5程度である。また，南側の上層からは，土師器坏２と槍鉋５が出土した。そのほかの出土遺物は，少量の土器片で，そのうち，墨書土器１点（４）を図示した。

本遺構については，遺構の形態その他から，土坑墓の可能性が推測される。土坑墓であれば，下層も埋め戻された土層であるが，覆土の様相からは判然としない。

SKⅡ072（第63図，図版20）

調査区南部北側，4Z-61・71グリッドにある土坑である。確認面の平面形は円形に近い形であるが，底面の平面形は楕円形である。遺構の規模は径1.3m，底面は長径1.08m，短径88cm，深さは56cmである。底面は中央部がやや深く，壁際でやや高まる。覆土については，最上層に焼土を多く含む土層がみられる。それ以下は黒褐色土・暗褐色土主体の土層であるが，下層はローム粒をやや多く含む。図示した遺物は土師器坏３点で，それらが出土遺物のすべてである。いずれも覆土上層から出土した。坏１は遺存が良く，土坑の中心近くから正位で出土した。２は散っているが，2/3程度の遺存である。

SKⅡ073（第64図，図版20）

調査区南部北側，4Z-72グリッドにある土坑である。平面形はやや不整な楕円形である。遺構の規模は長径1.33m，短径1.09m，底面は長径1.04m，短径81cm，深さは30cmである。東側では確認面が深いため，壁高が低くなっている。本来は，より整った形態であると考える。南側の底面は平坦で，壁との境が明瞭であるが，北側の底面から壁にかけては，ゆるやかに高まる。覆土については，最上層に焼土を多く含む土層がみられる点が，近くに所在するSKⅡ072と共通する。それ以下は黒褐色土・暗褐色土主体の土層であるが，下層はローム粒をやや多く含む。平安時代の須恵器甕，土師器皿・甕片が少量出土したが，すべて小片であり，図示したものはない。

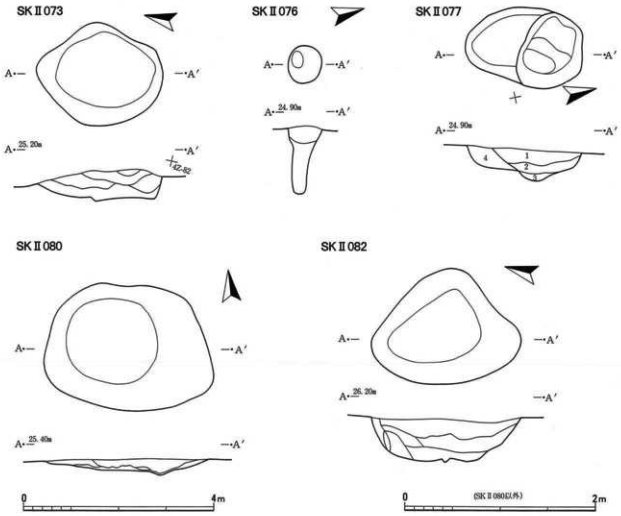
SKⅡ076（第64図）

調査区北部南西側，3Z-34グリッドにある土坑である。平面形はほぼ円形で，規模は径35cm～40cm，深さは72cmである。柱穴状の遺構であるが，周囲に同様のピットがみられない。覆土は黒褐色土で，上層は若干の焼土粒・山砂を含む。奈良・平安時代の須恵器甕・土師器甕片が出土したが，図示したものはない。

SKⅡ077（第64図）

調査区北部南西側，3Z-44・54グリッドにある土坑である。平面形は不整な楕円形である。規模は長径1.23m，短径85cm，深さは21cm～33cmである。底面は北側が深く，南側が浅い。底面の南側は，平坦面がやや広いが，北側はその東側が深くなっている。覆土については，１・４層が黒褐色土・暗褐色土でロームの包含が少ない。２・３層はローム粒・塊を多量に含む黒褐色土・暗褐色土である。土層の堆積状況をみると，北側部分が南側部分を切っていると思われ，土坑２基が重複している可能性がある。奈良・平安時代の土師器甕・坏小片が出土したが，図示したものはない。

SKⅡ080（第64図，図版20）



第64図　SKⅡ073・Ⅱ076・Ⅱ077・Ⅱ080・Ⅱ082

調査区南部南端，7Z-01・11グリッドにある土坑である。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長径3.55m，短径2.65m，深さは8㎝～34㎝である。底面は全体に浅く，確認面までゆるやかに高まる。底面の範囲・壁は不明瞭である。覆土は黒褐色土主体で，下層はローム粒の包含がやや多い。奈良・平安時代の土師器甕・坏，須恵器甕片が若干量出土したが，図示したものはない。

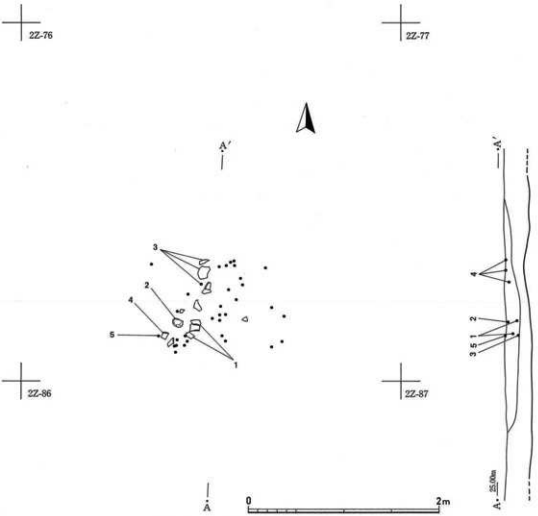
SKⅡ082（第64図）

調査区南部中央，5Z-62グリッドにある土坑である。平面形は不整な楕円形である。規模は長径1.41m，短径1.17m，底面は長径98㎝，短径65㎝，深さは48㎝である。底面はやや凹凸があり，壁へは丸みをもって立ち上がる。出土遺物は奈良・平安時代のロクロ土師器坏片3点，縄文土器片1点である。図示したものはない。

4．土器集中遺構

土器集中遺構（2Z-76地点）（第65図，図版20）

調査区北部中央西寄りに位置する土器集中遺構である。径1.3mほどの範囲から出土したが，分布密度が濃い部分は長径1.2m，短径50㎝の範囲である。図示した土器は，土師器坏3点・皿1点，須恵器坏1点の5点である。そのうち，坏2と皿3は遺存の良い土器であり，正位で出土している。図示した以外の



第65図　土器集中遺構（2Z-76地点）

破片には，別個体の土師器坏・須恵器坏も含まれる他，土師器甕や須恵器甕・壺もある。全体に，出土層位は確認面及びその近くであるので，確認面よりも上部に遺物が存在していた可能性が高い。土器片を含む土層は若干の焼土粒・褐色土粒を含む暗褐色土である。その下層は褐色土粒を斑状にやや多く含む暗褐色土であり，表土層とソフトローム層（Ⅲ層）との間の漸移層である。土器包含層は下層にゆるやかに落ち込むように堆積しているが，明瞭な遺構を確認できない。

土器集中の東側には，SBⅡ018が約１m離れて所在する。至近の距離であり，土器集中はSBⅡ018と関係する可能性があると考える。

第２節　遺　物

１．竪穴住居（第13表）

計測値等は観察表に記載したので省略する。

SIⅡ001（第66・67図，図版40・41・50～54）

1～24はロクロ土師器坏である。1・3・12・18・22の5点および4・8・9・11・14～16の7点がそれぞれ重なった状態で，カマド左側，住居西隅床面から出土している。出土状況は遺構での説明の通りである。

これら12点出土の坏は，大きさから2種類に分けられる。直径12cm前後が4点（1・12・18・22）および4点（4・9・11・16），直径14cm前後が1点（3）および3点（8・14・15）である。共通する特徴としては，底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施され，ロクロ目が明瞭である。4・8は底部全面に回転ヘラケズリが施され，回転糸切り痕が消されている。また，器形の特徴としては，体部が，回転ヘラケズリのため，外傾して直線的に立ち上がる。体部中位は緩やかに内彎して広がり，体部上部から口縁部は外反する。以上の坏は出土状況から同時性が強いと考えられ，同じように出土した土師器坏13，須恵器甕30も同様である。また，坏9・11～16の底部外面に墨書「任」，坏18の体部外面に墨書「善」，坏22の底部外面に墨書「十」が書かれている。坏22は口縁部にススが付着しているので，灯明器として使用されたと考えられる。

2は住居中央床面の出土である。底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施されるが，ロクロ目は不明瞭で，前述の坏群よりも体部の広がりがやや小さい。6は住居中央覆土中位の出土である。口縁部は住居中央床面の出土である。口縁部がほとんど外反しない。7は住居北隅覆土中の出土である。前述の坏群と同じ特徴があり，体部外面に墨書「本」が2字書かれている。10はカマド内の出土で坏群と同じ特徴があり，底部外面に墨書「任」が書かれている。5は内面に黒色処理が施される。

19・20・24は体部下部から底部である。19はカマド出土，20・24は覆土出土である。24の底部外面に墨書が書かれている。欠損のため一部の遺存であるが，字形から「奈」（「大」と「田」の合せ文字）の可能性がある。23は体部片である。外面に墨書が書かれている。欠損のため文字は不明である。

17・21は大型の坏である。住居の柵状遺構出土で，前述の坏群と同じ特徴がある。17は体部下部にやや丸みがある。21は底部外面に墨書「任」が書かれている。

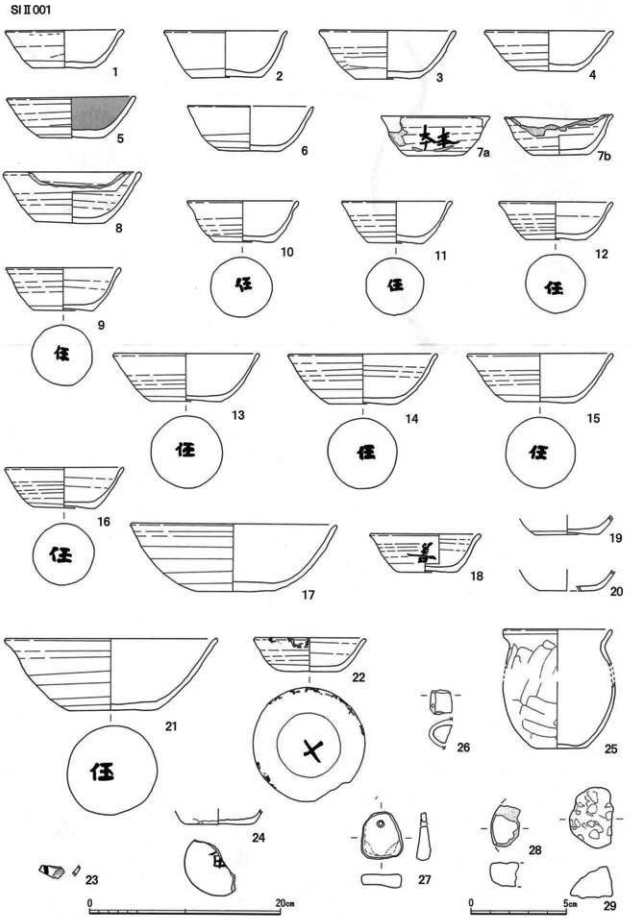
坏の胎土はほぼ同じで，細砂粒・赤色スコリア粒を少量含み，細雲母粒をやや多く含む。

25は土師器小型甕である。上半部と下半部が接合しないが，同一個体と判断した。平底で，胴部は中間部を欠損するが，やや縦長の球形と考えられる。口縁部は小さく外反し，口縁は小さく立ち上がって受け口状になる。

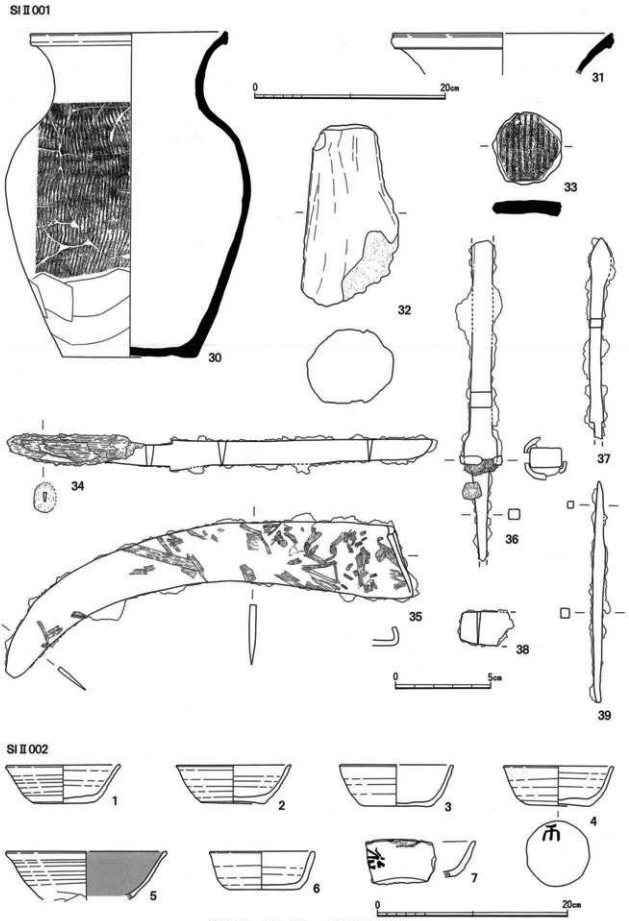
26は石製品である。砂岩質で表面は磨耗している。磨製石斧片の可能性がある。27は小型の砥石である。丸みのある台形状で，上端部に両側から穿孔されている。28は石製品である。小片のため用途は不明であるが，砥石の可能性がある。29は軽石片である。

30・31は須恵器甕である。30は前述の坏群と同地点で出土している。平底である。胴部は鶏卵形で，最大径は上半部にある。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，外反して口縁に至る。口縁は緩帯状で，端部はつまみ出されたように受け口状になり，直下が沈線状にくぼむ。胴部に縦位平行叩き目が施され，下部にはヘラケズリが施される。縦位平行叩き目は口縁部にも施されるが，ヨコナデでほとんど消されている。胎土は細砂粒をやや多く含む。31は口縁部である。端部は30と同様であるが，つまみ出しは小さい。

32は土製支脚である。上半部の遺存で，細長い円錐台形と考えられる。33は円盤状土製品である。須恵器甕の胴部片を転用している。



第66図　SIⅡ001出土遺物



第67図　SⅡ001・Ⅱ002出土遺物

34～39は鉄製品である。34は刀子である。完形で茎部に木質が遺存する。刃部と茎部との境に関があり，背部側と刃部側の両関である。35は鎌である。完形で，彎曲刃である。36・37は鉄鏃である。36は刃部を欠損する。断面は四角形で，頸部と茎部との境に関がある。37は茎部端部を欠損する。鏃身は小さく，菱形で，頸部と茎部との境に関がある。38は刃部である。幅が広いので鎌と考えられる。39は錐である。断面は四角形の棒状で，関はないと思われる。

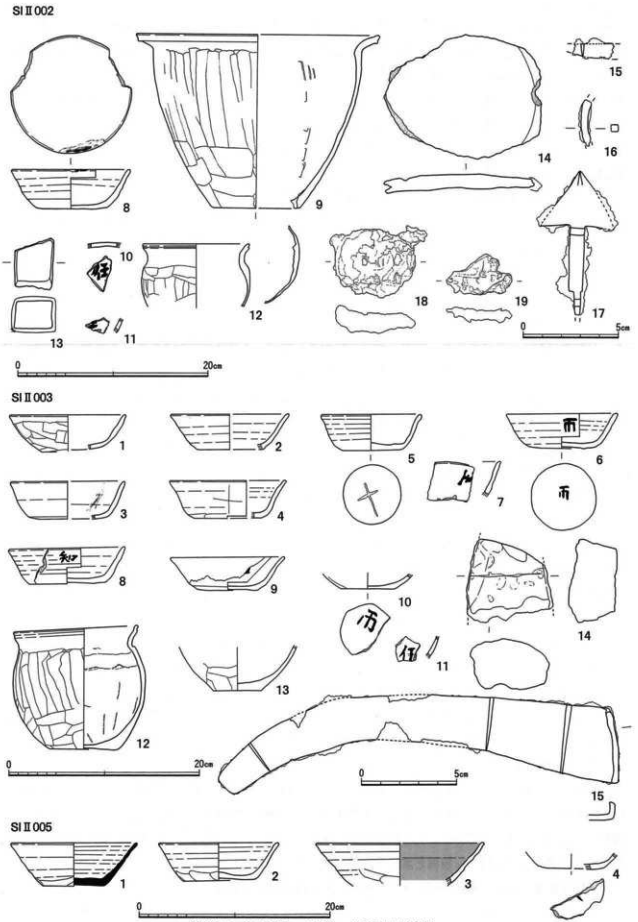
SⅡ002（第67・68・80図，図版41・42・49～51・53・54）

1～8はロクロ土師器坏である。すべて，覆土中出土である。1は底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。ロクロ目が明瞭である。底部外面周辺寄りに墨書「上」が施される。2は底部回転糸切り無調整である。体部も無調整で，底部はやや突出した形状である。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は小さく外反する。3は底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリが施され，体部は無調整である。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。胎土に細雲母粒を多く含む。4は底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。内面底部中央が明瞭にくぼむ。底部外面に墨書「市」が施される。5はやや大形である。口縁部から体部で，体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は大きく開き，口縁部は外反する。ロクロ目が明瞭である。内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。6は底部に手持ちヘラケズリが施される。体部は垂直に近く外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。7は体部外面に墨書「福」があり，口縁部にススが付着する。灯明皿として使用されたと考えられる。8は底部回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。ロクロ目が明瞭である。底部外面周辺寄りおよび体部正位に墨書「市」が施される。口縁部内側にススが付着し，周辺が熱で赤変しているので，灯明皿として使用されたと考えられる。口縁から体部上部を2箇所，半月状に意図的に割られたと考えられ，灯明皿に使用したことと関係があると思われる。

9は土師器甑である。底部は5孔である。胴部は丸みのある逆円錐台形で，口縁部は強く外反する。口縁は縁帯状で，つまみ出されたようにわずかに受け口状である。10・11はロクロ土師器坏片である。10は底部外面に墨書「任」がある。11は体部外面に墨書があるが，破片のため文字不明である。12は小型甕である。口縁部から胴下部で，胴部はやや扁平な球形と思われる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，外反して口縁に至る。口縁はわずかにつまみ出された様に受け口状である。口縁直下が沈線状であるが，ヨコナデにより一部埋もれている。

13は砥石である。四角の棒状と思われるが，両端が欠損している。14は土製円板である。ロクロ土師器坏の底部を転用している。打ち欠き部分が1箇所あり，土錘として使用された可能性がある。15～17は鉄製品である。15は刀子片である。16は棒状であるが，断面が四角形であるので，釘片と思われる。17は鉄鏃である。鏃身は三角形で，頸部と茎部との境に関がある。

18・19は鉄滓である。形状から，2点とも椀形鍛冶滓と考えられる。



第68図　SIⅡ002・Ⅱ003・Ⅱ005出土遺物

SⅡ003（第68図，図版42・49～51・54）

1～11は土師器坏である。1・5・10が床面から，8が覆土下層から，ほかは覆土中から出土している。

1はロクロ未使用である。底部中央が欠損する。平底で，底部外面は手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁は小さく外反する。体部に横方向の手持ちヘラケズリ，口縁部にヨコナデが施される。胎土は，細砂粒・赤色スコリア粒をやや多く含む。

2～11はロクロ坏である。2～4は底部中央を欠損する。2は底部周辺部に回転ヘラケズリが施される。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がり，ゆるやかにが内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。外面体部下部は無調整で，内外面全体に回転ヨコナデが施され，ロクロ目は不明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。3は平底で，底部外面は手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。体部下端部には不明瞭であるが手持ちヘラケズリが施される。内外面全体に回転ヨコナデが施され，ロクロ目は不明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。内面口縁部から体部にかけて，ススが付着しているので，灯明皿として使用されたと考えられる。4は平底で，底部外面は全体に手持ちヘラケズリが施されると考えられる。体部は垂直に近く外傾して立ち上がり，体部中位からやや大きく外反し，口縁部に至る。体部下端部は手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。体部外面に焼成後の線刻「十」が施される。5は完形である。平底で，底部外面は全面に回転ヘラケズリが施される。体部は垂直に近く外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反し，口縁は丸縁状に肥厚する。口縁の内側に1条，沈線状の強いヨコナデが施される。体部下端部は回転ヘラケズリが施される。外面底部に焼成後の線刻「十」が施される。

6～11には墨書が施される。6は底部がやや上げ底の平底で，回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，体部下部回転ヘラケズリが施される。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部および，体部正位に墨書「市」が施される。7は口縁部から体部片である。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面右横位に墨書「生？」が施される。8は底部がやや上げ底の平底で，回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリが施される。体部下端部は無調整である。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がる。体部中位まではゆるやかに内彎し，中位からは直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。胎土は砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面の体部正位に墨書「知」が施される。体部の破損状況から意図的に割られた可能性がある。9は底部がやや上げ底の平底で，回転糸切り，底部周辺部回転ヘラケズリ，外面体部下端部回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面体部に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。10は体部下部から底部である。外面底部および体部下部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。底部外面に墨書「市」が施される。なお，内面底部に爪形の調整痕がみられ，内面のロクロ痕も不明瞭なので，坏ではなく，小形甕の底部の可能性がある。11は体部である。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含む。外面正位に墨書が施されるが，破損しているが，文字は「任？」である。

12・13は土師器小形甕である。底部は平底で，外面にヘラケズリが施される。胴部はほぼ球形で，口縁部との境に稜がある。胴部下部には横位のヘラケズリが施され，胴部上位から中位には縦位のヘラケズリ

が施される。口縁部は外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。口縁下に沈線状の強いヨコナデが施される。外部口縁部および内面胴部上位に粘土紐の接合痕がみられる。内面体部下部から底部にやや長い刻み目状の調整痕がみられる。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。13は胴部下部から底部である。底部は平底で，外面にヘラケズリが施される。胴部下部には横位のヘラケズリが施される。内面体部下部から底部に，やや長い刻み目状の調整痕がみられる。胎土は細砂粒を多く含む。

14は土製支脚片である。胎土は砂質で，焼成は不良である。破片のため形状は不明であるが，円錐台形と思われる。

15は鉄製鎌である。ほぼ完形で，基部の屈曲部分が遺存する。

SIⅡ005（第68・69図，図版42・54）

7以外はすべて覆土中の出土である。7は床面から出土している。

1は須恵器坏である。ロクロ成形で，外面底部および体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。底部は平底で，体部が外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。ロクロ目は明瞭である。胎土は長石粒・石英粒を多く含む。

2～4はロクロ土師器坏である。2は底部がやや上げ底で，回転糸切り，底部周辺部および体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は，細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。3は口縁部から体部である。やや大形の坏で，体部は外傾してほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭で，体部が屈曲している様に見える。内面に黒色処理，ヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含む。二次的な被熱のため赤変している。4は体部下部から底部片である。底部はやや上げ底の平底で，回転糸切り，底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。底部外面に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。

5・6は土師器甕である。両者とも常総型甕である。5は口縁部から胴部中位である。胴部中位から下には縦位ヘラナデが施される。胴部は鶏卵形と思われる。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。内面胴部上位に板状の当て具痕がある。胎土は砂粒・雲母粒を多く含む。6は胴部下位から底部である。底部外面に木葉痕があり，周辺部にヘラケズリが施される。胴部には縦位ヘラナデが施される。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。5と接合はしないが同一個体の可能性がある。

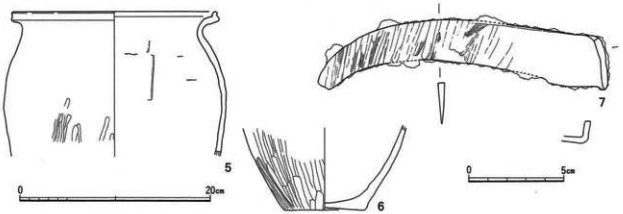
7は鉄製鎌である。先端部を欠く以外はほぼ完形で，基部の屈曲部分が遺存する。

SIⅡ006（第69・70図，図版42・43・50・51・53・54）

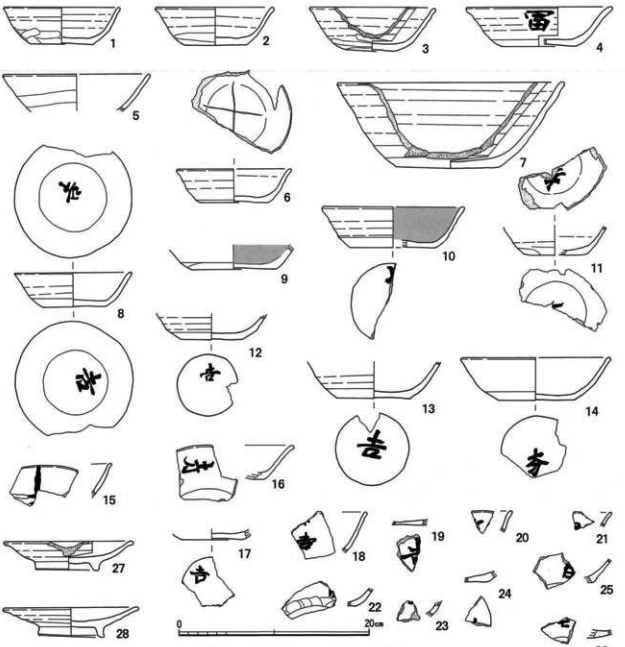
1～26はロクロ土師器坏である。出土位置は1がカマド内，5が床面，7・10が覆土下層で，他は覆土中である。

1は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒をやや多く含む。2は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，

SIⅡ005

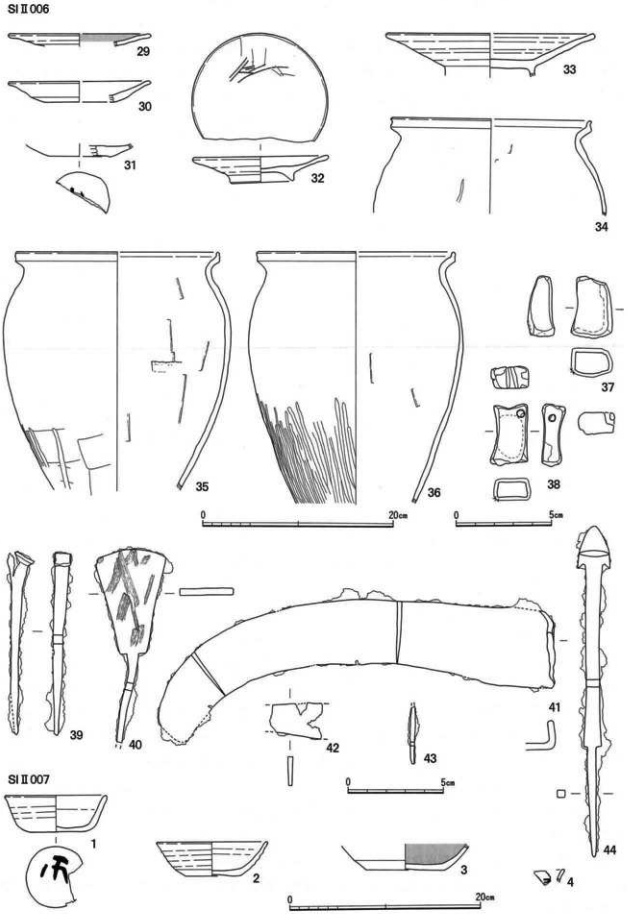


SIⅡ006



第69図　SIⅡ005・Ⅱ006出土遺物

中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや玉縁状になる。胎土は細砂粒を少量含み，細雲母粒をやや多く含む。３は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部に手持ちヘラケズリが施される。体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含み，細雲母粒をやや多く含む。口縁から体部に半月状に意図的に割られたと考えられる。４は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面全体にヘラミガキが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含み，細雲母粒をやや多く含む。外面体部正位に墨書「冨」が施される。５は口縁部から体部である。体部下部に回転ヘラケズリが施される。内面にヘラミガキが施される。体部はわずかに内彎し，口縁部は直線的に開く。胎土は細砂粒をやや多く含む。６は底部がやや上げ底で，回転糸切りの後，底部周辺部に回転ヘラケズリおよび，体部下端に面取り状の回転ヘラケズリが施される。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がり，ゆるやかにが内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は細砂粒を多く含む。内面底部に焼成後の線刻「十」が施される。７は大型の坏である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリ，内面は底部全体と体部は部分的にヘラミガキが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭で，体部が屈曲している様に見える。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含み，細雲母粒をやや多く含む。口縁から体部下部にかけて，半月状に意図的に割られたと考えられる。８は平底で，外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。二次的被熱と思われるが，器面がやや荒れている。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，尖り気味である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。底部内外面に墨書「吉」が施される。９はやや大形の坏底部である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施され，スス状の炭化物が付着している。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。10は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面全体にヘラミガキ，黒色処理が施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反し，口縁がやや肥厚する。外面底部に墨書が施され，破損しているが文字は「大？」である。11は体部から底部である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含む。底部内外面に墨書が施され，文字は「夯？」である。12は体部から底部である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面底部に墨書「吉」が施される。13は体部から底部である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がる。胎土は，細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部に墨書「吉」が施される。14は平底で，外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。器面が荒れているが，内面全体にヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は，細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部に墨書「夯」（「大」と「万」の合せ文字）が施され



第70図　SIⅡ006・Ⅱ007出土遺物

る。

15～26は墨書土器片である。15・16・18・20～23・25・26は外面体部である。文字が判別できるのは16の「方」（「十」と「万」の合せ文字）（右横位），18の「口吉」（正位）である。17・19・24は外面底部である。文字は17・19が「吉」で，他は破損のため不明瞭である（21・22・25は「冨？」）。

27～33は土師器皿で，すべてロクロ成形である。27・28・32・33は高台が付く。出土位置は，27・28・32が床面，33が覆土下層，他は覆土中である。

27は断面が台形の高台で，体部は大きく広がって立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。外面底部に回転糸切り痕がある。胎土は，細砂粒をやや多く含む。口縁から体部にかけて，半月状に意図的に割られたと考えられる。28は断面が台形の高台で，端部が斜めに面取り状である。外面底部に回転ヘラケズリが施され，中央部に回転糸切り痕が残る。内面は全体にヘラミガキが施される。体部は大きく広がって立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は，細砂粒を少量含み，細雲母粒を多く含む。図示はしていないが，割れ口から，口縁から体部にかけて，半月状に意図的に割られた可能性がある。29は口縁部から体部である。高台が付くかは不明である。内面にヘラミガキが施される。胎土は，細砂粒を多く含む。30は口縁部から体部である。高台が付くかは不明である。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。二次的被熱と思われるが，器面がやや荒れている。。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。31は底部片である。高台は無く，外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面にヘラミガキが施される。胎土は，細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。32は高台の内側がゆるく傾斜し，断面が三角形状になる。体部は大きく広がって立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁はわずかに外反する。全体に器面が荒れているため，底部および内面の調整は不明である。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。内面体部に焼成後の線刻が施されるが，刻み目状で，内容は不明である。33はやや大形である。高台は端部が欠損しているが，断面は台形と思われる。外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。体部に立ち上がりの傾斜がやや大きく，皿よりも鉢に近い器形である。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含む。

34～36は土師器甕で，すべて常総型甕である。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。34は口縁部から胴部上位である。胴部は鶏卵形と思われる。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分が外反する。35は口縁部から胴部下位である。胴部中位から下には縦位ヘラナデと横位ヘラケズリが施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分はほぼ直立する。内面胴部に板状の当て具痕がある。器面調整はかなり粗雑と思われる。36は口縁部から胴部下位である。胴部中位から下には縦位ヘラナデが施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分はわずかに外反する。内面胴部中位に板状の当て具痕がある。

37・38は砥石である。やや扁平な方柱形で，長辺端部以外の４面が使用されている。使用面の中央がくぼむ。38は隣り合う面に通るように孔が開けられ，紐等を通して携帯した可能性がある。石材は凝灰岩質と考えられる。

39～44は鉄製品である。39は釘である。断面方形で，上端部が広がっている。40は鉄鏃である。鏃身は整形で先端部が幅広である。頸部の断面は方形である。41は鎌である。完形で，基部の屈曲部が遺存する。42は刀子の刃部片と考えられる。43は，棒状で，断面が方形なので釘と考えられる。44は鉄鏃である。完形で，頸部と茎部との境は両関である。

SⅡ007（第70・71図，図版43・49）

1～4はロクロ土師器坏である。出土位置は，2がカマド内，3が床面，1・4が覆土中である。1は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は彎曲して，垂直に近く外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。二次的な被熱のためと思われるが，器面が荒れている。外部底面に墨書「市」が施される。2は底部中央がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。ロクロ目が強く，明瞭である。内外面に細かな炭化物が斑点状に付着している。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。3は体部下部から底部である。底部の大きさから大形の坏である。平底で，外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキおよび黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，砂粒を少量含む。4は口縁部片である。外面に墨書が施され，破損しているが文字は「市」である。

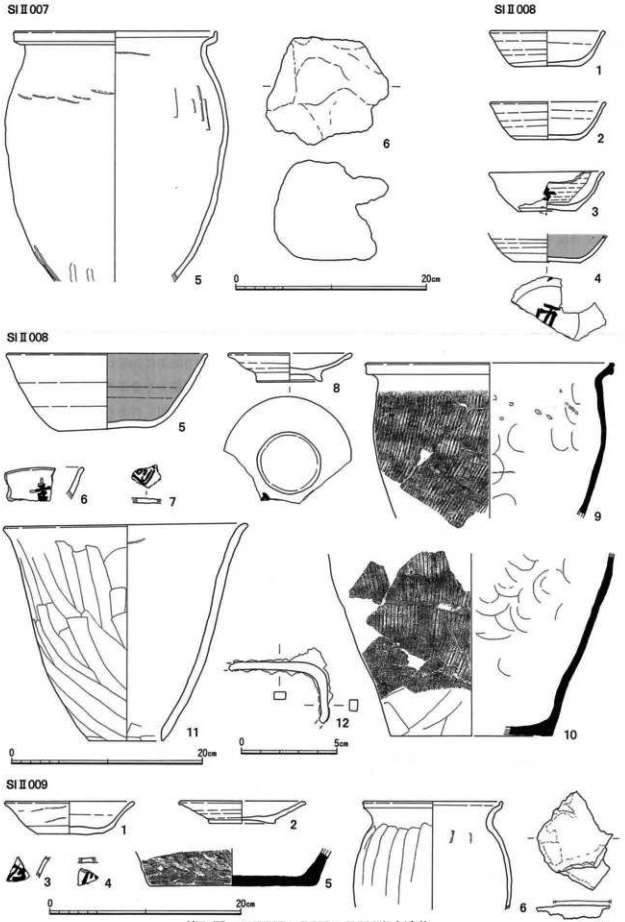
5は土師器甕である。カマド前面の床面から出土している。口縁部から胴部下位である。外面胴部下位は横位ヘラケズリの後粗い縦位ヘラナデが施される。胴部上位には横位にやや長い刻み目状の調整痕がみられる。内面胴部上位には板状の当て具痕がみられ，口縁部には粘土紐接合痕が残る。胴部は鶏卵形で，口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分はほぼ直立する。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。

6は土製支脚片である。上端部分で，破損のため器形は不明瞭であるが，円錐台形と思われる。胎土は砂粒をほとんど含まないが，焼成は悪く，焼成せずにカマド内で使用したと考えられる。

SⅡ008（第71図，図版43・49・50・53）

1～7はロクロ土師器坏である。出土位置はすべて覆土中である。

1は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや玉縁状に肥厚する。内面口縁全体に淡く炭化物が付着する。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。2は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや肥厚する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。3は底部中央がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反する。ロクロ目が強く，明瞭である。胎土は細砂粒をやや多く含む。外面体部正位に墨書が施される。文字部分が破損しているが，残りの字形から「吉」と考えられる。4は体部下部から底部である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中央部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に



第71図　SⅡ007・Ⅱ008・Ⅱ009出土遺物

回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキおよび黒色処理が施される。胎土は細砂粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部に墨書が施される。文字部分が破損しているが，残りの字形から「市」と考えられる。

5は大型の坏である。平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキおよび黒色処理が施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。

6は口縁部から体部片である。外面正位に墨書が1字確認できる。やや淡くなっているが，「吉」と考えられる。7は底部片である。内面に墨書が1字確認できる。一部欠損しているが，形から，「圖」と考えられる。

8は高台付皿である。覆土から出土している。ロクロ成形で，高台の内側がゆるく傾斜し，断面が三角形状になる。外面底部は回転ヘラケズリが施され，爪形の細かな調整痕がみられる。内面はヘラミガキが施される。体部は大きく広がって立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや玉縁状に肥厚する。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面体部に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。外面底部に炭化物がまだらに付着し，墨痕の可能性がある。

9・10は須恵器甕である。出土位置は覆土中である。9は口縁部から胴部中位である。外面胴部に縦位叩き目，内面胴部には連続した半円形の当て具痕が施される。胴部は上半部に丸みのある逆円錐台形である。口縁部は短く外反し，口縁は縁帯状で，端部はつまみ出されたように受け口状になる。胎土は細砂粒をやや多く含む。10は胴部中位から底部である。平底で，胴部下端に斜位ヘラケズリ，その上位には叩き目が施され，中位に浅い沈線状のヨコナデが1条施される。内面胴部には連続した半円形の当て具痕が施される。胎土は細砂粒を多く含む。色調が黒褐色で，房総産の須恵器である。

11は土師器甑である。覆土から出土しているが，多くの破片が接合しているので，住居廃棄後に一括して投棄された様相である。底部は底無し状で，胴部は上位から中位に縦位のヘラケズリ，中位から下位に斜位のヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデが施される。胴部は丸みのある逆円錐台形で，口縁部は外反する。器形的には古墳時代後期の土師器甑に類似する。

12は鉄製品である。棒状で，片側がほぼ直角に折れ曲がっているので，くるる錠の可能性がある。

SIⅡ009（第71図，図版43）

1はロクロ土師器坏である。覆土から出土している。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部はやや広がって，外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反し，口縁はやや肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。

2は土師器高台付皿である。高台は低く，底部からの削り出し状で，回転糸切り痕が残る。体部は大きく広がって立ち上がり，直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は，細砂粒・細雲母粒を多く含む。二次的被熱のため器面がやや荒れている。

3はロクロ土師器坏の体部片である。外面に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。4はロクロ土師器坏の底部片である。外面に墨書が施され，破損しているが文字は「得？」である。

5は須恵器甕の底部である。床面付近からの出土である。外面に「二」字の成形痕が残る。外面の胴部

との接合部に指の押圧痕が明瞭である。内面は周辺部以外はやや滑らかに磨耗しているので，転用硯の可能性がある。胎土は長石粒・石英粒をやや多く含む。

6は土師器甕である。床面からの出土である。やや小形で，口縁部から胴部中位の遺存である。外面胴部に縦位ヘラケズリが施される。内面胴部上端には当て具痕と思われる，調整痕がある。胴部はやや縦長の球形と思われる。口縁部は短く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は外反する。胎土は砂粒・雲母粒を多く含む。

7は砥石片である。全体の形は不明であるが，磨耗面が明瞭である。

SIⅡ012（第72図，図版43・44・49）

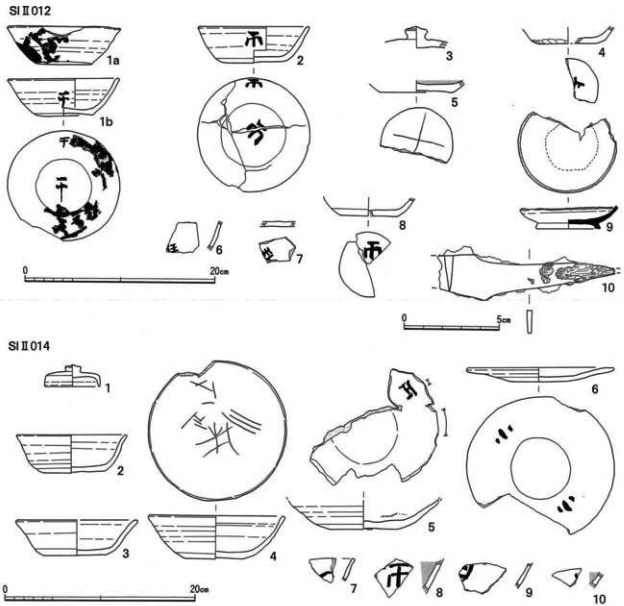
1はロクロ土師器坏である。壁際の床面から出土している。やや上げ底で，回転糸切りの後外面底部端部を面取り状に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒をやや多く含む。口縁から体部にかけて，小さく半月状に意図的に割られたと考えられる。また，打ち欠き部分と，その反対側の口縁から体部にススが付着しているので，灯明具として使用されたと考えられる。外面底部および体部正位に墨書が施される。文字は「千」に似ているが，筆順から「市」の可能性もある。2はロクロ土師器坏である。覆土から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端（底部端）に面取り状の回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・赤色スコリアをやや多く含む。外面口縁部に淡く炭化物が付着しているので灯明具として使用された可能性がある。外面底部および体部正位に墨書「市」が施される。

3は土師器坏蓋片である。覆土から出土している。天井部中央で，擬宝珠形のツマミが付く。内面にヘラミガキが施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。

4はロクロ土師器坏の体部から底部である。覆土から出土している。外面底部および体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒を多く含む。外面底部に墨書「上」が施される。5はロクロ土師器坏の体部から底部である。床面から出土している。わずかに上げ底で，外面底部に回転ヘラケズリが施され，中央部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面にヘラミガキおよび黒色処理が施される。胎土は細砂粒を少量含む。外面底部に焼成後に線刻「十」が施される。6～8はロクロ土師器坏である。覆土中から出土している。6は体部片である。内面はヘラミガキが施され，外面正位に墨書「任」が施される。7は底部片である。内面はヘラミガキが施され，外面正位に墨書「任」が施される。8は体部下部から底部である。平底で，外面底部および体部下部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・赤色スコリアをやや多く含む。器面がやや荒れている。底部外面に墨書「市」が施される。

9は灰釉陶器椀である。床面付近から出土している。体部から底部である。高台を持ち，内彎した，断面「ハ」字状で，下端部の幅が広い高台である。内面は全面に灰釉が施される。体部中間で，ほぼ同じ高さに意図的に割られている。また，内面底部に磨耗しているので，硯に転用されたと考えられる。外面体部から底部に墨痕と思われる線状の模様がある。墨書かは不明瞭である。

10は鉄製刀子である。刃部基部から茎部で，背と刃部に関があり，茎部に木質が残る。



第72図　SⅡ012・Ⅱ014出土遺物

SⅡ014（第72・73図，図版44・45）

1は土師器蓋である。大きさ，形から小形短頸壷の蓋と考えられる。覆土中から出土している。天井部は平坦で中心部に擬宝珠形のツマミが付く。端部の返しはやや長く，ほぼ垂直である。天井部にヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。

2～5はロクロ土師器坏である。2はカマド内から出土し，支脚に転用されている。平底で，外面底部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。3は覆土中から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，体部中位から外反し，口縁部はやや大きく外反する。胎土は

細砂粒・細雲母粒を多く含む。４は床面から出土している。わずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反し，やや肥厚する。ロクロ目が強く，明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。内面底部から体部に焼成後の線刻が施されるが，文字か，模様か不明瞭である。５は覆土中から出土している。体部の開きが大きく，皿に近い形である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は大きく開き，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁はわずかに内彎する。口縁が磨耗しているので，縁を再生して使用した可能性がある。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。内面体部に墨書が施される。淡く不明瞭であるが，正位の「市」と思われる。

６は土師器皿である。高台は無い。カマド内から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は大きく開いて立ち上がり，わずかに外反して口縁に至る。口縁はほぼ水平である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面体部に，中心を挟んで２箇所に墨書が施される。それぞれ正位で「小」である。

７～10は坏片である。覆土中から出土している。７は口縁部から体部片，ほかは体部片である。体部外面に墨書が施される。８は正位で「市」であるが，ほかは破損のため不明である。７は内面にヘラミガキ，８・10は内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

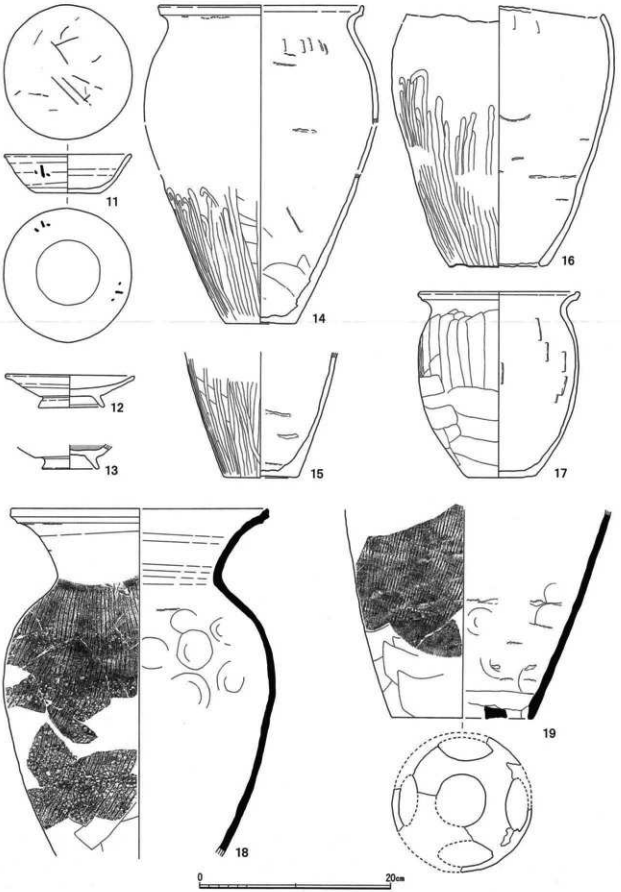
11はロクロ土師器坏である。床面付近から出土している。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反する。口縁下に粘土紐の接合痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面体部に２箇所墨書が施される。正位で，「小」である。内面底部から体部に焼成後の線刻が施されるが，文字か，模様か不明瞭である。

12・13は土師器高台付皿である。12は，底部に回転ヘラケズリが施される。高台はやや広がった「ハ」字状で，わずかに内彎する。体部は大きく広がって立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。器面がかなり荒れ，口縁に刻み目状の磨耗痕がみられる。13は体部下部から底部である。高台はやや高く，「ハ」字状である。内面にヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。

14～17は土師器甕である。14は住居廃棄後に一括投棄された様相である。16は床面付近の出土である。15・17はカマド内から出土し，17は倒立位置で，支脚および土師器坏２を覆う形で出土し，カマド廃棄の祭祀における中心的な土器と考えられる。14～16は常総型甕である。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。14は上下接合はしないが，形，調整から同一個体と判断した。底部は平底で，木葉痕が施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は直立に近く外傾する。胴部中位から下には縦位ヘラナデと横位ヘラケズリが施される。内面体部下部から底部に明瞭なナデが施される。内面胴部に板状の当て具痕がある。15は胴部下位から底部である。底部は平底で，木葉痕が施される。外面に縦位ヘラナデが施される。内面に粘土紐接合痕が残る。16は胴部である。上下の割れ口が磨耗調整されているので，底無し型の甑として再利用されたと考えられる。胴部中位から下には縦位ヘラナデが施される。内面に粘土紐接合痕が残る。

17はやや小形の甕である。平底で，外面底部にヘラケズリが施される。胴部中位から下位に横位ヘラケ

SⅡ014



第73図　SⅡ014出土遺物

ズリ，胴部上位には縦位ヘラケズリが施される。胴部は鶏卵形で，口縁部は短く外反し，ヨコナデが施される。口縁はつまみ出された様に小さく外反し，受け口状である。内面胴部に板状の当て具痕がある。胎土は，細砂粒を多く含む。

18は須恵器甕である。住居廃棄後に一括投棄された様相である。外面胴部下位にヘラケズリ，上位から中位に叩き目，内面には同心円状の当て具痕が施される。口縁部はヨコナデが施される。胴部は鶏卵形で，口縁部は大きく外反する。口縁は折り返しで，やや受け口状である。胎土は細砂粒を多く含み，色調は暗褐色である。胎土，焼成色から房総産と考えられる。

19は須恵器甑である。覆土中の出土である。胴部中位から底部で，５孔である。外面胴部下位には横位ヘラケズリ，中位には叩き目が施される。内面は同心円状の当て具痕が施され，粘土紐接合痕が残る。胎土は，砂粒，雲母粒を多く含む。焼成色は黒色である。胎土が常総型甕にやや類似するので，常陸産の可能性もある。

SⅡ024（第74図，図版44）

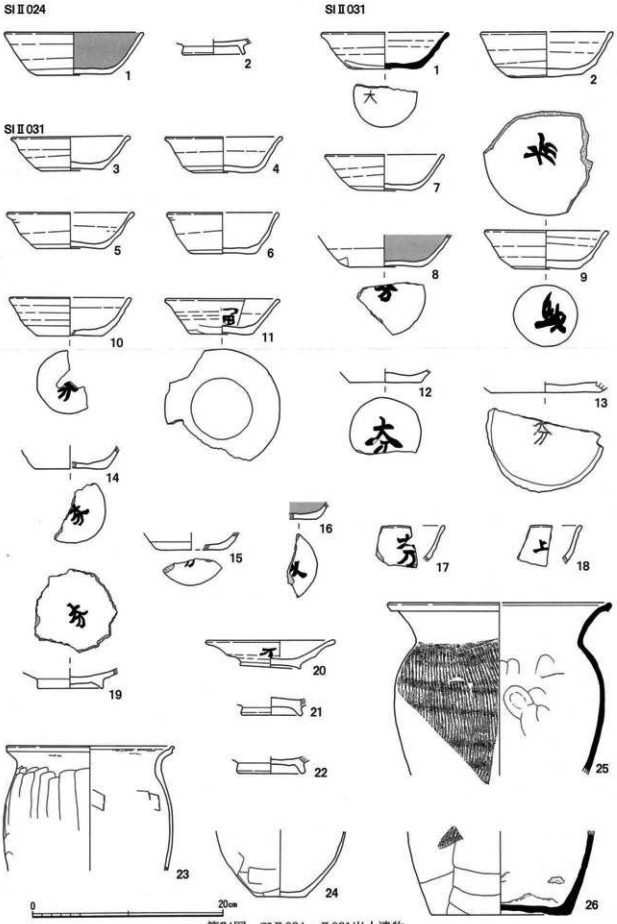
１はロクロ土師器坏である。覆土中から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。内面にヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。

２は土師器高台付皿である。底部で，外面に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。高台は断面「ハ」字状である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。

SⅡ031（第74・75図，図版45・50・53）

１は須恵器坏である。覆土中から出土している。平底で回転ヘラ切りの後外面底部周辺部および，体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや肥厚する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒をやや多く含む。外面底部に中心からずれて，焼成後の線刻「大」が施される。焼成色は褐色であるが，切り離しの技法から須恵器と判断した。常陸産の須恵器に同様の技法がみられる。

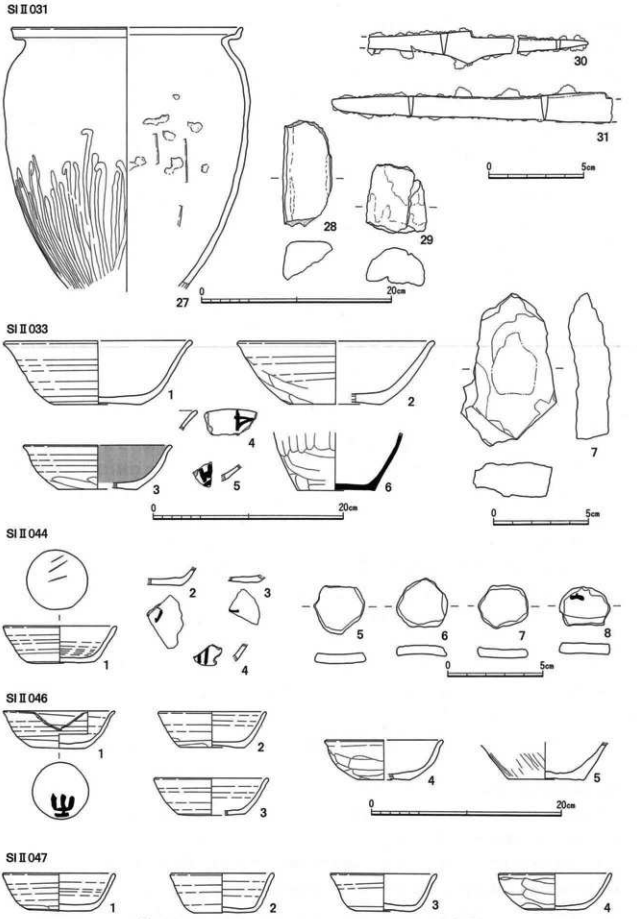
２～18はロクロ土師器坏である。出土位置は11が床面，２・６・10が床面付近，他は覆土中の出土である。２は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中央部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反し，やや玉縁状になる。胎土は細砂粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。３・４は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はやや強く外反し，口縁は肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを微量含む。５は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はやや強く外反し，口縁は肥厚し，やや玉縁状になる。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。６は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部に回転ヘラケズリおよび，体部下端に面取り状の回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち



第74図　SⅡ024・Ⅱ031出土遺物

上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，口縁は肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。7は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。内外面の口縁部から体部に淡くスス状炭化物が付着する。全体に器面が荒れている。8は体部から底部である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面底部中央に墨書が施され，一部欠損しているが字形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と考えられる。9は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部に回転ヘラケズリおよび，体部下端に面取り状の回転ヘラケズリが施される。体部は底部との境でわずかに屈曲しながら外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。内外面底部中央に墨書「夯」(「大」と「万」の合せ文字）が施される。10は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中央部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。ロクロ目が明瞭で，器面がやや荒れている。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面底部中央に墨書が施される。一部欠損しているが字形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と考えられる。11は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。外面体部に回転ヨコナデが施される。体部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反し，口縁はやや肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。内面体部正位に墨書が施される。淡いため，文字は不明瞭であるが，形から「冨」と考えられる。12は底部である。外面に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。内面にヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部中央に墨書が施される。一部欠損しているが字形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と考えられる。内面に褐色の膜状付着物があり，漆の可能性も考えられる。13は大形の坏底部である。外面に回転ヘラケズリが施されるが，中央部に回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面中央に焼成後の線刻「夯」(「大」と「万」の合せ文字）が施される。14は体部下部から底部である。回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。全体に器面が荒れている。外面底部中央に墨書「夯」(「大」と「万」の合せ文字）が施される。15は体部下部から底部である。回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。全体に器面が荒れている。外面底部に墨書が施される。欠損しているが，残りの形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と思われる。16は体部下部から底部である。回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面底部に墨書が施される。欠損しているが，残りの形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と思われる。17は口縁部から底部片である。体部正位に墨書が施される。欠損しているが，残りの形から「夯」(「大」と「万」の合せ文字）と思われる。18は口縁部から底部片である。体部正位に墨書「上」が施される。

19～22は土師器高台付皿である。出土位置は19が床面，20が床面付近，他は覆土中の出土である。19は体部下部から底部である。底部外面に回転ヘラケズリが施される。高台は外側が垂直，内側が傾斜した，



第75図　SⅡ031・Ⅱ033・Ⅱ044・Ⅱ046・Ⅱ047出土遺物

断面三角形である。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒を多く含む。内面底部中央に墨書「夯」（「大」と「万」の合せ文字）が施される。20は突出した底部に，低く小さな高台が付く。底部は回転糸切り無調整である。体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は広く開いて立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反し，口縁はほぼ水平で，肥厚する。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。体部外面正位に墨書「万」が施される。内外面の口縁部から体部に淡くススス状の付着物がみられる。21は底部である。回転糸切り痕が残る。高台は断面三角形である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。25は底部である。回転糸切り痕が残る。高台は断面四角状で，全体として「ハ」字状である。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。

23・24は土師器甕である。出土位置は24が床面，23が覆土中の出土である。23は住居廃棄後の投棄か，流れ込みのような出土状況である。

23は口縁部から胴部中位である。胴部上位は縦位ヘラケズリ，胴部中位は横位と思われるヘラケズリが施される。やや長胴で，口縁部は短く外反する。口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分が外反する。内面胴部に板状の当て具痕がある。口縁部には粘土紐の接合痕がある。胎土は細砂粒を多く含む。24は胴部下位から底部である。底部は回転糸切り無調整である。体部下部は横位ヘラナデが施される。内面底部にやや長い刻み目状の調整痕がある。胎土は細砂粒を多く含む。

25・26は須恵器甕である。出土位置は25が床面付近，26が覆土中の出土である。25は住居廃棄後の投棄か，流れ込みのような出土状況である。

25は口縁部から胴部中位である。胴部は縦位叩き目の後に，ほぼ等間隔に１条のヨコナデが施される。内面にはナデが施される。胴部は鶏卵形と考えられる。口縁部は大きく外反し，口縁は縁帯状で，やや受け口である。胎土は石英粒，長石粒を多く含む。26は胴部下位から底部である。平底で，外面底部は無調整，胴部下位は横位ヘラケズリが施される。胎土は石英粒，長石粒を多く含む。

27は土師器甕である。常総型甕である。出土位置は覆土中の出土で，住居廃棄後の投棄か，流れ込みのような出土状況である。口縁部から胴部下位である。胴部は鶏卵形で最大径は上位にある。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は外傾する。胴部中位から下には縦位ヘラナデが施される。内面胴部に板状の当て具痕がある。内面に粘土紐の接合痕が残る。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。

28・29は土製支脚片である。28は方柱状と思われ，表面にナデが施される。29は円錐台形と思われる。

30・31は鉄製品である。出土位置は30がカマド内，31が覆土中の出土である。30は刀子で，先端部が欠損している。茎部が２分し，接合しないが，出土位置から同一と考えられる。刃部と茎部との境の背部に関がある。31は刀子の刃部である。茎部との境の背部に関がある。

SIⅡ033（第75図，図版45・50・51）

１～５はロクロ土師器坏である。出土位置は１がカマド内で，土製支脚に乗って出土している。３は床面，２・４・５は覆土中から出土である。

１・２は大形の坏である。１は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反し，口縁は小さく外反する。内面はヘラミガキが施され，器

面が二次的被熱のように，やや荒れ，赤変している。外面体部に部分的に横位ヘラミガキが施される。胎土は細砂粒を多く含む。外面口縁部から体部および内面全体に淡くスス状の炭化物が付着する。２は平底で，外面底部および体部下部手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒を多く含む。３は中央部がわずかに上げ底になると思われる。回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。外面はかなり荒れている。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。４は口縁部片である。内面体部に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。５は体部片である。外面に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。

６は須恵器甕である。胴部中位から底部で，土師器小形甕に似ると思われる。カマドから多くの破片が出土しているが，住居廃棄後の投棄か，流れ込みと思われる。底部は平底で，外面周辺部に手持ちヘラケズリが施される。胴部下位に横位ヘラケズリ，中位より上に縦位ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

７は石片である。かなり大きな石器と思われ，鉄床石の可能性がある。

SIⅡ044（第75図，図版45・49・51）

１～４はロクロ土師器坏である。出土位置は１・２が床面でほかは覆土中である。

１は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，体部中位からわずかに外反し，口縁に至る。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。内面底部に焼成後の線刻が施される。記号か文字かは不明である。２は体部下部から底部である。底部外面に墨書が施されるが，破損のため文字は不明である。３は底部片である。外面に墨書が施され，「市」と思われる。４は体部片である。外面に墨書が施され，「市」と思われる。

５～８は円盤状土製品である。土器片を再利用している。覆土中の出土である。

SIⅡ046（第75図，図版45）

１～３はロクロ土師器坏である。出土位置は１がカマド内，他は覆土中の出土である。１は平底で，底部外面および体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。二次的被熱のため，器面がやや荒れ，部分的に赤変している。胎土は細砂粒を多く含む。底部外面縁寄りに墨書「市」が施される。口縁から体部に半月状に意図的に割られたと考えられる。２は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒をやや多く含む。内外面全体に淡くスス状の炭化物が付着する。３は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。二次的被熱のため，器面がやや荒れ，部分的に赤変している。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

４は土師器坏である。非ロクロ成形である。出土位置はカマド内である。平底で，外面底部および体部に手持ちヘラケズリが施される。口縁部にヨコナデが施される。体部は扁平な半球形で，口縁部は小さく

外反する。二次的被熱のため，器面がやや荒れ，部分的に赤変している。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。

5は土師器甕である。胎土から常総型と考えられる。出土位置は覆土中である。胴部下部から底部である。外面底部に木葉痕がある。胴部下部に縦位ヘラナデが施される。

SI Ⅱ 047（第75・76図，図版45・46・50・54）

1～3はロクロ土師器坏である。出土位置は1が床面付近，2・3が床面である。1は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部にわずかに回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁はほとんど外反しない。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。2・3は中央部がわずかに上げ底で，回転糸切りの後外面底部周辺部に回転ヘラケズリが施される。体部は，垂直近く外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。

4は土師器坏で，非ロクロ成形である。出土位置は覆土中である。平底で，外面底部および体部に手持ちヘラケズリが施される。口縁部にヨコナデが施される。体部は扁平な半球形で，口縁部ほぼ直立する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアをやや多く含む。

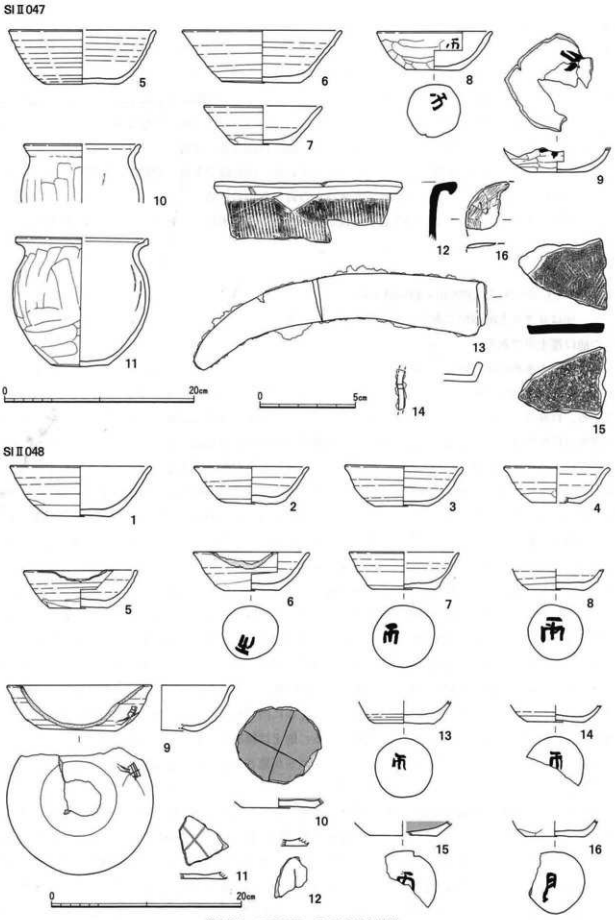
5・6はロクロ土師器坏である。やや大形の坏である。出土位置は5が床面，6が床面付近である。

5は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目は間が狭く，明瞭である。内面はヘラミガキが施される。二次的被熱のため，器面がやや荒れ，部分的に赤変している。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。6は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。

7はロクロ土師器坏である。平底で，回転糸切りの後外面底部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。二次的被熱のため，器面がやや荒れ，部分的に赤変している。胎土は細砂粒を少量含み，・細雲母粒を多く含む。

8・9は土師器坏で，非ロクロ成形である。出土位置は覆土中である。8は平底で，外面底部および体部に手持ちヘラケズリが施される。口縁部にヨコナデが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は小さく外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含むと思われる。外面底部やや周辺寄りに「市」，内面体部正位に「市」が施される。9は体部から底部である。平底で，外面底部および体部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面体部および内面底部の体部寄りに墨書が施され，破損しているが文字は「千？」である。

10・11は土師器小形甕である。出土位置は10が床面付近，11が床面で，多数の破片が出土している。10は口縁部から胴部中位である。胴部は上位から中位に縦位ヘラケズリ，口縁部はヨコナデが施される。外面口縁部か端に粘土紐接合痕がみられる。内面胴部上位に刻み目状の調整痕がみられる。胴部はやや縦長の球形と思われる。口縁部は外傾して立ち上がり，口縁はつまみ出された様に外反し，受け口状である。胎土は細砂粒を多く含む。二次的被熱のため部分的に赤変し，器面が荒れている。11は平底で，外面底部



第76図　SⅡ047・Ⅱ048出土遺物

にヘラケズリ，胴部中位から下位に横位ヘラケズリ，上位から中位に縦位ヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデが施される。胴部はやや縦長の球形で，口縁部は外反し，口縁はつまみ出された様に立ち上がり，受け口状，内面に段がある。胎土は細砂粒を多く含む。二次的被熱のため部分的に赤変し，器面が荒れている。12は須恵器甑と思われる。覆土中から出土している。口縁部から胴部上位片で，外面胴部は縦位叩き目が施される。胴部はやや丸みがある逆円錐台形と思われる。口縁部は強く外反し，口縁は折り返され，上端が面取り状に調整される。胎土は細砂粒，細雲母粒を多く含む。

13・14は鉄製品である。両者とも床面から出土している。13は鎌である。完形で，基部の屈曲が明瞭である。14は棒状品である，断面が方形で，大きさから釘と考えられる。

15は須恵器甕の胴部片である。内外面が磨耗しているので，転用砥石と考えられる。16は紡錘車の一部と考えられる石片である。

SI Ⅱ048（第76～78図，図版46・49～51・53）

1～16はロクロ土師器坏である。出土位置は1・8～10は床面，2・6はカマド内，5・16は床面付近，その他は覆土中である。

1はやや大きめの坏である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は回転ヨコナデを境に，小さく外反する。外面口縁部に回転ヨコナデ，内面は全体にヘラミガキと黒色処理が施される。黒色処理は二次的被熱のために部分に淡くなっていると考えられる。口縁部が欠け，割れ口が磨耗しているので，欠けた後にも使用した可能性がある。また，意図的な口縁部の打ち欠きの可能性もある。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。二次的被熱のため外面が一部赤変している。2は底部中央がやや上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。内面底部中央の突出が顕著である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。3は平底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はやや強く外反し，やや肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。内面口縁部から底部に，部分的にススが付着し，外面は二次的被熱のため，全体が赤変している。4は底部中央がやや上げ底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。外面口縁部に回転ヨコナデが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は回転ヨコナデを境に，やや強く外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。5は底部中央がわずかに上げ底で，外部底面に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。外面口縁部に回転ヨコナデが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。口縁から体部に半月状に意図的に割られたと考えられる。口縁部の内外面同位置にススが付着する。6は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，削り残しのように，回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。口縁部に回転ヨコナデが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。胎土は細砂粒・細

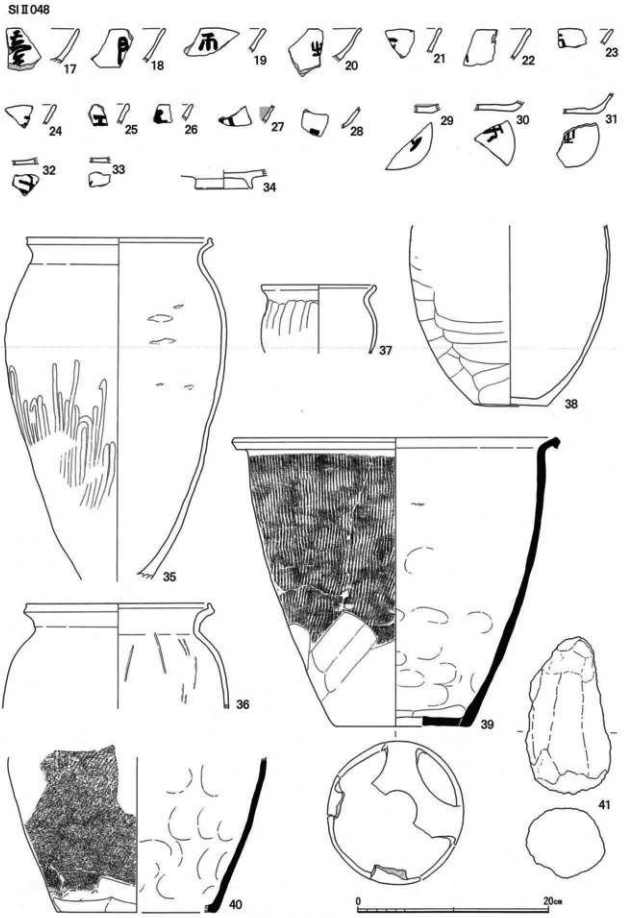
雲母粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部周辺部寄りに墨書「市」が施される。口縁から体部に半月状に意図的に割られたと考えられる。半月状の割れ口対面の外面口縁部に口縁部に淡くススが付着する。7は底部はわずかに上げ底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端に，面取り状に回転ヘラケズリが施される。口縁部に回転ヨコナデが施される。体部は底部との境が屈曲し，外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は外反し，やや尖り気味である。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含み，砂粒を少量含む。外面底部周辺部寄りに墨書「市」が施される。8は体部下部から底部である。底部はやや上げ底で，外面底部および体部下部に回転ヘラケズリが施される。ロクロ目が明瞭である。外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部中央に墨書「市」が施される。9はやや大きめの坏である。底部はやや上げ底と思われる。回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。底部中央は焼成後穿孔され，孔周辺が整形されている。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は小さく外反する。口縁はやや肥厚する。外面口縁部から体部に回転ヨコナデ，内面は全体にヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。口縁から体部下端に半月状に意図的に割られたと考えられる。外面体部正位に焼成後の線刻「鬼？」が施される。10は底部である。回転糸切りの後，外面底部周辺部に手持ちヘラケズリが施される。内面は全体にヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。内面に焼成後の線刻「十」が施される。11は底部片である。内面に焼成後の線刻「十」が施される。12は底部片である。内面に焼成後の線刻が施されるが，破片のため不明である。13は体部下部から底部である。底部中央がわずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部周辺部寄りに墨書「市」が施される。内外面に淡くスス状の炭化物が付着する。14は体部下部から底部である。底部中央がわずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアをやや多く含む。外面底部中央に墨書「市」が施される。15は底部である。平底で，外面底部回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部中央に墨書「市？」が施される。16は底部である。平底で，外面底部回転ヘラケズリが施されるが，回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部中央に墨書「巳」が施される。

17～31は坏片である。すべて墨書が施される。17～26は口縁部から体部片である。外面体部に墨書が施される。17は正位で，「喜？」である。18は正位で，「巳」である。19は正位で，「市」である。20は倒位で，「市」である。21～26は部分的で，文字は不明であるが，23～25は字形から「市」と思われる。19・25は内面にヘラミガキが施される。

27・28は体部片である。外面体部に墨書が施されるが，部分的で，文字は不明であるが，27は「市」である。27は内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

29～33は底部片である。底部外面に墨書が施される。墨書は部分的であるが，29～32は字形から「市」と思われる。29は内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

34は高台付皿の底部である。外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。高台は「ハ」字状で，やや外反する。内面にヘラミガキが施される。



第77図　SⅡ048出土遺物

35・36は土師器甕である。常総型甕で，胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。出土位置は覆土中であるが，破片での出土で，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。

35は口縁部から胴部である。胴部中位から下には縦位ヘラナデが施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は小さく外反する。内面胴部に粘土紐の接合痕が残る。器面調整はかなり粗雑と思われる。36は口縁部から胴部上位である。胴部は鶏卵形と思われる。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は内傾する。内面胴部に板状の当て具痕がある。

37は土師器小形甕である。出土位置はカマド内である。口縁部から胴部中位である。外面胴部に縦位ヘラケズリ，口縁部にヨコナデが施される。胴部はやや扁平な球形と思われる。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。口縁は丸みがある。胎土は細砂粒を多く含む。二次的被熱のため赤変している。

38は土師器甕の胴部中位から底部である。出土位置は覆土中であるが，破片での出土で，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。平底で，外面底部にヘラケズリ，外面胴部に横位ヘラケズリが施される。胴部は縦長の球形である。胎土は細砂粒を多く含む。

39は須恵器甑である。出土位置は覆土中であるが，破片での出土で，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。底部は５孔である。外面底部にヘラケズリが施される。胴部は下位に横位ヘラケズリ，上位から中位に縦位叩き目が施される。口縁部はヨコナデが施される。内面胴部はナデが施される。胴部はやや丸みのある逆円錐台形である。口縁部は短く外反し，口縁は折り返され，口縁上端は面取り状になる。胎土は砂粒・長石粒・石英粒をやや多く含む。胎土から常陸産と思われる。

40は須恵器甕で，胴部中位から底部である。出土位置は覆土中であるが，破片での出土で，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。底部は平底である。外面胴部は下位に横位ヘラケズリ，中位に縦位叩き目が施される。内面胴部は円形の当て具痕が施される。胎土は細砂粒を多く含み，赤色スコリアを少量含む。焼成色は褐色で，房総産と思われる。

41は土製支脚である。出土位置はカマド内である。縦長の円錐台形である。焼成状態から，未焼成で使用され，カマド内で焼成されたと考えられる。

42～45は円盤状土製品である。土器片を再利用している。覆土中の出土である。42は土師器甕片，43～45は土師器坏片を使用している。45は墨書が施されるが，円盤成形のため文字は不明である。端部に明瞭な刻み目はないが，土錘の可能性がある。

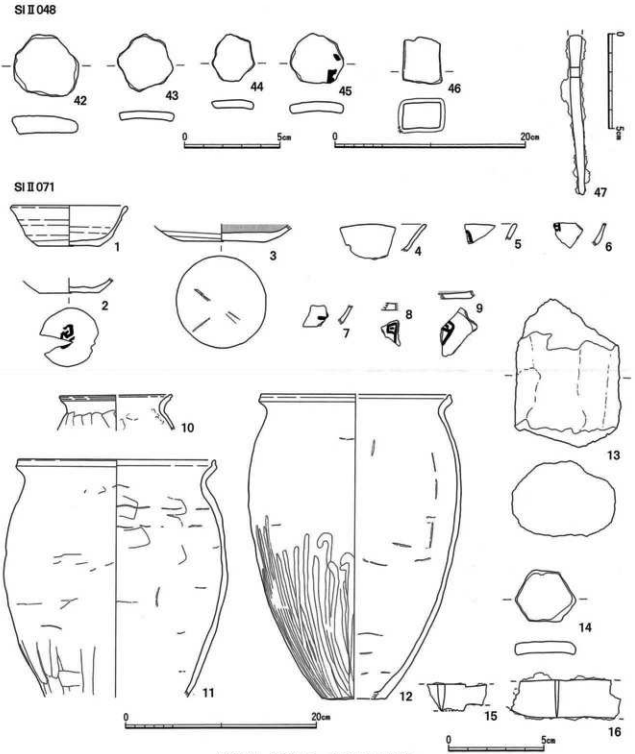
46は砥石片である。方柱形で，両端部が欠損する。端部を除く４面が磨耗している。

47は鉄製品である。断面は四角形で，大きさから釘と思われる。

SⅡ071（第78図，図版47・50・51・53）

１～３はロクロ土師器坏である。出土位置は，１はカマド内，２・３は覆土中である。

１は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反し，やや肥厚する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。二次的被熱のため赤変し，器面が剥離している。２は体部下部から底部である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，



第78図　SⅡ048・Ⅱ071出土遺物

中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部ほぼ中央に墨書「弓」が施される。３は大形の坏である。体部下部から底部である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，砂粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部に焼成前のヘラ書きが施されるが，文字か模様かは不明である。

４～９は坏片である。５～９に墨書が施される。覆土中から出土している。４・５は口縁部から体部片

である。５は外面に墨書が施されるが，破損のため，文字は不明である。６・７は体部片である。外面に墨書が施されるが，破損のため，文字は不明である。８・９は底部である。外面に墨書が施される。部分的であるが，字形から「弓」と思われる。

10は土師器小形甕である。出土位置は床面である。口縁部から胴部上位である。外面胴部上位に縦位ヘラミガキが施される。内面にはナデが施され，口縁部にヨコナデが施される。胴部はやや扁平な球形と思われる。口縁部は外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。胎土は細砂粒を多く含む。二次的被熱のため赤変している。

る。

11・12は土師器甕である。常総型甕で，胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。出土位置は，破片での出土で，覆土中から床面であるが，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。11は口縁部から胴部下位である。胴部下位は縦位ヘラケズリの後に，粗い縦位ヘラナデが施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分は小さく外反する。内面胴部にナデ調整および粘土紐の接合痕が残る。器面調整はかなり粗雑と思われる。12は底部を欠損する。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部はやや短く，強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分はほぼ直立する。内面胴部に板状の当て具痕がある。粘土紐の接合痕が残る。

13は土製支脚である。出土位置はカマド内である。断面は楕円形で，棒状に近い円錐台形になると思われる。焼成状態から，未焼成で使用され，カマド内で焼成されたと考えられる。

14は円盤状土製品である。土器片を再利用している。覆土中の出土である。土師器坏片を使用していると思われる。端部に明瞭な刻み目はないが，土錘の可能性がある。

15・16は鉄製品で，15は刀子片である。覆土中から出土している。刃部と茎部との境部分で，背側と刃側に関がある。16は穂摘み具の刃部片である。

SⅡ078（第79図，図版47～51）

１～６はロクロ土師器坏である。出土位置は，４が出入り口ピット内，他は覆土中である。

１は平底で，外面底部およびに体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は強く外反し，やや玉縁状になる。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。破片が接合するが，口縁から体部にかけて半月状に割られている。２は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部ほぼ中央に墨書「Ｐ」が施される。３は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁はほぼ直線的に開く。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部ほぼ中央および体部正位に墨書「Ｐ」が施される。口縁から体部下部を半月状に意図的に割られたと考えられる。４は平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反

する。内面底部中央がやや盛り上がる。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部ほぼ中央および体部正位に墨書「巳」が施される。口縁から体部下部を半月状に意図的に割られたと考えられる。5はやや上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。内面底部中央が盛り上がる。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部ほぼ中央および体部正位に墨書「巳」が施される。また，外面底部に焼成後の線刻「十」が施される。口縁から体部下部を半月状に意図的に割られたと考えられる。6はわずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁はわずかに外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部ほぼ中央および体部正位に墨書「巳」が施される。口縁から体部下部を半月状に意図的に割られたと考えられる。

7～9はロクロ土師器皿である。出土位置は，8がカマド内，他は覆土中である。

7はやや上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は大きく開いて立ち上がり，わずかに外反して口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒を多く含み，細雲母粒をやや多く含む。8はわずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は大きく開いて立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく内彎し，やや玉縁状である。内面にヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部中央に墨書「市」が施される。9はやや上げ底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は大きく開いて立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭である。内面にヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部中央に墨書「？」が施される。

10・11は土師器高台付皿である。出土位置は，10は床面付近，11は覆土中である。

10は外面底部に回転ヘラケズリが施される。高台はやや薄く，断面「ハ」字状で，下端部が小さく外反する。体部は大きく開いて立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁はわずかに外反する。内面はヘラミガキが施されるが，器面全体が磨耗している。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。口縁から体部上部を小さく半月状に意図的に割られたと考えられる。11は体部下部から底部である。外面底部に回転ヘラケズリが施される。高台はやや薄く，断面「ハ」字状で，下端部が小さく外反する。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。底面，高台を含む外面全体に赤彩が施されたと思われる。

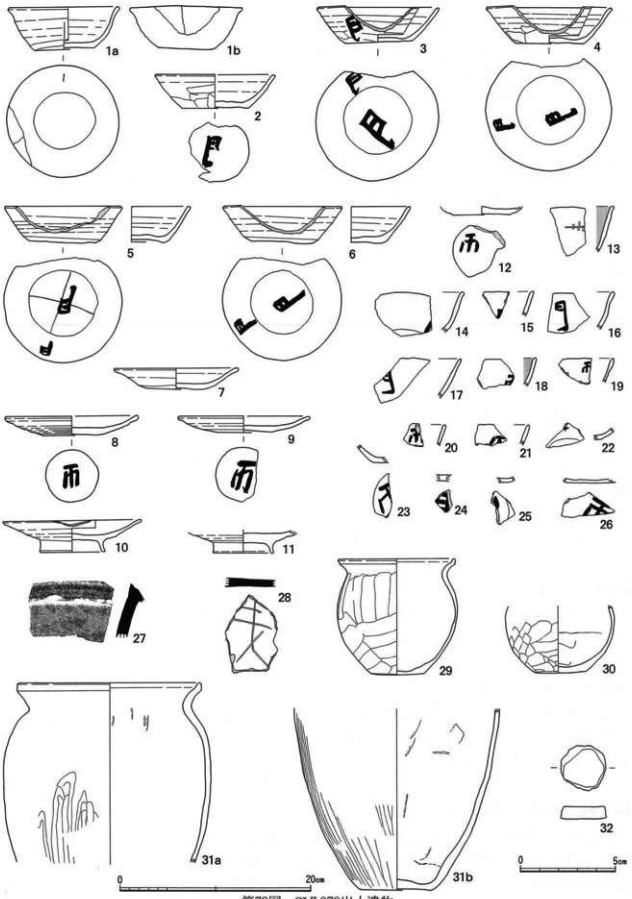
12～26は土師器坏片である。墨書，線刻が施される。出土位置は，12が床面，他は覆土中である。

12は底部である。外部周辺部に墨書「市」が施される。13～21は口縁部から体部片である。13は外面体部正位に焼成後の線刻「小」が施される。14～21は体部に墨書が施される。16は正位に「弓」，17は部分的であるが，正位に「卅」，18～21は部分的であるが，正位に「市」が施される。14・15は破損のため，文字は不明である。22・23は体部から底部である。22は体部に墨書が施されるが，破損のため，文字は不明である。23は部分的であるが，底部外面に墨書「市」が施される。24～26は底部片である。外面に墨書が施される。26は部分的であるが，「市」である。13・18は内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

27・28は須恵器甕片である。出土位置は，27が床面付近，28は覆土中である。

27は口縁部片である。櫛描波状文が施され，口縁は縁帯状で，上端部がつまみ出された様に受け口状で

SⅡ078



第79図　SⅡ078出土遺物

ある。胎土は砂粒を少量含む。古墳時代の須恵器であり混入と思われる。28は底部片である。外面に焼成前のヘラ書きが施されるが，一部分のため，文字か記号か，全体は不明である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。焼成色は黒褐色で，平安時代の房総産須恵器である。

29・30は土師器小形甕である。出土位置は両者とも床面付近である。

29は平底で，外面底部にヘラケズリが施される。胴部は上半に縦位ヘラケズリ，下半に横位ヘラケズリが施される。胴部はやや縦長の球形で，口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。口縁は丸みがある。胎土は細砂粒を多く含む。30は胴部中位から底部である。底部はやや丸底で，外面底部にヘラケズリが施される。胴部は中位から下位に位ヘラケズリが施される。胴部はほぼ球形と考えられる。内面胴部にナデ調整，粘土紐接合痕がみられる。胎土は細砂粒を多く含む。

31ａと31ｂは土師器甕である。常総型甕で，胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。接合はしないが，形，胎土から同一個体と考えられる。出土位置は，破片での出土で，覆土中から床面であるが，住居廃棄後の投棄か流れ込みと考えられる。底部は平底で，外面に木葉痕が施される。胴部中位から下位には縦位ヘラナデが施される。内面胴部にはナデ調整，板状の当て具痕が施される。胴部は尖った部分が長い鶏卵形である。口縁部はやや短く，強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段がある。受け口部分はほぼ直立する。

32は円盤状土製品である。土師器を転用している。

２．掘立柱建物（第13表）

掘立柱建物から出土した主な遺物は次のとおりである。計測値等は観察表に記載したので省略する。

SBⅡ018（第80図，図版53）

１は銅製品である。北側東西列中央の掘立柱跡の覆土から出土している。板状であるが，破片のため器形は不明である。

SBⅡ029（第80図，図版50）

１は土師器坏の体部片である。北西隅の掘立柱跡の覆土から出土している。外面に墨書「本」が施される。

SBⅡ030（第80図，図版53）

１は鉄鏃である。 北端の掘立柱跡の掘形覆土から出土しているほぼ完形である。鏃身は小さな菱形で，頸部を持つ。頸部と茎部との境に関がある。鏃身の断面は凸レンズ状，頸部と茎部は方形である。出土位置から建築儀礼に使用された可能性がある。

SBⅡ053（第80図，図版48・49）

１はロクロ土師器坏である。北側東西列西から２番目の掘立柱跡の柱痕覆土上面から，正位で出土している。やや上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。ロクロ目が

明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部周辺寄りに墨書「市」が施される。口縁から体部下部を半月状に意図的に割られたと考えられる。出土位置から建物廃棄儀礼に使用された可能性がある。

２は土師器坏の体部片である。北側東西列西から４番目の掘立柱跡の掘形覆土中から出土している。外面正位に墨書「市」が施される。

３はロクロ土師器坏である。北側東西列西から４番目の掘立柱跡の掘形覆土中から出土している。わずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部周辺寄りおよび体部正位に墨書「市」が施される。内面の一部が剥離している。

SBⅡ058（第80図，図版50）

１・２はロクロ土師器坏である。１は外面底部に墨書「子」，２は外面体部に墨書「子」が施される。

SBⅡ066（第80図）

１はロクロ土師器坏の体部下部から底部である。西側南北列中央の掘立柱跡の柱痕覆土上面から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。内面体部から底部に焼成後の線刻が施されるが，部分的で，文字，記号は不明である。出土位置から建物廃棄儀礼に使用された可能性がある。

２・３は土師器坏の底部である。外面に墨書が施される。部分的であるが，「市」と考えられる。

SBⅡ067（第80図，図版49・53）

１は土師器坏の底部である。外面に墨書が施される。部分的であるが，字形から「市」と考えられる。

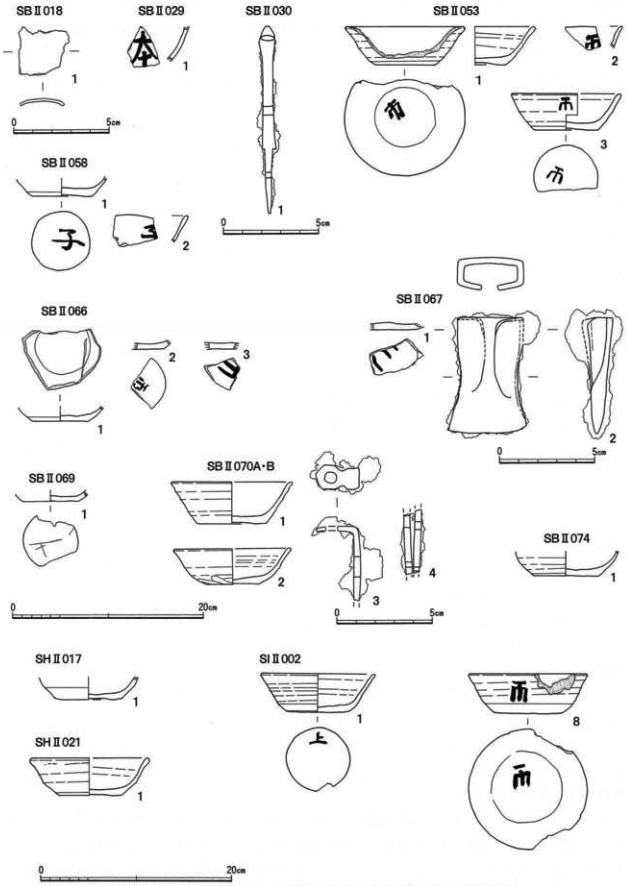
２は鉄製袋状鉄斧である。南側東西列東から２番目の掘立柱跡の柱痕覆土上面から出土している。ほぼ完形である。形状は短い撥形で，刃部はあまり広がらない。装着部が両側から折り返され，袋状になる。

SBⅡ069（第80図）

１はロクロ土師器坏の底部である。西側南北列南西隅の掘立柱跡の掘形覆土中から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面に焼成後の線刻「干」が施される。外面全体に墨痕が明瞭である。

SBⅡ070A・B（第80図，図版48・53）

１はロクロ土師器坏である。東側南北列北から２番目の掘立柱跡の柱痕覆土中から出土している。わずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアをやや多く含む。出土位置から建物廃棄儀礼に使用された可能性がある。



第80図　掘立柱建物・ピット群出土遺物及び竪穴住居出土遺物補遺

2はロクロ土師器坏である。東側南北列北から3番目の掘立柱跡の柱痕覆土中から出土している。平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，周辺部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。内面底部中央のくぼみが顕著である。

3・4は鉄製品である。3は短冊状の板の端を折り曲げた形状である。折り曲げた箇所に孔が施される。器形は不明である。4は棒状のものが2本錆着している。断面は方形で，鉄釘の可能性がある。

SBⅡ074（第80図，図版48）

1はロクロ土師器坏の体部から底部である。南北列北端の掘立柱跡の掘形覆土上面から出土している。平底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，周辺部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。内面底部中央のくぼみが顕著である。

3．ピット群（第13表）

ピット群から出土した主な遺物は次のとおりである。計測値等は観察表に記載したので省略する。

SHⅡ017（第80図）

1はロクロ土師器坏の体部から底部である。P1の覆土中から出土している。わずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

SHⅡ021（第80図，図版48）

1はロクロ土師器坏である。覆土中の2層から出土している。わずかに上げ底で，回転糸切りの後，外面底部周辺部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，やや玉縁状に肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。

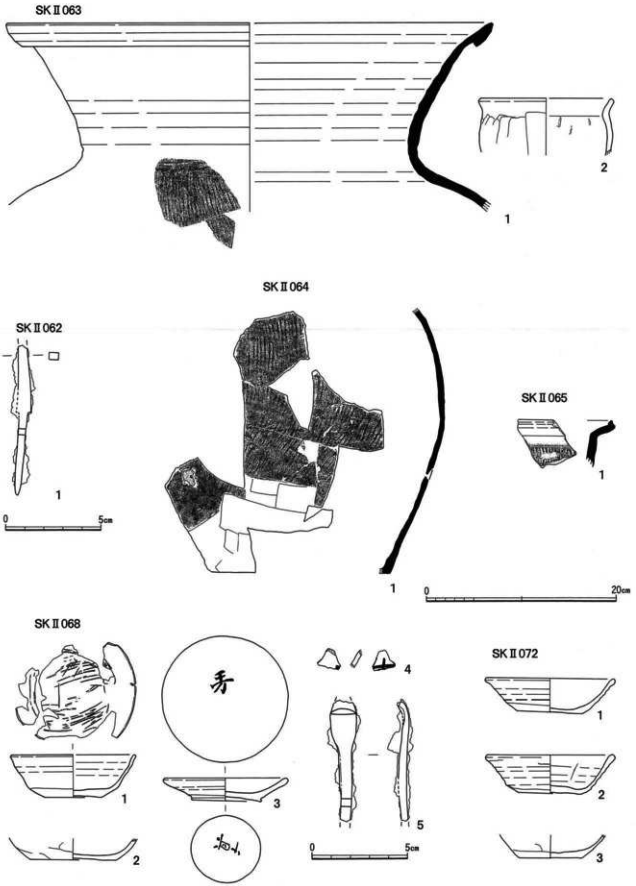
4．土　坑（第13表）

土坑から出土した主な遺物は次のとおりである。計測値等は観察表に記載したので省略する。

SKⅡ062（第81図）

1は鉄鏃である。覆土中から出土である。鏃身を欠損する。頸部と茎部との境に関を持つ。断面は方形である。

SKⅡ063（第81図，図版48）


SKⅡ063
1
2
SKⅡ064
1
SKⅡ062
1
0
5cm
SKⅡ065
1
0
20cm
SKⅡ068
1
2
3
4
5
0
5cm
SKⅡ072
1
2
3

第81図　土坑出土遺物

1は須恵器大甕の口縁部から胴部上端である。覆土中からの出土であるが，土坑が大きく攪乱を受けたため，隣接するSKⅡ062・SKⅡ064からも破片が出土する。SKⅡ064の1，須恵器大甕の胴部片と同一個体である。口縁部は大きく外反し，口縁は折り返されて縁帯状になる。外面口縁上半が面取り状になり，尖り気味である。胴部には縦位叩き目が施される。胎土は砂粒・細雲母粒を多く含む。焼成色は外面が黒褐色，内面褐色で，これらから，房総産と考えられる。

2は土師器小形甕である。覆土中から出土である。口縁部から胴部中位で，胴部には縦位ヘラケズリ，口縁部にはよこなでが施される。口縁は小さく外反し，わずかに受け口状になる。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

SKⅡ064（第81図，図版48）

1は須恵器大甕の胴部片である。SKⅡ063の1，須恵器大甕の口縁部から胴部上端と同一個体である。外面上位から中位に縦位叩き目，下位に横位ヘラケズリが施される。

SKⅡ065（第81図）

1は須恵器甕の口縁部から胴部上位である。胴部に縦位叩き目，口縁部にヨコナデが施される。口縁部は強く外反し，口縁はつまみ出された様に受け口状で，内面に段をもつ。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・雲母粒を多く含む。常総型甕と同様の胎土で，常陸産と思われる。

SKⅡ068（第81図，図版49）

1はロクロ土師器坏である。床面付近から出土している。平底で，外面底部および体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアをやや多く含む。内面底部に条線状の浅い刻み目と磨耗痕が施される。

2はロクロ土師器坏である。同一個体と思われる，口縁から体部下部と体部下部から底部が覆土1層から出土している。底部は平底で，外面底部および体部下部に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。

3は土師器高台付皿である。床面付近から出土している。底部に回転糸切り痕が残る。高台は削り出し状で，周辺部がわずかに突出する。体部は大きく開き，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は丸く，肥厚する。内面はヘラミガキが施される。胎土は胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。外面底部中央に墨書「千具」，内面底部周辺寄りに「秀」（「千」と「万」の合せ文字）が施される。

4は土師器坏の体部片である。内外両面に墨書が施されるが，部分のため，文字は不明である。

5は鉄製品で，槍鉋と考えられる。覆土1層から出土している。刃部先端と頸部下半を欠損する。刃部は剣形でいわゆる片丸造りである。先端に向かって，丸側に反っている。頸部断面は方形である。

SKⅡ072（第81図，図版48）

1・2はロクロ土師器坏である。覆土中層から出土している。1は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立

ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁は外反し，玉縁状に肥厚する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒多く含み，赤色スコリアを少量含む。二次的被熱のため器面が荒れ，内面が一部剥離している。

２は平底で，回転糸切りの後外面底部周辺および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁に至る。口縁は小さく外反し，玉縁状に肥厚する。内面底部中央がやや盛り上がる。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒多く含み，赤色スコリアを少量含む。二次的被熱のため器面が荒れている。

３は土師器小形甕の胴部下位から底部である。覆土上層から出土している。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。胴部下位に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

５．土器集中遺構（第13表）

土器集中遺構（2Z-76地点）（第82図，図版49・50）

１は須恵器坏である。平底で，回転ヘラ切りである。体部下端に，面取り状の手持ちヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ほぼ直線的に口縁に至る。口縁は強く外反し，やや肥厚する。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。焼成色は黒色で，胎土が土師器に似てるので，房総産と考えられる。

２は土師器坏である。平底で，回転糸切りの後に，外面体部周辺部および体部下端部に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反する。ロクロ目が明瞭である。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。

３はロクロ土師器皿である。平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面体部周辺寄りに，墨書「吉」が施される。

４はロクロ土師器坏の体部から底部である。平底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面体部に墨書が施されるが，部分のため文字は不明である。

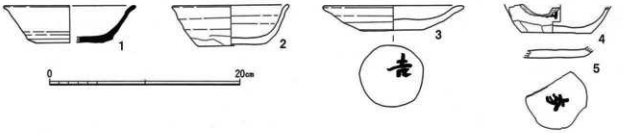
５はロクロ土師器坏の底部片である。外面に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒を多く含む。外面中央に墨書「夯」（「大」と「万」の合せ文字）が施される。

６．遺構外出土遺物（第82図，第13表，図版49～51）

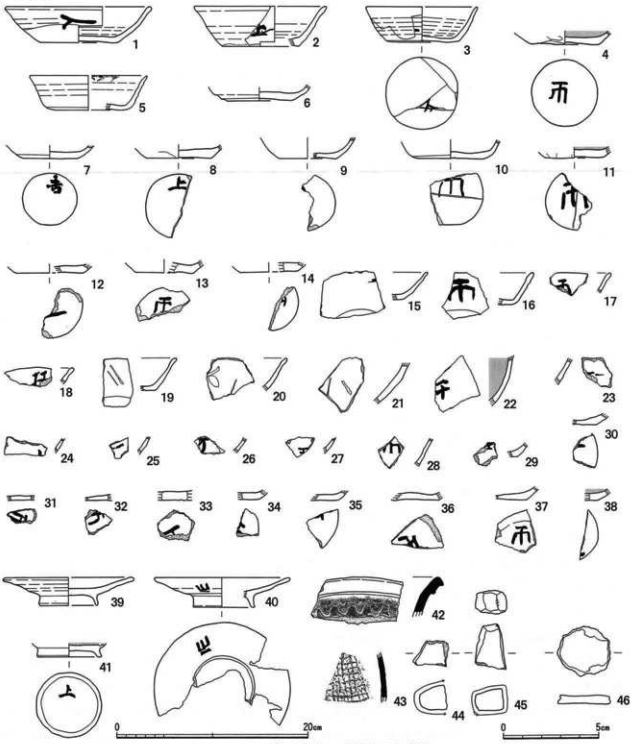
グリッドおよび時期の異なる遺構からの出土である。出土グリッド・遺構は観察表のとおりである。

１～３はロクロ土師器坏である。１は平底で，外面底部および体部下部に回転ヘラケズリが施される。体部はやや大きく広がって立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁は小さく外反し，丸く肥厚する。ロクロ目が明瞭である。内面にやや粗いヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面体部正位に墨書「人？」が施される。２は平底で，外面底部および体部下端に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，わずかに内彎して口縁に至る。口縁ゆるやかに外反し，尖り気味である。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面体部に墨書が施される。部分的であるが，正位で「上」と考えられる。３はわずかに上げ底で，回転糸切りの後に底部外面周辺部に回転ヘラケズリが施される。体部下部には調整は無い。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわ

土器集中遺構（2Z-76）



遺構外



第82図　土器集中遺構・遺構外出土遺物

ずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面体部やや周辺寄りに墨書「上」が施され，外面体部にも墨書が施されるが，部分的で，文字は不明である。4はロクロ土師器坏の体部下端から底部である。わずかに上げ底で，外面底部に手持ちヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。体部下端に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部中央に墨書「市」が施される。5は平底で，底部外面に回転ヘラケズリが施される。体部は外傾して立ち上がり，ゆるやかに内彎して口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含み，赤色スコリアを少量含む。内外口縁にススが付着する。

6～14はロクロ土師器坏の底部である。6はわずかに上げ底で，回転糸切りの後に外面底部周辺部に回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。7は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒・やや多く含む。外面底部周辺寄りに墨書「吉」が施される。8は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部周辺部に墨書「上」が施される。9は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施されるが，中心部に回転糸切り痕が残る。胎土は細砂粒・細雲母粒・赤色スコリアを少量含む。外面底部中央部に墨書が施されるが，部分のため文字は不明である。10は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を多く含む。外面底部中央部に焼成前のヘラ書き「－」と，墨書「市」が施される。11は平底で，回転糸切りの後に底部外面周辺部に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。外面底部中央部に焼成後の線刻「－」と，墨書「市」が施される。12は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。外面底部中央部に墨書が施されるが，部分のため，文字は不明である。13は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒をやや多く含む。外面底部中央に墨書「市」が施される。14は平底で，外面底部に回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面底部中央に墨書が施されるが，部分のため，文字は不明である。

15～38は土師器坏片である。19～21を除いて，墨書が施される。

15～18は外面体部に墨書が施される。16・17は正位で「市」である。18は部分であるが，正位で「任」の可能性がある。15は部分のため文字は不明である。

19～21は外面体部に焼成後の線刻が施されるが，部分のため文字・記号は不明である。

22～29は外面体部に墨書が施される。部分のため文字は不明であるが，26は正位で「万」，28は正位で「市」の可能性がある。

30～38は外面底部に墨書が施される。37は「市」である。他は部分で，文字は不明であるが，31・32・36は「市」の可能性がある。

22・38は内面にヘラミガキと黒色処理が施される。

39～41は土師器高台付皿である。39は外面底部に回転ヘラケズリが施される。高台は断面「ハ」字状で，ほぼ直線的である。体部は大きく開き，直線的に口縁に至る。口縁はわずかに外反する。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。二次的被熱のため器面が荒れ，剥離している。40は高台は薄く，断面「ハ」字状で，端部が小さく外反する。体部は大きく開き，わずかに外反して口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。内面はヘラミガキが施される。胎土は細砂粒・細雲母粒をやや多く含む。外面体部に倒位で墨

書「市」が施される。41は底部から高台部である。外面底部に回転ヘラケズリが施される。高台は厚く，断面はやや広がった「ハ」字状で，端部は平坦である。内面はヘラミガキと黒色処理が施される。胎土は細砂粒・細雲母粒を少量含む。外面底部周辺寄りに墨書「上」が施される。

42は須恵器甕の口縁部片である。折り返し口縁で，折り返しの上端と下端が突帯状になる。折り返し口縁下に櫛描波状文が施される。胎土は砂粒・長石粒をやや多く含む。古墳時代の須恵器である。

43は須恵器甕の胴部片である。外面に格子叩き目が施される。胎土は砂粒・長石粒・石英粒・細雲母粒を多く含む。焼成色が明褐色で，胎土が常総型甕に類似するので，常陸産と思われる

44・45は砥石片である。小形で，遺存部分から四角錐形状と思われる。

46は円盤状土製品である。土師器片を転用している。

第11表　奈良・平安時代竪穴住居観察表

計測値（　）内の数値は推定値

遺構No.	規模 (主軸×副軸 m)	主軸方向	面積 (上：床面積 ㎡ 下：貼床部面積 ㎡)	深度 (cm)	柱穴深さ (cm)	出入口 (深さ　cm)	位置	カマド位置	特記遺物・備考	時期
SI Ⅱ001	4.98×3.90 4.14×3.90	N-78°-W	13.54	40～65		29	全周（掘を除く）	西壁中央	カマド周辺に焼ラ状しの堆状地区有り。竪穴は掘を含む数値。掘の床面からの高さは27cm、焼行きは70cm程度。掘を含む面積は16.44㎡。	Ⅳ期
SI Ⅱ002	3.50×3.98	N-108°-E 掘　N-17°-E	12.52	49～55		20 掘 18	全周	東壁中央 掘　北壁中央		Ⅱ期
SI Ⅱ003	3.98×3.85	N-71°-W	13.00	47～50		9	全周	西壁中央		Ⅲ期
SI Ⅱ005	3.46×3.26	N-85°-W 掘　N-3°-E	9.86	49～60		14 掘 15	全周	南壁中央 掘　北壁中央	3箇所の壁位穴あり。それぞれ別のあたりもあり。掘面底からの深さは、P1が24cm、P2が45cm、P3が23cm。床面からの深さは、P1が20cm、P2が13cm、P3が23cm。	Ⅲ期
SI Ⅱ006	4.54×4.48	N-14°-E 掘N-106°-E	16.79 7.80	32～62	P1 52 P2 55 P3 55 P4 60	17 掘 15	全周	北壁中央 掘　東壁中央	4箇所の壁位穴あり。底面からの深さは、P5が60cm、P6が57cm、P7が107cm、P8が80cm。床面からの深さは、P5が14cm、P6が24cm、P7が44cm、P8が22cm。	Ⅴ期
SI Ⅱ007	4.10×？	N-72°-W 掘　N-17°-E	(15.2)	18～26		？ ？	全周か	西壁中央 掘　北壁中央	遺存不良	Ⅲ期
SI Ⅱ008	？×6.10	(N-45°-W)	(33.65) (7.85)	41～70	P1 ？ P2 75 P3 73 P4 ？	18	全周か	（北西壁中央）		Ⅳ期
SI Ⅱ009	4.70×4.85	N-22°-E	(19.9) (4.5)	21～22	P1 64 P2 42 P3 30 P4 ？	39	全周か	北壁中央		Ⅴ期
SI Ⅱ012	3.66×3.80	N-4°-W 掘　N-86°-E	12.35	46～50		17	全周	北壁中央		Ⅳ期
SI Ⅱ014	3.58×3.66	N-25°-E	10.78	41～68		13	北東壁欠	北東壁中央		Ⅴ期
SI Ⅱ024	3.70×？	(N-25°-E)	(10.9)	27		？	遺存部全周	北東壁中央？	遺存不良	Ⅳ期
SI Ⅱ031	4.26×4.60	N-68°-W 掘　N-21°-E	18.95 6.30	6～22	P1 23～36 P2 24～50 P3 10～22 P4 21・34	12 掘 18	一部欠だが本来は全周か	西壁中央 掘　北壁中央	各柱穴は整備のピットがあり、建て替えに伴い、位置を変えている。ピット数は、P1が4、P2が4～5、P3が2～3、P4が2。南壁に壁柱穴あり。深さは平面が37cm、東側が28cm。	Ⅴ期
SI Ⅱ033	3.24×4.05	N-14°-E	12.49	12	P1？ 18 P2？ ？ P3？ ？ P4？ 28	26 掘？ 11	全周か	北壁中央 掘？　東壁中央？		Ⅴ期
SI Ⅱ037	？×？	N-6°-E (W)	？	5		？	全周？	？		
SI Ⅱ044	？×3.93	N-7°-W 掘　N-82°-E	(14.2) (6.3)	27～47	P1 ？ P2 50 P3 66 P4 ？	33 掘 31	ほぼ全周か	（北壁中央） 掘　東壁中央		Ⅳ期
SI Ⅱ046	？×？	N-30°-E	？	5		？	全周？	北東壁有寄り		Ⅳ期
SI Ⅱ047	3.80×3.80	N-19°-E	11.62	39～68		20	東壁3/5南東壁南東・西壁5/5寄り	北壁中央		Ⅲ期
SI Ⅱ048	3.88×3.70	N-77°-W N-14°-E	11.16	29～73		16 掘 20	ほぼ全周 掘　全周	西壁中央 掘　北壁中央		Ⅴ期
SI Ⅱ071	3.65×3.78	N-84°-W	10.55	30～39		20	ほぼ全周	西壁やや右寄り		Ⅴ期
SI Ⅱ075	3.92×3.64	N-67°-W	11.27	25～45		46	ほぼ全周	北西壁中央		Ⅳ期

Ⅰ期　8世紀前葉　　Ⅱ期　8世紀後葉～9世紀初頭　　Ⅲ期　9世紀第1四半世紀　　Ⅳ期　9世紀第2四半世紀　　Ⅴ期　9世紀第3四半世紀　　Ⅵ期　9世紀末～10世紀前半頃

・（『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査書　XⅥ　―印西市船尾白幡遺跡―　平成16年3月（財）千葉県文化財センター』第3章　第2節から）

第12表　掘立柱建物観察表

( )は推定値

遺構No.	規格(桁×梁)	構造	桁行長(m)	梁行長(m)	柱間寸法(m)	面積(㎡)	柱穴径(cm)	柱穴深(cm)	柱穴深 隅平均(cm)	柱穴深 中間平均(cm)	桁行方位	備考
SBⅡ015	2間以上×2間	側柱	3.64以上	5.08	桁 1.63～1.88 梁 2.54	18.2以上	36～116	36～64	52	38	N-42°-W	
SBⅡ018	2間×2間	側柱	3.76～4.18	3.70～4.04	1.88～2.18	15.52	50～88	34～60	47.5	45.5	N-25°-E	
SBⅡ029	1間×2間	側柱	3.24～3.72	3.34	桁 3.24～3.72 梁 1.55～1.75	12.12	34～50	18～60	33	41	N-88°-E	
SBⅡ030	？×2間	側柱か	?	3.98	1.94～2.07	16以上？	78～92	22～44	41	22	N-71°-W	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ032	2間？×2間	側柱か	2.13以上	4.02	1.90～2.13	16以上？	78～90	38～44	43	34	N-85°-E	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ041	1間以上×1間以上	側柱	3.86	2.46以上	2.46～3.86	14以上？	84～90	12～40	41	21	N-46°-W	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ045	2間以上×3間	側柱	3.54以上	5.66	1.46～2.22	20以上？	42～100	14～38	24.5	22.5	N-12°-E	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ052	3間(以上？)×2間？	側柱	2.65以上	4.54(以上？)	1.56～2.50	20以上？	78～108	50～61	61	54	N-26°-E	
SBⅡ053	3間×2間？	側柱	6.14	2.1以上	1.92～2.22	25.5前後？	89～128	66～90	85	73	N-77°-W	
SBⅡ056	1間以上×1間以上	側柱	2.20以上	2.85以上	2.20～2.85	?	75～96	26～40	26	37	N-20°-E	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ057	2間？×？	側柱	?	3.34	1.75～1.82	?	22～38	18～28	23	28	N-7°-E	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ058	1間以上×1間以上	側柱	2.20以上	2.18以上	2.18～2.20	?	48～80	48～80	40	38	N-16°-E	桁梁逆の可能性あり
SBⅡ066	3間×2間	側柱	6.36・6.46	4.64・4.74	1.85～2.55	30.34	90～156	50～84	77	69.5	N-77°-W	
SBⅡ067	身舎　3間(以上？)×2間	側柱	3.88以上	4.04・4.68	1.60～2.52	身舎(22前後・25前後)	90～114	76～98	62	49	N-78°-W	北辺側に片庇
	全体　3間(以上？)×3間		3.88以上	6.00		全体(33前後)	60～114	54～98				
(庇)	3間(以上？)		3.88以上	1.30～1.95？	1.30～2.08	(7前後～10.5前後)	60～80	11～48	34	29		
SBⅡ069	2間(以上？)×2間	側柱	5.34以上	4.56	桁 2.64～3.08	24以上(～36.5前後？)	76～104	58～86	68	60	N-77°-W	
					梁 2.26～2.36							
SBⅡ070A	3間×2間	側柱	6.40・6.46	4.06・4.10	1.88～2.40	26.14	90～126	59～83	68.5	70	N-20°-E	
SBⅡ070B	3間×2間	側柱	6.38・6.40	4.08・4.10	1.70～2.40	26.24	92～128	54～90	81	68	N-18°-E	
SBⅡ074	3間×2間(以上？)	側柱	6.12	2.5以上	2.02～(2.5)	30前後	102～118	76～106	94	79	N-17°-E	
SBⅡ075	身舎　？×2間	側柱	?	5.00	2.30～2.70	身舎(25以上？)	82～104	46～62	54	64	N-73°-W	東辺側に片庇
	全体　？×2間		?	5.00		全体(30前後？)	60～114	54～98				
(庇)	2間？		1.05	5.00？	2.5	5.25？	46～90	18～24	24	18		

第13表　奈良・平安時代遺構・遺構外出土遺物観察表

（　）は復元値、［　］は現存値を示す

遺構・遺物番号		器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
SE1001	1	土師器坏	12.2	4.0	6.6	100%	内 暗褐色 外 暗茶褐色	良好	ロクロ成形　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底熱　内面銀鏡　外面煤付着痕有り	76
	2	土師器坏	12.8	5.0	7.3	100%	淡橙色～暗褐色	良好	ロクロ成形　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　灯明器	8・11・50・64・65
	3	土師器坏	14.1	5.2	6.8	100%	淡橙色	良好	ロクロ成形　内 ヘラミガキ　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	80
	4	土師器坏	13.3	4.3	6.4	100%	内 黒色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ヘラミガキ　外 回転ヘラケズリ　底 回転ヘラケズリ　底外面に炭ー黒炭付き	79
	5	土師器坏	13.3	4.3	6.7	100%	内 黒色 外 明褐色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　内面黒色処理	9・10・66・67
	6	土師器坏	(13.1)	4.8	6.6	60%	明橙褐色～暗褐色	良好	ロクロ成形　内 ヘラミガキ　外 回転ヘラケズリ　ヘラミガキ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	52・64
	7	土師器坏	11.3	4.2	6.2	95%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　墨書文字　底外面墨書不明（本来）	44・45・47
	8	土師器坏	11.4	5.4	7.2	90%	内 赤褐色 外 明褐色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り	69
	9	土師器坏	11.9	4.5	6.3	100%	暗褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　ヨコナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	71
	10	土師器坏	11.4	4.3	6.3	95%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	102
	11	土師器坏	11.4	4.4	5.9	100%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	70
	12	土師器坏	11.8	4.0	6.3	100%	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）内面銀鏡　底熱　内面に稀薄ー薄ー黒炭付き　内面明瞭暗褐色に変色	78
	13	土師器坏	13.0	5.0	7.4	100%	内 橙褐色 外 淡黄褐橙色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	62
	14	土師器坏	13.4	5.3	7.1	100%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	75
	15	土師器坏	13.1	5.1	7.2	100%	淡橙色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	74
	16	土師器坏	12.3	4.2	6.5	100%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ヨコナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）灯明器	72
	17	土師器坏	21.4	7.1	8.5	95%	淡橙色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	9・89・91・109・110
	18	土師器坏	11.35	4.0	6.6	100%	内 赤褐色 外 黒褐色	良好	ロクロ成形　内 ヨコナデ　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　体外面墨書正位（墨）内面銀鏡　灯明器	77
	19	土師器坏		(5.0)	6.8	30%	暗褐色	良好	ロクロ成形　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	98
	20	土師器坏		(2.3)	(5.8)	35%	淡橙色	良好	ロクロ成形　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	10・11・56
	21	土師器坏	22.0	7.5	9.2	70%	内 淡褐色 外 淡褐色、明褐色	良好	ロクロ成形　内 ミガキ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書（住）	86・91・109
	22	土師器坏	11.5	3.6	6.7	95%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書「十」灯明器　内面銀鏡	79
	23	土師器坏				5%	橙褐色	良好	ロクロ成形　底外面墨書「了」	11
	24	土師器坏		(1.7)	(7.0)	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形　外 平行ヘラケズリ　底 回転糸切り　平行ヘラケズリ　底外面墨書「篇？」	12
	25	土師器甕	11.2		5.0	50%	明褐色・黒褐色	良好	内 ヘラナデ　ナデ　外 平行ヘラケズリ　ナデ　底 平行ヘラケズリ	108
	26	石製品	長さ 2.6	幅 2.3	厚さ 1.8				重さ11.4g	9
	27	石製品	長さ 4.9	幅 4.3	厚さ 0.5～0.9				重さ37.61g　硬石	43
	28	石製品	上面径 (2.0)	下面径 (1.8)					重さ4.6g　磁石の可能性有り	58
	29	軒瓦	長さ 3.2	幅 2.2	厚さ 1.6				重さ3.04g	110
	30	須恵器甕	20.6	34.3	14.1	100%	内 暗灰褐色 外 黒灰褐色、黒灰褐色	良好	内 ナデ　ヨコナデ　外 タタキ　ヨコナデ　ヘラケズリ　底 ヘラケズリ　ナデ	10・69・110・63
	31	須恵器甕	(23.0)			10%	橙褐色	良好	内 ナデ　ヘラナデ　ヨコナデ　外 ナデ　ヘラナデ　ヨコナデ	59・84・87・90
	32	土製支脚	広さ 18.5	厚 7.5～8.5			外 赤褐色	赤花に焼い		106
	33	円錐状土製品	長径 3.8		厚さ 0.7		内 暗灰色 外 灰黒色		重さ12.3g	8
	34	鉄製品 刀子	長さ 22.3	幅 12.5	厚さ 4.0	100%			重さ13.2g　茎部　刃部長13.7　刃部幅1.55　刃部厚0.5～4.0　茎長6.5　茎幅1.1　茎厚（刃側）0.4　（刃先）0.2　茎部は木製手柄が残り、鞘質の痕が茎部部分を覆う	85
	35	鉄製品 釘	長さ 21.35	幅 3.15	厚さ 0.35	100%			木質が全面に多く付着	68
	36	鉄製品 鉄鎌	長さ 16.8	幅 1.15	厚さ 1.0				重さ67.8g　？鎌存　？鎌分に木質も遺存　工具か	60
	37	鉄製品 鉄鎌	長さ 10.55	幅 0.6	厚さ 0.45				重さ16.7g　刃部長 2.53　鷲棟幅0.6　鷲棟厚さ0.45	3・7
	38	鉄製品 鉄	長さ 2.9	幅 1.7	厚さ 0.2				重さ5.0g	25
	39	鉄製品 鏃	長さ 11.7	幅 0.45	厚さ 0.5	100%			重さ10.0g　茎形	29
SE1002	1	土師器坏	11.7	6.6	4.0	75%	内 橙褐色 外 淡黄褐色～暗褐色	良好	ロクロ成形　外 回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書「上」	1・3・4・53・90
	2	土師器坏	11.8	(6.8)	4.0	50%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ヨコナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	30・52
	3	土師器坏	(11.6)	(7.6)	4.4	45%	橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ	1・4・7
	4	土師器坏	11.4	6.6	4.2	75%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形　内 ヨコナデ　外 ヨコナデ　回転ヘラケズリ　底 回転糸切り　回転ヘラケズリ　底外面墨書「住」	50・85
	5	土師器坏	(11.6)		(5.1)	20%	内 黒色 外 暗色～暗褐色	良好	ロクロ成形　内 ヘラミガキ　外 平行ヘラケズリ　内面黒色処理	1・2・56

遺構・遺物番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	成形	特徴	遺物番号
6	土師器杯	10.7	7.7	4.0	50%	内 明褐色 外 橙褐色		ロクロ成形 底 切り離し不明 手持ちヘラケズリ 被熱を受けず、内外面の磨耗著しい	1・4・101・104
7	土師器杯			3.7	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形 手持ちヘラケズリ 体外面部著横位「福？」 口縁部内外面既ずれ 灯明器？	42
8	土師器杯	12.3	7.4	4.1	85%	内 淡褐色 外 明赤褐色・淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ、回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 意匠図案 体外面正位「福」 見外面「福」 灯明器？	62・72・77
9	土師器椀	(15.4)	(9.3)	[18.3]	30%	内 淡褐色・黒褐色 外 橙褐色・淡褐色	良好	内 ナデ、ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 三代文字 内面煤付着	1・38・73・78・80・91・95・97
10	土師器杯			底片	1%	内 橙褐色 外 橙褐色	良好	底 ロクロ成形 底外面墨書「仙」	103
11	土師器杯				20%	内 淡灰褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 底外面墨書「任」	2
12	土師器甕	(11.1)		[5.7]	30%	内 黒褐色 外 黒褐色・淡赤褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ 手持ちヘラケズリ	1・67・69
13	碗石	長さ 5.4	幅 4.0	厚さ 2.9				重さ105.03g	86
14	土製品	長さ 8.3	幅 6.5	厚さ 0.9	100%	内 暗赤褐色・橙褐色 外 橙褐色・暗褐色	良好	ロクロ成形 土師器杯高台の転用 打ち欠きあり 土錘か 土器として以外 手持ちヘラケズリ	94
15	鉄製品刀子	長さ 2.2	幅 0.6	厚さ 0.15				重さ0.8g	1
16	鉄製品釘	長さ 24	幅 0.35	厚さ 0.35				重さ1.15g	1
17	鉄製品鉄鏃	長さ 7.55	幅 3.5	幅2～3.4				重さ23.53g 刃部長5.1 刃部幅3.9 刃部厚0.2 茎長3.45 茎幅0.75 茎厚0.3 茎厚0.4	5
18	鉄滓	長さ 7.55	幅 10.2	厚さ 3.05				重さ193.6g 鍛冶剥離滓	48
19	鉄滓	長さ 4.25	幅 6.9	厚さ 1.65				重さ40.3g 鍛冶剥離滓	47
SI Ⅱ003	土師器杯	12.1	(6.6)	3.9	40%	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ ヨコナデ 底 手持ちヘラケズリ	3・28・82・83
2	土師器杯	(12.2)		[3.8]	30%	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 口縁部内外面の一部油煙付着 打明器？	3・24・25
3	土師器杯	(11.9)	(8.3)	3.9	30%	暗褐色	良好	ロクロ成形 底 手持ちヘラケズリ 被熱 体内面の一部にタール付着 灯明器？	3・32
4	土師器杯	(12.0)	(7.0)	4.0	30%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラキリ 体外面墨刻正位「中」	2・27・28
5	土師器杯	10.4	6.1	3.8	100%	内 淡橙褐色・橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ヨコナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書(墨刻) 体外面 「用」 底外面「用」	51・60
6	土師器杯	11.5	6.9	3.7	75%	淡灰褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書(墨刻) 体外面 「正」	3・8・30・45
7	土師器杯			[3.7]	底片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書横位「正」	10
8	土師器杯	12.0	8.0	3.8	45%	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書正位「和」	40
9	土師器杯	(11.8)	(6.2)	3.5	40%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外墨書「？」	1・52
10	土師器杯		(5.6)	[1.6]	30%	内 橙褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「和」	72
11	土師器杯				底片	褐色	良好	内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 体外墨書正位「任」	4
12	土師器椀	(12.8)	7.2	12.5	50%	内 淡橙色 外 淡褐色・黒褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	43
13	土師器椀		5.0	[4.6]	20%	内 赤褐色・茶褐色 外 茶褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	3・4・78・81・84
14	土製支脚	長さ 7.7	幅 8.8	厚さ 5.1		淡黄褐色			63
15	鉄製品鎌	長さ 21.05	幅 3.6	厚さ 2.5	100%			重さ64.36g	31
SI Ⅱ005	須恵器杯	13.1	6.5	4.6	55%	灰色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 刻印無変	71・105
2	土師器杯	12.4	7.6	4.0	60%	内 赤褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	72・105
3	土師器杯	(12.4)		[4.5]	25%	内 黒褐色・明赤褐色 外 赤褐色・黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 被熱 内面黒色処理	14・15・65・66・84・106・111
4	土師器杯		(7.0)	[1.8]	10%	内 淡橙色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	106
5	土師器椀	21.3		[15.3]	25%	内 暗褐色 外 黄褐色・暗褐色	良好	内 ナデ、ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ・ヘラナデ ヘラミガキ 黒色処理	3・6・8・17・18・32・80・87・89・91・105・108
6	土師器椀		8.4	[8.6]	15%	内 暗黄褐色 外 淡褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラミガキ 底 手持ちヘラケズリ 黒色処理	80・106
7	鉄製品鎌	長さ 15.1	幅 2.15	厚さ 0.3	100%			重さ55.7g 全体に繊維質が付着	92
SI Ⅱ006	土師器杯	12.0	6.6	3.9	100%	淡橙色・赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	308
2	土師器杯	12.3	6.6	4.1	95%	内 淡褐色 外 淡褐色・黒褐色	良好	ロクロ成形 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	2・3・97・285・286
3	土師器杯	13.0	5.6	4.6	90%	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ ロ縁、体部の一部意図的なけり入れ	282
4	土師器杯	(15.2)	(7.9)	4.1	50%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外面墨書不明「？」	4・29・40・41・43・119・120・183
5	土師器杯	(15.2)		[3.9]	30%	内 暗茶褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 被熱	326
6	土師器杯	(11.8)	(7.0)	3.5	40%	内 暗赤褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内面墨刻「十」	3・92・265
7	土師器杯	23.6	10.9	9.0	75%	内 明赤褐色・黒褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ ミガキ 外 ヨコナデ 底 回転糸切り ヘラナデ? 口縁、体部 意図的なけり入れ	275・287
8	土師器杯	12.2	6.6	3.6	90%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転糸切り ナデ 底内面墨書「宮」	4・68・268・313
9	土師器杯			3.9	[2.3]	35%	内 黒色・赤褐色 外 暗色・淡褐色	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面黒色処理 被熱	255・256・259・296

遺構・埋蔵番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
10	土師器坏	(14.6)	(9.0)	4.3	45%	内 黒色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 糸切り 糸切り 回転ヘラケズリ 内面黒色処理 底外面墨書「大？」	2・283
11	土師器坏		(6.6)	[3.1]	25%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 黒色処理 底内面「保？」 底外面「？」	47・151
12	土師器坏		6.4	[2.9]	50%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「吉」	67・128・267
13	土師器坏		7.7	[3.9]	35%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「内」	184・303
14	土師器坏	(15.0)	(7.0)	4.5	30%	内 淡黄褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り？ 回転ヘラケズリ 底外面墨書「保」	2・90・230
15	土師器坏			[3.6]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書正位「賀？」	4・98
16	土師器坏			[3.6]	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外面墨書倒位「久」	77・223
17	土師器坏		(6.3)	[1.1]	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「台」	4・15
18	土師器坏			[4.3]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 体外面墨書正位「賀」	184
19	土師器坏			[0.6]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「宮」	4
20	土師器坏			[2.3]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外面墨書「？」	3
21	土師器坏			[1.5]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書正位「賀？」	4
22	土師器坏			[1.9]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 体外面墨書正位「賀？」	30
23	土師器坏			[1.6]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「？」	3
24	土師器坏			[1.1]	破片	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	1
25	土師器坏			[2.4]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外面墨書正位「賀？」	4・7
26	土師器坏			[0.9]	破片	橙褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	3
27	土師器 西谷付属	13.3	6.5	3.0	100%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ 口縁部に火恒 焼絶の？	312
28	土師器 高谷付属	13.9	6.7	3.1	80%	内 淡黄褐色・黒褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 回転糸切り ヘラケズリ ナデ	324・325
29	土師器皿	(14.6)		[1.3]	30%	内 橙褐色 外 橙褐黄色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 内面黒色 底 糸切 無調	3・168・169
30	土師器皿	(14.6)		[2.2]	30%	明紅褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ	276
31	土師器皿		(6.4)	[4.1]	15%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ ヘラナデ 底外面墨書「？」	4・44
32	土師器 高谷付属	14.0	6.5	2.8	80%	内 淡褐色・橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ナデ 底 切り離し不明 ナデ 底内緩刻	9・307・311
33	土師器 高谷付属	(21.5)		[4.6]		橙褐色	良好	ロクロ成形 高台部ヨコナデ 底 回転ヘラケズリ ナデ	171・173・234・274
34	土師器鍋	(20.7)		[10.0]	10%	橙褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ ヨコナデ ヘラミガキ 平縁型	187・308
35	土師器壺	(21.1)		[25.0]	25%	内 褐色～暗茶褐色 外 淡褐色～暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ ヨコナデ 手持ちヘラケズリ ヘラミガキ 金鉢型	366
36	土師器壺	(20.5)		[26.5]	35%	内 暗茶褐色 外 暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ ヨコナデ ヘラミガキ 受口状口縁 山部少々付着	3・167・168・277・278・279・280
37	砥石	長さ 6.4	幅 4.2	厚さ 2.5				重さ84.6g	131
38	砥石	長さ 6.3	幅 3.9	厚さ 2.2				重さ68.4g 表が1箇所、長側面の縁から裏側面に貫通 側部用の紐石（紐ずれ）	8
39	鉄製品 釘	長さ 9.65	幅 0.5	厚さ 0.45	100%			重さ10.4g 完形	5
40	鉄製品 鉄鏃	長さ 10.2	幅 3.7	厚さ 0.4				重さ27.7g 刃部長5.5 刃部幅3.7 刃部厚0.35 茎部長4.7 重量164 茎部幅0.35 茎部厚0.4 鏃品か？	297
41	鉄製品 鎌	長さ 20.8	幅 2.8	厚さ 0.55	100%			重さ92.2g 鎌	297
42	鉄製品 刀子	長さ 2.75	幅 1.5	厚さ 0.25				重さ2.18g	165
43	鉄製品 釘？	長さ 3.0	幅 0.2	厚さ 0.2				重さ0.6g	295
44	鉄製品 鉄鏃	長さ 17.35	幅 2.25	厚さ 0.3	100%			重さ20.1g 長形 刃部長2.25 刃部幅1.75 刃部厚0.3 茎部長9.5 茎部幅0.7 茎部厚0.4 重さ5.8 茎幅0.4 茎厚0.4	261
SH 007	1 土師器坏	10.5	(6.3)	3.9	70%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 底外面墨書「川」	2・3・6・19・20
	2 土師器坏	11.4	5.8	3.6	100%	内 灰褐色 外 淡黄色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	43・53・54
	3 土師器坏		6.3	[2.8]	40%	内 黒色 外 暗赤褐色・橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面黒色処理	54・53
	4 土師器坏			[1.4]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書倒位「郡」	2
	5 土師器甕	21.1		[26.4]	60%	淡褐色～暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ ヨコナデ ヘラミガキ 受縁型 内面放射痕有り	3・11・15・37・52・58
	6 上師器鉢	長さ 11.4	幅 11.9	厚さ 10.5					42・46
SH 008	1 土師器坏	11.9	6.9	3.8	90%	暗黄色・褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 黒色	122・158
	2 土師器坏	(12.0)	(6.8)	4.0	55%	黄色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 同転糸切り 回転ヘラケズリ	1・4・24・158
	3 土師器坏	(11.9)	(6.0)	4.1	35%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 体外面墨書正位「賀」内面に黒鉛処 黒色	168
	4 土師器坏		(7.0)	[2.8]	20%	内 褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書2箇所 底外面「明」 外内面黒色処理	44・155

遺構・遺物番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	成或	特徴	遺物番号
5	土師器杯	20.9	9.9	6.2	70%	内 黒色 外 褐色・橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 ヘラナデ 底 平持ちヘラケズリ ヘラミガキ 内面黒色処理	157
6	土師器杯			[3.3]	破片	赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外面墨書正位「竹」	155
7	土師器杯			[0.6]	破片	暗褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 底内面墨書「屋」	156
8	土師器 高台付皿	(12.0)	6.7	3.0	60%	内 明赤褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラナデ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ 体外面墨書銘在「?」	101
9	須恵器壺	(25.8)		[16.3]	15%	灰色	良好	ロクロ成形 ヘラナデ タタキ 内面当て工具ナデ痕 口縁部に2条の凹線	158
10	鉄石器製			(17.0)	[19.2]	15%	内 暗茶褐色 外 黒褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 タタキ 平持ちヘラケズリ 底 磨耗 内面の胎土に植物繊維が含まれる	19・20・144・145・155・159・
11	土師器甕	23.2	7.7	22.8	80%	内 褐色・暗褐色 外 褐色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ナデ ヘラナデ 下端ヘラケズリ 外 ヨコナデ ヘラケズリ 内面胎土含有物	8・9・6・8・12・23・33・34・39・103・104・107・108・109・110・111・112・113・114・115・116・117・118・119・120・121・122・123・124・125・126・127・128
12	鉄製品 〈C.C.鉄〉?	長さ 3.05	幅 0.6	厚さ 0.4				重さ8.2g 棒状品が1.2度内に曲がっている 伸ばした長さは7.5	74・98
SB 009	1 土師器杯	13.3	6.8	3.5	100%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱 外面稜金位有り	45・60・62
	2 土師器 高台付	(12.8)	(6.4)	2.4	30%	内 赤褐色・暗褐色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱? 器面荒れのため内面のヘラミガキ不明	106
3	土師器杯			[2.2]	破片	暗褐色	良好	内外 ナデ 体外面墨書正位「時?」	83
4	土師器杯			[0.6]	破片	内 褐褐色 外 赤褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 底外面墨書「?」	83
5	須恵器壺			17.4	[4.0]	25% 内 青灰色 外 青灰色・茶褐色	良好	内 ナデ ヘラミガキ 外 ナデ 工具 内に2段分位有り 底 植物繊維、繊維下体外面の一部炭化有	30・22・109
6	土師器壺	14.5		[11.4]	30%	内 暗褐色・黒色 外 暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 平持ちヘラケズリ 鏡熱により器面荒れの為底部不明	32・53・67・68・69・83
7	砥石	長さ 10.3	幅 8.0	厚さ 1.45				重さ106.5g 鉄床石の破片を砥石に転用?	13
SB 012	1 土師器杯	11.5	5.8	4.0	100%	淡黄褐色・黒色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 鏡熱2箇所 体外面正位「千」、底外面「千」	21
	2 土師器杯	11.5	6.8	3.9	100%	内 暗褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱2箇所 体外面正位「川」 底外面「川」	2
3	土師器杯底			2.2	10%	内 灰褐色 外 褐褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底球状のつまみ部分	22
4	土師器杯			(6.2)	[1.8]	15% 赤褐褐色	良好	ロクロ成形 外 平持ちヘラケズリ 底 平持ちヘラケズリ 底外面墨書「上」 体部外面底位置有り	39
5	土師器杯			7.6	[1.2]	25% 内 黒色 外 淡灰褐色・黒褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面線刻「十」 内面黒色処理	30
6	土師器杯			[3.0]	破片	暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外面墨書正位「任」 鏡熱	39
7	土師器杯			[1.6]	破片	橙褐色	良好	内 ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「任」	37
8	土師器杯			(6.0)	[1.9]	10% 内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「用」	37
9	灰釉陶器 輪花皿			6.6	[2.2]	10% 灰色	良好	ロクロ成形 外 ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ ナデ	31
10	鉄製品 刀子	長さ 9.3	幅 1.9	厚さ 0.45				重さ17.4g 茎長5.8 茎幅1.2 茎刃(刃側) 0.3 (刃側) 0.2	25
SB 014	1 土師器	5.7		2.3	100%	内 淡橙褐色 外 黒色・淡橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ ナデ	1
2	土師器杯	13.0	6.6	4.0	100%	内 淡黄褐褐色・黒褐色 外 明赤褐色・淡黄褐色		ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	95・2
3	土師器杯	(12.5)	6.6	3.7	65%	赤橙褐色・暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱?	62
4	土師器杯	14.0	6.2	4.6	100%	内 明茶褐色 外 黒褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内部から体部内面に線刻	64・73
5	土師器杯	(15.6)	(6.5)	3.1	45%	内 明橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体内外面鏡面合成有り 体内面墨書正位「小」・正位「小」	27・43・71・74
6	土師器杯	15.2	6.3	1.5	80%	内 紅褐色 外 黒色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱痕跡 体内面正位「小」・正位「小」	96
7	土師器杯			[2.4]	破片	淡橙色	良好	ロクロ成形 体外面墨書「?」	72
8	土師器杯			[3.6]	破片	内 黒色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外面墨書正位「市」 内面黒色処理	不明
9	土師器杯			[2.7]	破片	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 体外面墨書「?」	99
10	土師器杯			[1.6]	破片	内 黒色 外 暗褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 ヘラケズリ 体外面墨書「?」内面黒色処理	71
11	土師器杯	13.2	6.7	4.1	100%	内 淡黄色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 鏡熱3箇所 体外面正位「小」・正位「小」	61
12	土師器 高台付皿	13.4	(6.8)	3.4	75%	内 淡紅褐色・黒褐色 外 赤褐色	あまい	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り ナデ	80
13	土師器 高台付皿	(10.0)	5.6	[2.4]	25%	内 淡色 外 橙褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 ナデ 内面黒色処理	4
14	土師器壺	(21.3)	7.2	[38.5]	45%	内 淡褐色 外 橙褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラケズリ ヨコナデ 平持ちヘラケズリ ヘラミガキ 底 大型底 骨組型 鏡熱	13・22・37・52・53・54・69・70・76・78・79・80・154
15	土師器壺			(7.8)	[13.16]	30% 内 淡褐色 外 暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 平持ちヘラケズリ ヘラミガキ 底 本底部 鏡熱	97
16	土師器壺	(20.8)	(16.2)	[26.7]	70%	淡褐色・暗褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ 骨組型 型種の口縁部と底部を欠いて大切口を削り直って底に転用	35・36・65・67・68・72・73・74
17	土師器壺	16.6	7.3	19.6	90%	内 暗褐色・明褐色 外 暗褐色・黒色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 平持ちヘラケズリ 外面荒れ痕	46・1
18	須恵器壺	(26.8)		[36.4]	10%	暗赤灰褐色	良好	内 ナデ ヘラミガキ 外 ヨコナデ タタキ 平持ちヘラケズリ 内外面彼位置有り 内面当て工具あり 平面形 器面剥離	8・9・3・5・6・7・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31

遺構・試掘番号		器種	口径	底径	器高	歪存度	色調	焼成	特徴	図版	遺物番号
	19	須恵器甕		14.7	[2.2]	30%	黒灰色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 タタキ 平行ちへラケズリ 底 平持ちへラケズリ 縦物痕跡 玉ボケ 平柴痕	12・48・59・63・66・73・74・99	
SII024	1	十師器坏	14.4	8.0	4.6	70%	内 黒色 外 黒色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内黒部色結果 体外綜合痕可	9・10・11・12・13・26	
	2	高台付坏		6.3	[1.7]	30%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	7	
SII031	1	椀広器坏	(13.1)	(6.6)	4.1	40%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 平持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 貼りハラナデ 底外面線刻「大」	150・244・245	
	2	土師器坏	(13.7)	7.6	4.8	70%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色・淡橙色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	198・225	
	3	土師器坏	12.3	6.2	3.6	65%	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ ヨコナデ 外 ヨコナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	236	
	4	土師器坏	(12.1)	6.4	3.8	75%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	229・253	
	5	土師器坏	(13.1)	7.1	3.8	90%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内外黒部分痕有り	2・191・264	
	6	土師器坏	(11.5)	(6.5)	4.3	30%	暗褐色	ややもろい	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	3・68・223・235	
	7	土師器坏	(12.4)	5.7	3.8	55%	暗褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面 線状痕跡	193・202	
	8	土師器坏		(8.0)	[3.4]	15%	内 黒色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷」 内面黒色処理	151	
	9	土師器坏	(12.6)	6.6	4.0	50%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色・明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書2種類 底外面「冷」 底内面「冷」	246	
	10	土師器坏	(12.4)	(6.8)	4.0	40%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷」	91・188	
	11	土師器坏	11.6	6.5	3.7	80%	内 淡橙褐色・明淡褐色 外 淡橙褐色・明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外面黒色不完中「冷」	200	
	12	土師器坏		7.5	[1.4]	10%	淡灰褐色	良好	内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷」	135	
	13	土師器坏		(11.5)	[1.1]	15%	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷」	2・175・178	
	14	土師器坏		(7.4)	2.4	20%	暗褐色	ややもろい	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷」	301	
	15	土師器坏		(7.4)	[1.8]	10%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	222	
	16	土師器坏			[1.6]	10%	内 黒色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冷?」 内黒部色結果	301	
	17	土師器坏			[3.8]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 体外面黒	2	
	18	土師器坏			[4.6]	破片	淡褐色	ややもろい	ロクロ成形 体外面墨書不明「上」	66	
	19	土師器 高台付皿		6.7	[2.1]	25%	内 淡褐色 外 淡褐黒色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 底 回転ヘラケズリ 底内面墨書「冷」	184	
	20	土師器 高台付皿	13.4	6.3	3.1	80%	内 淡赤褐色・黒褐色 外 暗淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ 体外面墨書不完「方」	2・197	
	21	土師器 高台付皿		6.2	[1.6]	25%	淡橙褐色	ややもろい	ロクロ成形 内 ミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面 内面の部分的はっきりしている	187	
	22	土師器 高台付皿		6.6	[1.8]	25%	暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書	201	
	23	土師器椀	17.4		[13.1]	35%	内 暗色 外 暗褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 平持ちヘラケズリ	14・16・19・20・182・183・186・5	
	24	土師器甕		(5.4)	[7.2]	35%	内 暗赤褐色 外 赤黒色～暗赤褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 平持ちヘラケズリ 底 ナデ 被熱 外面胎骨部痕有り	249	
	25	須恵器甕	23.2		[18.1]	10%	暗青灰色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 タタキ 車輪痕潰	10・12・13・19・22・25・185・225・301	
	26	須恵器甕		(14.6)	[8.8]	20%	青灰色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 平持ちヘラケズリ 底 機物状痕 外面いた状有り 斜状潰痕	134・168・191	
	27	須恵器甕	(24.0)		[27.5]	25%	内 暗褐色 外 暗褐黒色～暗色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 ナデ ヘラナデ ヨコナデ 平持ちヘラケズリ ヘラミガキ 玉ボケ	1・4・5・18・19・13・15・26・32・33・34・38・39・30・31・35・54・55・56・57・58 青・赤・白・黒・白・18・19	
	28	土製支脚	長さ 11.1	幅 5.15	厚さ 4.6		暗色	良好	外 ヘラケズリ ナデ ヘラナデ	211	
	29	土製支脚	長さ 7.25	幅 6.4	厚さ 3.7	10%				227	
	30	鉄製品 刀子	長さ 11.55	幅 1.1	厚さ 0.4				茎長11.5g 茎長 (現在) 6.15 茎幅0.5 茎厚0.2	297	
	31	鉄製品 刀子	長さ 14.75	幅 1.3	厚さ 0.35				重さ20.5g 刀部41.1～1.3 刀部厚2.5～3.5	240	
SII033	1	土師器坏	(19.4)	9.2	6.6	55%	内 赤褐色～明褐色 外 明赤褐色～暗色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ ヘラミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ ヘラミガキ 二次焼成有り	80・88	
	2	土師器坏	(20.5)	(9.9)	6.7	30%	内 淡褐色 外 淡灰褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 平持ちヘラケズリ 底 切り離し不明 平持ちヘラケズリ	34・45・50・74・78・78・(人0002)	
	3	土師器坏	(15.3)	(6.2)	4.7	30%	内 淡色 外 淡褐黒色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 平持ちヘラケズリ 底 切り離し不明 平持ちヘラケズリ 内黒部色結果 炭焼成有り	41	
	4	土師器坏				破片	淡赤褐色	良好	ナデ 体内面墨書「?」	1	
	5	土師器坏				破片	淡橙色	良好	内 ナデ 外 ナデ ヘラケズリ 体外面墨書「?」	1	
	6	須恵器甕		8.2	[6.1]	35%	灰色	良好	内 ナデ 外 平持ちヘラケズリ 底 ナデ?	52・84・85・87・89・90・95	
	7	鉄床石	長さ 15.3	幅 9.6	厚さ 1.8～3.5				重さ700g	59	
SII044	1	土師器坏	11.7	7.2	3.5	100%	淡赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 二次焼成痕有り 底内線刻	35	
	2	土師器坏				10%	赤褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ 平持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 平持ちヘラケズリ 底外面墨書「?」	34	
	3	土師器坏				破片	淡灰色	良好	底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「冨」	1	

遺構・層位番号	器種	口径	底径	器高	波状度	色調	成形	特徴	遺物番号
4	土師器杯				破片	淡褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ナデ 外外面器壁正位「形？」	1
5	円錐状+鼎脚	最大径 2.6		厚さ 0.45		内 黒色 外 淡灰褐色	良好	底径3.54g 黒色処理 土師器呼称用	1
6	円錐状+鼎脚	最大径 2.6		厚さ 0.5		内 黒色 外 淡褐色	良好	重さ3.54g 黒色処理 土師器呼称用	1
7	円錐状+鼎脚	最大径 2.6		厚さ 0.45		内 黒褐色 外 淡黄褐色	良好	重さ3.17g 黒色処理 土師器呼称用	1
8	円錐状+鼎脚	最大径 2.6		厚さ 0.55		内 黒色 外 淡褐色	良好	重さ3.95g 外面刷毛「？」 土師器呼称用 内面黒色処理	1
SE#046 1	土師器杯	11.7	5.8	3.9	95%	内 明赤褐色・黒褐色 外 明赤褐色	良好	ヨコナデ成形 外 回転ヘラケズリ 外 切り離し不明 回転ヘラケズリ 底外面器書「形」	16
2	土師器杯	(7.2)	6.8	3.7	55%	淡黄褐色	良好	ヨコナデ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	12
3	土師器杯	11.85	7.2	4.0	95%	淡黄褐色～明赤黄色	良好	ヨコナデ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 二次焼成有り	1・9・10・23
4	土師器杯	(12.5)	(5.4)	4.2	40%	内 赤褐色～灰褐色 外 明赤褐色～黄色	良好	内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	18・19・20
5	土師器覆		8.0	[4.0]	30%	内 淡灰褐色～黄色 外 灰黄褐色～淡赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラミガキ 底 太筆痕 常総型	1・4・6・7・15
SE#047 1	土師器杯	11.65	6.8	4.0	100%	内 黄色 外 淡褐色	良好	ヨコナデ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	47
2	土師器杯	11.2	6.2	4.2	100%	内 橙褐色 外 淡黄褐色～明黄色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	53
3	土師器杯	11.0	5.8	4.0	100%	内 明褐色 外 淡橙褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ナデ 外 ナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	85
4	土師器杯	11.8	6.3	3.8	75%	内 橙色～赤褐色 外 淡赤褐色～淡褐色	良好	内 ナデ 外 ヨコナデ 平持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	27・58
5	土師器杯	(15.3)	7.6	5.7	35%	内 淡橙色～灰褐色 外 明赤褐色～黄色	良好	ヨコナデ成形 内 ヘラミガキ 底 切り離し不明 回転ヘラケズリ 二次焼成有り	83・96・99・113
6	土師器杯	16.7	8.4	5.6	75%	内 淡黄褐色～灰黄褐色 外 淡黄褐色～淡褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	56・57・60・87・88・89・90・95・119
7	土師器杯	(12.3)	(6.0)	4.1	30%	明褐色	良好	ヨコナデ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	33・95
8	土師器杯	11.9	5.6	4.1	60%	淡黄褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ ナデ 底 手持ちヘラケズリ 底面2箇所 体外面正位「四」・底外面「四」	59
9	土師器杯		(6.2)	[2.6]	25%	淡褐色	良好	内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 外 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り 底面2箇所 体外面正位「T」 底内面「T」	39・95
10	土師器皿	(12.1)		[5.2]	20%	内 黄色 外 褐色・明褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	73
11	土師器覆	(13.5)	6.1	13.7	60%	内 褐色～赤褐色 外 赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	78・79・97・98・102・109
12	紡錘車転				破片	内 暗黄灰色 外 暗黄灰色・黒色	良好	内 ナデ 外 ナデ タタキ	34・39・41・80・93
13	鼎製品脚	長さ 15.15	幅 2.9	厚さ 0.35				重さ50.4g	70・94
14	鼎製品釘	長さ 1.9	幅 0.25	厚さ 0.25				重さ0.82g 釘か	69
15	土師器	長さ 9.2	幅 7.5	厚さ 0.9		灰色	良好	重さ65.7g 砥石器管片を砥石に転用か	104
16	石製品 紡錘車	径 (4.4)			破片	黒灰色		蛇紋岩質？	2
SE#048 1	土師器杯	14.8	6.7	5.3	75%	内 黄褐色 外 淡橙色・明赤褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	98
2	土師器杯	11.9	5.7	3.9	100%	内 明褐色 外 淡赤褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	143
3	土師器杯	12.3	5.8	4.2	60%	内 明赤褐色・灰褐色 外 明赤褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	101・115
4	土師器杯	(10.9)	(5.1)	3.8	50%	内 淡橙褐色 外 淡橙褐色～淡黄褐色	良好	ヨコナデ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1・41・42
5	土師器杯	11.8	5.3	4.0	95%	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ	112
6	土師器杯	12.0	5.9	4.1	95%	淡褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面書「形」	154
7	土師器杯	(11.4)	6.6	3.9	45%	内 淡黄褐色 外 淡褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ヨコナデ 外 ナデ ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面書「形」	85
8	土師器杯		5.8	[2.2]	30%	橙褐色	良好	ヨコナデ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面書「形」	49
9	土師器杯	15.1	8.0	4.8	70%	内 橙黄褐色 外 淡黄褐色・明赤褐色	良好	ヨコナデ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体外面線刻「平位「鬼」？	99
10	土師器杯		7.5	[1.0]	30%	内 黄色 外 黄褐色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 内面赤彩痕 底内面線刻「十」 日時体験土器か？大きか？	154
11	土師器杯				10%	橙褐色	良好	底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底内面線刻「十」 内外面山 砂付着 火熱を転用	5
12	土師器杯				破片	淡赤褐色	良好	底 手持ちヘラケズリ 底外面線刻	1
13	土師器杯		6.2	[2.2]	30%	内 明赤褐色・黒褐色 外 淡黄褐色・黒褐色	良好	ヨコナデ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面書「形」	81
14	土師器杯		6.0	[1.7]	15%	淡黄褐色	良好	ヨコナデ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面書「形」	1
15	土師器杯		(7.0)	[1.3]	15%	内 黄色 外 淡褐色		ヨコナデ成形 内 ミガキ 底 切り離し不明 回転ヘラケズリ 底外面書「形」 内面黒色処理	1・64
16	土師器杯		6.2	[1.6]	15%	淡橙褐色	良好	ヨコナデ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面書「P」	1・74
17	土師器杯				破片	淡褐色	良好	ヨコナデ成形 体外面書正位「面」	12
18	土師器杯				破片	淡褐色	良好	ヨコナデ成形 外 手持ちヘラケズリ 体外面書正位「P」	1
19	土師器杯				破片	淡褐色	良好	ヨコナデ成形 体外面書正位「四」	1

遺構・遺物番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
20	土師器坏				破片	内 橙褐色 外 褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ ヘラケズリ 体外面墨書側位「所」	1
21	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外面墨書「?」	1
22	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 ナデ 体外面墨書「?」	1
23	土師器坏				破片	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外面墨書正位「用」	185
24	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外面墨書正位「用」	1
25	土師器坏				破片	赤褐色	良好	内 ミガキ 外 ナデ 体外面墨書正位「用」	72
26	土師器坏				破片	淡赤褐色	良好	体外面墨書「?」	1
27	土師器坏				破片	内 黒色 外 淡褐色	良好	内 ミガキ 外 ナデ 体外面墨書正位「用」	1
28	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 ヘラケズリ 体外面墨書「?」	1
29	土師器坏				10%	内 黒色 外 淡褐色	良好	内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「用」 内面黒色処理	1
30	土師器坏				破片	明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「用」	170
31	土師器坏				15%	淡褐色	良好	内 ナデ 外 ナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「用」	53
32	土師器坏				破片	淡褐色	良好	内 ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「用」	185
33	土師器坏				破片	淡褐色	良好	内 ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	185
34	土師器 第分付皿		5.8	[2.0]	25%	淡橙褐色	良好	内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	61
35	土師器椀	19.4		[35.9]	60%	内 淡褐色 外 黄褐色～褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ 手持ちヘラケズリ ヘラミガキ 常総型 二次焼成有り	1・4・8・11・21・25・28・34・38・41・108・110・118・119・121・126
36	土師器椀	19.1		[11.0]	35%	内 明淡褐色 外 明赤褐色～褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ 常総型	24・132・134・137・140・147・149・159
37	土師器椀	11.8		[7.15]	40%	明赤褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	144・145
38	土師器椀		7.7	[19.0]	45%	内 淡褐色～赤褐色 外 淡褐色～淡赤褐色	良好	内 ヘラナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	63・102・113・118・133・168
39	須恵器椀	33.6	14.2	30.4	40%	内 灰褐色 外 灰黄褐色	良好	内 ヨコナデ ナデ 外 ヨコナデ タタキ 手持ちヘラケズリ 底 ナデ 五弁式	1・9・27・32・34・102・104・107・127・131・133・135・138・139・155・158・2・12
40	土師器壺		(16.8)	[15.7]	10%	内 淡黄褐色 外 明褐色～褐色	良好	内 ナデ 外 タタキ 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り 内面当て具痕有り	2・5・91・103
41	土製支脚	最大 16.5	幅 8.3	厚さ 7.35					162
42	円錐状 土製品	最大径 3.4		厚さ 0.9		外 褐色～淡褐色		重さ10.24g	1
43	円錐状 土製品	最大径 2.8		厚さ 0.4		外 淡黄褐色		重さ4.0g	1
44	円錐状 土製品	最大径 2.5		厚さ 0.4		外 明黄褐色		重さ2.15g	1
45	円錐状 土製品	最大径 2.8		厚さ 0.45		外 淡褐色		重さ4.0g 外面線書「?」	1
46	碁石	長さ 4.7	幅 3.8	厚さ 2.6				重さ32.22g 石材：緑灰凝質	92
47	鉄製品 釘	長さ 8.45	幅 0.5	厚さ 0.5				重さ9.21g	158
SI Ⅱ071 1	土師器坏	12.0	6.6	4.3	60%	内 明赤褐色・明褐色 外 淡赤褐色・明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	48・55・59・68
2	土師器坏		6.2	[1.6]	30%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」 体部穿孔有り 鉄製・銅製覆れ	1・70
3	土師器坏		9.4	[1.8]	30%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 内面黒色処理 底外面無刻	14
4	土師器坏				破片	明赤褐色	良好	ナデ	68
5	土師器坏				破片	黄褐色 外 淡褐色	良好	体外面墨書「?」	1
6	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外面墨書「?」	1
7	土師器坏				破片	淡褐色	良好	体外面墨書「?」	1
8	土師器坏				破片	内 淡褐色 外 橙褐色	良好	底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	71
9	土師器坏				破片	内 淡褐色 外 明赤褐色	良好	底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」 内面黒色処理	71
10	土師器椀	(11.6)		[3.7]	10%	内 淡褐色 外 明褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	17
11	土師器椀	20.6		[24.8]	65%	内 淡黄褐色・淡褐色 外 淡黄褐色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ 手持ちヘラケズリ 常総型	1・28・29・41
12	土師器椀	(19.6)	(6.7)	32.0	35%	淡褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ ナデ ミガキ 底 木葉痕 常総型	11・39・49・50・51・54・57
13	土製支脚	長さ 15.3	径 10.8	厚さ 7.9					65
14	円錐状 土製品	最大径 3.2		厚さ 0.6		橙褐色	良好	重さ5.56g 土師器坏の転用	1
15	鉄製品 刀子	長さ 3.15	幅 1.4	厚さ 0.4				重さ4.11g	7
16	鉄製品 棒状小具	長さ 5.8	幅 2.1	厚さ 0.2				重さ7.31g 片側は孔部分で欠損か	7
SI Ⅱ076 1	土師器坏	11.5	6.2	4.5	100%	内 明褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 切り離し不明 回転ヘラケズリ 体外面ヘラ書き	35

遺構・遺物番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	特徴	遺物番号
2	土師器坏	(12.4)	(7.0)	3.6	45%	内 淡黄褐色 外 淡黄色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 不持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「下」	29・57
3	土師器坏	12.6	7.1	3.7	85%	淡黄色・赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底部墨書 体外底正位「下」 底外面「下」	65
4	土師器坏	13.0	7.2	3.8	85%	明褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底部墨書 体外底正位「下」 底外面「下」	61・63・64
5	土師器坏	12.1	7.0	3.8	80%	内 淡橙褐色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書「墨書 体内底正位「下」 墨書「下」 底外面墨書「下」	38
6	土師器坏	12.3	6.6	3.8	90%	内 淡黄褐色 外 明茶褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書「墨書 体外底正位「下」 底外面「下」	59
7	土師器皿	12.9	6.0	2.2	100%	明褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	34
8	土師器皿	(13.6)	5.6	2.0	50%	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「同」	84
9	土師器皿	(13.0)	(5.5)	1.7	45%	内 灰褐色・赤褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「同」	6
10	土師器 高台付皿	14.4	6.8	3.3	95%	橙褐色	ちゃわん まい	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 切り離し不明 ナデ	36
11	土師器 高台付皿		6.2	[2.4]	20%	内 明褐色 外 赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ	1・5
12	土師器坏		16.0	[1.0]	15%	内 淡褐色 外 明褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「同」	24
13	土師器坏				破片	内 黒褐色 外 淡褐色・黒色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 体外墨書刻正位「同」内面黒色処理	1
14	土師器坏				10%	内 淡橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 体外墨書「?」	1
15	土師器坏				破片	内 明褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書「?」	1
16	土師器坏				破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書「弓」内外面に山砂付着	91
17	土師器坏				破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書「弓」	20
18	土師器坏				破片	内 黒色 外 淡黄褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 体外墨書正位「而」 内面黒色処理	1
19	土師器坏				破片	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 体外墨書「而」	1
20	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書正位「而」	66
21	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書「而」	1
22	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 底 回転ヘラケズリ 体外墨書「?」	1
23	土師器坏				10%	淡褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「而」	1
24	土師器坏				破片	内 黒褐色 外 淡褐色	良好	底外面墨書「下」 内面黒色処理	1
25	土師器坏				破片	淡褐色	良好	底外面墨書「?」	1
26	土師器坏				破片	内 淡褐色 外 淡黄褐色・黒褐色	良好	底 不持ちヘラケズリ 底外面墨書「而」	1
27	鉢か器壁				破片	灰色	良好	外 波状文 自然釉	45
28	鉢か器壁				破片	暗赤褐色	良好	底外面にヘラ書き 平面底	47
29	土師器壺	(12.0)	5.6	12.2	75%	内 明灰褐色・黒褐色 外 淡褐色・黒褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラケズリ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ	1・3・4・8・40・41・50
30	土師器壺		5.6	[2.9]	50%	内 淡褐色 外 淡褐色・黒褐色	良好	内 ヘラケズリ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	33
31	土師器壺	19.0	7.4	[19.0]	30%	内 明褐色 外 明褐色・淡褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ナデ ミガキ 底 木葉痕 ナデ 手持ちヘラケズリ 常総型	1・42・52・62・63・67・71・72・83・93・1・42・62・63・93・93・新・新・新・36・73・35・42
32	円筒状 土製品	最大径 2.1		厚さ 0.6		淡褐色	良好	重さ4.7g 土師器かまたは須恵器製の転用	1
SB II 018 1	鋼製品	長さ 2.65	幅 2.35	厚さ 0.15				重さ3.08g	
SB II 029 1	土師器坏			[3.7]	破片	内 黒色 外 褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 体外墨書正位「年」	1
SB II 030 1	鉄製品 鉄鏃	長さ 9.8	幅 0.85	厚さ 0.3				重さ7.5g 先形 刃部長1.8 刃部幅0.85 刃部厚0.3 茎部長4.55 茎部幅0.6 茎部厚0.45 重量3.45 茎幅0.3 茎厚0.3	
SB II 053 1	土師器坏	12.3	6.3	4.0	75%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「而」	1
2	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書正位「而」	3
3	土師器坏	11.2	6.7	3.9	45%	内 黒褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回 転糸切り 回転ヘラケズリ 墨書刻線刻 体外底正位「而」 底外面「而」	3
SB II 058 1	土師器坏		6.2	[2.1]	25%	明黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラ ケズリ 底外面墨書「子」	1
2	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 体外墨書正位「子」	1
SB II 066 1	土師器坏		5.7	[1.6]	25%	淡褐色	良好	内 ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転 ヘラケズリ 底内面ヘラ神書	2
2	土師器坏				破片	淡褐色	良好	内 ナデ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「而」	5
3	土師器坏				破片	淡褐色	良好	内 ミガキ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「而」	5
SB II 067 1	土師器坏				破片	内 赤褐色 外 淡赤褐色	良好	底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「而」	7
2	鉄製品 鉄鉄鉄件	長さ 6.15	幅 4.05	厚さ 0.9				重さ23.5g 完形 刃部3.4.05 中央部幅2.85 中央部厚0.9 末鉄鉄鉄部外寸3.45×1.75 内寸2.8×1.15 鉄鉄鉄鉄鉄厚0.3	3

遺構・ピット番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	特徴	遺物番号
SB Ⅱ 019 1	土師器甕		5.8	[1.2]	25%	内 明赤褐色 外 淡赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面線刻	1
SB Ⅱ 070 1 A・B	土師器甕	(12.6)	7.4	4.4	45%	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 二次焼成有り	1
2	土師器甕	(12.0)	5.5	3.8	45%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	3
3	鉄製品	長さ 3.95	幅 1.05	厚さ 0.35				重さ11.76g 孔径0.65 2と同一興味と思われるが接合しない	9
4	鉄製品 (釘のもの) 鉄製品 (釘のもの)	長さ 3.35 長さ 3.2	幅 0.3~0.35 幅 0.3	厚さ 0.25~0.4 厚さ 0.25~0.4					9
SB Ⅱ 017 1	土師器甕		(7.0)	[2.4]	25%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	2
SD Ⅱ 021 1	土師器甕	(12.2)	(6.5)	3.9	60%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 同転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1・2
SK Ⅱ 062 1	鉄製品 鉄鏃	長さ 7.9	幅 0.5	厚さ 0.4				重さ5.87g 茎長3.55 茎幅0.5 関部幅3.35 茎部0.3	11
SK Ⅱ 063 1	須恵器 大型甕	(50.8)		[19.9]	破片	内 黄灰褐色 黄褐色 外 黒灰褐色	良好	内 ヘラナデ 外 ヘラナデ タタキ 千鳥状	1・1・1・8・8・5・8・3・3・8 +鉄釘3個1・1・1・1・1・1・8・8・8・1・1・3・3・3・8・1・1・1・1・1・3・3・3・3・3
2	土師器甕	(13.9)		[6.8]	15%	内 明赤褐色 外 橙褐色~褐色	良好	内 ヨコナデ ヘラナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り	2・3
SK Ⅱ 064 1	須恵器壺			[27.9]	10%	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	内 ナデ ヘラナデ 外 タタキ 底 ナデ ヘラナデ 底部下端より底を10~11cmの所に貫通径2.5cmの焼成後穿孔あり	303・1・14・19 694・1・3・4・3 SZ-17-3801
SK Ⅱ 065 1	灰色釉壺				破片	内 暗灰褐色 外 黄灰褐色	良好	宋銭 淡灰釉壺	4
SK Ⅱ 066 1	土師器甕	(13.0)	6.0	4.5	55%	内 淡褐色 外 淡褐色~灰黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 切り後不明 手持ちヘラケズリ 二次焼成有り 底内面線刻	10
2	土師器甕		9.6	[2.2]	15%	淡褐色	良好	内 ミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ	4・1・3
3	土師器 高台付皿	12.7	7.2	2.4	100%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ 墨書2箇所 底内面「等」 底外面「仁見」	7
4	土師器甕				破片	赤褐色	良好	墨書2箇所 底外面「?」 体内面「?」	1
5	鉄製品 鏃	長さ 6.4	幅 1.4	厚さ 0.4				重さ9.7g 刃部長3.5 刃部幅1.4 刃部厚0.3 棘状部長3.9 棘状部幅0.5 棘状部厚0.4	2
SK Ⅱ 072 1	土師器甕	13.4	6.9	3.6	90%	淡褐色・黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ ヨコナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 製作 荒れている	1・11
2	土師器甕	13.2	6.7	4.1	65%	淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ ナデ 外 ヨコナデ 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 体内面線刻	1・3・5・6・8・9
3	土師器甕		6.7	[2.5]	30%	内 広褐色 外 明赤褐色	良好	ロクロ成形 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	10
SB Ⅱ 074 1	土師器甕		6.7	[2.6]	35%	明赤褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	1
遺構外 土師器甕	須恵器甕	(13.6)	(7.0)	[3.6]	35%	黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 ヘラナデ	40・41・47
2	土師器甕	12.0	7.2	4.3	80%	内 暗褐色 外 暗褐色・褐色	良好	ロクロ成形 内 ヨコナデ 外 ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	44・47
3	土師器皿	14.5	6.7	2.6	90%	内 橙褐色 外 淡橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「仁」	33・36・37・65
4	土師器甕		7.3	(2.9)	35%	内 明茶褐色 外 赤褐色	良好	ロクロ成形 内 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	42
5	土師器甕				30%	淡黄褐色	良好	底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「存」	22
遺構外	土師器甕	(14.0)	(8.1)	3.8	70%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外面墨書「仁」 底外面墨書「仁」	010-67
2	土師器甕	(13.8)	(8.0)	4.2	15%	赤褐色	良好	ロクロ成形 内 手持ちヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 二次焼成あり 体外面墨書「仁」	042-1.23.97
3	土師器甕	(11.5)	7.6	3.8	55%	内 淡黄褐色~黄褐色 外 淡褐色~明赤褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 二次焼成あり 墨書2箇所 体外面「?」 底外面「上」	042-53.55.73.97
4	土師器甕		(7.0)	[1.5]	35%	内 橙色 外 淡褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 内面黒色処理 底外面墨書「形」	2A-1
5	土師器甕	(12.2)	(6.7)	3.6	25%	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 刷毛ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 灯明皿	7Z-02-1
6	土師器甕		6.8	[1.4]	15%	内 淡黄色 外 白褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ	2B-1
7	土師器甕		5.7	[1.4]	10%	淡黄褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「有」	2A-59-1
8	土師器甕		(6.8)	[1.4]	20%	赤褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「上」	2A-10
9	土師器甕		(5.8)	[2.2]	20%	内 淡褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	1B-52-1
10	土師器甕		(6.6)	[2.0]	20%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「田」 底外面ヘラ書き	2A-36-1
11	土師器甕		(6.2)	[1.2]	15%	内 黒色 外 褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 手持ちヘラケズリ 底 回転糸切り 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「雨」 底外面線刻 内面黒色処理	5Z-46-1
12	土師器甕		(7.0)	[1.0]	10%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	2A-56-1
13	土師器甕		(6.0)	[1.4]	10%	淡橙色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「雨」	03B-9
14	土師器甕		(6.0)	[1.2]	10%	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「?」	4Z-50-2-1
15	土師器甕			[3.0]	15%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外面墨書「?」	042-97
16	土師器甕			3.4	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外面墨書正位「雨」	5Z-01
17	土師器甕			[2.2]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書正位「雨」	5Z-00-1

遺構・遺物番号	器種	口径	底径	器高	遺存度	色調	焼成	特徴	遺物番号
18	土師器坏			[2.0]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書正位「杵？」	2A-66-1
19	土師器坏			[3.4]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 体外面横刷	038-2
20	土師器坏			[3.5]	破片	内 赤橙褐色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 体外面ヘラ磨き 体外面横刷 被熱	2A-58-1
21	土師器坏			[4.2]	破片	内 赤褐色 外 橙褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ 体外面横刷	2B-80-1
22	土師器坏			[5.3]	破片	内 黒色 外 暗褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体外面墨書正位「千」 内面黒色処理 被熱	030-43
23	土師器坏			[2.8]	破片	内 橙色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ヘラミガキ 体内面墨書「？」	042-97
24	土師器坏			[1.5]	破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書「？」	042-1
25	土師器坏			[2.0]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書「？」	表採-19
26	土師器坏			[1.5]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 体外面墨書正位「万」	3Z-00-29
27	土師器坏			[1.7]	破片	内 赤褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書倒位「上」	2A-56-1
28	土師器坏			[3.0]	破片	淡橙褐色	良好	ロクロ成形 体外面墨書正位「邢」	5Z-00-1
29	土師器坏			[1.5]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 体外面墨書「？」	
30	土師器坏			[1.2]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 内 ナデ 外 手持ちヘラケズリ 底 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「？」	1B-62-1
31	土師器坏			[1.0]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	079-1
32	土師器坏			[1.0]	破片	橙褐色	良好	ロクロ成形 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「邢」	5Z-00-1
33	土師器坏			[1.1]	破片	褐色	ややあまい	ロクロ成形 底 手持ちヘラケズリ 底外面墨書「？」	2Z-46-1
34	土師器坏			[1.0]	破片	暗橙褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	2A-52-1
35	土師器坏			[1.0]	10%	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「？」	2Z-67-1
36	土師器坏			[1.0]	10%	内 橙褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転糸切り 回転ヘラケズリ 底外面墨書「邢」	079-1
37	土師器坏				破片	淡褐色	良好	ロクロ成形 外 回転ヘラケズリ 底 回転ヘラケズリ 底外面墨書「邢」	5Z-10-1
38	土師器坏			[1.2]	破片	内 黒色 外 暗色・黒褐色	良好	内 ヘラミガキ 外 回転ヘラケズリ ヘラミガキ 底 ナデ 底外面墨書「？」内面黒色処理	2Z-17-1
39	土師器 高台付皿	(13.2)	(5.9)	[2.9]	45%	内 明橙褐色 外 橙褐色	良好	ロクロ成形 底 ナデ 外面荒れていて調整箇所多い	2Z-67-1
40	土師器 高台付皿	14.0	6.3	3.1	45%	内 明褐色 外 淡褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 回転ヘラケズリ ナデ 底 ナデ 体外面墨書倒位「邢」	079-2
41	土師器 高台付皿		6.6	1.4	10%	内 黒色 外 淡褐色・黒褐色	良好	ロクロ成形 内 ミガキ 外 ナデ 底 回転糸切り ナデ 内面黒色処理 底外面墨書「上」	2B-1
42	須恵器甕			[4.2]	破片	青灰色	良好	内 ナデ・ヘラナデ 外 ナデ	3Z-00-34
43	須恵器甕				破片	内 淡褐色 外 淡橙褐色	良好	内 ナデ 外 タタキ	4Z-91-0001
44	砥石	長さ 2.75	幅 3.75	厚さ 2.6	破片	薄茶色		重さ29.54g	6Z-62-1
45	砥石	長さ 4.8	幅 3.25	厚さ 2.25	破片	薄茶色		重さ49.53g	2A-45-3
46	円錐状 土製品	長径 2.8	短径 2.6	厚さ 0.45	100%	淡褐色	良好	重さ3.7g 土師器坏造形の転用 土器はロクロ成形 外 回転ヘラケズリ	030-4

第７章　中・近世及びその他の遺構・遺物

第１節　遺構とその出土遺物

検出された遺構は溝状遺構７条，土坑１基である。特に，溝状遺構は調査区を横断するように検出され，調査区外まで遺構の分布が広がると考えられる。

１．土　坑

SKⅡ039（第84図，図版21）

調査区中央部，3A-45グリッド周辺に位置する。溝状遺構SDⅡ011および，SDⅡ038の重複部分に重複しているが，本遺構が最も新しい。平面形は方形に近い楕円形で，規模は3.4m×2.15m，検出面からの深さは45cmである。図示できる遺物は検出されなかったが，検出面直下の覆土中に焼土層が検出され，底面付近では，踏み固められたような硬化面が検出された。本遺構の東側のSDⅡ038には踏固め面が検出されているので，SDⅡ038と関連した遺構とも考えられる。

時期は，SDⅡ011およびSDⅡ038よりも新しいので，中・近世以降と考えられる。

２．溝状遺構

溝状遺構は７条である。

SDⅡ011（第83図，図版21）

調査区中央部，大グリッド2A・3Aを南北に走る溝状遺構である。途中に撹乱を受けている。検出長は45m，幅は0.9m～1.2m，検出面からの深さは0.15m～0.2mである。底面はほぼ平坦である。南端がSKⅡ039・SDⅡ038と重複する。

北部底面にピットが３基検出された。南から，円形，径0.5m，底面からの深さ0.15m，楕円形0.6m×0.4m，底面からの深さ0.2m，円形，径0.2m，底面からの深さ0.15mである。

底面および覆土中に硬化面はなく，SDⅡ038とほぼ垂直に接しているので，中・近世以降の地境溝の可能性がある。

SDⅡ036（第84図）

調査区北部，大グリッド1Aの北東隅を南北に走る溝状遺構である。途中に撹乱を受けている。検出長は27.4m，幅は0.25m～1.0m，検出面からの深さは0.05m～0.2mである。底面は南側が深く，標高も低くなる。底面にピットが１基検出された。円形で，径0.4m，底面からの深さ0.3mである。

底面および覆土中に硬化面はなく，SDⅡ011に類似しているので，中・近世以降の地境溝の可能性がある。

SDⅡ038（第84図，図版21）

調査区中央部，大グリッド4Z・3Z・3A・3Bを東西に走る溝状遺構である。調査区を横切り，調査区外にまで延びている。検出長は90.0mである。SKⅡ039およびSDⅡ011と重複し，重複部から西は１条で，長さ66.0m，幅0.8m～1.3m，検出面からの深さは0.1m～0.3mである。底面は東に傾斜し，深さは東側が深

く，標高も低くなる。

重複部から東は２条になる。長さ24.0mで，ほぼ平行な位置関係である。遺構間の距離は0.6m～1.5mで，東側が広くなり，硬化面が検出されている。北側遺構は幅0.5m～0.7m，検出面からの深さは0.1m～0.2m，南側遺構は幅0.9m～1.2m，検出面からの深さは0.1m～0.4mである。底面は西側が深くなるが，標高は東側が低くなり，東へ傾斜している。

SDⅡ011との新旧関係は不明であるが，SKⅡ039とは，土層から本遺構が古い。

底面および覆土中に硬化面はない。SDⅡ011とほぼ垂直に重複し，西側部分はSDⅡ011と同様に，中・近世以降の地境溝の可能性がある。東側部部については地境溝を伴う道跡の可能性がある。また，SKⅡ039に接して，楕状に溝を埋めている土層が検出され，SDⅡ011の東側に，遺構に沿った道が存在した可能性がある。時期は中・近世以降と思われる。

SDⅡ059（第83図）

調査区北部，大グリッド2A・2Bの境付近を南北に走る溝状遺構である。SDⅡ059・Ⅱ060・Ⅱ061の３条がほぼ平行している。３条の内の西端に位置し，東隣のSDⅡ060との距離は，1.3m～2.0mである。検出長は13.9m，幅は0.5m～0.9m，検出面からの深さは0.1m～0.2mである。底面は，北へ緩く傾斜している。

底面にピットが３基検出された。北から，円形，径0.5m，底面からの深さ0.1m，楕円形0.83m×0.56m，検出面からの深さ0.2m，円形，径0.3m，底面からの深さ0.35mである。

底面および覆土中に硬化面はない。また，SDⅡ060との間にも硬化面はない。中・近世以降の地境溝の可能性がある。

SDⅡ060（第83図）

調査区北部，大グリッド2A・2Bの境付近を南北に走る溝状遺構である。SDⅡ059・Ⅱ060・Ⅱ061の３条がほぼ平行している。３条の内の中央に位置し，東隣のSDⅡ061との距離は，3.0m～4.8mである。検出長は13.2m，幅は0.4m～1.0m，検出面からの深さは0.1m～0.2mである。底面は，北へ緩く傾斜している。

遺構内にピットが２基検出された。北から，円形，径1.7m，検出面からの深さ0.15m，円形0.4m，底面からの深さ0.2mである。

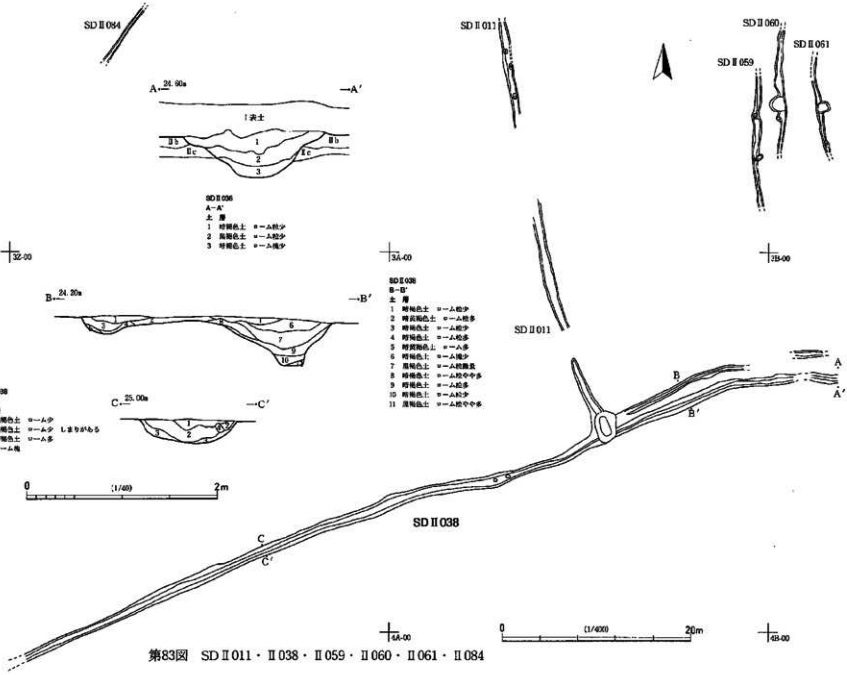
底面および覆土中に硬化面はない。また，SDⅡ061との間にも硬化面はない。中・近世以降の地境溝の可能性がある。

SDⅡ061（第83図）

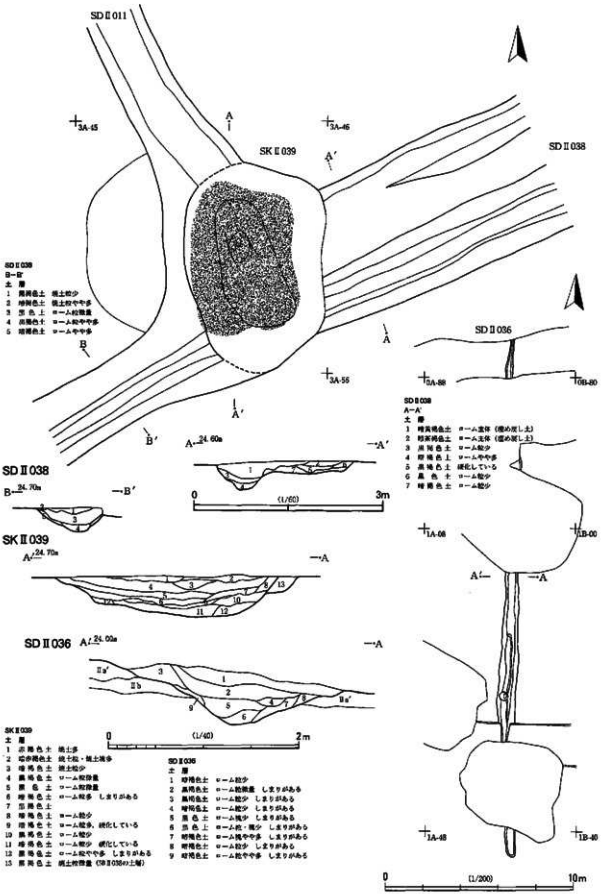
調査区北部，大グリッド2A・2Bの境付近を南北に走る溝状遺構である。SDⅡ059・Ⅱ060・Ⅱ061の３条がほぼ平行している。３条の内の東端に位置する。検出長は10.5m，幅は0.4m～0.6m，検出面からの深さは0.05m，底面はほぼ平坦である。

遺構内にピットが２基検出された。北から，楕円形1.45m×1.1m，底面からの深さ0.2m，円形，径0.4m，底面からの深さ0.15mである。

底面および覆土中に硬化面はない。中・近世以降の地境溝の可能性がある。



第83図 SDⅡ011・Ⅱ038・Ⅱ059・Ⅱ060・Ⅱ061・Ⅱ084



第84図　SD Ⅱ036・Ⅱ038・SK Ⅱ039

SDⅡ084（第83図）

調査区西端，大グリッド２Ｚを北東から南西に走る溝状遺構である。検出長6.8m，幅は0.35m～0.5m，検出面からの深さは0.05m～0.1m，底面はほぼ平坦である。南北両端で浅くなり，検出面から消滅する。

底面および覆土中に硬化面はない。中・近世以降の地境溝の可能性がある。

第２節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては，銭貨がある。

銭貨（第85図，図版54）

１は皇宋通寶である。渡来銭で，初鋳年は1039年である。２は寛永通寶である。字体から古寛永である。

第85図　銭　貨

第8章　まとめ

第1節　全体の概要

1　旧石器時代（第86図）

船尾白幡遺跡Ⅱからは1箇所のブロックとブロック外の石器が検出され，第2文化層の1つの文化層が設定された。この項では，船尾白幡遺跡[1]と比較検討し，その様相をまとめることとする。

第2文化層の石器群は第1ブロック1箇所の石器群が帰属している。本文で記載したように第2文化層としたのは船尾白幡遺跡で検出されている第2文化層と同一の文化層と考えられるためである。船尾白幡遺跡Ⅱでは立川ローム層のⅢ層とⅣ・Ⅴ層の境界部分に出土層位があり，石材は黒曜石を主体にした石器群であった。また，礫群は検出されていない。当該期石器群の石器集中における石材構成では，黒色緻密質安山岩（安山岩A）を主体にしたものと黒曜石を主体にしたものとの2つの石材に偏在することが知られている。南から入り込む支谷を挟んだ船尾白幡遺跡では，この支谷を取り巻くように台地縁辺から11箇所のブロックと5箇所の礫群が検出されている。安山岩Aを主体にしたブロックが多いが，第4ブロックのように黒曜石を主体にしたブロックも存在する。船尾白幡遺跡Ⅱの第1ブロックは少数で構成されており，器種構成は明確な利器がナイフ形石器の破片1点と削器1点だけであり，そのほかは剥片・砕片など石器生産に関連して生産されたもので占められる。ナイフ形石器は縦長剥片素材を斜めに切り取った素材の幾何型先刃ナイフと想定されるが，明確ではない。石器製作技術は，黒曜石母岩を消費して90°打面転移を基調として縦横比が同じ剥片素材を生産している。武蔵野編年のⅣ層下部・Ⅴ層期の石器群に対比される石器群に該当するものと考えられるが，船尾白幡遺跡では，角錐状石器の存在とナイフ形石器がより幾何形化していることを考慮すると，Ⅳ層下部・Ⅴ層期でも新段階のものと考えられる。船尾白幡遺跡Ⅱで検出されたブロックは礫群も伴わないことから，船尾白幡遺跡の石器群をベースにして移動し，ごく短期間の活動が行われたことを示すものであろう。

また，船尾白幡遺跡Ⅱでは，石器集中としては検出されなかったが，ブロック外出土石器として面取り尖頭器（東内野型尖頭器）2点と，その接合資料や細石刃が検出されている。このことから，船尾白幡遺跡で確認されなかった尖頭器石器群や，細石刃石器群の文化層の存在も予測された。中でも，面取り尖頭器と削片の接合資料は県内では数例しか存在せず，貴重な資料が追加されたといえよう。

2　縄文時代（第87図）

検出された遺構は，竪穴住居3棟（中期2，後期1），竪穴状遺構3基（中期2，後期1），土坑2基（早期1，後期1），ピット群3箇所である。船尾白幡遺跡では，炉穴3基，陥穴状土坑9基，竪穴住居4棟である。なお，昭和49年の調査[2]で炉穴が2基調査されている。

Ⅱでは，早期・前期は土坑（SKⅡ081），包含層として検出され，明瞭な居住遺構は検出されなかった。集落は中期以降に形成されたが，規模は小さいと思われる。

船尾白幡遺跡では，早期から比較的多くの遺構・遺物が検出されている。早期の遺構は陥穴（9），炉穴（3）であり，前期は住居（2）である。位置的には，船尾白幡遺跡では，陥穴は9基中6基が調査区の中央やや北に位置する。ここは東西両側から浅い谷が迫る地区である。炉跡は昭和49年分も含めて，斜面際に位置している。特に，調査区南端には3基が位置している。前期以外の住居跡は，中期（1），後

期（1）である。住居は調査区の南部，台地斜面際に位置している。

Ⅱでは居住遺構は，調査区の中央から北側に位置している。調査区は小舌状台地で，居住遺構は，ほぼ平坦面に位置している。ここで注目されるのは，後期（加曽利B期）の住居跡・竪穴状遺構が検出されたことである。船尾白幡遺跡および船尾白幡遺跡Ⅱ南西側の戸神川の低地に位置する西根遺跡から多量の加曽利B式土器が出土していることは前回報告書に記載したが，土器のよりどころとなる遺構が検出されていない。今回，該当期の住居が検出され，本遺跡に後期（加曽利B期）の集落跡が存在することが明らかになった。しかし，調査区からは2棟のみであるので，調査区外に集落の中心があると考えられるが，住居の検出状況から，調査区北側の，戸神川上流域の台地上に中心が存在した可能性があると思われる。なお，対岸台地上の鳴神山遺跡，白井谷奥遺跡の可能性も考えられるが，調査区内からは縄文時代の遺構は検出されていない。

3　弥生時代　（第88図）

検出された遺構は竪穴住居1棟，竪穴状遺構2基である。調査区中央から南部に検出され，遺跡南半部の調査区外にも遺構が存在する可能性は極めて大きい。船尾白幡遺跡で検出された遺構は後期の竪穴住居13棟で，昭和49年の3棟分と合わせて16棟である。Ⅱの調査では数的に少なく，分布も南東部に限られているので，集落の中心は船尾白幡遺跡である可能性が大きい。時期的には後期に所属するが，破片が多いため細かな時期は不明である。

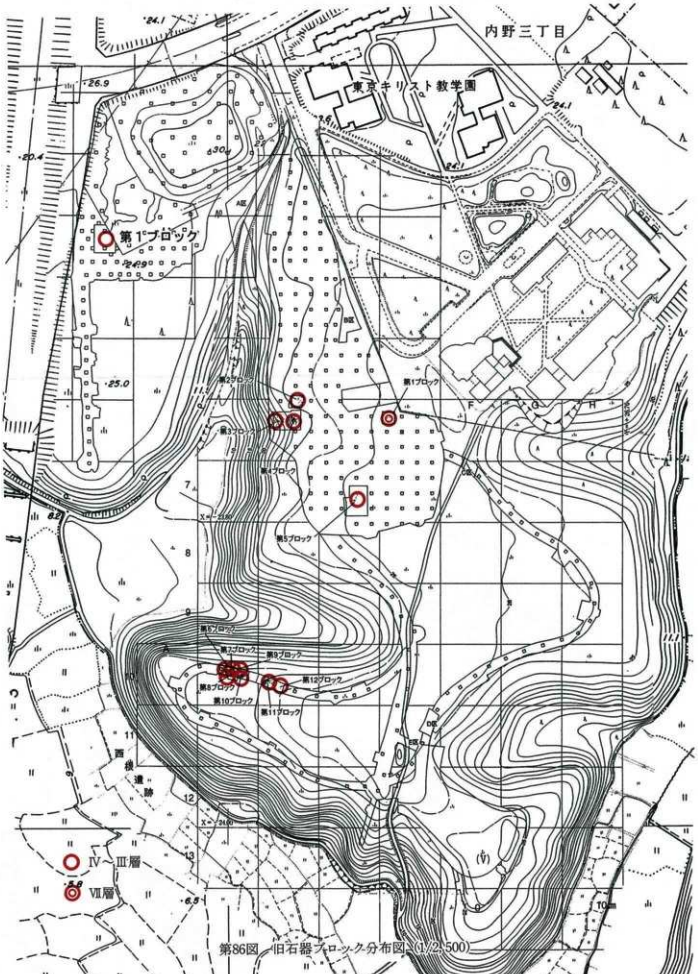
住居の構成は船尾白幡では大型および中型は平面形が隅丸方形で，11棟である。このうち，面積が測定できるものは9棟である。楕円形は2棟で，小型である。長方形は2棟で，大型1棟，小型1棟である。円形は1棟で，中型である。Ⅱで検出された住居は隅丸方形であるが，主柱穴が検出されず，小型に分類される。このことからも，集落の中心は船尾白幡にあったと推定される。

4　古墳時代（第88図）

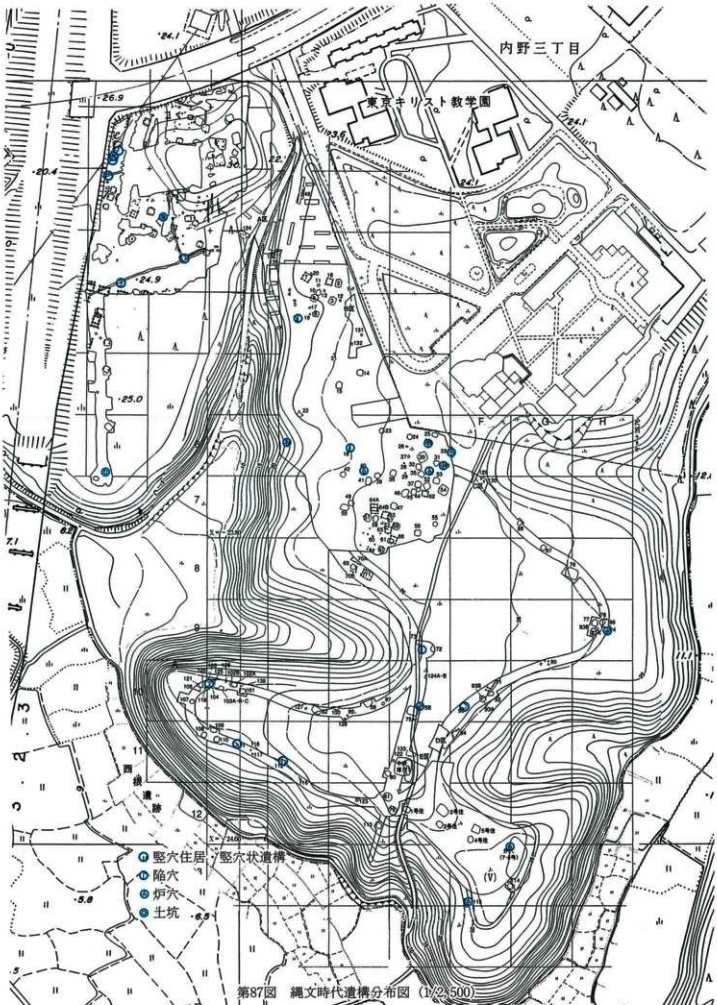
古墳時代の遺構としては，後期の竪穴住居が7棟発見され，船尾白幡遺跡に近い，調査区北部東半部に集中している。

船尾白幡遺跡で検出された遺構は，後期の竪穴住居3棟である。昭和49年調査時に1棟調査されている（第5号住居址）ので，計4棟である。SI054・SI056は調査区中央に，SI133は及び第5号住居址は南部に位置する。054と056はやや近い位置にある。東側および南側がすぐ調査区外であり，この部分にも竪穴住居が存在し，小さなまとまりとなることが予想される。SI133と第5号住居址はやや離れているが，南部地域にも散在的に数棟の竪穴住居が営まれた可能性が考えられる。

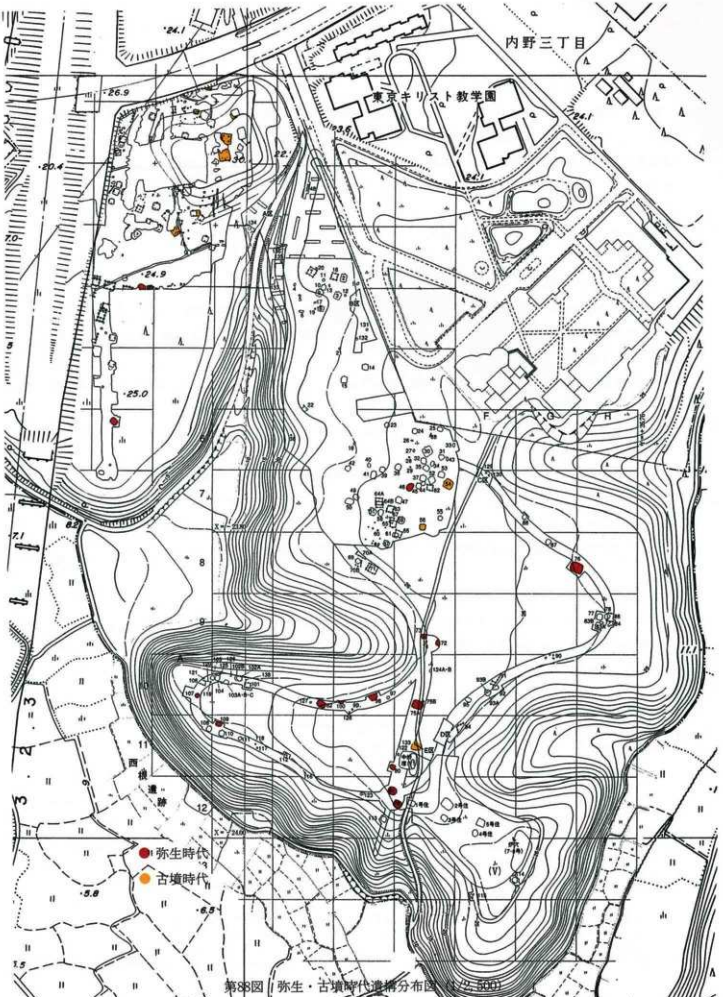
Ⅱでは，住居は大きさから小型・中型・大型に区分される。小型住居はSIⅡ013・034・035・040，中型はSIⅡ010，大型はSIⅡ042・043である。また，出土土器から，SIⅡ013・034・035・040，010とSIⅡ042・043の2時期に区分され，住居の大きさの小型・中型と大型との区分と一致する。SIⅡ013・034・035・040，010が古く，SIⅡ042・043が新しい。暦年代では6世紀末から7世紀前半でと推定され，これは船尾白幡の住居とほぼ同時期である。しかし，船尾白幡およびⅡ遺跡において，奈良・平安時代の集落への継承は，調査区内では不連続である。



第86図　旧石器ブロック分布図（1/2,500）



第87図　縄文時代遺構分布図（1/2,500）



第88図 弥生・古墳時代遺構分布図 (1:500)

5　奈良・平安時代　(第89～91図)

船尾白幡遺跡で発見された遺構は，竪穴住居53棟，掘立柱建物17棟，ピット群２基，土坑３基，井戸状遺構１基である。船尾白幡遺跡Ⅱの調査で，竪穴住居が20棟，掘立柱建物が19棟発見されており（他遺構は省略），また，昭和49年調査時に１棟調査されている（第４号住居址）ので，合わせて竪穴住居74棟，掘立柱建物36棟である。集落は南半部の調査区外に展開することが確実なので，棟数の大幅な増加が見込まれる。

本遺跡検出遺構の主体となる時期である。

6　中・近世その他

船尾白幡遺跡で発見された中・近世及び時期不明の遺構は，土坑57基，溝状遺構３条である。遺物は少量で，図示した遺物は小皿と文久永寶１点である。なお，南部に所在した塚１基が，昭和49年に船尾中峠遺跡[2]という遺跡名称で調査されている。

Ⅱでは土坑１基，溝状遺構７条である。出土遺物はほとんど無く，他の遺構との重複関係から時期を判断した。溝状遺構がほぼ東西，南北に走るのが特徴であり，地境溝の可能性がある。

注１　糸川道行・小笠原永隆・田島　新　2004　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』(財) 千葉県文化財センター

２　古内　茂ほか　1976　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』(財) 千葉県文化財センター

第２節　奈良・平安時代の集落の様相

船尾白幡遺跡の報告書[1]（以下前報告書）に従い，両遺跡全体の様相を概観する。

１．竪穴住居・出土遺物の時期区分（第14表）

前報告書の土器区分に従い，住居を区分をすると，表の様になると考えられる（SIⅡ037は遺物少量のため時期区分不明）。ⅡではⅡ～Ⅴ期に含まれる。前報告書と異なり，Ⅱ期が少ない。また，Ⅳ・Ⅴ期が多くなるのは前報告書と同様である。

第14表　竪穴住居の時期区分

時　期	遺　構　番　号
Ⅰ期	該当竪穴住居無し
Ⅱ期	SIⅡ002
Ⅲ期	SIⅡ003　SIⅡ005　SIⅡ007　SIⅡ047
Ⅳ期	SIⅡ001　SIⅡ008　SIⅡ012　SIⅡ024　SIⅡ044　SIⅡ046　SIⅡ078
Ⅴ期	SIⅡ006　SIⅡ009　SIⅡ014　SIⅡ031　SIⅡ033　SIⅡ048　SIⅡ071
Ⅵ期	該当竪穴住居無し

2．集落の変遷

Ⅱ期（SIⅡ002）

検出された住居は１棟である。調査区の西端部北側に位置するが，遺跡が所在する小舌状台地のほぼ中央である。前報告書の住居群とは隔絶し，別グループを形成すると考えられる。北および西への広がりが推定される。

Ⅲ期（SIⅡ003・005・007・047）

検出された住居は４棟である。区分の基本は新治産須恵器坏および箱形に近いロクロ土師器坏の存在である。

分布は，調査区の中央やや北に集中し，前報告書とは別グループを形成すると考えられる。SIⅡ003およびSIⅡ005は近接しているので前後関係になる可能性があるが，他は同時存在の可能性が大きい。また，SIⅡ005・007はカマドを北壁から西壁に作り替えているので，単独カマドの住居よりもやや長い存在期間が推定される。よって，カマドの作り替えから，SIⅡ005・007・047からSIⅡ003・005・007の住居群への変化が推定される。

Ⅳ期（SIⅡ001・008・012・024・044・046・078）

検出された住居は７棟である。前報告書に従い，ロクロ土師器坏の口径・底径比が２：１前後に注目した。他の要素として，皿（高台付き，無高台）の出現を加えた。

分布は調査区北部に６棟，南部に１棟であるが，南部の調査範囲を考慮すると，ほぼ全域に分布していると考えられる。前報告書においても，遺跡が所在する台地全体に分布する傾向があり，両者を一体の集落とすることも考慮しなければならないと考えられる。

Ⅴ期（SIⅡ006・009・014・031・033・048・071）

検出された住居は７棟である。前報告書に従い，ロクロ土師器坏の底径が口径の１／２以下になるものが増えることから分類した。他に，ロクロ土師器高台付椀坏類の出現，ロクロ土師器の底部回転糸切り無調整の増加を加味した。

分布は，Ⅳ期と同様の分布を示し，北部に６棟，南部に１棟である。Ⅳ期の発展を継承し，Ⅱの小舌状台地上全域に集落が展開したと考えられ，船尾白幡遺跡と併せて，奈良・平安時代の集落が最も栄えた時期と考えられる。

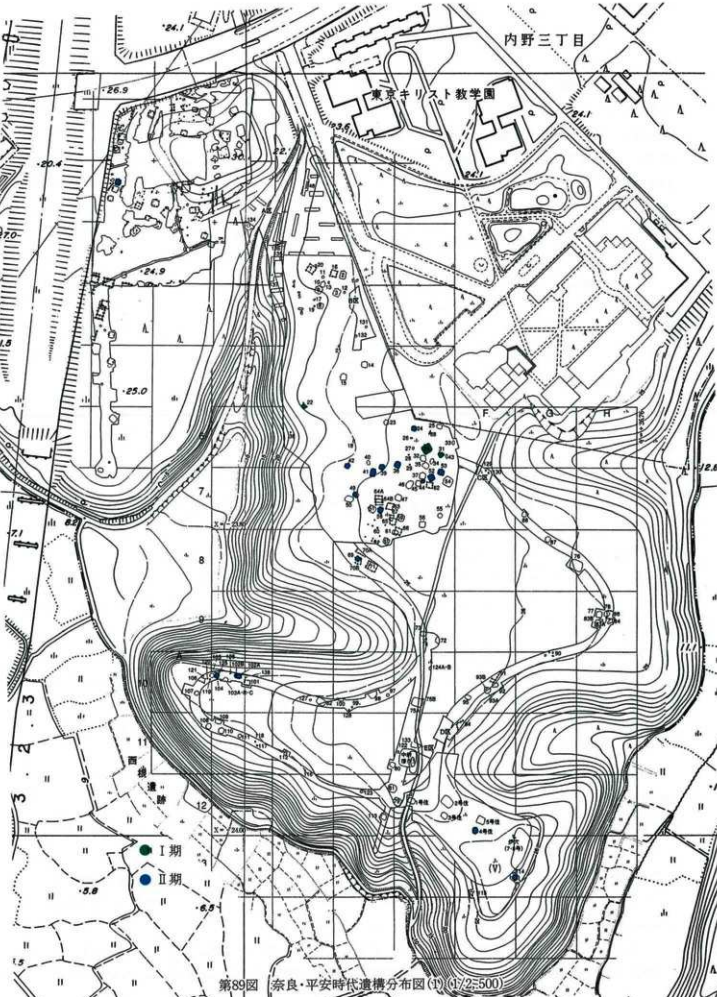
前報告書でⅥ期に区分された住居は，Ⅱでは検出されなかった。これは，Ⅵ期における集落縮小の度合いが，船尾白幡遺跡よりも大きかったためと考えられる。

掘立柱建物

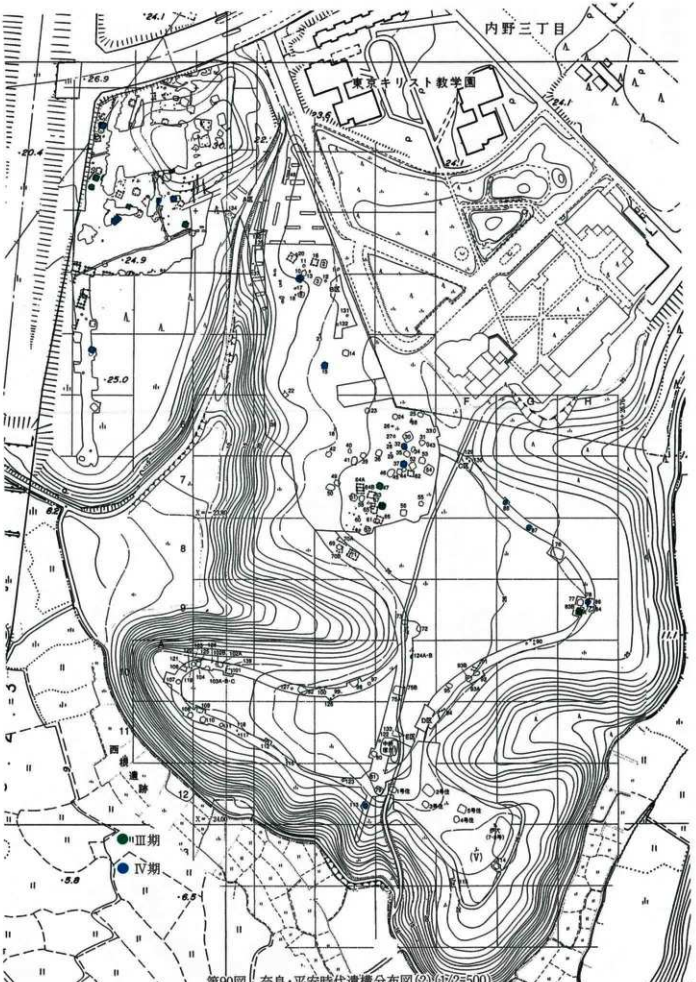
住居との位置関係から，前報告書と同様に，Ⅳ・Ⅴ期に属すると考えられる。分布は，北部北側に４棟，北部中央に６棟，調査区のほぼ中央，北部と南部との境に９棟である。

北部北側の４棟は，ほぼ均等に分散している。北部中央の６棟は重複関係を含めて，集中した配置であり，軸方位もほぼ一致するので，グループを形成すると考えられる。北部と南部の境の９棟は，東西列および南北列の２方向に整然とした配置を示し，グループを形成する。

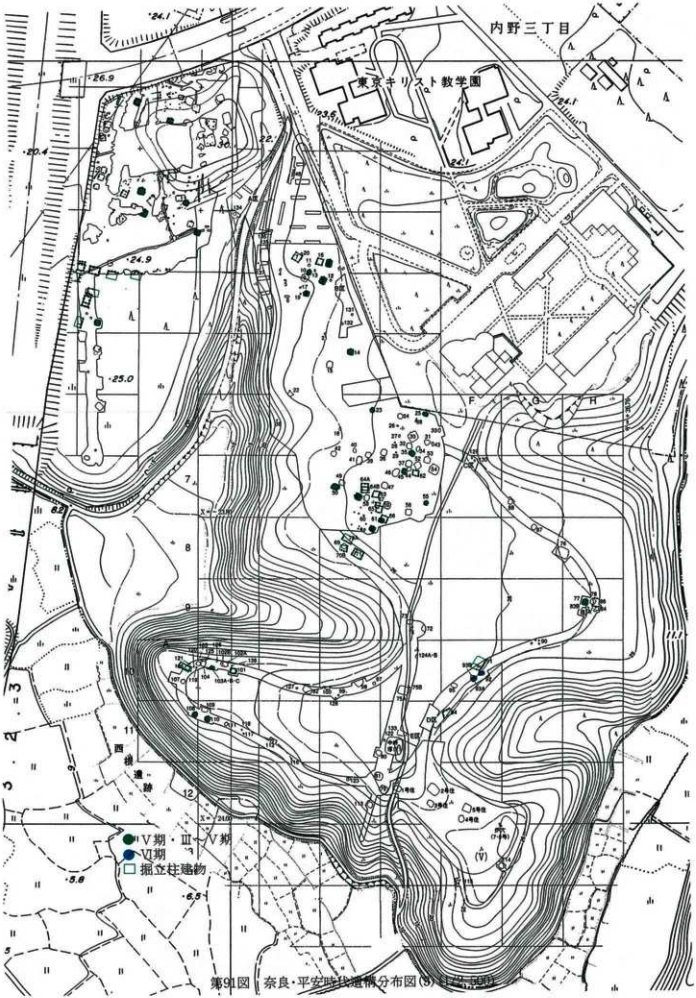
以上から，北部北側の掘立柱建物は，それぞれ単独か，同時期の個々の住居に付属する可能性がある。北部中央の掘立柱建物は，グループの形成が，同時期（Ⅴ期の可能性が大）の住居跡グループに付属する



第89図　奈良・平安時代遺構分布図(1)(1/2,500)



第90図 奈良・平安時代遺構分布図(2)(1/2,500)



第91図　奈良・平安時代遺構分布図(3)（1/250）

可能性がある。北部と南部の境の掘立柱建物は，規模の大きな，整然とした配置が推定されるので，住居に付属するというよりも，集落に属する可能性，すなわち，船尾白幡遺跡およびⅡ遺跡の集落に付属する倉庫群と考えられる。

3．文字・記号資料について（第92～95図，第15・16表）

整理作業において確認し，報告した資料は227点であり，土器点数は222点である。内訳は，墨書土器（2文字以上を含む）199点，線刻土器23点（墨書有2点），ヘラ書き土器5点（墨書有1点，線刻有1点）である。これは，掘立柱建物，土坑，遺構外出土も含む数である。Ⅱで検出された住居は20棟であるので，住居1棟当たりの数としては約11点（墨書約10点，線刻約1点，ヘラ書き0.2点）になる。文字・記号資料の記載部位としては底部内外面および口体（胴）部内外面がある。それぞれの内訳は第15表のとおりである。

以上から，文字・記号資料の種類としては圧倒的に墨書が多く，文字・記号資料の住居1棟当たりの点数は前報告書および鳴神山遺跡よりも多い（約2倍）。しかし，文字・記号資料中の墨書の割合，記載部

第15表　文字・記号資料部位表

総数	種類	中計	器種	中計	部位	中計	部位	中計	方位	小計	内　　訳
242	土師器	241	坏類	241	口縁・体部	110	外面	101	正位	60	墨書57　線刻3
									横位	7	墨書7
									倒位	3	墨書3
									不明	31	墨書26　線刻3　ヘラ書き2
							内面	9	正位	2	墨書2
									横位	0	
									倒位	0	
									不明	7	墨書6　線刻2
					底部	129	外面	114			墨書104　線刻9　ヘラ書き1
							内面	15			墨書7　線刻7　ヘラ書き1
					不明	2					墨書2
			甕類	0							
			その他	0							
	須恵器	1	坏類	0							
			甕類	1	底部	1	外面	1			ヘラ書き1
							内面	0			
			その他	0							

墨書	214
線刻	23
ヘラ書き	5

位の割合は前報告書等とほぼ同じである。

第16表は時期別の文字・記号資料であるが，時期により使用する文字・記号が変化している。また，各時期をとおして使用される文字・記号資料もある。

まず，各時期をとおして使用される文字・記号資料について述べる。住居跡の時期（Ⅱ～Ⅴ期）すべてにわたって使用される文字は「市」である。また，3時期にわたって使用される文字は「任」（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ），「上」（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ），「十」（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ），「千」（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）である。ただし，「上」はⅢ期では未

第92図　文字・記号資料集成（1）

第93図　文字・記号資料集成（2）

第94図　文字・記号資料集成（3）

第95図　文字・記号資料集成（4）

第16表　文字・記号主要資料一覧表

時期	墨　　書	線　刻	ヘラ書き
II期	「市」，「任」，「上」，「福」		
III期	「市」，「任」，「千」，「王」，「知」	「十」	
IV期	「市」，「任」，「上」，「千」，「十」，「善」，「本」 「吉」，「人」，「奈」，「圖」，「阝」，「弓」，	「十」，「三？」， 「卌？」	
V期	「市」，「上」，「吉」，「万」，「子」，「小」，「千」， 「富」，「善？」，「本」，「千具」，「得」，「夯」， 「方」，「秀」，「阝」，「弓」，	「十」，「大」， 「鬼？」 「夯」	

（「奈」は「大」と「田」，「夯」は「大」と「万」，「方」は「十」と「万」，「秀」は「千」と「万」の合せ文字）

検出であるが，他時期の検出点数から，Ⅲ期にも使用された可能性が大きい。

そのほか，複数時期の資料としては，「本」（Ⅳ・Ⅴ），「吉」（Ⅳ・Ⅴ），「巳」（Ⅳ・Ⅴ），「弓」（Ⅳ・Ⅴ）である。

また，単一時期の資料は，「福？」（Ⅱ），「知」（Ⅲ），「王」（Ⅲ），「善」（Ⅳ），「圖」（Ⅳ），「人」（Ⅳ），「富」（Ⅴ），「夯」（Ⅴ），「小」（Ⅴ），「得」（Ⅴ），「鬼？」（Ⅴ），「子」（Ⅴ），「方」（Ⅴ），「秀」（Ⅴ），「千具」（Ⅴ）等である。

資料は以上の様に時期別に分類されるが，特徴として次のことが考えられる。

「市」がⅡ～Ⅴ期のすべてに使用されたことは，この文字が，この集落にとって大きな意味を持つことを示すと考えられる。

「任」と「巳」または「弓」が集落存続間に，前半と後半で交代すると考えられる。

Ⅳ・Ⅴ期になると，「吉」，「夯」，「方」，「秀」，「得」，「富」等の吉祥・願望の意味が強い文字が出現する。この段階で，集落に何か不安定な要素が発生したと思われる。これは，使用文字が集落の発展，展開，衰退の影響を受けていることを示すと考えられる。

4．土器の打ち欠きについて（第96図，第17表）

このことについては，前報告書で詳細な分析がされているので，ここでは，追加資料の紹介を主に述べる。

打ち欠きかどうか不明瞭な土器

写真図版の1-3，1-9，1-11，1-12，1-13，1-14，1-15，1-16，1-22，6-2，7-2，44-1，72-2は，口縁部の欠損部分が接合し，ほぼ完形に復元できたものである。破片の接合で，意図的な破損かは不明瞭である。よって，図示はせずに，破損の状況を写真で掲載した。

打ち欠き土器

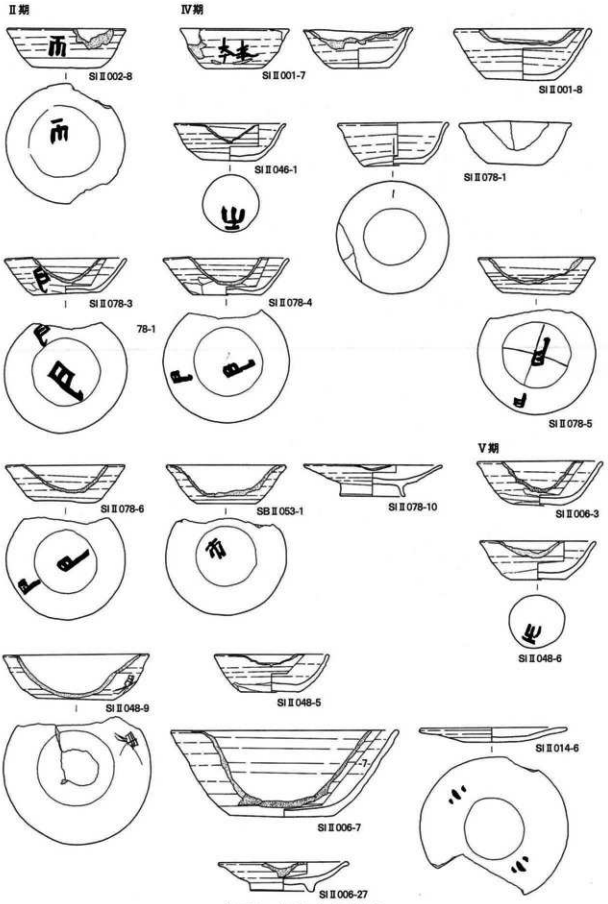
明瞭な打ち欠きが施された土器は第96図である。土器は土師器坏・皿類であり，口縁・体部の一部が打ち欠きされたもので，底部付近まで打ち欠きがおよぶが，すべてこのタイプと考えられる。

時期は，Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ期で，Ⅲ期には明瞭な打ち欠きは検出されないが，検出遺構数から，集落存続全時期で行われたと思われる。特に，Ⅳ・Ⅴ期には多くなると考えられる。打ち欠き土器の出土状況は第17表のとおりである。

確認した打ち欠き土器の中で，墨書，線刻を持つものは11点であり，打ち欠き土器の７割を占める。これは墨書，線刻と打ち欠きが強く関わっていることを示すと考えられる。また，「市」，「巳」の，集落または集落の一時期を代表する墨書を記載した土器に打ち欠きが施されることも注目される。

Ⅳ・Ⅴ期に多く見られること，墨書と関連していることから，墨書における吉祥，願望表現の文字の出現，増加に対応して，土器の打ち欠きという行為も盛んになった可能性がある。

注１　糸川道行・小笠原永隆・田島　新　2004　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』（財）千葉県文化財センター



第96図　打ち欠き土器集成

第17表　打ち欠き土器等一覧表

遺構	検出番号	器種	打ち欠き	穿孔	破壊	箇所	土器の状態	文字・記号種別	内容	部位・方向	出土状況	時期	備考
SⅡ002	8	土師器坏	○			口縁部2箇所	接合有	墨書2箇所	「市」・「市」	体外面正位・底外面	覆土中層	Ⅱ	灯明具として使用
SⅡ001	7	土師器坏	○			口縁部1箇所	接合有	墨書2箇所	「本」・「本」	体外面正位・体外面正位	北隅覆土下層	Ⅳ	
	8	土師器坏	○			口縁部1箇所	接合無				西隅床面	Ⅳ	
SⅡ046	1	土師器坏	○			口縁部から体部中位1箇所	接合無	墨書	「市」	底外面	カマド内上層	Ⅳ	
SⅡ078	1	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合有	ヘラ書き	不明	体外面	南壁中央下覆土上層	Ⅳ	
	3	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合無	墨書2箇所	「P」・「P」	体外面正位・底外面	カマド前面覆土中層	Ⅳ	
	4	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合有	墨書2箇所	「P」・「P」	体外面正位・底外面	出入ロピット内	Ⅳ	
	5	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合無	墨書2箇所 線刻1箇所	墨書「P」・「P」線刻「十」	墨書　体外面正位・底外面 線刻　底外面	出入ロピット付近覆土上層	Ⅳ	
	6	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合無	墨書2箇所	「P」・「P」	体外面正位・底外面	北壁中央下覆土下層	Ⅳ	
	10	土師器高台付皿	○			口縁部1箇所	接合有				南隅覆土下層	Ⅳ	
SBⅡ053	1	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合無	墨書	「市」	底外面	P2柱底上	Ⅳ	
SⅡ006	3	土師器坏	○			口縁部から体部下位1箇所	接合無				南西隅覆土下層	Ⅴ	
	7	土師器坏（大型）	○			口縁部から体部下位1箇所	接合有				南側覆土下層	Ⅴ	
	27	土師器高台付皿	○			口縁部1箇所	接合無				カマド前床面	Ⅴ	
SⅡ014	6	土師器皿	○			口縁部2箇所	接合無	墨書2箇所	「小」・「小」	体外面正位・体外面正位	カマド内	Ⅴ	
SⅡ048	5	土師器坏	○			口縁部から体部中位1箇所	接合無				北東隅床面	Ⅴ	
	6	土師器坏	○			口縁部から体部中位1箇所	接合無	墨書	「市」	底外面	カマド内	Ⅴ	
	9	土師器坏	○	○		口縁部から体部下位1箇所　底部穿孔焼成後	接合無	線刻	「鬼？」	体外面正位	中央やや南床面	Ⅴ	

写 真 図 版

遺跡周辺航空写真（約1／7,000　昭和48年撮影）

図版2

1　調査区北部航空写真（東から）

2　調査区南部航空写真（北から）

1　SIⅡ 042・Ⅱ 043
付近近景（西から）

2　第1ブロック

3　第1ブロック

図版4

1　SIII 025

2　SIII 028

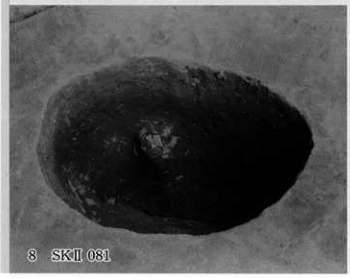
5　SIII 055

3　SIII 028炉跡

4　SIII 028遺物出土状況

6　SIII 027

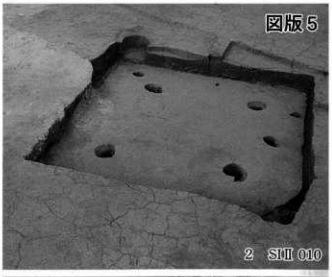
7　SIII 026


8　SKII 081

9　SKII 022

図版5

1　SⅡ 079

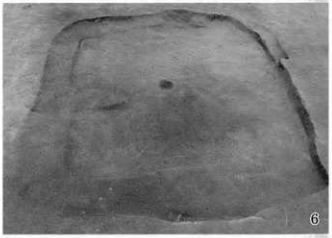


2　SⅡ 010

3

3・4　SⅡ 010 遺物出土状況　4

5　SⅡ 034 縮小プラン



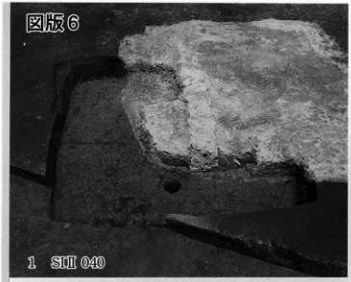
6

6　SⅡ 034 拡大プラン

7　SⅡ 034
遺物出土状況

8　SⅡ 035

図版6



1　SⅡ 040

2　SⅡ 040 遺物出土状況

3　SⅡ 042

4

5

6

7

4～8　SⅡ 042 遺物出土状況　8

1～3　SⅡ-042遺物出土状況

4・5　SⅡ-042カマド

6　SⅡ-043

7　SⅡ-043カマド

8　SⅡ-043遺物出土状況

図版8

1　SⅡ 043 遺物出土状況

2　SⅡ 001

3・7　SⅡ 001 遺物出土状況　3

4・5　SⅡ 001 炭化材・焼土出土状況　4

5

6　SⅡ 001 遺物・炭化材出土状況

7

8　SⅡ 002　8

図版 9

1　SIII 002 カマド

2　SIII 003

3　SIII 003 カマド

4・6　SIII 005　4

5　SIII 005 カマド

6

7　SIII 005
壁柱穴

8　SIII 006

図版10

1　SⅡ 006 カマド

2　SⅡ 006

3

4

3～5　SⅡ 006 遺物出土状況　5

6　SⅡ 007

7　SⅡ 007 カマド

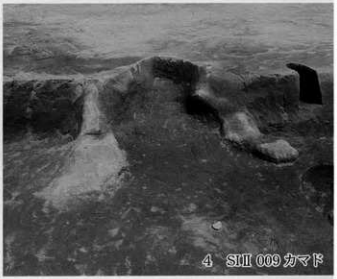
8　SⅡ 007 遺物出土状況

図版11

1　SHI 007カマド

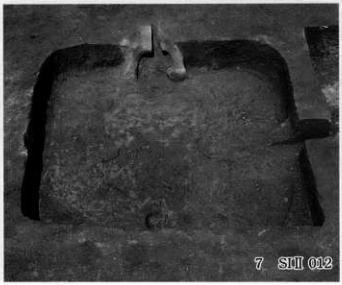
2　SHI 008

3　SHI 009


4　SHI 009カマド

5・6　SHI 009遺物出土状況　5

6


7　SHI 012

8　SHI 012カマド

図版12

1　SII 013

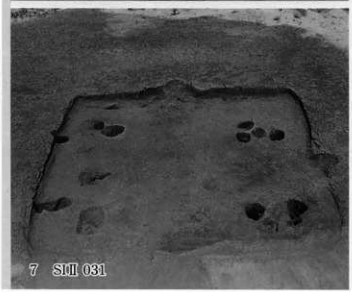
2　SII 013 カマド

3　SII 014

4・5　SII 014 遺物出土状況　4

5

6　SII 024



7　SII 031

8　SII 031 カマド

1

2

1～3　SIII 031 建物出土状況
3

4　SIII 033

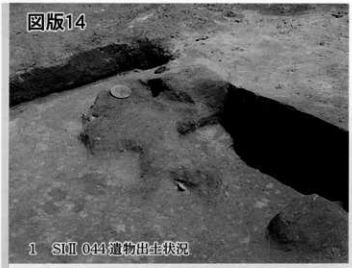
5　SIII 033 カマド

6　SIII 037・SBII 032

7　SIII 044

8　SIII 044 焼土出土状況

図版14



1　SⅡ 044 遺物出土状況

2　SⅡ 046

3　SⅡ 046 カマド

4　SⅡ 046 遺物出土状況

5　SⅡ 047

6　SⅡ 047 カマド

7・8　SⅡ 047 遺物出土状況　7

8

1　SⅡ 048
建て替え後

2　SⅡ 048 カマド

4

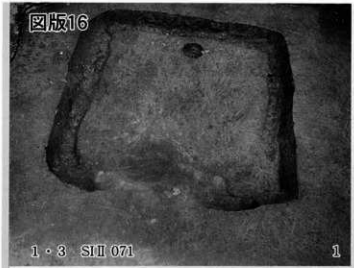
3　SⅡ 048 建て替え前

5

6

4～7
SⅡ 048 遺物出土状況
7

図版16


1・3　SII 071　1

2　SII 071 カマド

3

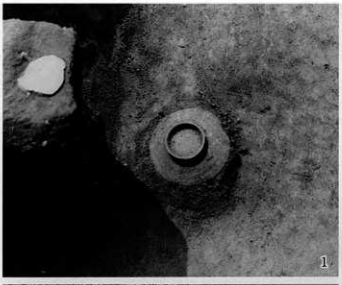
4　SII 071 遺物出土状況

5　SII 078　5

6　SII 078 カマド

7・8　SII 078 遺物出土状況　7

8


1

1・2　SIII 078 建物出土状況　2

3　SIII 051

4　SBII 018

5　SBII 029

6

6・7　SBII 030　7

8　SBII 032

図版18

1　SBⅡ041

2　SBⅡ045・Ⅱ057

3　SBⅡ052

4

4・5　SBⅡ053建物出土状況　5

6　SBⅡ053　6

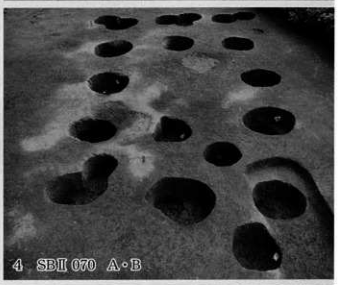
7　SBⅡ056

8　SBⅡ058

1 SBⅡ 066

2 SBⅡ 067

3 SBⅡ 069


4 SBⅡ 070 A・B

5 SBⅡ 074

6 SBⅡ 075

7 SHⅡ 050

8 SKⅡ 062
Ⅱ 063
Ⅱ 064

図版20

1　SKⅡ 063

2　SKⅡ 062

4　SKⅡ 063 確認面

3　SKⅡ 072

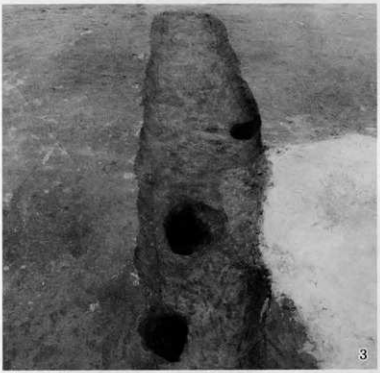
5　SKⅡ 073

6　土器集中遺構

7　SKⅡ 080

1　SDⅡ011・Ⅱ038

2　SKⅡ039

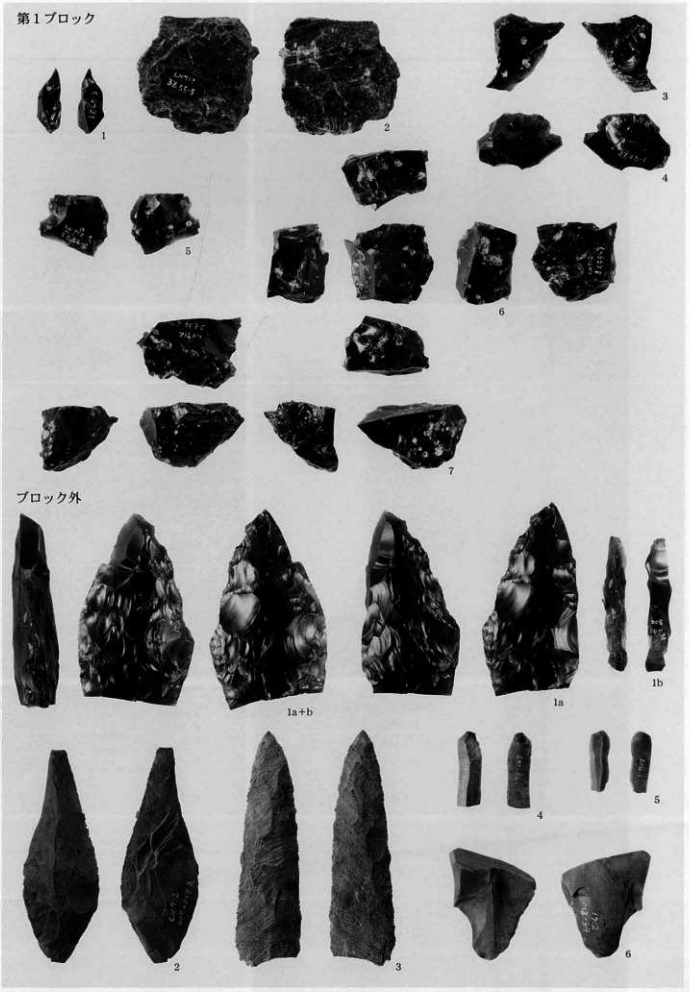


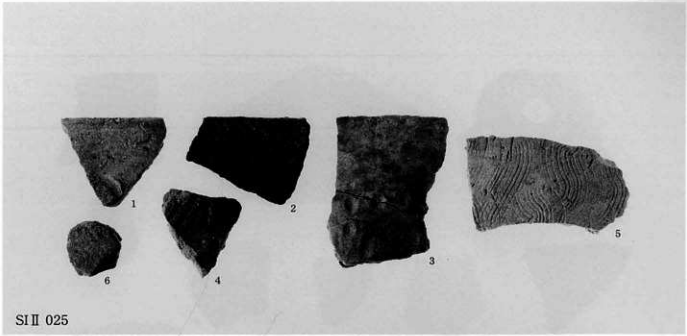
3

3・4　SDⅡ011　4

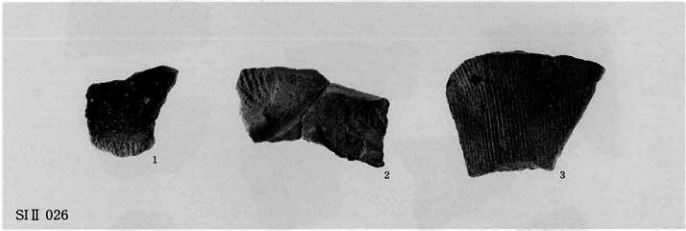
5・6　SDⅡ038
5

6

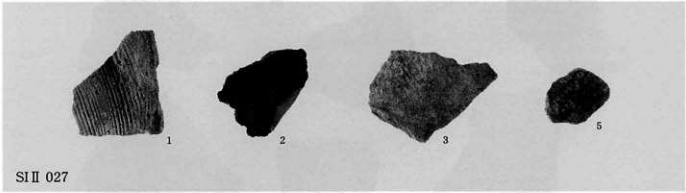

第1ブロック
1
2
3
4
5
6
7
ブロック外
1a+b
1a
1b
2
3
4
5
6



SⅡ 025



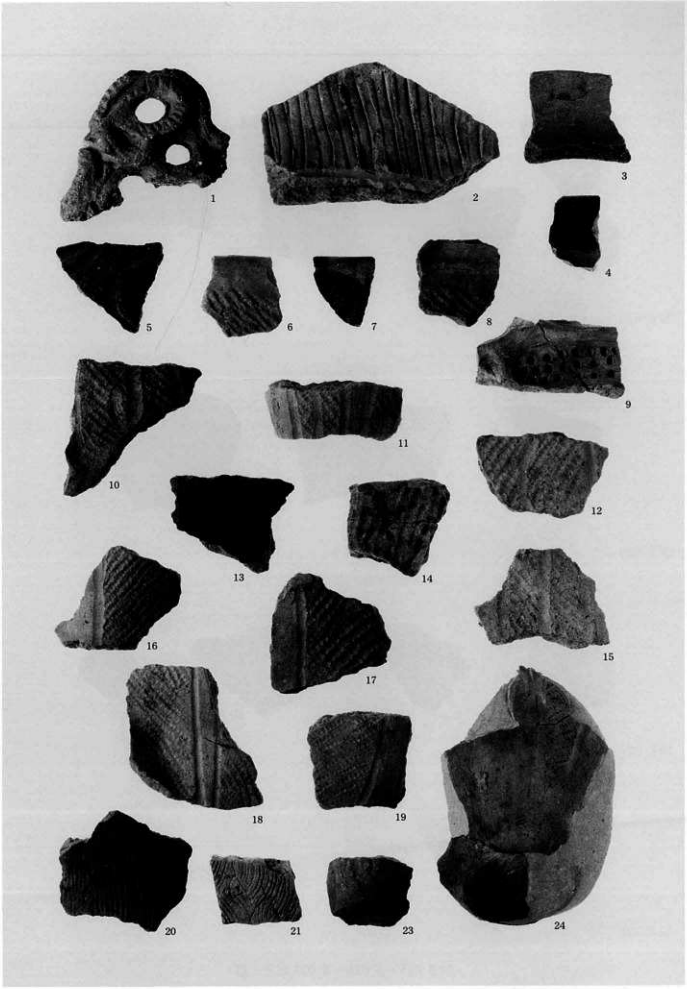
SⅡ 026



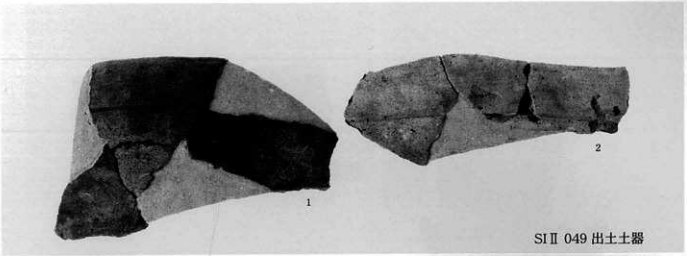
SⅡ 027

SⅡ 027

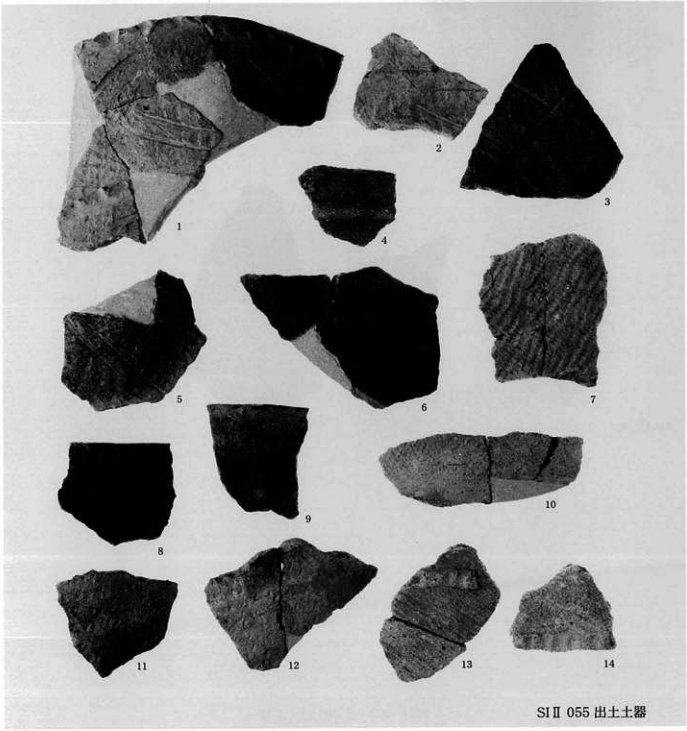
SⅡ 025・Ⅱ 026・Ⅱ 027 出土土器



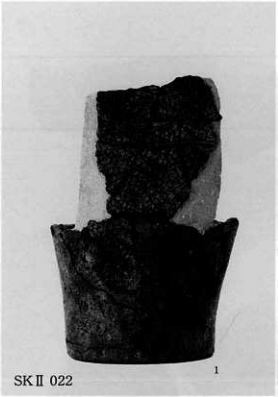
SIⅡ 028 出土土器



SI II 049 出土土器



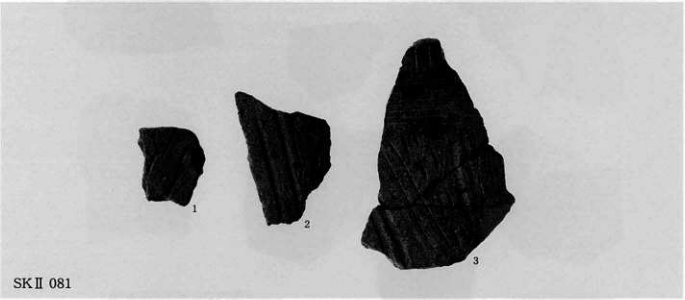
SI II 055 出土土器



SKⅡ 022

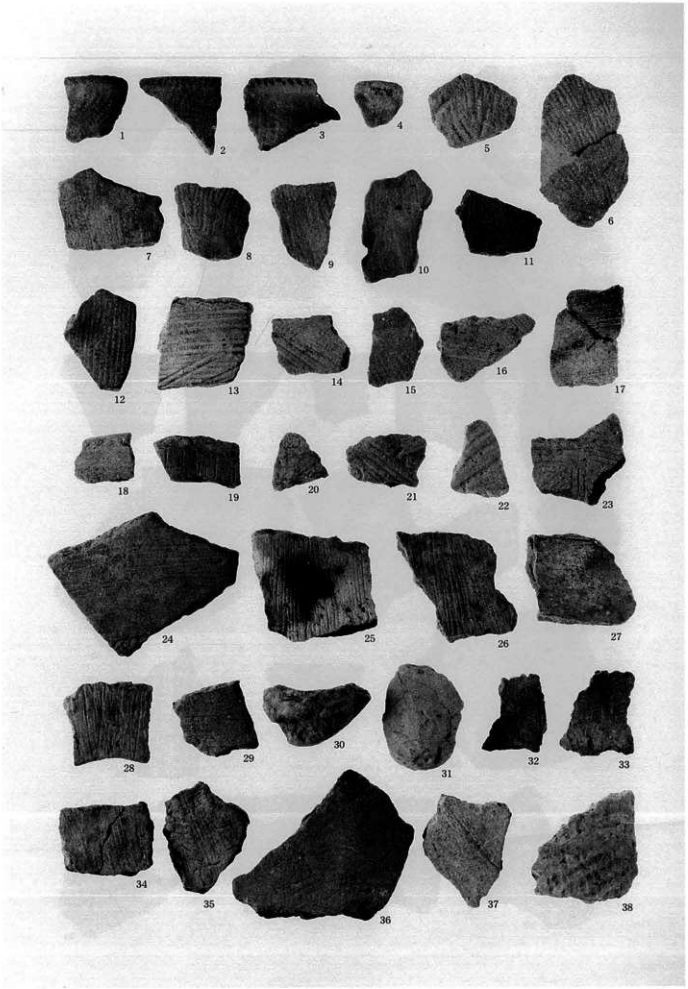
SKⅡ 022

SKⅡ 022

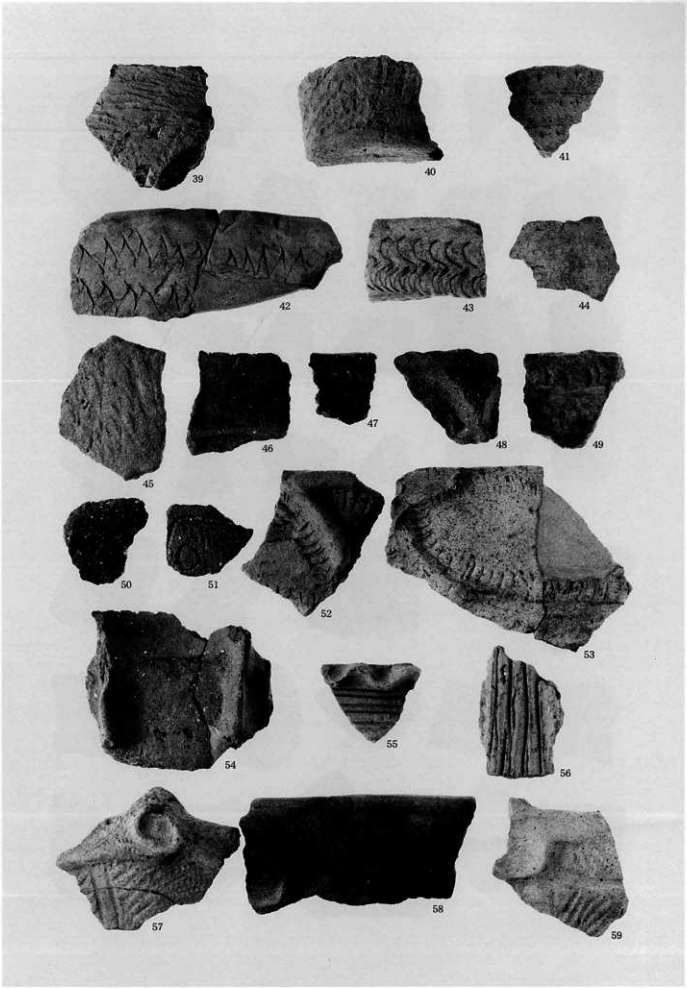


SKⅡ 081

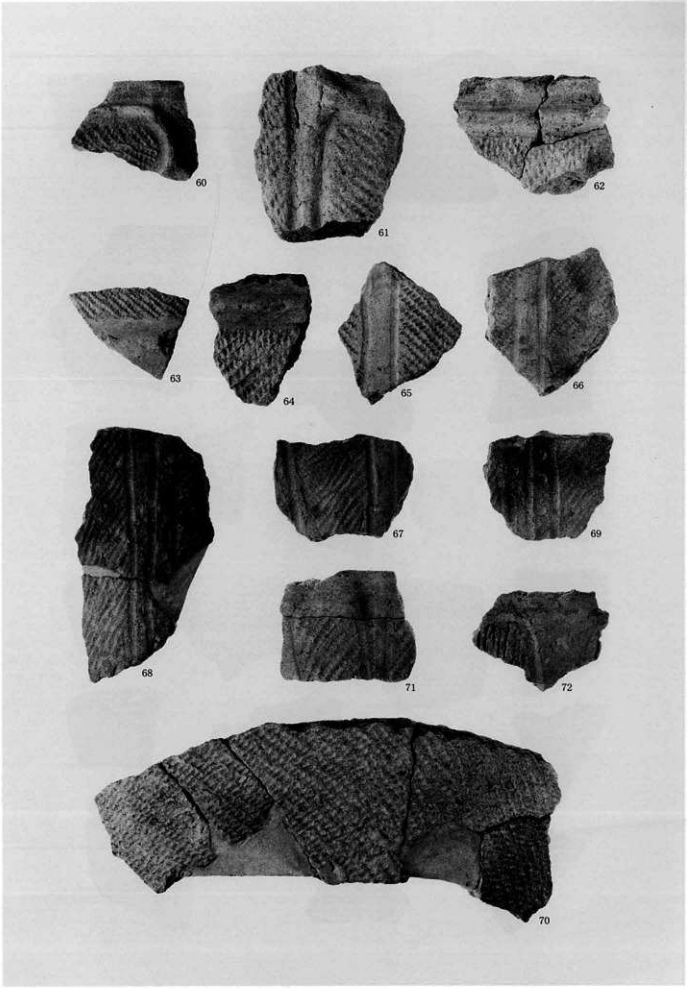
SKⅡ 022・Ⅱ 081 出土土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

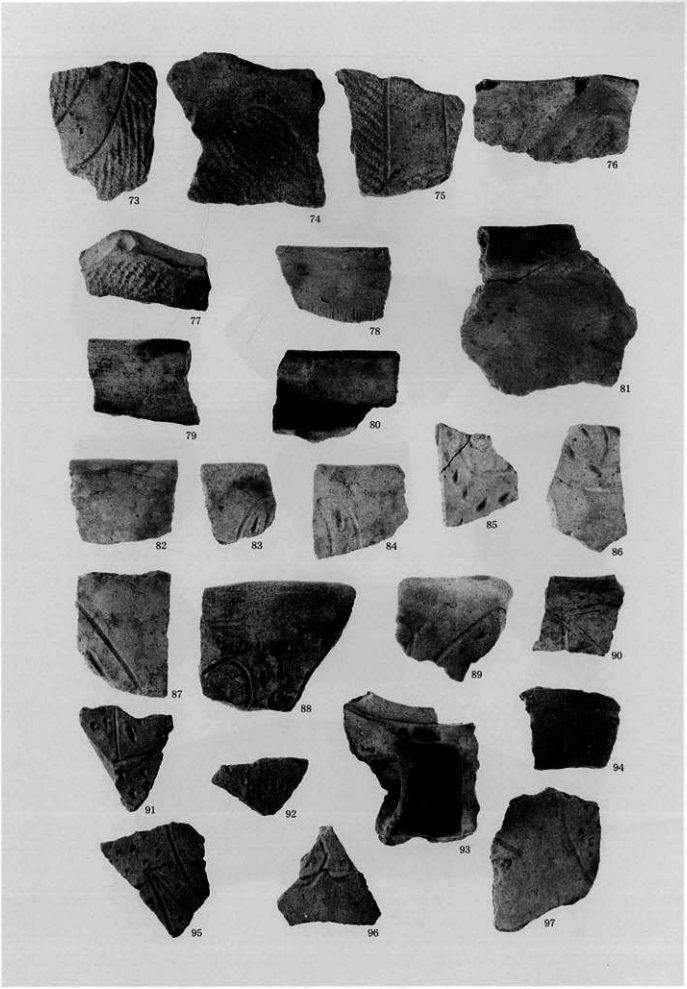
遺構外出土土器（1）-1



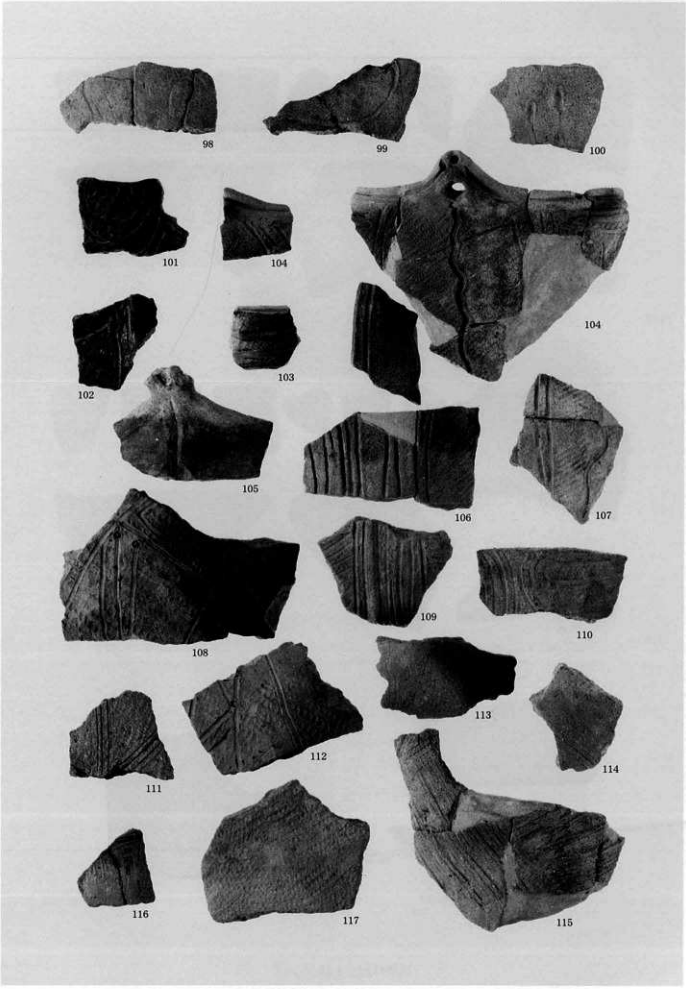
遺構外出土土器（1)-2,(2)-1



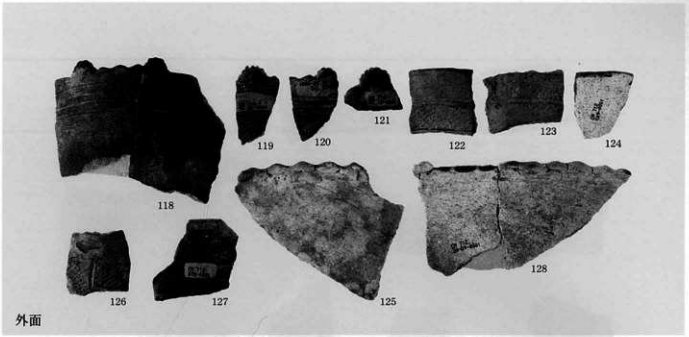
遺構外出土土器（2）-2,（3）-1

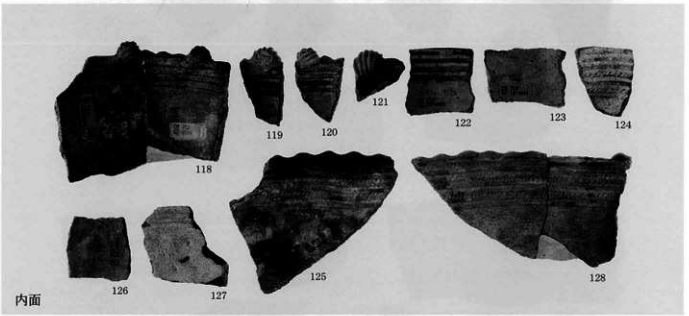

73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

遺構外出土土器（3）-2


98
99
100
101
104
104
102
103
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
117
115

遺構外出土土器（3）-3,（4）


外面
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128

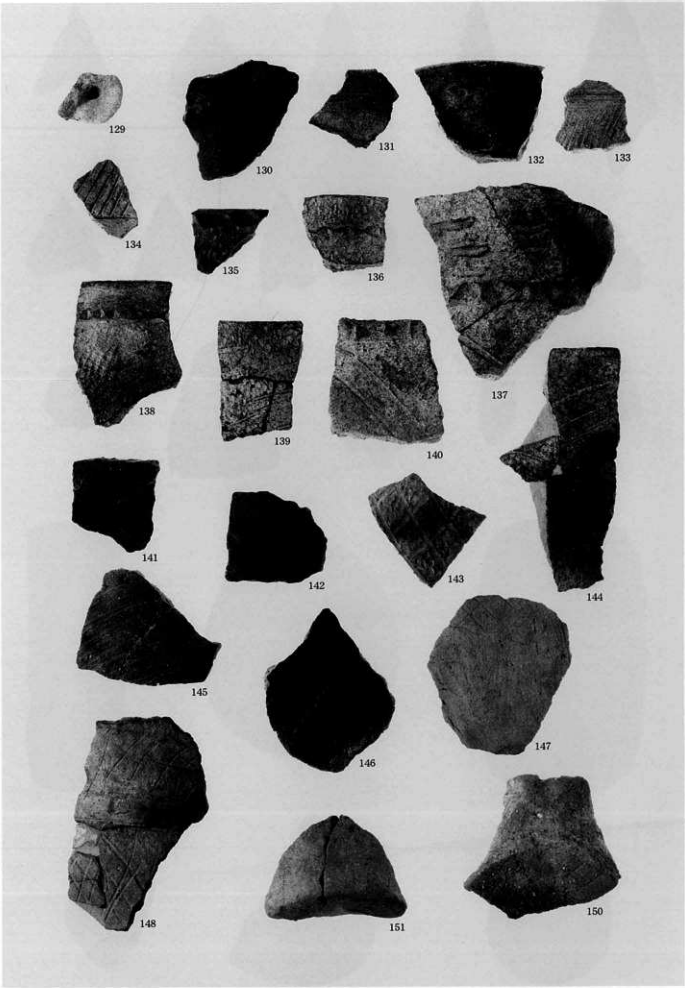

内面
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128

149

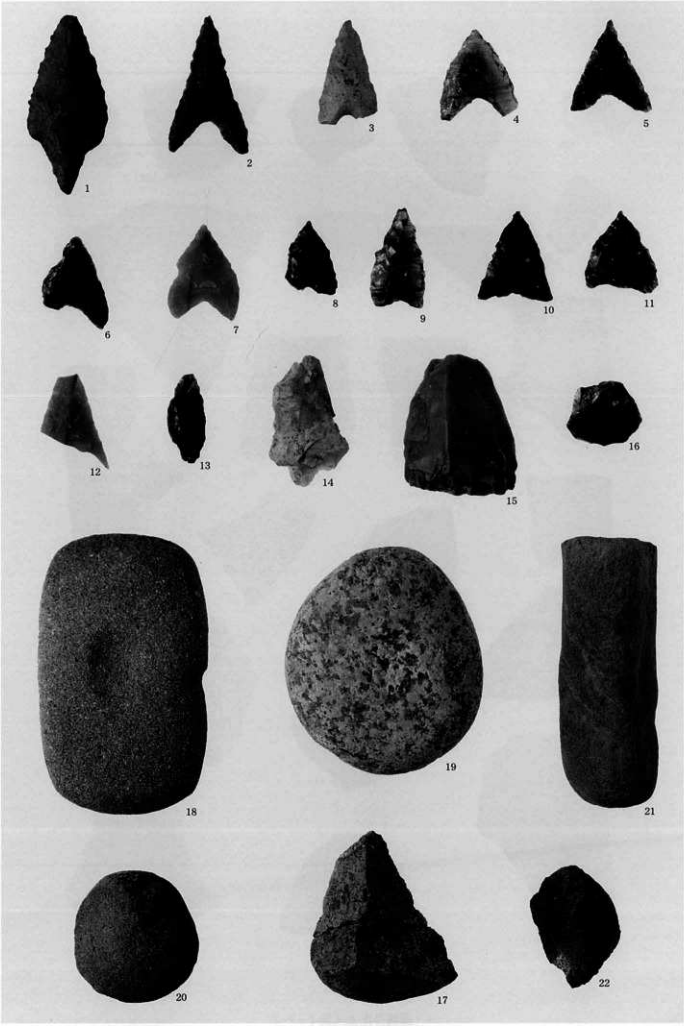
154

152

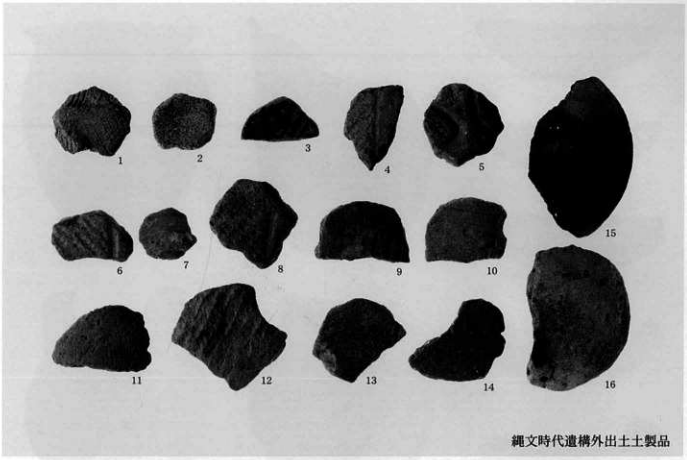
遺構外出土土器(5)-1


129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
150
151

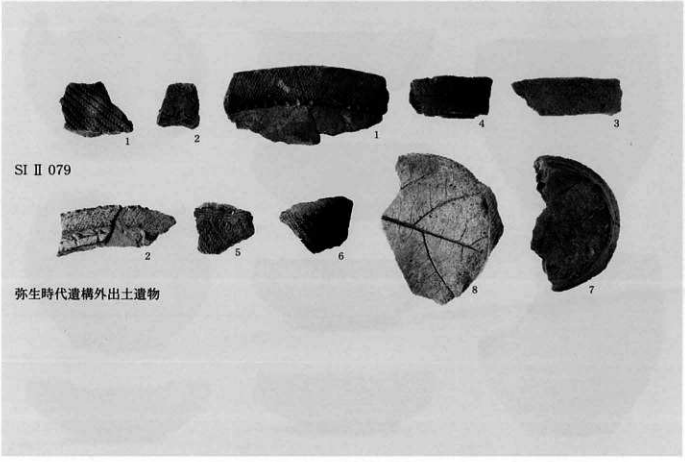
遺構外出土土器（5）-2



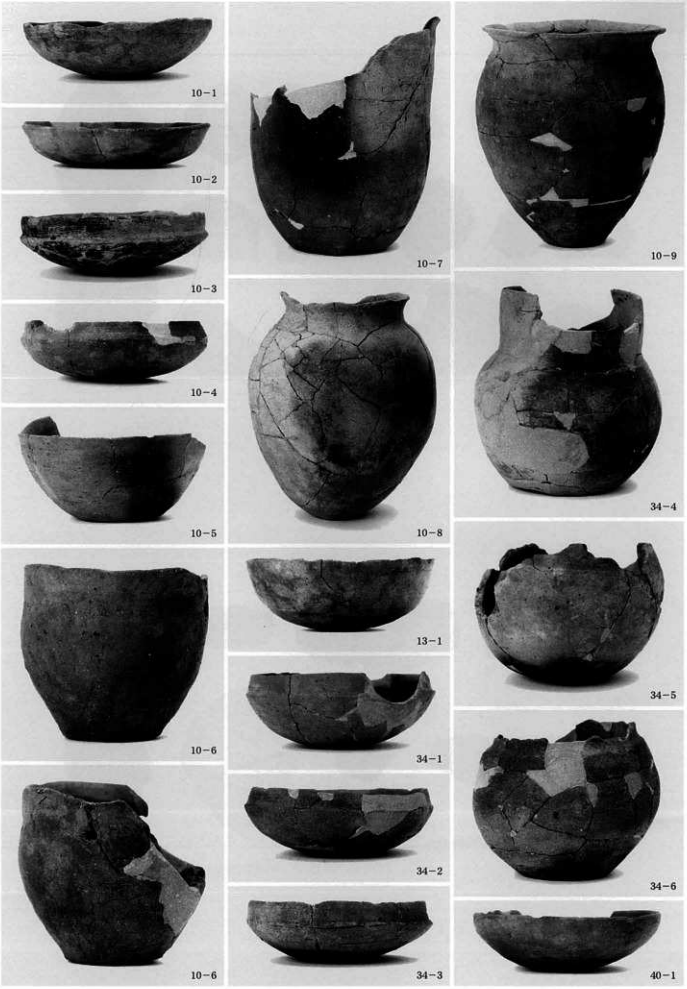
縄文時代石器



縄文時代遺構外出土土製品



弥生時代遺構外出土遺物



古墳時代遺構出土土器(1)

34−8

34−10

34−11

34−12

42−1

40−3

42−2

42−3

42−4

42−5

42−6

42−7

42−8

42−9

42−10

42−11

42−11

42−12

42−14

42−15

古墳時代遺構出土土器（2）

42－16

42－18

43－11

42－17

42－23

43－12

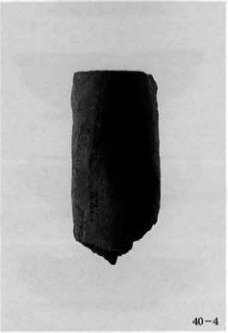
43－2

43－4

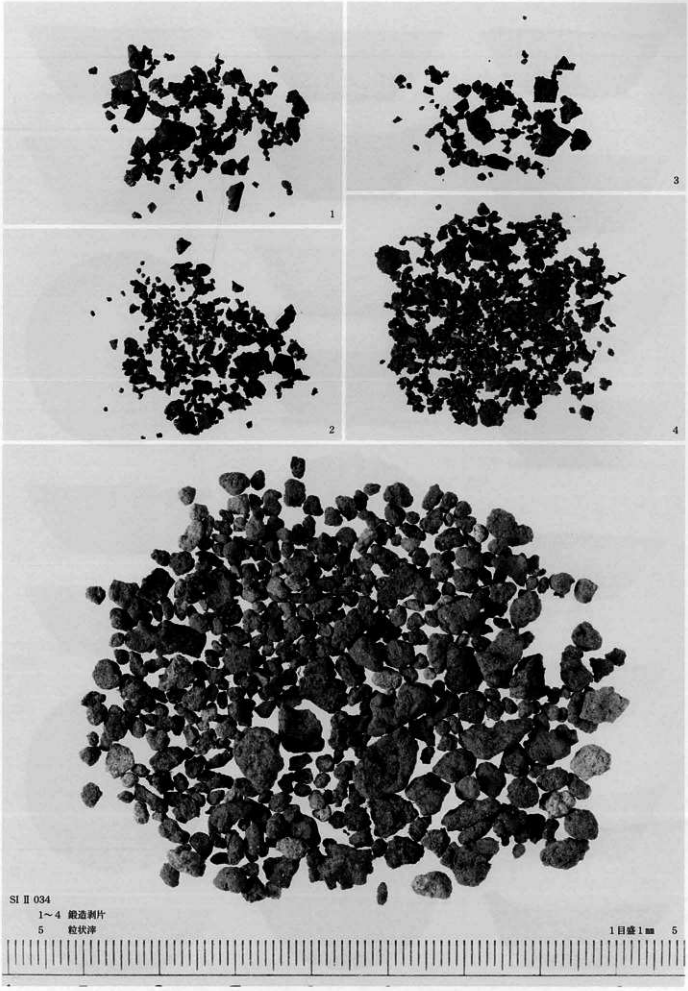
43－1

43－3

外－1


40－4

古墳時代遺構出土土器（3）

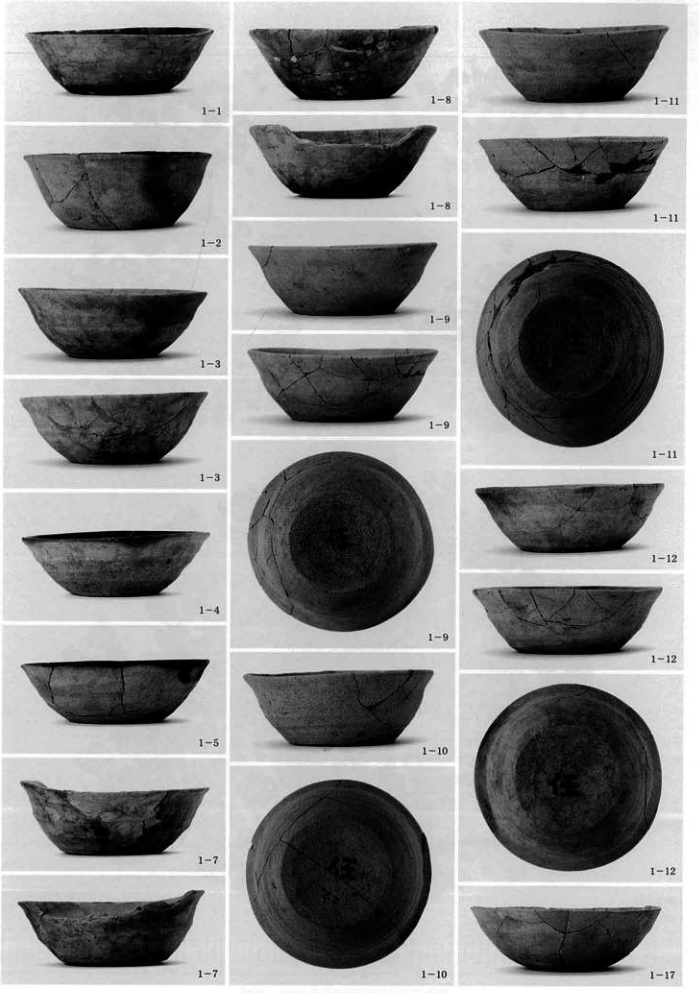


SI Ⅱ 034

1～4　鍛造剥片

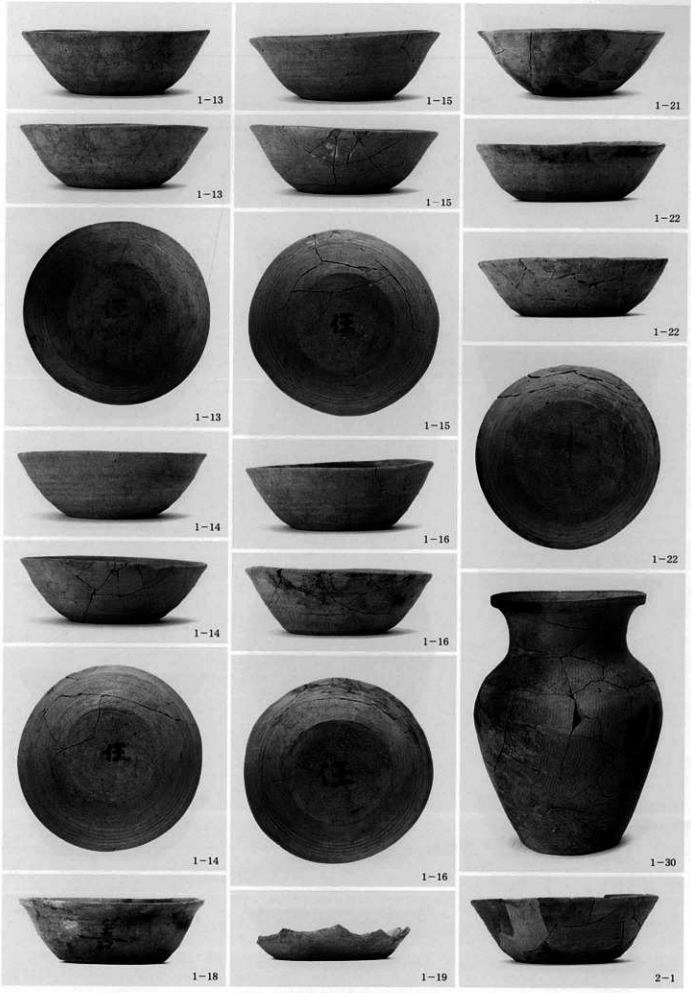
5　粒状滓

S I



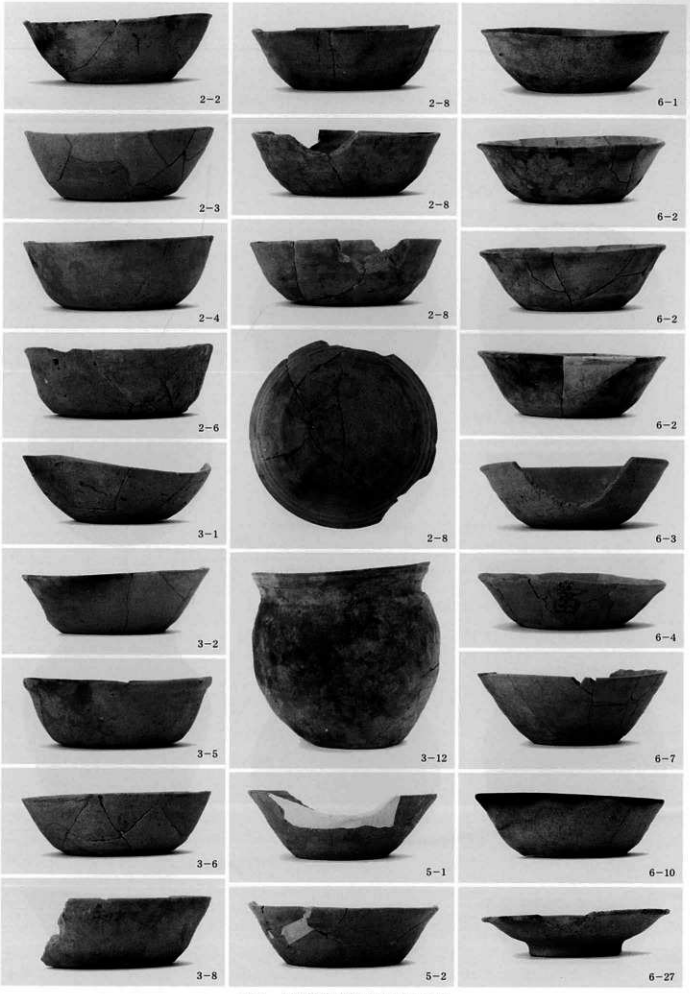
奈良・平安時代遺構出土土器（1）

S I



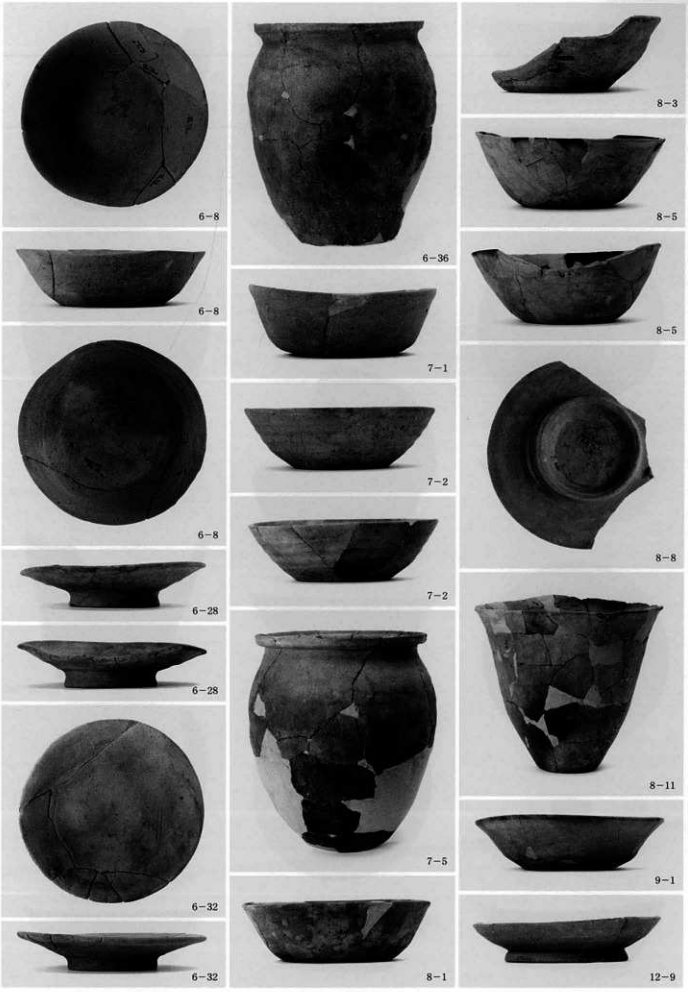
奈良・平安時代遺構出土土器（2）

S I



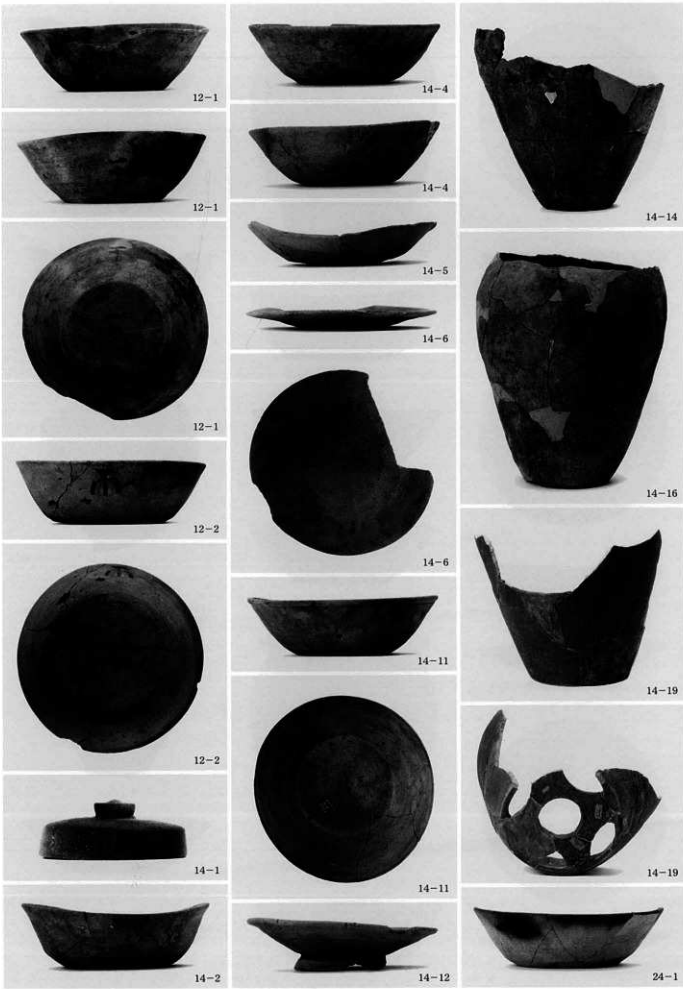
奈良・平安時代遺構出土土器（3）

SI



奈良・平安時代遺構出土土器（4）

S I



奈良・平安時代遺構出土土器（5）

S I

14−17

14−18

31−2

31−3

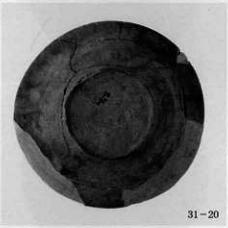
31−4

31−7

31−9

31−11

31−20


31−20

33−1

33−3

44−1

44−1

46−1

46−1

46−1

46−2

46−3

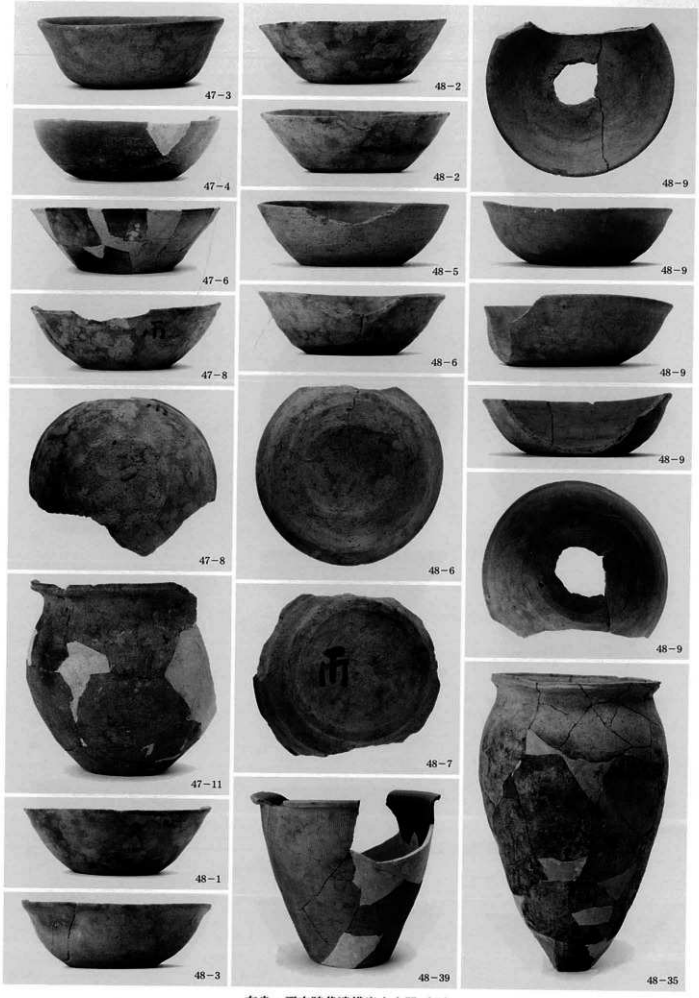
46−4

47−1

47−2

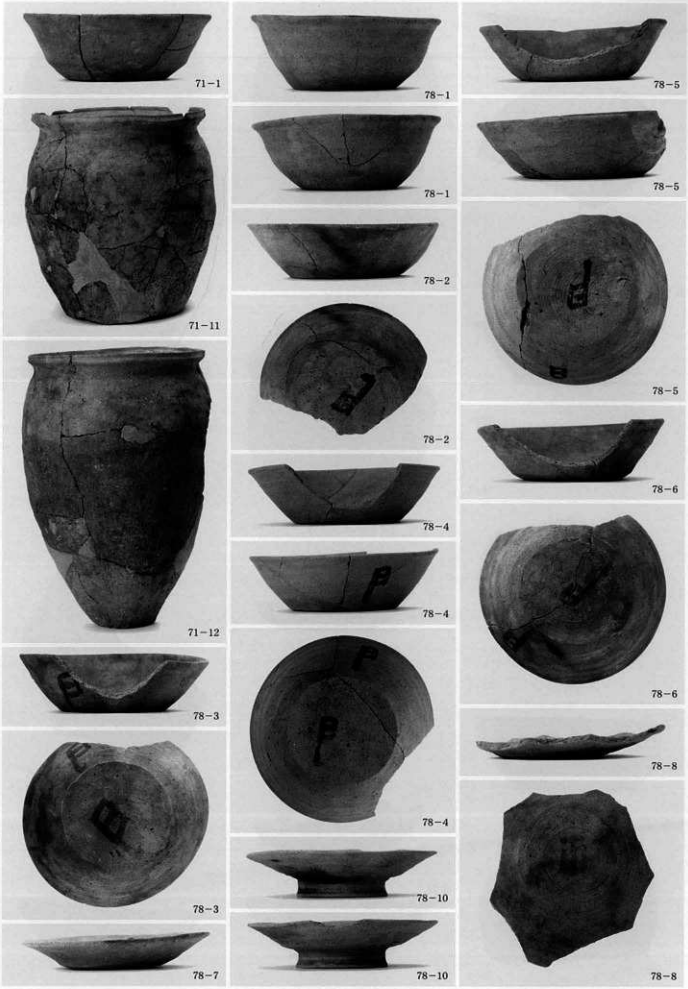
奈良・平安時代遺構出土土器（6）

S I



奈良・平安時代遺構出土土器（7）

S I



奈良・平安時代遺構出土土器（8）

SI

78−9

78−9

78−29

78−29

SB

53−1

53−1

53−1

53−2

53−2

58−1

70−1

70−2

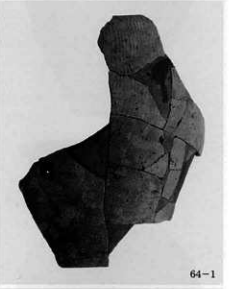
74−1

SH

21−1

SK

63−1


64−1

72−1

72−2

奈良・平安時代遺構出土土器（9）

SK

土器集中遺構

68－3

68－1

集中－2

68－3

68－1

集中－3

68－3

遺構外

外－40

集中－3

集中－4

外－1

外－40

外－3

2－4

3－6

3－10

7－1

8－4

12－8

44－2

48－19

48－20

48－23

48－31

48－32

53－2

67－1

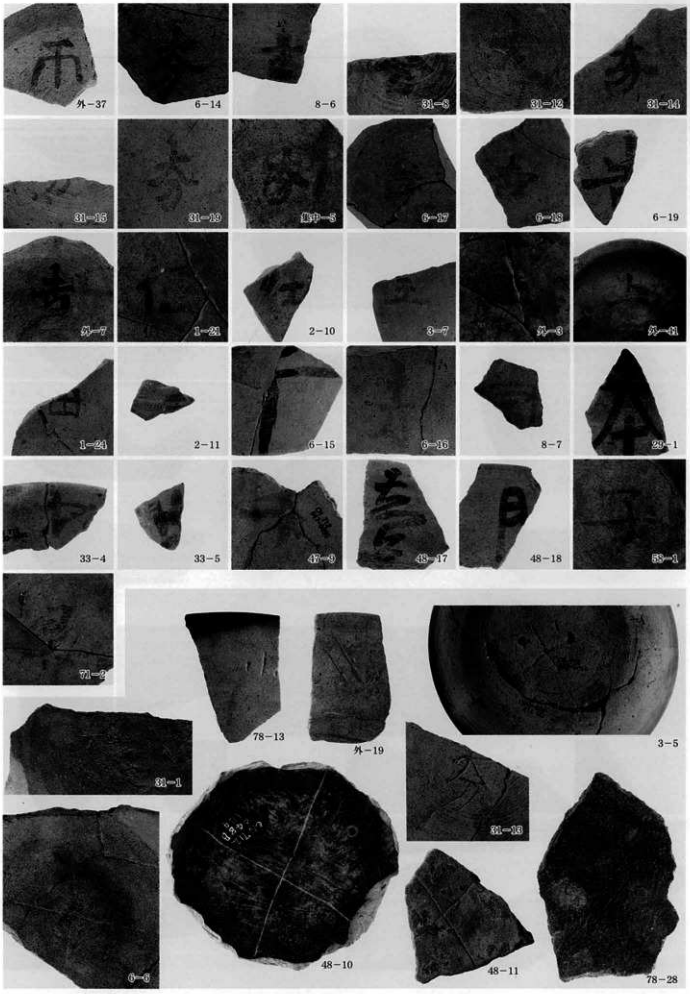
78－12

78－19

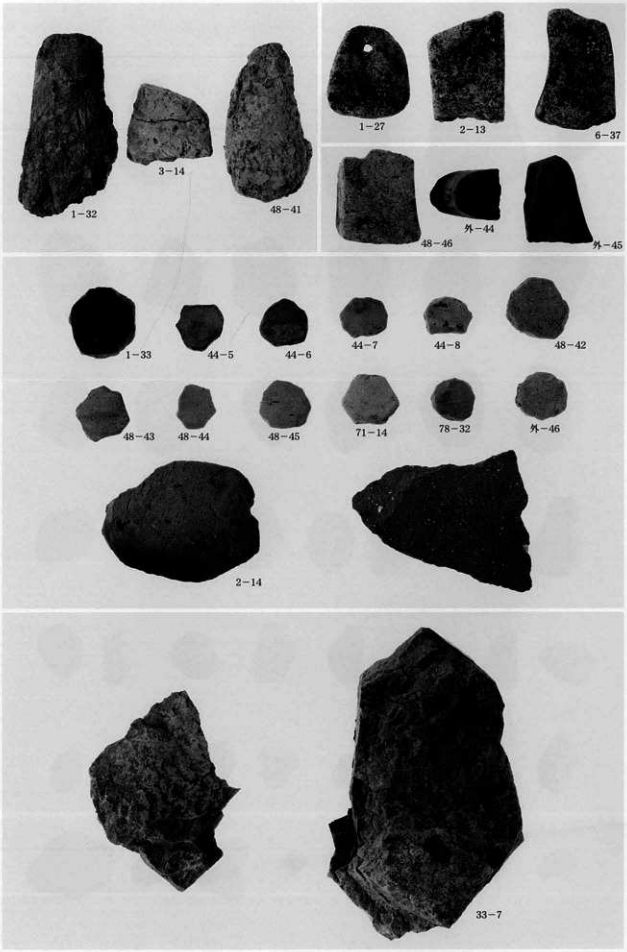
78－20

外－4

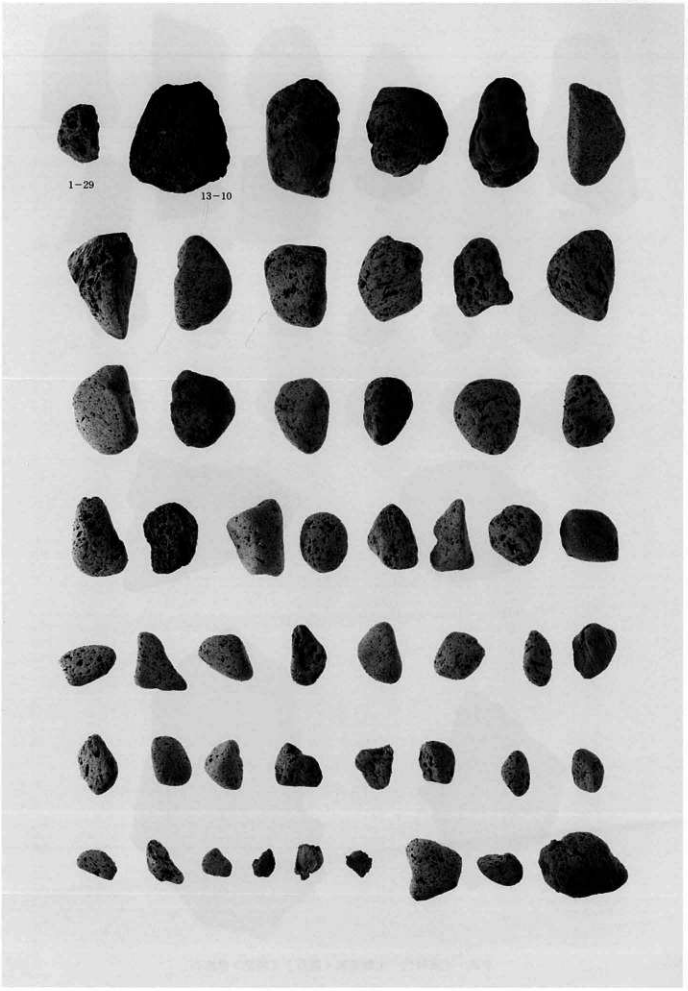
奈良・平安時代遺構出土土器（10）および遺構外出土土器，文字・記号資料（1）


外−37
6−14
8−6
31−5
31−12
31−14
31−15
31−19
31−8
6−17
6−18
6−19
外−7
1−21
2−10
8−7
外−8
外−41
1−24
2−11
6−15
6−16
8−7
29−1
33−4
33−5
47−9
48−17
48−18
59−1
71−2
78−13
外−19
3−5
31−1
31−13
6−8
48−10
48−11
78−28

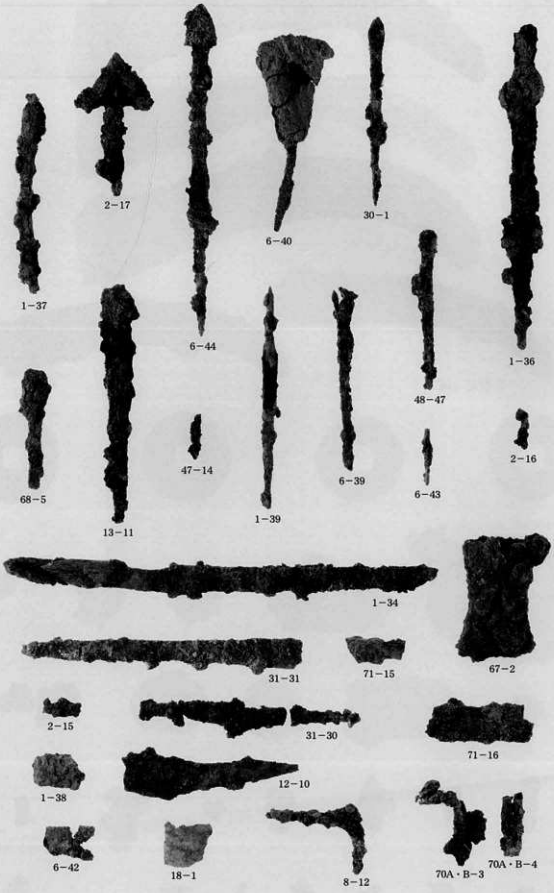
文字・記号資料（2）



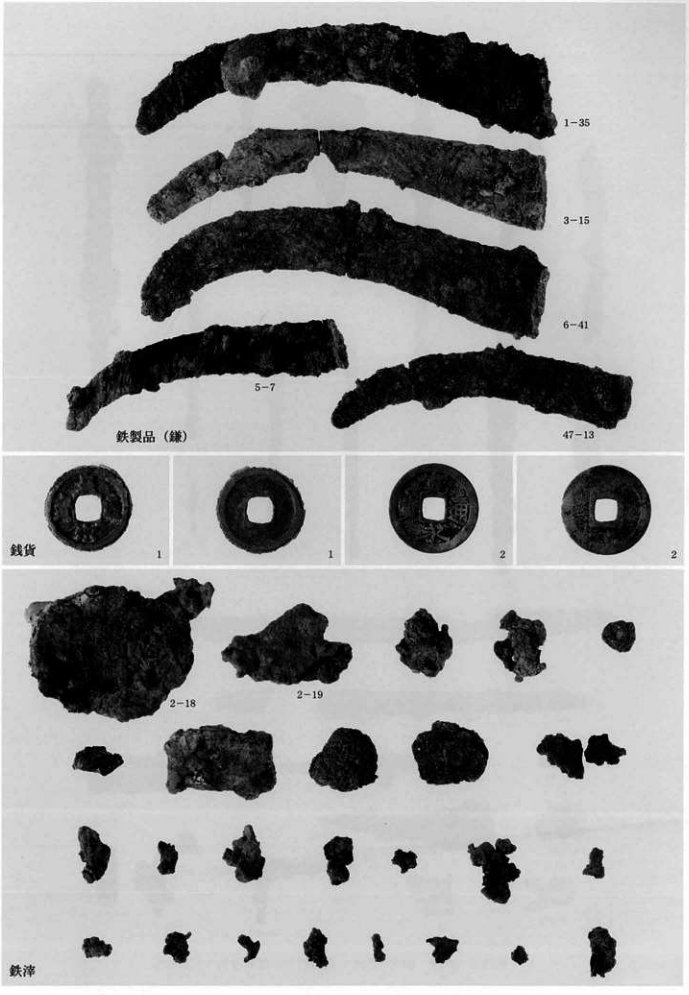
奈良・平安時代　土製支脚・砥石・土製品・鉄床石



軽石（SI Ⅱ 001・Ⅱ 013）（番号無しはSI Ⅱ 013出土）



鉄・銅製品（鉄鏃・槍鉋・刀子・袋状鉄斧・穂摘み具・釘ほか）


1−35
3−15
6−41
5−7
47−13
鉄製品（縁）
銭貨
1
1
2
2
2−18
2−19
鉄滓

報告書抄録

ふりがな	ちばにゅーたうんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVII
副書名	印西市船尾白幡遺跡II
巻次	XVII
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第510集
編著者名	香取正彦・糸川道行・矢本節朗・星 勇人
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦 2005年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
船尾白幡遺跡II (ふなおしらはたいせき)	印西市船尾字神明作 (いんざいし ふなお あざしんめいさく) 217-1 ほか	12231	CN712	35度 47分 12秒	140度 7分 32秒	19950703～ 19950926 19960303～ 19960312 19970407～ 19970918	2,748 1,068 8,121	公園造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船尾白幡遺跡II	包蔵地 包蔵地・集落跡 集落跡 集落跡 集落跡 包蔵地	旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良・平安 中・近世	石器集中地点 1地点 竪穴住居 3棟 竪穴状遺構 3基 土坑 2基 ピット 90基 竪穴住居 1棟 竪穴状遺構 2基 竪穴住居 7棟 竪穴住居 20棟 掘立柱建物 19棟 ピット・ピット群 4箇所 土坑 11基 土器集中遺構 1箇所 溝状遺構 7条 土坑 1基	ナイフ形石器，剥片 縄文土器，石鏃，磨石 弥生土器 土師器，須恵器 土師器，須恵器，砥石，金属製品 銭貨	奈良・平安時代において，船尾白幡遺跡と共に古代印旛郡絵穂郷の中心的集落と考えられる。 墨書・線刻の文字・記号資料を多量に出土する。

千葉県文化財センター調査報告第510集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVII

－印西市船尾白幡遺跡Ⅱ－

平成17年3月25日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部
千葉県印西市戸神501

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印　刷　三陽工業株式会社
千葉県市原市五井5510-1